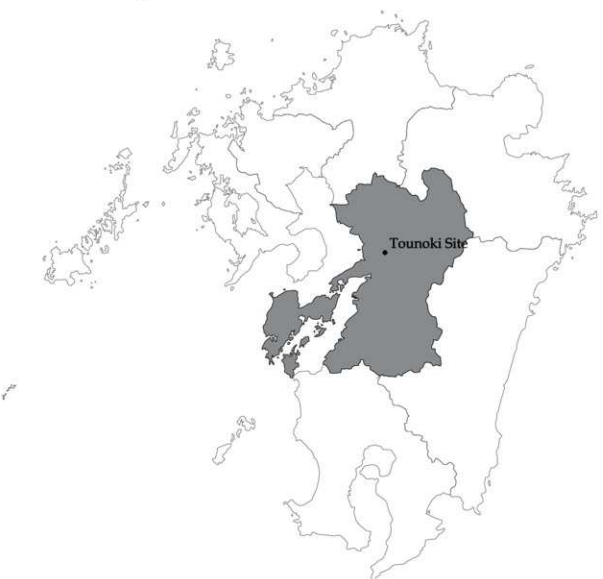
塔ノ木遺跡



○調査
浅久野友和　植栗英郎

○編集
福田剛士

嘉島町教育委員会
2018

序

嘉島町では東部台地土地区画整理事業を平成９年から計画し、事業を推進しているところであり、複数の埋蔵文化財包蔵地がその事業地の範囲内にあることから、平成 12 年から調査を実施しており、現在もまだ継続中であります。

今回は、平成 19 年度から 23 年度にかけて実施された塔ノ木遺跡における発掘調査の成果を報告するものであります。

本遺跡からは、縄文時代から中世にかけての資料が出土し、長い期間この場所が当時の人々によって利用されていたことが明らかとなりました。中でも、首長墓と思われる多くの副葬品を伴った古墳が確認され、周辺に多数の甕棺墓や土壙墓も確認されました。これら墓の分布や副葬品の有無が、当時の墓制の変遷や階層性の出現を示す貴重な資料となります。

さらに、他の遺跡との対比を通してこの土地がどう利用されてきたのか、また、熊本という地域に限らず汎九州的にどういう交流を持っていたのかが今後明らかになってくるかと思われます。

出土した資料は、嘉島町公民館に保管されており、今後広く活用されることを待ち望んでおります。本報告書を通じて学術的な側面への貢献だけではなく、文化財保護に対する関心と理解に貢献できれば幸甚です。

最後に、文化財保護の趣旨を理解し、調査に際して便宜を図っていただいた関係者各位に厚くお礼を申し上げます。

2018 年３月　　嘉島町教育委員会　教育長　　髙野　隆

例　言

1　本書は、嘉島東部台地土地区画整理事業に伴って実施した、 熊本県上益城郡嘉島町北甘木所在の塔ノ木遺跡の発掘調査報告書である。
2　本遺跡の調査は、嘉島町教育委員会が主体となり、社会教育課が調査を担当した。
3　資料の整理は、嘉島町公民館で実施した。出土資料及び記録は、 同公民館及び上島倉庫に保管されている。
4　発掘調査時の写真は、浅久野友和・椎葉天昭が撮影し、遺物写真については牛島茂が撮影した。
5　本書の執筆・編集は、橋口剛士が担当した。
6　土器胎土の色調を示す際には農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』を使用し、磁器の色調を示す際には『DIC カラーガイド　中国の伝統色』を使用した。

発掘調査及び本報告書を刊行するにあたって下記の方々のご協力を得た。記してお礼申し上げる。

【発掘調査　50 音順、敬称略】
荒木八月子　池本アイ子　石嶋孝子　岩野一子　大塚シズ子　岡照代　緒方貞幸　緒方聡美
奥村朝子　片山孝子　勝田信子　菊池由美子　後藤豊　小鉢航二　小林道子　坂下ハルエ　坂本一子
嶋田安雄　清水眞須江　高橋元子　立石リエ　田中廣太郎　田上登　田上陽子　塚野洋子
塚本スミ子鶴田ミチヨ　内藤百合子　永井静子　永田清美　中富洋子　中林ヒロコ　中林ユキエ
西岡榮子　蜂屋榮　蜂屋美美代　浜竹孝信　平井和子　福永タミ子　藤瀬納子　藤田シズエ
藤本道子　本田弘彰　前田和子　増永眞一　水野溢美　水元文廣　村上惇子　村崎妙子　森下富子
森島ユリ子　森田ミドリ　守永ルイコ　山内好美　吉川ヨウ子　吉田和子　吉田シヅエ　吉富美知子
吉富雪子　吉村京子　吉本弘子　笠弘幸

【整理作業　50 音順、敬称略】
石田敦子　岩下恵美子　岩野一子　大川好美　緒方聡美　奥村朝子　椎葉一代　塩田喜美子
園田尚子　高田清香　髙松孝子　田中裕子　溜潤俊子　土田みどり　鶴田ミチヨ　永田清美　林伸彦
平井和子　平川惠里子　前田和子　宮守富子　森島ユリ子　森田ミドリ　山田由美　結城あけみ
吉田和子

【指導・助言　順不同、敬称略。所属は当時】
堤英介（益城町教育委員会）杉井健（熊本大学文学部）三好栄太郎（熊本市教育委員会）木村龍生
木庭真由子　宮崎敬士（熊本県教育庁文化課）　髙木恭二（宇土市民会館）　吉田和彦（杵築市教育委員会）檀佳克（八女市教育委員会）荒木隆宏（玉名市役所）竹田宏司（玉名市教育委員会）高木正文

目　次

第１部　調査と環境　… 3
第１章　調査の経緯と経過
第１節　事業と埋蔵文化財包蔵地
第２節　調査体制
第３節　発掘作業の経過
第４節　整理作業等の経過
第２章　遺跡の位置と環境　… 6
第１節　遺跡の地理的環境
第２節　遺跡の歴史的環境

第２部　調査の成果　…13
第１章　調査の方法と状況
第１節　調査の方法
第２節　層序
第３節　遺構・遺物
第２章　旧石器時代～縄文時代　…16
第１節　旧石器時代
第２節　縄文時代
第３節　縄文時代の遺構
第４節　縄文時代の遺物
第３章　弥生時代　…33
第１節　概況
第２節　弥生時代の遺構
第３節　弥生時代の遺物
第４章　古墳時代　…104
第１節　概況
第２節　古墳
第３節　土壙墓・木棺墓
第４節　住居祉
第５章　古代　…134
第１節　概況
第２節　遺構
第３節　包含層出土遺物
第６章　中世　…158
第１節　概況
第２節　遺構
第３節　包含層出土遺物

第３部　自然科学的分析
塔ノ木遺跡埋蔵文化財発掘調査に係る炭素年代測定業務委託報告書　…206
熊本県嘉島町塔ノ木遺跡３号墳出土の古墳人骨　…214

第４部　総括
第１章　塔ノ木遺跡の調査結果　…225
第１節　調査結果概況
第２章　塔ノ木遺跡の甕棺　…226
第１節　塔ノ木遺跡出土甕棺の様相
第２節　出土甕棺の属性検討
第３節　塔ノ木遺跡における弥生時代の存続時期と甕棺の位置づけ
第３章　塔ノ木遺跡の古墳時代　…231
第１節　古墳の分布と形状
第２節　古墳の規模
第３節　主体部と被葬者
第４節　古墳と土壙墓
第５節　集落構造と墓域
終章　塔ノ木遺跡について　…236
第１節　塔ノ木遺跡の調査成果
第２節　塔ノ木遺跡について

挿図目次

第1図　嘉島東部台地土地区画整理事業の範囲と遺跡地図　…7
第2図　町内遺跡地図　…8
第3図　鰹原石棺墓遺構・遺物実測図　…10
第4図　調査区遺構配置状況図　…14,15
第5図　旧石器時代の遺物　…16
第6図　縄文時代の遺構が多く見られる地点　…17
第7図　3号埋甕実測図　…17
第8図　貯蔵遺構実測図　…18
第9図　種子長幅のばらつき分布　…19
第10図　集石（SY04）実測図　…19
第11図　土坑（SK226）実測図　…20
第12図　土坑（SK221）実測図　…20
第13図　土坑（SK230）実測図　…20
第14図　土坑（SK234）実測図　…21
第15図　土坑（ST131）実測図　…21
第16図　土坑（SK239）実測図　…22
第17図　縄文時代前期土器実測図　…23
第18図　包含層出土土器（縄文）①　…23
第19図　包含層出土土器（縄文）②　…24
第20図　包含層出土土器（縄文）③　…25
第21図　包含層出土遺物（縄文・石器）①　…27
第22図　包含層出土遺物（縄文・石器）②　…28
第23図　包含層出土遺物（縄文・石器）③　…29
第24図　包含層出土遺物（縄文・石器）④　…30
第25図　包含層出土遺物（縄文・石器）⑤　…31
第26図　包含層出土遺物（玉類）　…31
第27図　弥生時代の遺構が多い地点　…34
第28図　1号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…35
第29図　2号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…36
第30図　3号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…37
第31図　4号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…38
第32図　5号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…39
第33図　6号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…40
第34図　7号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…41
第35図　8号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…42
第36図　9号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…44
第37図　10号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…45
第38図　11号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…46
第39図　12号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…47
第40図　13号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…48
第41図　14号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…49
第42図　15号甕棺出土状況図及び遺物実測図　…50

第 43 図 16 号甕棺出土状況図及び遺物実測図 …51
第 44 図 17 号甕棺出土状況図及び遺物実測図 …52
第 45 図 18 号甕棺出土状況図及び遺物実測図 …53
第 46 図 19 号甕棺出土状況図及び遺物実測図 …54
第 47 図 20 号甕棺出土状況図及び遺物実測図 …55
第 48 図 21 号甕棺出土状況図 …56
第 49 図 21 号甕棺遺物実測図 …57
第 50 図 22 号甕棺出土状況図及び遺物実測図 …58
第 51 図 23 号甕棺出土状況図及び遺物実測図 …59
第 52 図 24 号甕棺出土状況図及び遺物実測図 …59
第 53 図 25 号甕棺出土状況図 …60
第 54 図 25 号甕棺遺物実測図 …61
第 55 図 塔ノ木遺跡における土壙墓の形態分類 …63
第 56 図 土壙墓最密集域と形態区分 …64
第 57 図 土壙墓の先後関係を示す遺構 …65
第 58 図 土壙墓 A 類の分布と密度 …66
第 59 図 弥生時代の土壙墓（A 類）① …67
第 60 図 弥生時代の土壙墓（A 類）② …68
第 61 図 弥生時代の土壙墓（A 類）③ …69
第 62 図 弥生時代の土壙墓（A 類）④ …70
第 63 図 土壙墓 C 類の分布 …72
第 64 図 土壙墓 C 類の遺構密度 …73
第 65 図 弥生時代の土壙墓（C 類）① …74
第 66 図 弥生時代の土壙墓（C 類）② …75
第 67 図 弥生時代の土壙墓（C 類）③ …76
第 68 図 弥生時代の土壙墓（C 類）④ …77
第 69 図 弥生時代の土壙墓（C 類）⑤ …78
第 70 図 弥生時代の土壙墓（C 類）⑥ …79
第 71 図 弥生時代の土壙墓（C 類）⑦ …80
第 72 図 弥生時代の土器① …81
第 73 図 弥生時代の土器② …82
第 74 図 弥生時代の土器③ …84
第 75 図 弥生時代の土器④ …85
第 76 図 弥生時代の土器⑤ …86
第 77 図 弥生時代の土器⑥ …87
第 78 図 弥生時代の土器⑦ …88
第 79 図 弥生時代の土器⑧ …89
第 80 図 弥生時代の土器⑨ …90
第 81 図 弥生時代の土器⑩ …91
第 82 図 弥生時代の土器⑪ …92
第 83 図 弥生時代の土器⑫ …93
第 84 図 弥生時代の土器⑬ …94
第 85 図 弥生時代の土器⑭ …95
第 86 図 線刻のある甕 …96
第 87 図 弥生時代の石器① …98
第 88 図 弥生時代の石器② …99

第 89 図 弥生時代の石器③ …100
第 90 図 古墳時代の遺構が多く見られる地点 …105
第 91 図 1 号墳（SZ01）平面図及び周溝断面図 …106
第 92 図 1 号墳（SZ01）散布石材実測図 …107
第 93 図 1 号墳（SZ01）石材抜き取り痕実測図 …108
第 94 図 1 号墳（SZ01）周溝出土遺物実測図① …109
第 95 図 1 号墳（SZ01）周溝出土遺物実測図② …110
第 96 図 2 号墳（SZ02）周溝及び石棺実測図 …112
第 97 図 2 号墳（SZ02）石棺実測図 …113
第 98 図 2 号墳（SZ02）石棺実測図（蓋除去後） …114
第 99 図 2 号墳（SZ02）石棺内出土遺物 …115
第 100 図 2 号墳（SZ02）周溝内出土遺物 …116
第 101 図 3 号墳（SZ03）周溝・石棺実測図 …117
第 102 図 3 号墳（SZ03）石棺石蓋実測図 …118
第 103 図 3 号墳（SZ03）石棺実測図（石蓋除去後）…119
第 104 図 3 号墳（SZ03）石棺掘り方実測図 …120
第 105 図 3 号墳（SZ03）棺内出土遺物実測図 …121
第 106 図 3 号墳（SZ03）周溝出土遺物実測図 …122
第 107 図 土壙墓の区分 …123
第 108 図 土壙墓（B 類）の分布 …124
第 109 図 土壙墓（B 類）分布密度 …125
第 110 図 ST05 遺構・遺物実測図 …126
第 111 図 ST95 遺構・遺物実測図 …126
第 112 図 土壙墓（B 類）遺構実測図① …127
第 113 図 土壙墓（B 類）遺構実測図② …128
第 114 図 土壙墓（B 類）遺構実測図③ …129
第 115 図 土壙墓（B 類）遺構実測図④ …130
第 116 図 木棺墓実測図 …131
第 117 図 SI16,17 遺構実測図 …132
第 118 図 SI18 遺構実測図 …133
第 119 図 SI19 遺構実測図 …133
第 120 図 古代の遺構が多く見られる地点 …135
第 121 図 SI03 遺構及び遺構内出土遺物実測図 …136
第 122 図 SI03 出土遺物実測図 …137
第 123 図 SI04 遺構及び出土遺物実測図 …138
第 124 図 SI02 遺構実測図 …139
第 125 図 SI02 出土遺物実測図 …140
第 126 図 SI01 遺構実測図 …140
第 127 図 SI15 遺構実測図 …141
第 128 図 SI15 出土遺物実測図 …142
第 129 図 SD39,40 遺構実測図 …143
第 130 図 土壙墓の区分 …144
第 131 図 SK204 遺構実測図 …144
第 132 図 SK218 遺構・遺物実測図 …145
第 133 図 土壙墓（1 b 類）実測図 …146
第 134 図 土壙墓（2 b 類）実測図① …147

第 135 図　土壙墓（２b 類）実測図②　…148
第 136 図　包含層出土遺物（古代）①　…150
第 137 図　包含層出土遺物（古代）②　…151
第 138 図　包含層出土遺物（古代）③　…152
第 139 図　包含層出土遺物（古代）④　…153
第 140 図　包含層出土遺物（古代）⑤　…154
第 141 図　包含層出土遺物（古代・硯）　…155
第 142 図　中世の遺構が多く見られる地点　…159
第 143 図　SD45,46 遺構実測図　…160
第 144 図　SD47 遺構実測図　…161
第 145 図　SD41,42 遺構実測図　…162
第 146 図　SD14,15 遺構実測図　…163
第 147 図　SD48,49 遺構・遺物実測図　…164
第 148 図　SD53,54,56,57 遺構実測図　…165
第 149 図　SD33 遺構・遺物実測図　…166
第 150 図　SD58 遺構・遺物実測図　…167
第 151 図　SD58 出土遺物実測図①　…168
第 152 図　SD58 出土遺物実測図②　…169
第 153 図　SD63 遺構実測図　…170
第 154 図　SD64 遺構・遺物実測図　…171
第 155 図　SK200,201 遺構・遺物実測図　…171
第 156 図　SK201 出土遺物実測図　…172
第 157 図　SD73 遺構・遺物実測図　…172
第 158 図　SD74,75 遺構・遺物実測図　…173
第 159 図　土壙墓の分類　…174
第 160 図　中世土壙墓（１a 類）遺構・遺物実測図　…175
第 161 図　中世土壙墓（１a 類）遺構実測図　…176
第 162 図　中世土壙墓（１a・２b 類）遺構・遺物実測図　…177
第 163 図　中世土壙墓（２b 類）遺構・遺物実測図　…178
第 164 図　SK94 実測図　…179
第 165 図　SK219 遺構・遺物実測図　…180
第 166 図　SK264 遺構・遺物実測図　…181
第 167 図　SX03 遺構実測図　…182
第 168 図　SI14 遺構・遺物実測図　…183
第 169 図　SI07 遺構実測図　…184
第 170 図　SI08 遺構実測図　…185
第 171 図　SI08 遺物実測図　…186
第 172 図　SI10 遺構実測図　…186
第 173 図　SI11 遺構・遺物実測図　…187
第 174 図　SI12 遺構実測図　…188
第 175 図　SI05 遺構実測図　…189
第 176 図　SX04 遺構実測図　…190
第 177 図　SX04 出土遺物実測図　…191
第 178 図　SI13 遺構実測図　…191
第 179 図　SI13 遺物実測図　…192
第 180 図　包含層出土遺物（中世）①　…197

第 181 図　包含層出土遺物（中世）②　…198
第 182 図　包含層出土遺物（中世）③　…199
第 183 図　包含層出土遺物（中世）④　…200
第 184 図　包含層出土古銭　…200
第 185 図　甕棺出土位置と甕棺の分類（東地区）　…227
第 186 図　甕棺出土位置と甕棺の分類（東南地区）　…228
第 187 図　塔ノ木遺跡における甕棺の分類と編年　…230
第 188 図　塔ノ木遺跡で確認された古墳の分布　…231
第 189 図　各古墳の要素比較　…232
第 190 図　古墳の分布と土壙墓の墓域　…234
第 191 図　例外的な土壙墓の位置と古墳との関係　…234
第 192 図　塔ノ木遺跡における古墳時代の集落構造　…235
第 193 図　弥生時代中期における環有明海流入ルート　…238
第 194 図　加勢川・緑川流域における古墳時代主要遺跡の分布　…239

表目次

第 1 表　石器計測表（旧石器時代）　…16
第 2 表　縄文土器（遺構出土）観察表　…22
第 3 表　縄文土器（包含層出土）観察表　…25
第 4 表　石器計測表（縄文時代）　…32
第 5 表　塔ノ木遺跡出土甕棺観察表　…62
第 6 表　弥生土器（遺構出土）観察表　…101
第 7 表　弥生土器（包含層出土）観察表　…101
第 8 表　石器計測表（弥生時代）　…103
第 9 表　1 号墳（SZ01）周溝内出土遺物観察表　…110
第 10 表　2 号墳（SZ02）棺内出土遺物観察表　…116
第 11 表　2 号墳（SZ02）周溝内出土遺物観察表　…116
第 12 表　3 号墳（SZ03）周溝内出土遺物観察表　…122
第 13 表　遺構出土土器（古代）観察表　…149
第 14 表　包含層出土土器（古代）観察表　…156
第 15 表　遺構出土鉄器（古代）計測表　…157
第 16 表　遺構出土土器（中世）観察表　…193
第 17 表　遺構出土陶磁器（中世）観察表　…195
第 18 表　遺構出土土製品（中世）観察表　…195
第 19 表　包含層出土土器（中世）観察表　…201
第 20 表　包含層出土陶磁器（中世）観察表　…202
第 21 表　包含層出土土製品（中世）観察表　…205

第１部　調査と環境

第1章 調査の経緯と経過

第1節　事業と埋蔵文化財包蔵地

嘉島町では隣接する熊本市の市街地拡大傾向への対応及び町内における開発の東西格差を解消することを目的として昭和63年度に嘉島町東地区開発推進委員会を設置し、土地区画整理事業が計画された。事業地内において埋蔵文化財包蔵地が存在することから平成12年度以降専門職員を配置して調査を実施しており、現在も進行中である。調査に際しての遺跡地図やその他の問題については第2集で述べたとおり（嘉島町教育委員会 2016）であるのでここでは省略する。

第2節　調査体制

本遺跡の発掘調査は、平成19年度から22年度まで、報告書作成作業は平成27年から29年度にかけて実施された。当時の調査体制は下記のとおりである。

【発掘調査】

平成19年度
調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　六嘉　晋（教育長）
調査事務局　野村和行（社会教育課長）
　松本伸二（社会教育係長）
調査担当　中川裕二（社会教育課主事）
　浅久野友和、椎葉天昭（嘱託）

平成20年度
調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　六嘉　晋（教育長）
調査事務局　野村和行（社会教育課長）
　松本伸二（社会教育係長）
調査担当　中川裕二（社会教育課主査）
　浅久野友和、椎葉天昭（嘱託）

平成21年度
調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　六嘉　晋（教育長）
調査事務局　野村和行（社会教育課長）
　石阪　浩（社会教育係長）
調査担当　中川裕二（社会教育参事）
　浅久野友和、椎葉天昭（嘱託）

平成22年度
調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　六嘉　晋（教育長）
調査事務局　野村和行（社会教育課長）
　石阪　浩（社会教育係長）
調査担当　中川裕二（社会教育参事）
　浅久野友和、椎葉天昭（嘱託）

平成23年度
調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　六嘉　晋（教育長）
調査事務局　野村和行（社会教育課長）
　石阪　浩（社会教育係長）
調査担当　中川裕二（社会教育参事）
　浅久野友和、椎葉天昭（嘱託）

【報告書作成】

平成27年度
調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　工藤和之（教育長）
調査事務局　石井誠志（社会教育課長）
　増永貴士（社会教育係長）
整理担当　稲葉貴子、橋口剛士（嘱託）

平成28年度
調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　工藤和之
　（教育長、平成28年12月まで）
　高野　隆
　（教育長、平成28年12月から）

調査事務局　西郡豊孝（社会教育課長）
　　増永貴士（社会教育係長）
整理担当　橋口剛士（社会教育課技師）
　　稲葉貴子（嘱託）

平成29年度
調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　高野　隆（教育長）
調査事務局　西郡豊孝（社会教育課長）
　　増永貴士（社会教育係長）
整理担当　橋口剛士（社会教育課技師）
　　稲葉貴子（嘱託）

平成30年度
調査主体　嘉島町教育委員会
調査責任者　高野　隆（教育長）
調査事務局　西郡豊孝（社会教育課長）
　　増永貴士（社会教育係長）
整理担当　橋口剛士（社会教育課技師）

第3節　発掘作業の経過

発掘調査について当時の状況を知るための野帳や調査日誌が残されていないため、詳細な経過について記述することができない。

第4節　整理作業等の経過

調査で出土した遺物は一旦調査事務所や旧公民館ホールなどに分散して保管されていた。これを上島区にある農業用定温倉庫に一括して保管することとなり、平成27年度の整理開始まではそこで保管されていた。

筆者が非常勤職員として勤務し始めた平成27年の8月頃、正職員の不在により次の現場が入られなくなっていたため、現場嘱託と作業員によって塔ノ木遺跡などの洗浄作業をやっていた。法的事務などの現場で必要とされる一連の事務が完了して次の現場に入り始めてからも悪天候時には公民館の敷地内にテントを張って遺物の洗浄作業を進めた。

ところが、これまで保管していた遺物のほとんどが未洗浄であることをはじめ、様々な問題を抱えていることが明らかとなり、この問題に対して一つずつ対処していく必要に迫られた。

まず、整理作業を行う上で一番の問題となったのが整理作業をする場所がほとんどないということと、整理作業員がほとんどいないことであった。

その当時、公民館は老朽化が進んでいるとはいえいまだ現役の生涯学習施設として会議室などは貸し出しを行っていた。

整理作業場としては旧図書室、旧事務室、旧パソコン研修室、庁務手室と面積が狭く、連動性が取りづらい配置にあるものがあてがわれていた上に、いつからそこにあるのかわからない不要備品等で空きスペースは埋め尽くされ、残された狭いスペースで図面整理等をおこなっていたとのことだった。

こういった状況にあってまず作業領域の確保が最優先と考え、貸し出しに供されていた会議室を除く部屋すべてにあった不要品等を廃棄処分し、どうしても捨てられないものについては管理区分ごとに設けた倉庫に整理し、空間的な余地を広げた。

また、細かく区切られていた仕切り等を取り外し、さらには不要な壁を壊すなどして作業領域及び整理中の遺物保管場所の確保を実施した。

これと同時に現場の作業員から適性のある人員を引き抜いて洗浄作業及び接合作業に専従させ、業務が年間を通じて動く流れを整理した。

平成27年夏の終わりには状況がある程度改善して整理作業が現場と同時並行で進むようになってはきたものの、依然として遺物の洗浄作業は屋外でやらざるを得なかった。

これから迎える冬場に寒風吹き込むテントで作業を強いるのはあまりにも忍びないということで遺物洗浄棟を公民館横に仮設で設置するよう協議し、それが建つまでの間は公民館に隣接する旧有線放送室の一角を整理し、洗浄作業を屋内で実施することとした。

業者選定や建築確認申請などの諸手続が済み、平成28年度に入って基礎工事が完了した時、4月14日の21時26分、最大震度7をはじめとする大地震が熊本を襲った。国史跡である井寺古墳も墳丘に亀裂が入り、石室の積石が崩れるなど深刻なダメージを受けるなど各地の

文化財に被害が及んだ。避難誘導等もあって状況をあまり確認できないまま時間が経過し、15日の朝を迎えた。

様子を確認しに行ったところ公民館は辛うじて建物自体の被害は軽微であったが、中に入った遺物はうずたかく積んでいたテンバコが倒れ中身が辺りに散乱し、接合中・復元中の遺物は粉々に砕け、報告書などとともに床一面に散らばっていた。

交通網が寸断され、通常数十分の通勤距離を数時間掛けて出勤してきた非常勤職員とお互いの無事を喜ぶもつかの間、数日後には雨の予報も出ていたことから亀裂が生じた井寺古墳の墳丘にシートを掛けるように指示し、再び被害状況調査に戻るなど慌ただしい一日だった。

余震も収まる気配を見せ、一時収束したと思われたことから15日深夜に至って一部の当直を残して職員を帰宅させたところ、未明に至って再び最大震度7の猛烈な揺れを観測し、職場で待機していた筆者も机にしがみついて体勢を保とうにも繰り返す大きな揺れに振り回されるように揺さぶられ、ついには弾き飛ばされた。これが本震であった。

避難者が大勢いた建物内は悲鳴や警報音が鳴り響く愁嘆場と化し、現場は蜂の巣を突いたような状態に陥った。その後も激しい余震が続き、一旦帰宅した避難者もまた町民会館の屋外に殺到し、混沌としたまま朝を迎えた。

公民館も本震前にある程度片付けが済んでいたとのことであったが本震により片付け前よりもひどい有様になっていた。

また大きな揺れが来るかもしれない、とのことで落ち着くまでの間片付けを控えるように通達し、作業員も被災している状況にあることからしばらくの間は現場作業・整理作業ともに業務を停止、事態収束後も通勤に難がある場合は無理に出勤しないように連絡した。

結果的にすべての作業が通常に戻ったのは地震から1ヶ月後の5月に入ってからのことではなかっただろうか。地震で中断していたユニットハウスの設置もようやく済み、かねてからの懸案であった洗浄棟が使用可能となった。

本震後の整理作業場（町公民館）の様子

そうした幾多の障害・困難をどうにかくぐり抜け、28年度に接合作業、遺物実測作業を実施し、翌29年度に製図・製版等の作業を実施した。調査面積が14.854㎡と広く、また時代も縄文時代～中世まで幅広く出土したことや種々雑多であった上に変わった遺物も多かったことから図化に大きな時間を割かざるを得なかった。

こうした困難な状況下でこの報告書が刊行に至ったことは偏にこの作業に携わった方々の献身的な努力、及び私の提言を聞き入れてくれた上司の理解に拠る部分が大きい。この場を借りてお礼を申し上げる次第である。

地震の被害を受けた町民会館（左）と公民館分館（右）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節　遺跡の地理的環境

1　遺跡の位置

嘉島町は熊本平野南部、加勢川と緑川に挟まれた平野部に位置する。遺跡は、嘉島町の東側、飯田山から西側へ延びる舌状の丘陵地上にある。

2　遺跡周辺の地形環境

本遺跡が存在する丘陵は、嘉島台地・甘木台地などと称されるが、今回の土地区画整理事業では、町の東側にある台地ということから東部台地と呼称されていることからもわかるように、確定的な名称がないようである。

この丘陵の周囲は、矢形川が南北に走り、この丘陵と六嘉地域に挟まれ蛇行する様子が見て取れる。また、丘陵の北側にある浮島さん（浮島熊野坐神社）に代表される湧水地が町内に点在しており、水の豊富な地域である。さらに緑川・御船川・加勢川が平行して西走するため、水利には事欠かず、熊本市南部に広がる田園地帯の一角を成している。

その一方で、このような地理的条件にあるために、周囲は洪水に見舞われやすい地域であった。そのため、古くから治水工事が繰り返されてきており、特に有名なのが加藤清正による御船川の付け替えである。

御船川及び合流する矢形川は、暴れ川として認識されており、大雨の際にはまずこの辺りが氾濫し、加勢川に流れ込むことによって熊本平野に甚大な被害をもたらしていた。このような状況にあって清正が肥後入りしてからは大規模な治水事業が行われ、御船川は緑川と合流することとなり、結果熊本平野における洪水の被害が減じられることとなった。付け替え以前の御船川の流路は定かではないが、上六嘉の蛇行した流路に沿った集落形状を参考にすると、八龍塘から川久保・徳ノ前・藤田・丸池あたりを走り、笈ノ瀬に向かって北上していたのではないかと思われる。

このルート沿いには水に関わる小字名がついていることもそれを傍証するものであろう。今でも大雨の際には轟々と流れる御船川が、その勢いを落とすことなく矢形川に流れ込んでいた姿は想像を絶する。

第2節　遺跡の歴史的環境

1　地名

北甘木の由来は、この周辺を中心に発達した中世の荘園である昧木庄と通じるものがある。御船町に甘木という地名があり、その北側であるためについたものであろう。一方、井寺についての由来は確かではない。

また、小字に見られる地名を見ると、丘陵の西側では「石塚」「遠見塚」「上官塚」など「塚」がつくものや、「鏡原」というような名称が目立つ。

「塚」は名の通り墳墓や小山を指すことが多く、実際にこの地内で古墳や削平で墳丘を失っているものの、石室や周溝から古墳と推測されるものまで含めて確かに墳丘が存在し、墳墓として認知されていたことを示すものである。

「鏡原」の“鏡”も古墳や石棺墓などに副葬された鉄剣・鉄刀が出土したことを暗示するものとも考えられる。同地内にある北甘木神社は通称“鏡神社”とも呼ばれており、素戔嗚尊と稲田姫尊を祀っている。同神社は、江戸前期に別の地にあったものがこの地に遷座したと伝えられる。

この「塚」がつく字内において古墳と思われるものが数十基発掘調査によって確認され、うち1基については装飾古墳であったことが明ら

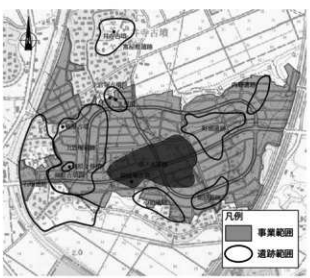
かとなっている。他にも耕作中や住宅建設時に甕棺や石棺が出てきたという話を地元の人から聞くことが多く、昔からそういった墓域の存在が認識されていたのではないかと思われる。

さて、遺跡が存在する「塔ノ木」という地名を鑑みるに、大木の近くに塔（石塔）でもあったのだろうか。今ではすっかり耕作され、畑地と宅地が広がるばかりとなっているが、東部台地における地名は付近の風景を思い起こさせるものが多く、興味深い。小字以下の地元の人にしかわからない名前を調べるとさらに多くのことがわかるのだろう。

2　遺跡の分布

古墳など表面に見えているなどして古くから認知されている以外の埋蔵文化財包蔵地は、資料が残っているものから推測して昭和52年に18の遺跡が町内にあるとされて以降、昭和62年、平成10年に事業に伴う試掘・確認調査が実施され、現在のような遺跡の分布範囲になっている（第1図）。

特に東部台地土地区画整理事業に伴う平成10年度調査で明らかとなった遺跡の分布範囲は、台地の平坦部分をほぼ覆い尽くすかのような状態であること、これまでの耕作などによる削平がなければさらに遺跡の範囲が広がったであろうことが容易に推測できるものであった。特に飯田溝と呼ばれる窪地を挟んで東西に弥生時代から古墳時代にかけての墳墓群が存在し、斜面を登り東に向かうにつれてその密度が減衰していき、墓域が無くなった辺りから二子塚遺跡の集落が見え始めるという修景である。



第1図　嘉島東部台地土地区画整理事業の範囲と遺跡地図

3　塔ノ木遺跡周辺の遺跡

塔ノ木遺跡がある北甘木台地は、縄文時代～中世末にいたるまでの間、様々な遺跡が形成されてきた。豊富な湧水を背景とした水田経営によって成立した生産基盤により多くの人間の生活を支えてきたことは想像に難くない。

江戸時代以降土地の利用は畑として開発され、恐らくは江戸末期～昭和にかけて台地のふもとにある湿地帯を埋めるための土取場となったものと思われる。結果として、台地に存在した多くの古墳は地表から姿を消した。後の発掘調査により古墳群の存在が知られることとなる直接的な原因である。

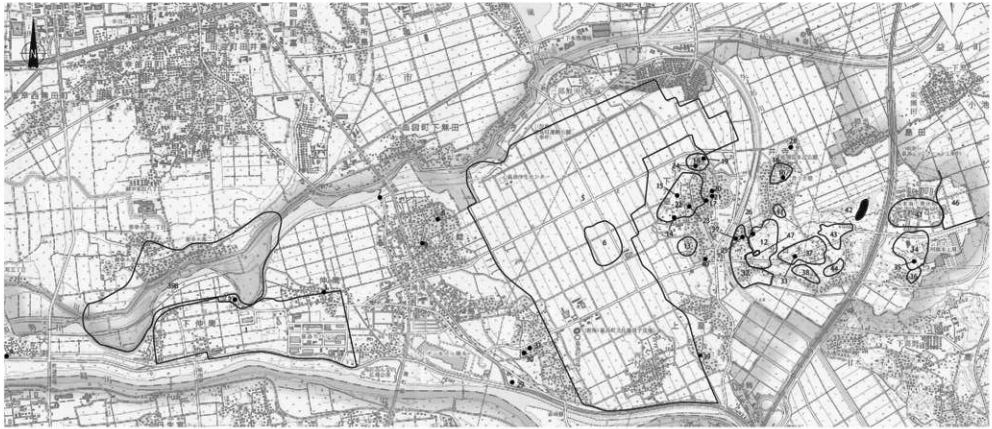
以下に塔ノ木遺跡と関連する遺跡等を記述する。なお、遺跡の後に括弧付きで記載される番号は熊本県教育委員会発行の『熊本県遺跡地図』（35-健軍、41-宇土、42-御船）における番号と一致する。

カキワラ貝塚（14）

小字名である「硫原」が示すとおり古くから耕作地において貝類が露出していたものと思われる。矢形川の支流である小川に面した断層崖に沿って貝塚が分布しているものと思われるが宅地化が進んだ現在となってはその面影を残すものは少ない。貝類に伴って人骨が出てくることも知られており、大正時代以降、人類学者等の注目を浴び度々調査に訪れることとなったようである。

昭和31年2月に土地の一部を下げる事に伴って乙益重隆らによって発掘調査が行われ、その成果は昭和34年に発行された日本考古学年報で発表された（乙益1959）。

要約すると表土下40cmの表層下に厚さ40cmの混土貝層が堆積し、その層から地形に沿って並んで3体の人骨が出土した。いずれも横臥屈葬であり、うち2体については抜歯の痕跡と思しき歯列の欠損が認められるとある。遺物は表層では弥生土器や須恵器などが混ざり、貝層に到達すると鐘崎式優勢な出方をする中に人骨が埋葬され、下層にいくにつれて出水式が優勢となる事を指摘してい



遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
1	加勢川流域条里跡	古代・中世
2	浄尊寺跡	中世
3	善正寺跡	中世
4	大正寺跡	中世
5	矢形川流域条里跡	古代・中世
6	益城郡家推定地	古代・中世
7	鮫関所跡	近世
8	光淋寺跡	中世
9	本木寺跡	中世
10	井寺古墳	古墳
11	上官塚古墳群	古墳
12	上官塚遺跡	弥生
13	カキワラ	弥生
14	カキワラ貝塚	縄文
15	宮の本墓棺群	弥生
16	井寺	古墳・中世
17	道上城跡	中世
18	西光寺	縄文～中世
19	西光寺墓棺群	弥生
20	内屋敷	弥生
21	護宿神の墓（菊池武光）	中世
22	下六嘉遺跡群	古墳～古代

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
23	六嘉神社の五重塔	中世
24	下六嘉の五輪塔	中世
25	遠見塚の塔	中世
26	剣原古墳	古墳
27	剣原墓棺群	弥生
28	手水鉢	中世
29	森崎原古戦場	中世
30	心蛾院法印良研塔	中世
31	平等寺跡	中世
32	石塚	縄文・弥生
33	御前塚古墳	古墳

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
34	二子塚	弥生・古代
35	二子塚古墳	古墳
36	下古閑	縄文
37	塔ノ木	縄文～古代
38	小迫	縄文
39	竜福寺跡	中世
40	西林寺跡	中世
41	大瀬	弥生
42	内野	弥生～古代
43	町頭	弥生～古代
45	栗原	弥生～古代

遺跡番号	遺跡名	遺跡の時代
46	塔平	弥生～古代
47	鴛原古墳群	古墳
398	御幸木部	古墳

第２図　町内遺跡地図

る。

また、出土貝のうちシジミについては田村実により汽水域のヤマトシジミであることが指摘されており、熊本では最内陸の貝塚の一つでありながらこの時期において海水が貝塚付近まで及んでいることの証左であると言える。

二子塚遺跡（34）

北甘木台地の最も高い部分に存在する。現サントリー九州熊本工場が誘致される際に工業用団地造成事業として用地が設定された際に調査されたものである。

環濠を有する弥生時代後期の集落跡で、丘陵の縁という地形を巧みに使っている。多くの住居に伴って製鉄遺構も存在し、高地性集落の様相を呈している。甕棺は少なく、上官塚遺跡とは対照的である。

二子塚古墳

二子塚遺跡内にある古墳である。２基が確認されており、いずれも円墳である。上官塚付近の古墳とは異なり群をなす様相は呈していない。

塔平遺跡（46）

北甘木台地の東側に位置し、二子塚遺跡に隣接する縄文時代後期及び弥生時代後期を中心とした集落遺跡である。高速道路の建設に伴う調査が実施され、その沿線上のみではあるが二子塚とは異なり環濠を有しない集落である。同時期に性格を異にする遺跡が近距離で存在している点もこの台地をめぐる利用のあり方の一端を示しているようで面白い。

上官塚古墳群（11）

北甘木台地の北西に位置する。断層崖の端にあり、その先の低地を挟んで井寺丘陵にある井寺古墳と対峙する位置関係にある。付近に多くの古墳が存在したことが今般の発掘調査により明らかとなっているが、低地における湿地帯を埋めるための土取り場として利用された結果、そのほとんどは現在では墳丘を著しく改変された２基のみがかろうじて残っているという状態である。

御前塚古墳（33）

飯田溝を挟んで上官塚古墳群の東にある古墳である。周辺は開墾により大部分を削られており、墳丘形状は判然としないが、周辺の古墳の形状から円墳であったであろう事が推測される。

現在笹藪に覆われており全体像が見えないが、主体があると思しき部分は不自然にくぼんでいるため盗掘を受けたか石室が崩れたかのいずれかと思われる。

井寺古墳（10）

北甘木台地の断層崖を挟んで存在する井寺丘陵の頂部に位置する。江戸時代の終わり頃に入口付近が崩れて開口したとされる。円墳とされるが墳丘及びその周辺は他の例に漏れず著しく削られており、元の形状は不明である。

主体は横穴式石室で羨門部および羨道、玄室内の石障に直弧文を中心とした線刻が施され、その線で区画された中に赤・白・青・緑により彩色される装飾古墳である。

大正５年に濱田耕作率いる京都帝國大學の考古学的な調査が実施され、翌年に刊行された「肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴」の巻頭を飾り、装飾古墳の存在が一般に広く知られる契機となった。大正 10 年３月に国史跡に指定された。

平成28年４月14日以降に発生した地震（平成 28 年熊本地震）により大きな被害を受け、現在復旧に向けての検討及び調査が行われている。

剱原古墳（26）

上官塚古墳群の西隣に位置する。遺跡地図上に記載されているものの、点が落ちている辺りに行っても墳丘らしきものはなく、どのようにして見つかったのかについても不明である。当時墳丘が存在したとしてもその後の耕作や開発により墳丘を失った可能性も考えられる。

剱原石棺墓

昭和 43 年に桑畑の耕作中に発見されたものであり、その後県教委の斡旋を受けた緒方勉により私費で調査が実施されたものである（緒方 1968）。地点は北甘木 1910 番地、サントリービール工場へ上る坂の入口辺りにある防火水槽の付近であったと聞く。箱式石棺墓であり、古墳の埋葬主体ではないかと推測す

る。周辺の調査が実施されたかは明らかではないが、周辺の古墳の傾向を見るに周溝を伴っていた可能性はある。

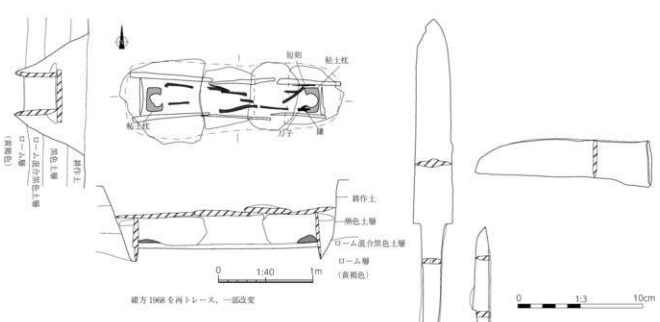
地山まで深く掘り込んだ土壙の底に複数の板石を組み合わせて棺部を形成し、屍床には小粒の石によるいわゆる玉砂利を敷き詰める（第３図）。さらに頭部位があった場所には粘土製の枕があったとある。また、追葬を受けており東西に枕がある。

棺部板石を立てた後に周りの部分に土を入れ、10cm 程度外部が露出する程度に埋めたのち、板石の周囲に棺を巻くように粘土を巡らす。その後４枚の板石で以て蓋がなされ、地表面まで埋め戻される。棺内は全面赤彩され、特に頭部あたりは濃く顔料が撒かれていたとのことであった。

人骨の残存具合から推察すると、西側に安置された遺体の方が後に葬られたものであろう。東側人骨の頭部付近には短剣及び刀子、鉄鎌が副葬品としてあったと記載されている。

遺物については『熊本史学』第 35・36 合併号に図面付きで報告されているが、氏が保存されているのかもしれないが所在不明である。

人骨については、熊本大学第２解剖学教室の協力を得て調査云々との記載があるので、熊本大学医学部に標本が収められている可能性はあるが確認できていない。



磯方 1968 を再トレース、一部改変

第３図　剣原石棺墓実測図

第２部　調査の成果

第1章 調査の方法と状況

第1節　調査の方法

1　発掘区とグリッドの設定

事業区域全体に旧日本測地系（TokyoDatum※）X:-29000,Y:-25350 を原点にした 50 m グリッドを設定し（大グリッド）、南北軸にA～Sまで、東西軸に1～40までの記号番号が設定されている。この大グリッドからさらに 10 m区画によって北西隅を起点として 25 分割する（小グリッド）。このグリッド設定については難があり、大と小での起点と進行方向が異なっており非常に分かりづらい。塔ノ木遺跡は、上記の大グリッドの中で I16 ～ M20 グリッドの範囲に広がっている（第4図）。

2　座標の修正

（1）本事業における座標系について

区画整理事業に伴う調査が開始されたのは平成 10（1998）年に事業域全体を覆うグリッドが設定された。当時設定されたグリッドによる位置関係を崩さないために現在に至るまでこのグリッド配置を維持している。

（2）座標の修正

ただし、本報告書で掲載する図面には旧測地系の座標が表示されるのは問題であるため、座標は新測地系平面直角座標系Ⅱ系（JGD2011、EPSG:6670）に改めたものを記載するために国土地理院「Web 版 TKY2JGD」を用いて修正を行った。

そのため、各グリッドの境界杭の座標は xxxxx.000m というように小数点以下が整った数値ではないことを申し添えておく。また、可能な限り個別遺構図面においても新測地系の位置座標を表記するように努めたが、座標を合わせるポイント座標が無いなど全てを網羅するに至っていない。

第2節　層序

本遺跡において土層標準図が作成されていないため、大まかな層順などは明らかであるが層厚など細かい点については不明である。

表土下にクロボク、アカホヤ二次堆積土、クロニガ、ニガシロ、ロームという順に堆積する点については熊本における丘陵地で多く見られる層順と矛盾しない。

遺跡付近を含む北甘木台地全体は土取や畑の造成などにより大きく削平されており、塔ノ木遺跡においては深いところではニガシロまで、浅いところでもアカホヤまでは削られている状況にある。

こうしたこともあって、今回調査によって確認された遺構には地中をあまり深く掘り下げない住居等が少なく、逆に深く下げる土壙墓や甕棺墓が目立つという遠因になっているのかもしれない。

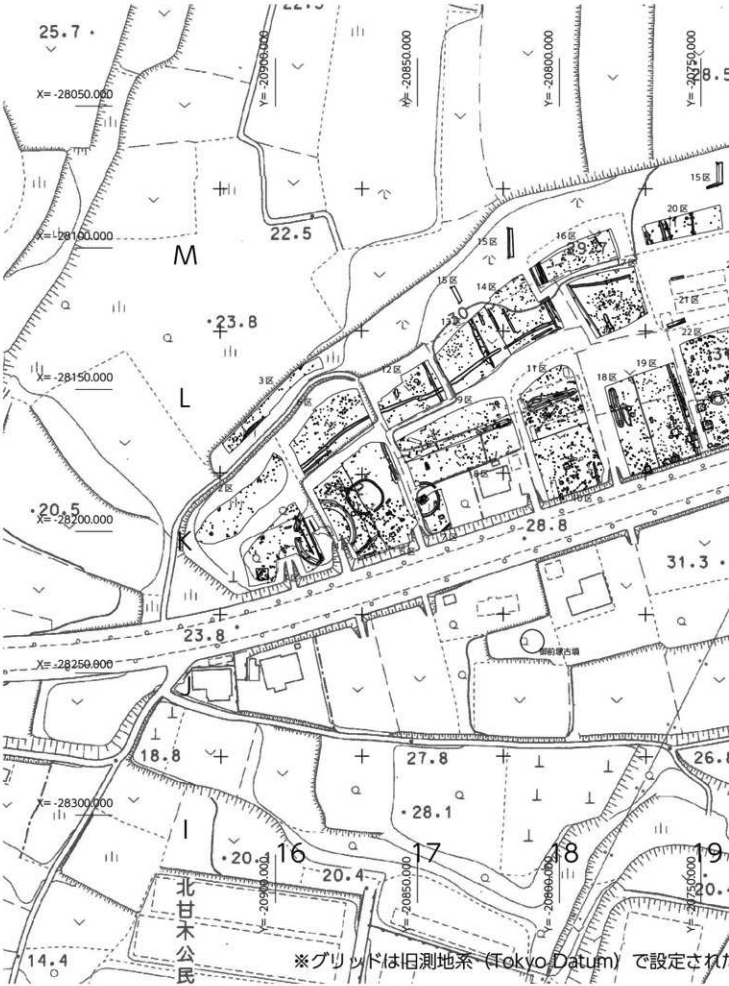
第3節　遺構・遺物

調査区において旧石器時代～近世までの遺構・遺物が確認された。

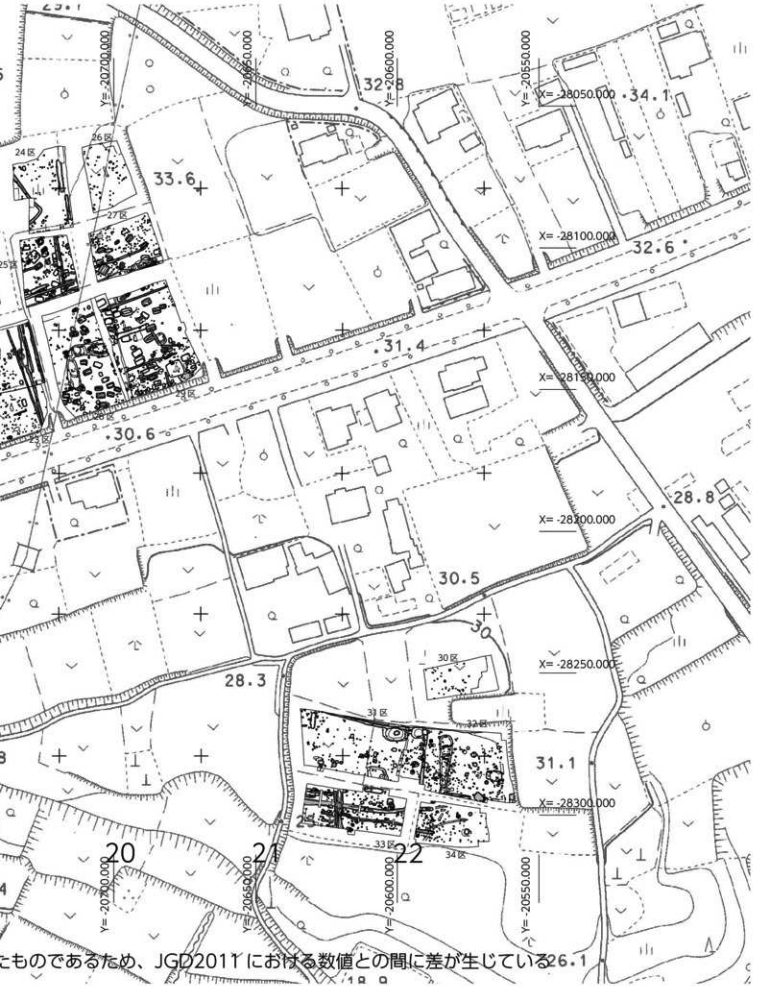
時期的にいくつかのピークを持っており、①縄文時代晩期、②弥生時代中期後半、③古墳時代中期、④中世（一部近世）の4時期に大別できるだろう。

時期によって遺跡全体における場所も若干異なっており、各世相を反映した占地のあり方を示すものとして興味深い。

次章以降において各時代における遺構及び遺物を説明していく。



第４図　調査区遺構配置状況



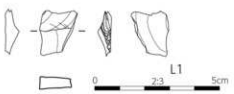
たものであるため、JGD2011 における数値との間に差が生じている

第2章 旧石器時代～縄文時代

第1節　旧石器時代

旧石器時代の遺構は確認されておらず、遺物のみの出土となる。遺跡から出土した石器のいくつかには同時期の所産であると思われるバティナの発達した剥片等が時折見受けられるので、往来はあったものと推測されるが有用な石材産地が付近にあるわけではないので単に通過地点のキャンプサイトのような扱いであったのではないかと推測する。

Ｌ１は腰岳産黒曜石製の百花台型台形石器である（第５図）。連続して剥離された石刃を素材とし、側縁は折り取り面をそのまま残置し、側縁はプランティングにより刃部の角状突起を作り出す。なお、右側縁の突起は欠損する。



第５図　旧石器時代の遺物

第１表　石器観察表（旧石器時代）

登録番号	図版No.	出土区	グリッド	遺構番号	出土層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
L1	79	34	22J-24			石器	石器台型台形石器	1.99	1.98	0.53	1.99	腰岳産黒曜石

第2節　縄文時代

縄文時代の遺物は調査区全体から出土しているが、遺構を含めたところとなると南側の調査区である第32・34区のあたりに集中している様に見受けられる（第６図）。

時期としては縄文時代後期の土器が多く出ており、隣接する町頭遺跡でも同様の傾向にあることから台地の頂部付近の尾根一帯に展開する生活域が存在していたことは想像に難くない。しかし、第１章第２節で指摘したとおり台地一帯は相当程度削平を受けており、頂部付近の遺構は悉く破壊されているものと思われ、緩斜面においてかろうじて残っているのではないかと推察される。

第3節　縄文時代の遺構

1　埋甕（第７図）

３基の埋甕が確認されたことになっていたが、うち１基については弥生時代のもので埋甕ではなく、もう１基に遺物がなく検証できないので今回報告しない。

３号埋甕は、34区で確認された埋甕である。径50cm程度の土坑に収まる形で出土した。土層の註記などはされていないため、内部に入っていたであろう土については不明である。

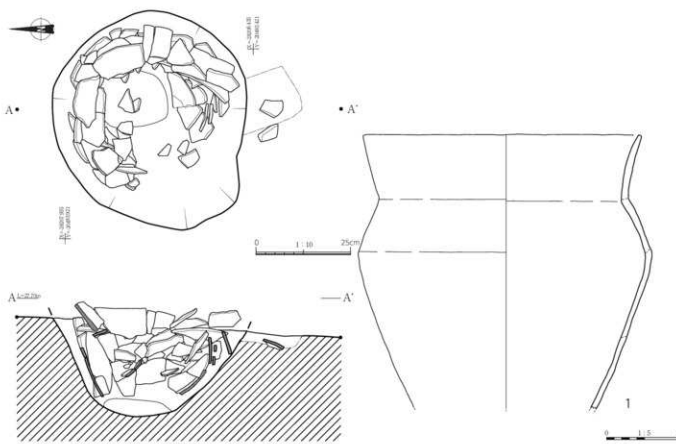
２は晩期、黒川式と思われる黒色磨研土器である。

2　貯蔵遺構（第８図）

台地の上で有機物が残るのは稀であるが、イチイガシを選って集積したものが土坑中から出土している。34区SK262は約１ｍの楕円形を呈する土坑である。その底に多くのドングリが集積して出土していた。種はイチイガシに限られており、選択的に採集されたものを土坑中に貯蔵したものでそのまま残置されたものと思わ

※グリッドは旧測地系（Tokyo Datum）で設定されたものであるため、JGD2011 における数値との間に差が生じている

第６図　縄文時代の遺構が多く見られる地点



第７図　３号埋甕実測図

れる。土層断面図を見る限りではドングリが集積している部分の上にかぶせられた土が２次的に切られていることから集積後数回にわたって掘り返された部分もあったものと思われる。

回収された種子 4125 点に対して長さ、幅及び重量を計測した。種子長幅数値のばらつきを見たものが第９図に示すものである。

数値的なものを見ていくと、長さの最低・最高値は 6.4mm・17.9mm、幅は 4.5・12.5mm、種平均値として長さ 11.01mm、幅 8.23mm、重量 0.23g である。数量密度は平均から±3mm の所にピークを持つ。ただし、計測時の問題として堅果をあるものと欠くものを分けずに計測したため、ばらつきが大きくなる原因となっている。

そういった問題はありながらも大きく群を離れる個体が認められない点からも同一の種を選択的に採取・保存していると考えても差し支えないものと思われる。

種子についてであるが、俵形の形状、堅果に縦縞が目立つことからイチイガシであると推定される。また、堅果の状態で貯蔵されていたこと、水場のない台地の上にこれがあったことを加味しても、あく抜きの必要が無いイチイガシであればこそのものと思われる。

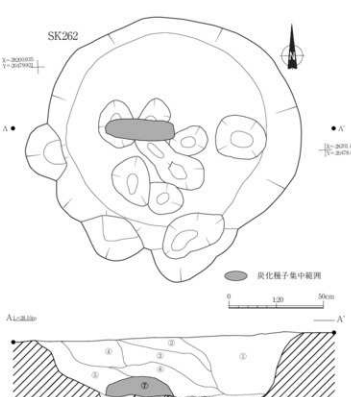
また、別章に掲載した分析結果によると AMS で 2,920 ± 30BP（CalBC1,215to1,015【IntCal13】）の値が出ており、遺跡出土土器の年代観と矛盾しない。

3　集石（第 10 図）

集石遺構が確認されている。4 基確認されたとあるが、図面が残されているのは 34 区の SY04 のみである。残りの３基のうち２基については写真は残っているものの図面は存在せず、最後の１基については図・写真ともに残されていない。当時の記録保存のあり方について疑問を抱くところである。

SY04 についても図面しか残されていないため石材や重量など詳細については不明であるが、大きさ約 15~20cm の亜角礫が多数を占める。

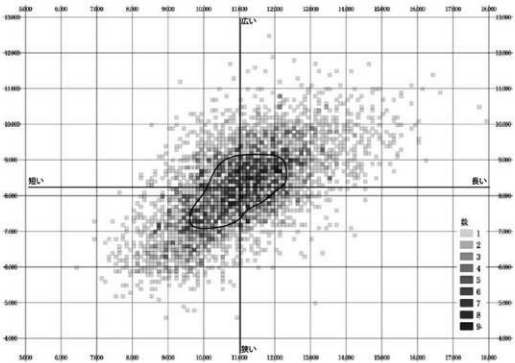
浅くくぼんだところに集積され、くぼみの中央に空間を持った状態で出土している。特記がないため被熱による赤化は認められなかったも



第８図　貯蔵遺構実測図

① 暗褐色　しまりなし　炭化種子が少量混じる
② 褐色　ややしまる　炭、焼土粒を含む
③ 黒褐色　しまりなし　炭化種子を少量含み、炭を多く含む
④ 暗褐色　ややしまる　炭、焼土粒を含む
⑤ 暗褐色　しまりなし　炭化種子片、炭を含む
⑥ 暗褐色　しまりなし　炭化種子片、炭を多く含む
⑦ 黒褐色　しまりなし　焼土をブロック状に含み、炭が多量に混じる
種子が密集した状態で出土する
⑧ 暗褐色　しまりなし
⑨ 暗褐色　しまりなし　焼土粒、炭、炭化種子片を含む
⑩ 暗褐色　しまりなし　少量の炭、焼土粒が混じる

遺構内出土種子



第９図　種子長幅のばらつき分布

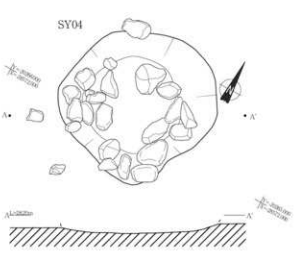
のと思われる。

４　土坑

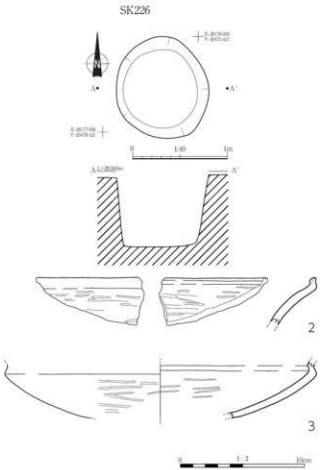
単純な土坑であるが、遺物を伴うことで縄文時代のものであると結びつけられたものについて記載する。すべて 32 区のものである。

時期的には縄文後期後半～晩期がこの遺跡においての中心的な時期であろうと思われる。径は１ｍ程度のものが多く、深さはおおむね 50cm 前後である。土器が埋土中から出土したとあるが、出方については記録がなく不明であるが、他の時代の混ざり混みがないため土坑がこの時期のものであると判断している。

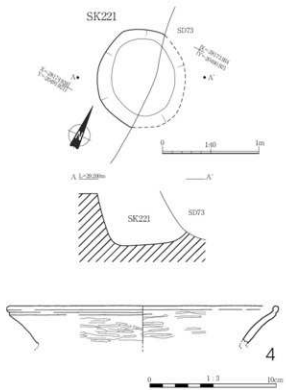
土器の項で述べるが古閑式段階の土器が優勢であり、土坑内出土遺物もそれとほぼ同じ傾向にある。器種としては浅鉢が多数を占める。



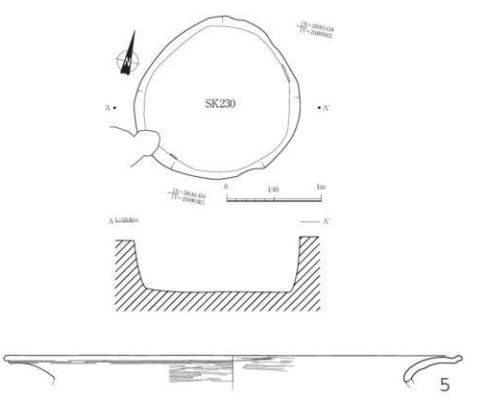
第 10 図　集石（SY04）実測図



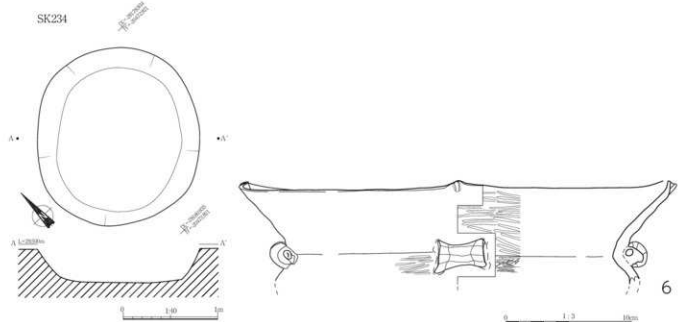
第 11 図　土坑（SK226）実測図



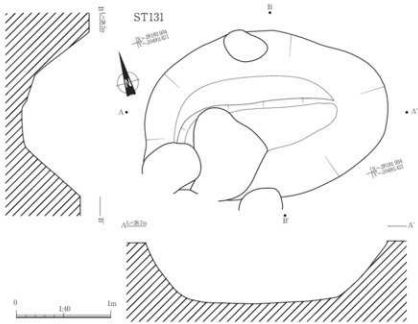
第 12 図　土坑（SK221）実測図

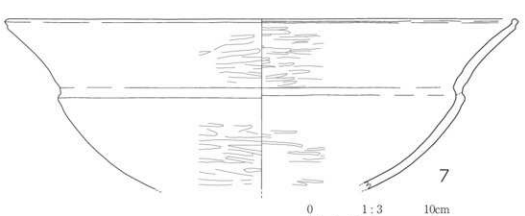


第 13 図　土坑（SK230）実測図

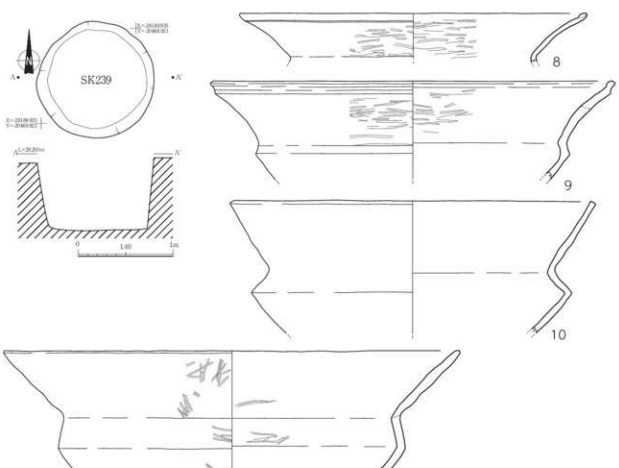


第 14 図　土坑（SK234）実測図





第 15 図　土坑（ST131）実測図



第16図　土坑（SK239）実測図

第2表　縄文土器（遺構出土）観察表

挿図番号	出土点数	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
1	24	3号竪穴			縄文土器		深鉢	口縁～胴部	36.4	(36.2)		長石，角閃石，雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	橙 Hue5.7YR 6/8	ケズリ	ナデ	良好	内面に煤付着
2	32	SK226	22-23		縄文土器		浅鉢	口縁		(3.6)		長石，角閃石	黒褐 Hue2.5Y3/1	黒褐 Hue2.5Y2/1	ミガキ	ミガキ	良好	内外面煤
3	32	SK226	22-23		縄文土器		浅鉢	胴部～胴部		(4.6)		長石，角閃石，雲母	黒褐 Hue2.5Y3/1	オリーブ黒 Hue5Y3/1	ミガキ	ミガキ	良好	
4	32	SK231	22-23		縄文土器		浅鉢	口縁	(21.6)	(3.0)		長石，雲母	灰黄 Hue2.5Y6/2	灰黄 Hue2.5Y4/2	ミガキ	ミガキ	良好	
5	32	SK230	123-4		縄文土器		浅鉢	口縁	(36.2)	(2.2)		長石，角閃石，雲母	黒褐 Hue10YR3/1	黒褐 沈線	ミガキ	ミガキ	良好	口縁沈線1条
6	32	SK234	122-7		縄文土器		浅鉢	口縁～胴部	(34.9)	(8.2)		長石，角閃石，雲母	浅黄 Hue2.5Y7/4	浅黄 Hue2.5Y7/4	条痕 ナデ ミガキ	条痕 ミガキ ナデ 工具痕	良好	
7	32	ST131			縄文土器		浅鉢	口縁～胴部	(41.2)	(13.6)		長石，角閃石，雲母	黒褐 Hue10YR3/1	オリーブ黒 Hue5Y3/1	ミガキ	ミガキ	良好	口縁部補修孔
8	32	SK229	123-6		縄文土器		浅鉢	口縁～胴部	(27.4)	(3.9)		長石，角閃石，雲母	黒褐 Hue2.5Y3/2	黒褐 Hue2.5Y3/1	ミガキ	ミガキ	良好	
9	32	SK229	123-6		縄文土器		浅鉢	口縁～胴部	(32.6)	(7.9)		長石，角閃石，雲母	黒褐 Hue10YR3/1	黒褐 Hue2.5Y3/2	ミガキ	ミガキ	良好	
10	32	SK229	123-6		縄文土器		浅鉢	口縁～胴部	(29.0)	(10.3)		長石，角閃石，雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	条痕，ナデ，ケズリ	ナデ	良好	内外面炭化物付着，内外面煤付着
11	32	SK229	123-6		縄文土器		浅鉢	口縁～胴部	(36.2)	(13.6)		長石，角閃石，雲母	黒 Hue2.5Y2/1	黒 Hue10YR2/1	ミガキ	ミガキ	良好	

第４節　縄文時代の遺物

１　縄文土器

遺構の所でも述べているが、塔ノ木遺跡で出土した縄文土器の多くは後期後半～晩期のいわゆる黒色磨研土器が大勢を占める。

（１）縄文時代前期

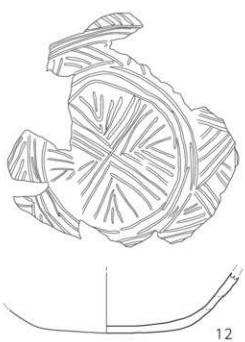
前期の土器に位置づけられるものとして曽畑式土器が出土している。底部のみであるが外器面に斜行する連続した沈線文を向きを違えつつ組み合わせており、その施文帯に横位の沈線文数条を区画文としている。底部は端部が柔らかな曲線を帯びる平底で、底部中央で×の字状に区画したなかに山形の沈線文を積み重ねるように施文する。

（２）縄文時代後期・晩期

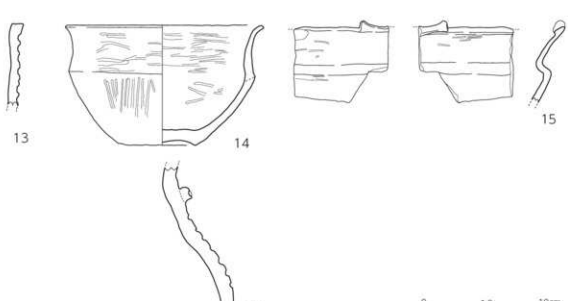
後期・晩期の土器は特に古閑式が多い。次いで御領式、一部に三万田式、鳥井原式を含む。

器種は浅鉢が多数を占め、深鉢はやや少ない傾向にある。破片が多く、完形もしくはそれに近い形に戻るものはあまりない。

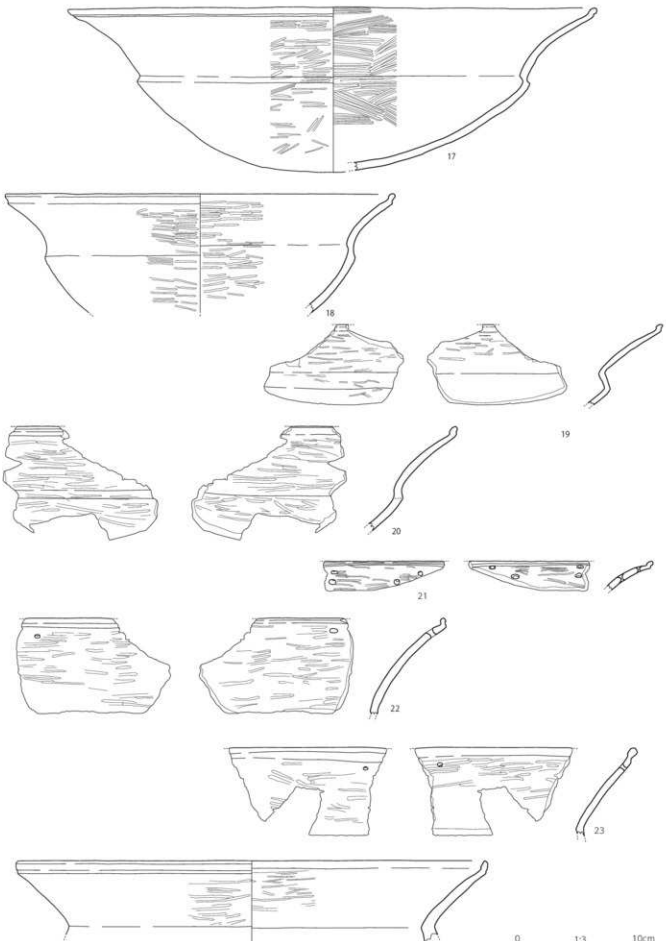
遺構出土の土器もこの時期のものに比定できるものが多く、この時期が縄文時代における中心時期と言える。



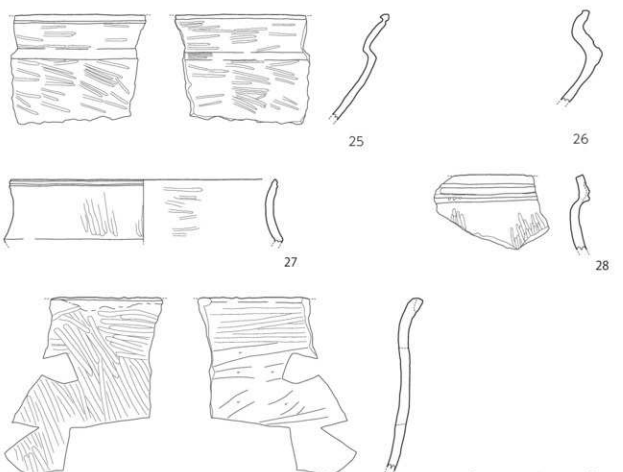
第 17 図　縄文時代前期土器実測図



第 18 図　包含層出土土器（縄文）①



第19図　包含層出土土器（縄文）②



第 20 図　包含層出土土器（縄文）③

第 3 表　縄文土器（包含層）観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
12	24	一括	-		縄文土器	前期	諸磯	底部	-	(4.8)	-	長石、石英、角閃石、雲母	にぶい黄橙 10YR5/4	にぶい橙 Hue7.5YR5/4	回転文	ナデ	良好	諸磯式土器
13	23	-	122-7		縄文土器	前期	諸磯	口縁	-	(6.6)	-	雲母、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	ナデ、回転文	ケズリ	良好	雲母混入
14	6	-	L17-23		縄文土器	前	口縁～底部	(15.7)	9.5	5.3	長石、石英、角閃石、雲母	にぶい橙 Hue7.5YR 6/6	にぶい橙～橙 Hue2.5YR6/4	ナデ	ミガキ、ナデ	ミガキ	良好	口縁～胴部、僅付着
15	24	一括			縄文土器	後期	称名寺	口縁～胴部	-	(6.5)	-	長石、雲母、褐色土粒	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue7.5YR 7/6	ミガキ	ミガキ	良好	
16	24	-	122-14		縄文土器	前期	諸磯	口縁～胴部	-	(11.7)	-	長石、石英、角閃石、雲母	にぶい赤橙 Hue2.5YR6/3	にぶい赤橙 Hue2.5YR6/3	回転	ナデ	良好	刺目突帯
17	24	一括	-		縄文土器	前期	諸磯	口縁～底部	41.8	(13.6)	-	長石、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	ミガキ	ミガキ	良好	内外面黒褐
18	24	一括	122-9		縄文土器	前期	諸磯	口縁～胴部	(30.6)	(9.4)	-	長石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR5/4	にぶい黄橙 Hue10YR5/4	ミガキ	ミガキ	良好	内外面黒褐
19	24	-	122-10		縄文土器	前期	諸磯	口縁～胴部	-	(6.3)	-	長石、角閃石、雲母	黒褐 Hue2.5Y2/1	黒褐 Hue2.5Y3/1	ミガキ	ミガキ	良好	
20	24	一括	-		縄文土器	前期	諸磯	口縁～胴部	-	(6.2)	-	長石、角閃石、雲母	褐 Hue10YR4/4	黒褐 Hue10YR3/2	ミガキ	ミガキ	良好	
21	32	-	122-4		縄文土器	後期	称名寺	口縁	(32.2)	(2.3)	-	長石、雲母	黒褐 Hue10YR3/2	黒褐 Hue10YR3/1	ミガキ	ミガキ	良好	浮孔 4 ケ
22	32	-	122-3		縄文土器	後期	称名寺	口縁～胴部	(20.8)	(7.6)	-	長石、角閃石、雲母	黒褐 Hue2.5Y3/1	黒褐 Hue2.5Y3/1	ミガキ	ミガキ	良好	浮孔
23	32	-	122-5		縄文土器	後期	称名寺	口縁～胴部	-	(6.9)	-	長石、石英、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR5/4	灰黄褐 Hue10YR5/2	ミガキ	ミガキ	良好	浮孔
24	32	-	122-3		縄文土器	後期	称名寺	口縁～胴部	(37.2)	(5.8)	-	長石、石英、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい黄橙 Hue10YR5/3	ナデ、ミガキ	ミガキ	良好	胴部と胴部の境界線の沈線
25	24	-	122-15		縄文土器	後期	称名寺	口縁～胴部	-	(6.6)	-	長石、角閃石、雲母	にぶい黄 Hue2.5Y6/3	褐灰 Hue10YR4/1	ミガキ	ミガキ	良好	
26	22	一括	-		縄文土器	後期	称名寺	口縁～胴部	-	(7.2)	-	長石、石英、角閃石、雲母	浅黄 Hue2.5Y7/3	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	磨消縄文、ミガキ、回線	ナデ	良好	
27	19	-	L19-17		縄文土器	後期	称名寺	口縁	(21.2)	(5.6)	-	長石、石英、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	褐灰 Hue2.5Y4/1	ミガキ	ミガキ	良好	口縁に僅付着
28	28	一括	-		縄文土器	後期	称名寺	口縁～胴部	-	(5.8)	-	長石、石英、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	ナデ、ミガキ	ナデ	良	口縁沈線2条、黒褐
29	23	-	122-6		縄文土器	後期	称名寺	口縁～胴部	(30.6)	(13.7)	-	長石、雲母	黒 Hue10YR2/1	黒褐 Hue10YR3/2	ナデ、ミガキ	ヘラケズリ	良好	

2　石器

本遺跡から出土する石器は黒曜石製が非常に多い。

（1）石核（第21図L2~L8）

定型的な手順に則った剥離をするものは確認できなかったが、打面転移を繰り返しつつ縦長剥片を指向した剥離を行っているものが多い傾向にある。後述する剥片鏃の素材剥片として使用されたものも含まれていると考える。剥離は相当程度進行しており原礫面をほとんど有しない。それを反映して遺跡に残される石核の多くは3cm角を下回るほどに消耗している。

（2）石鏃（第22図L9~L13）

多くは剥片鏃であり、後期後半～晩期の土器様相と大きな矛盾はない。上記の石核と同時期の所産と考えられる。連続的に剥離された痕跡である背面稜を残しつつ荒い調整により刃部を形成する。結果として剥片の反りを消化しきれずに残ったりと形状は不安定である。

（3）石匙（第22図L14~L16）

3点出土した。全て横匙である。大型剥片を素材としており、刃部となる下縁部及びつまみ部においては調整が集中しており、その他の部分ではやや疎である。そのため素材剥片の大剥離面がそのまま残置されている。

（4）両面加工石器（第22図L17）

両面ともに横方向の連続した剥離により素材の厚みを減じるような意図が見られるが、先端部を作り出そうとしたように見えず尖頭器などの先端が鋭利なものを意図したものではない。

（5）掻器・削器（第22図L18~L20）

L18は掻器であり分厚な円形に近い剥片を素材として縁辺～下縁部を調整して鈍角の刃部を作り出す。

L19,20は削器であり縦長剥片を素材として縁辺部に細かい調整を施し刃部とする。は横長の剥片を素材としており、下端付近に調整を加えて刃部とする。

（5）円盤形石器（第22図L21）

この石器をこの時期に設定すべきか判断に迷うところであるが付近で出土している石器の傾向からこの時期に含めておくこととする。分厚な盤状剥片を素材として縁辺部を粗く打ち欠いて円形とする。

（6）磨石・敲石（第22図L22~L29）

あまり数は多くはないが扁平な円礫を使用した元は磨石であり、部分的に敲打によるつぶれを有するものである。

大きく破砕しているのはに限られ、ほとんどは元の形状を保っている。

（7）石斧（第24，25図L30~L41）

やや分厚な盤状剥片を素材とした打製石斧である。粗割により剥片内部へ剥離痕が及ぶことは少なく、その後の縁辺調整によって石器中央付近に剥離痕が残置されるのではなくむしろ素材剥片の大剥離面が残っていることから素材剥片の厚さが比較的薄くかつ均等な厚みを持っていたものかと思われる。

また、は基本的に剥離により整形された石斧であるが刃部付近は磨かれている。原礫面を残す側は剥離により厚みを減じている。

3　玉製品

（1）垂飾（第26図L42）

L42は垂飾である。一見して管玉状の円柱形をなすもので、下端に向かって鋭くなるように研磨されており結果として牙状の形状を成す。

管状のものが折れた結果加工してこうなったのかとも考えたが頭部に穿孔痕が認められる一方先端部では穿孔の痕跡が認められないため当初からこういう形を指向したものである可能性があると判断した。

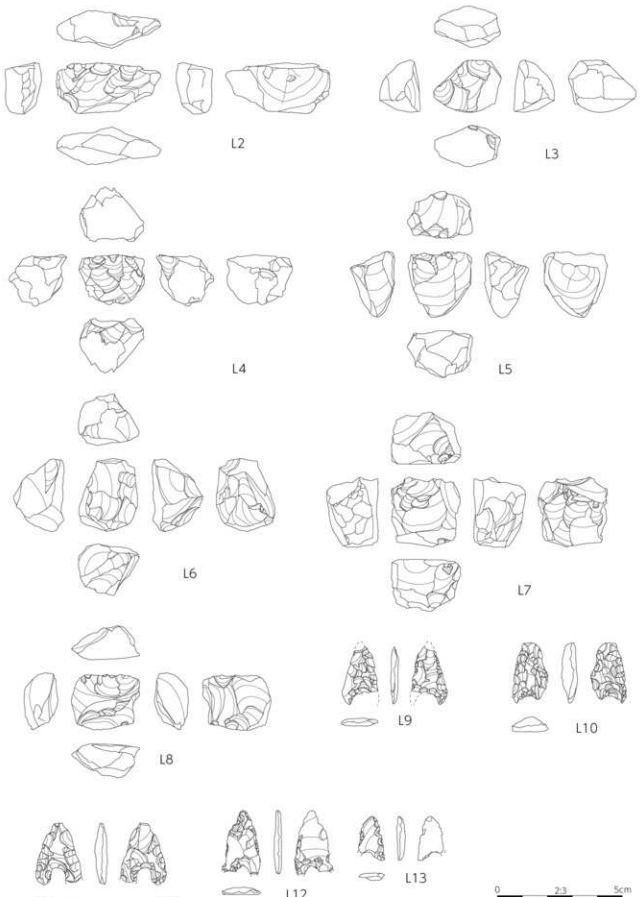
（2）管状玉製品（第26図L43）

滑石製の管状玉製品である。土坑内から出土したとあるが場所が特定されておらず、調査区での大雑把な位置しかわからない。

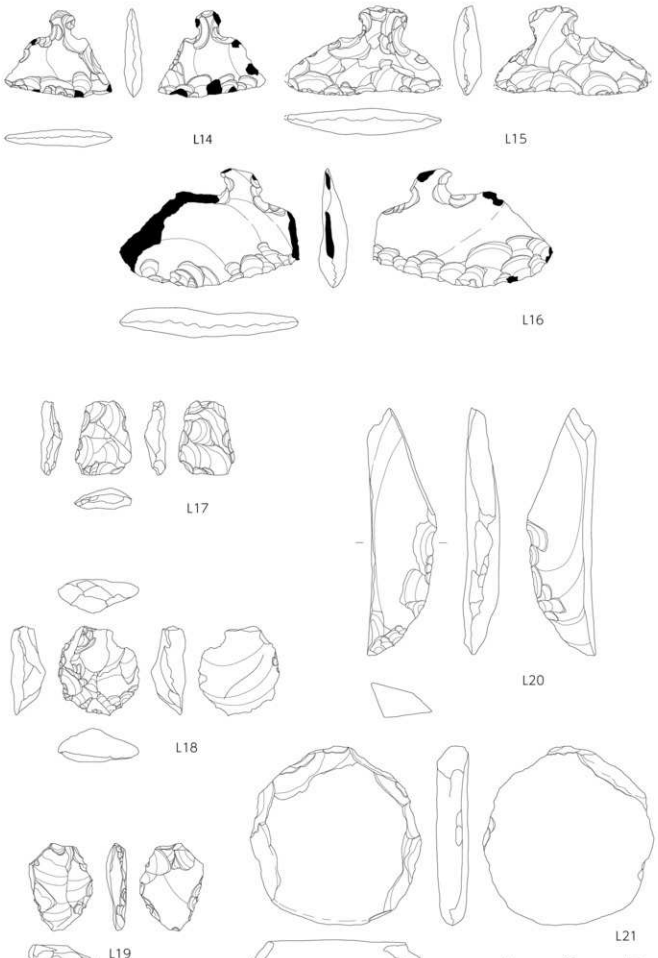
もとは抹角の長方形に近い形状をするものと思われるが、欠損し半割に近い形となっている。そのおかげで断面の観察が可能となっているわけであるが、小口両端からの最低3回（上2、下1）の穿孔により貫通したと考えられる。

下端部の小口側が欠損のため観察できないが、穿孔痕の切り合いからまず下方からの穿孔で中央付近まで到達し、その後ひっくり返して上方からの穿孔を行っている。結果貫通すれば問題なかったのであるが、若干のずれが起きたため再度上方外側から玉内側に向けての穿孔を行った。外面は現在でも光沢を確認できるほど

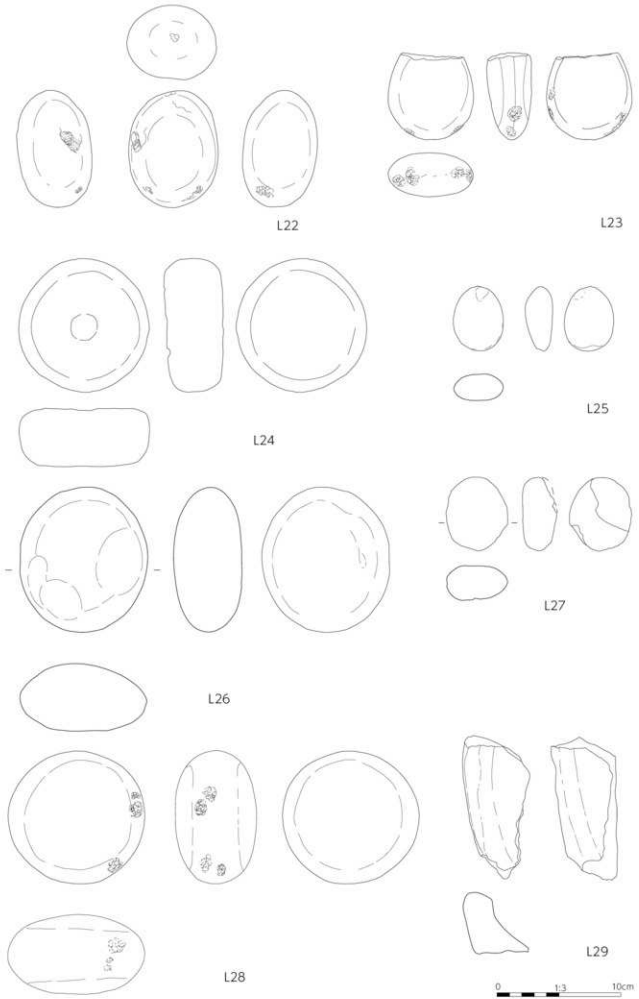
＊1　大坪志子氏のご教示による



第 21 図　包含層出土遺物（縄文 - 石器）①

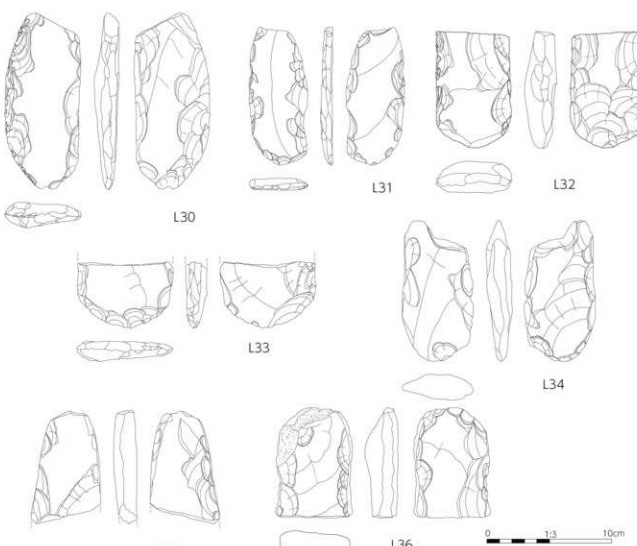


第 22 図　包含層出土遺物（縄文・石器）②

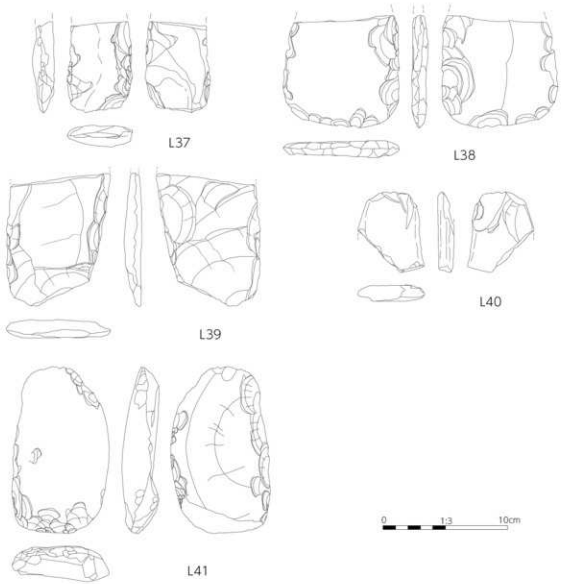


第 23 図　包含層出土遺物（縄文 - 石器）③

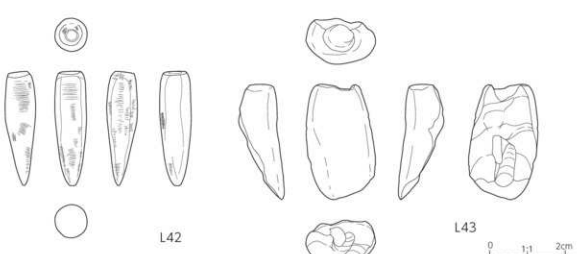
に磨かれている。擦痕がほとんど確認できないほどに細かい粒子による研磨と推定されるが、運動方向の結果残るわずかな稜から縦方向の研磨運動が優勢であると思われる。



第 24 図　包含層出土遺物（縄文 - 石器）④



第 25 図　包含層出土遺物（縄文 - 石器）⑤



第 26 図　包含層出土遺物（玉類）

第４表　石器計測表（縄文時代）

挿図番号	出土区	グリッド	遺構番号	出土層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
L02	31	I22-2	－	－	石核	1.91	4.09	1.60	10.24	
L03	32	I23-7	－	－	石核	2.10	2.55	1.61	7.73	
L04	32	I23-7	－	－	石核	2.58	2.14	2.49	8.18	
L05	32	I23-7	－	－	石核	2.63	2.56	1.82	9.70	
L06	32	I22-9	－	－	石核	2.85	2.26	1.92	11.32	
L07	34	I22-19	－	－	石核	2.82	2.79	2.08	18.08	
L08	33	I22-6	－	－	石核	2.29	2.74	1.42	7.07	
	32	J22-23	－	－	打製石鏃	2.25	1.37	0.30	0.71	
L10	34	I23-16	－	－	打製石鏃	2.34	1.38	0.63	1.79	
L11	33	I21-15	－	－	打製石鏃	2.55	1.79	0.44	1.79	
L12	34	－	－	－	打製石鏃	2.48	1.60	0.32	0.91	
L13	33	I21-15	－	－	打製石鏃	1.73	1.02	0.35	0.47	
L14	16	調査区東端	－	－	石匙	3.47	4.29	0.71	8.30	
L15	34	－	－	－	石匙	3.65	6.03	1.08	16.65	
L16	17	調査区内	－	－	石匙	4.75	7.15	1.20	31.30	
L17	33	I21-9	－	－	スクレイパー	2.96	2.28	0.86	4.13	
L18	34	I22-14	－	－	スクレイパー	3.56	3.16	1.35	11.51	
L19	32	I23-1	－	－	スクレイパー	3.45	2.72	0.78	6.17	
L20	1	K16-17	－	－	スクレイパー	9.70	2.82	1.41	37.61	
L21	33	I22-7	－	－	円盤型石器	7.04	6.82	1.24	80.45	
L22	－	－	－	－	敲石	9.46	7.22	6.15	242.15	
L23	14	－	－	－	敲石	7.00	6.90	3.62	253.33	
L24	1	K16-17	－	－	敲石	10.70	10.50	4.86	947.40	
L25	32	I23-6	－	－	敲石	5.27	4.15	2.31	68.07	
L26	7	K17-8	－	－	磨石	11.60	10.27	5.52	973.25	
L27	31	－	－	－	敲石	5.97	5.03	2.83	103.59	
L28	10	L18-18	－	－	磨石	10.67	11.00	6.54	1143.60	
L29	31	J22-22	－	－	石皿	(10.77)	(5.42)	(5.10)	230.19	
L30	13	M17-24	－	－	打製石斧	14.10	6.12	2.01	203.80	
L31	6	L16-19	－	－	磨製石斧	11.07	4.72	0.99	68.97	
L32	34	I22-14	－	－	打製石斧	9.30	6.07	2.61	205.80	
L33	34	I22-8	－	－	打製石斧	5.08	7.43	1.61	78.10	
L34	13	M17-24	－	－	打製石斧	11.30	5.72	2.14	145.36	
L35	13	M17-24	－	－	打製石斧	9.05	5.62	1.85	118.82	
L36	25	M20-11	－	－	打製石斧	(8.78)	6.13	2.71	188.93	
L37	6	L16-14	－	－	打製石斧	7.35	5.20	1.70	67.26	
L38	12	L17-12	－	－	打製石斧	9.00	9.20	1.26	161.71	
L39	28	L19-5	－	－	打製石斧	10.61	8.36	1.41	163.88	
L40	6	L16-14	－	－	打製石斧	6.49	5.39	1.33	50.78	
L41	34	I22-14	－	－	磨製石斧	13.37	7.83	2.77	387.94	
L42	28	L20-2	－	－	垂飾	3.03	0.82	0.81	2.79	三万田型
L43	32	L21-15	－	－	管状玉製品	3.05	1.76	1.03	6.50	滑石製

第3章 弥生時代

第1節　概況

弥生時代のものとしては中期にあたる甕棺墓及び土壙墓、それらに付随すると思しき精製土器などが確認された。分布域は25,27,28,29区あたりと尾根頂部付近の東側に集中しており、一部南の緩斜面において散発的に分布する。こうした状況から一定の区画の存在を想定できそうである。

ただし、対となるべき集落域がありそうなものであるが、今回調査した地点では確認できなかった。同様なことが上官塚においても同時期の甕棺墓群に対応するはずの集落域が存在しないという状態が見受けられる。削平により消滅したとも考えられるが、軒並み「ない」というのは異様である。

第2節　弥生時代の遺構

1　甕棺墓

遺跡から28基の甕棺墓（土器棺墓）が確認された。分布には偏りがあり、北は25，27，28，29区に南は33区に分布している（第27図）。分布の南北で同じ群には共通項が認められるものの、南と北相互においては形状が明らかに異なっており別の一群であるように見受けられる。多くは合わせ口式で、単棺と断定できるものはほとんどない。組み合わさる二つの土器には大きさが明確に異なる例が多く、大小で一セットを構成する。人骨の残存状況はあまり芳しくなく、あったとしても断片的にしか残っていない状態である。

なお、合わせ口甕棺において通例的に"上甕"、"下甕"と呼び習わしているが、実際棺としての上下関係を示すとは限らず、組み合わせた棺の大小でも小さいほうに遺体を納めていると考えられる場合もあるなど、棺の形状に拠った区別は適当でないように思われる。

これを踏まえて本報告では人骨の位置や棺の設置方法に着目し、遺体を納めた側を"主棺"、納棺後蓋の役割を果たす側を"副棺"と呼称することとする。

以下個別の説明を行っていくが、組み合わせは先述の区別により「○号（主棺＋副棺）」というように記載する。

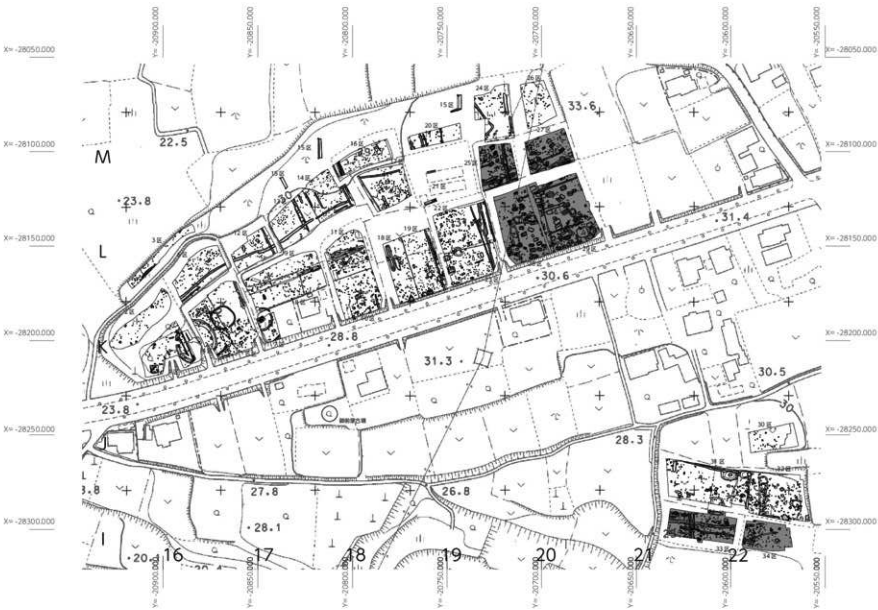
なお、個体の計測値も末尾に記載するが、最大胴部径の括弧書きは、底部から何cmのところで最大胴部径が来ているかを示すものである。また、口縁付近を打ち欠いて調整したものについては埋葬時にこの状態で機能的に完結しているものとして扱い、計測値も破損としたものではなく完存するものとして数値を記載する。

（1）1号（中型甕＋小型鉢　第28図）

25区で確認された。鉢と甕の組み合わせである。墓坑は楕円形を呈し、上部のほとんど削平されている。土坑の底部から斜面に沿わせるように甕を配置し、遺体を納めた後、鉢により蓋をした形である。ともに破砕しており、甕は陥没して上部から埋土が入ることで人骨は風化したものと思われる。

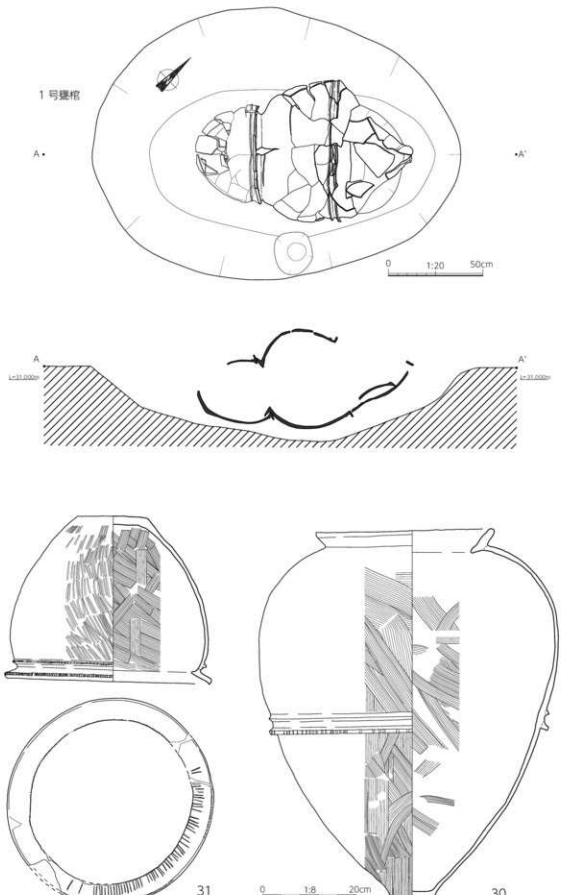
土器個別に目をやると、甕は、内湾する鋤先状口縁に口縁下部の径がすぼまり、肩が強く張り出す。胴部の中頃に刻目のある突帯を1条、その上に三角突帯を1条の都合2条巡らせている。最大胴部径は肩から突帯の間にあり、やや上に膨らんだ怒り肩のような印象を受ける。

鉢の大きさは日常で使用されるものに近い。口縁部には刻目を施し、口唇部はやや尖る。口縁直下に三角突帯に刻目を施すものが1条巡る。外器面はヘラミガキで丁寧に調整される。口縁の平坦面にはこの時期の他の土器に見られ



※グリッドは旧測地系（Tokyo Datum）で設定されたものであるため、JGD2011 における数値との間に差が生じている

第 27 図　弥生時代の遺構が多く見られる地点



第 28 図　1号甕棺出土状況図及び遺物実測図

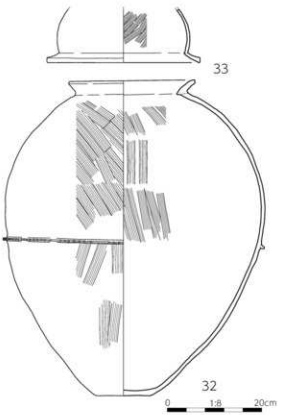
るような放射状のヘラ磨き調整のように赤色顔料により装飾が施される。

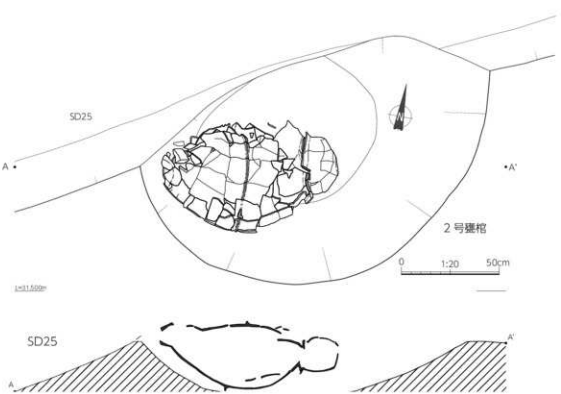
甕の底径は9.6cm・最大胴部径64cm（高56cm）・頸径32cm・口縁径38.4cm・高さ76.8cm、鉢は口縁径44cm・底部径16cm・高さ34.2cmを測る。

（2）2号（中型甕＋小型鉢　第29図）

25区で確認された。1号と同じく鉢と甕の組み合わせである。墓坑は楕円形で上部を大きく失っている。約1/3近くを溝（SD25）によって切られているが、棺自体は甕の一部を失う程度で残存している。これも1号と同じく甕を土坑の堀方に沿わせて設置し、納棺後鉢で蓋をする形状を取っているようである。墓坑の鉢付近に開いている領域は、納棺のための作業域と推定する。

土器について、甕の口縁は、1のように内湾する鋤先状ではなく、くの字を呈する。コの字刻目突帯が胴部中頃に1条巡らされ、最大胴部径は突帯よりも上のあたりに来る。1に比べるとやや中程に最大径が来るため、張り出しが少し下に落ち着いてきた印象を受ける。調整は突帯を境に下部は縦方向、上部は斜め方向のハケ目を施す。





第29図　2号甕棺出土状況図及び遺物実測図

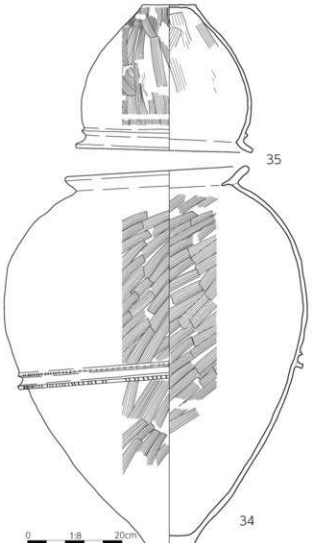
鉢は底部を破損するためはっきりしないが1号に比べて胴部の屈曲が強く、あまり器高は高くないと推測される。

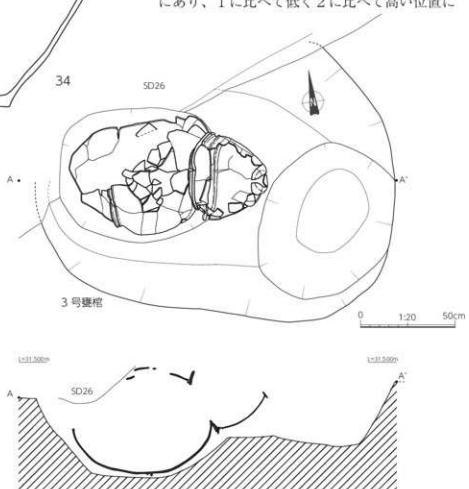
甕の底径は12cm、最大胴部径54.4（高48）cm、頸径21.6cm、口縁径21.4cm、高さ66.4cmであり、鉢は口縁径21.4cmを測る。

（3） 3号（中型甕＋小型鉢 第30図）

25区で確認された。1，2号と同じように小型鉢と中型甕の組み合わせである。墓坑は長楕円形で甕を設置する部分のみさらに掘りくぼめてある。そうして納棺後小型鉢を蓋としてかぶせている。鉢側に大きな空間があるのは1号、2号ともに共通してみられる点である。

甕の内湾する鋤先状口縁は1号のように顕著ではないが2号に比べてはっきりしている。ただし内部の先端は細く尖るように処理されており、1と2の中間的な関係にある。突帯は胴部中間あたりに2条、上は三角・下はコの字で刻目のものが巡る。最大胴部径は突帯よりも上部にあり、1に比べて低く2に比べて高い位置に





第30図 3号甕棺出土状況図及び遺物実測図

ある。器面は内外ともに斜め方向のハケ目となる。

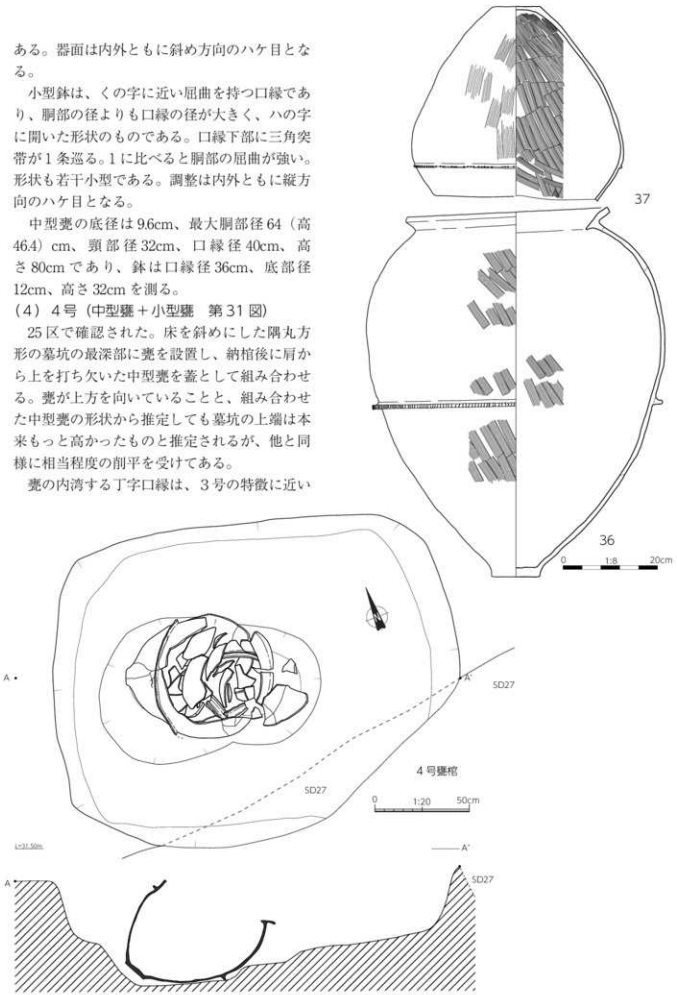
小型鉢は、くの字に近い屈曲を持つ口縁であり、胴部の径よりも口縁の径が大きく、ハの字に開いた形状のものである。口縁下部に三角突帯が1条巡る。1に比べると胴部の屈曲が強い。形状も若干小型である。調整は内外ともに縦方向のハケ目となる。

中型甕の底径は9.6cm、最大胴部径64（高46.4）cm、頸部径32cm、口縁径40cm、高さ80cmであり、鉢は口縁径36cm、底部径12cm、高さ32cmを測る。

（4）4号（中型甕＋小型甕　第31図）

25区で確認された。床を斜めにした隅丸方形の墓坑の最深部に甕を設置し、納棺後に肩から上を打ち欠いた中型甕を蓋として組み合わせる。甕が上方を向いていることと、組み合わせた中型甕の形状から推定しても墓坑の上端は本来もっと高かったものと推定されるが、他と同様に相当程度の削平を受けてある。

甕の内湾する丁字口縁は、3号の特徴に近い



第31図　4号甕棺出土状況図及び遺物実測図

が、角度がきついため肩が強く張る。口唇部は角張る。突帯は胴部中頃より下の位置にコの字で刻目のものが1条巡る。外器面の調整は突帯を挟んで両方ともに斜め方向のハケ目となる。

中型甕は、突帯の下に最大径が来るものであり、そこから口縁に向かって屈曲する。肩～口縁は納棺の際に打ち欠いて調整を行ったため存在しない。外器面は突帯までは縦方向のハケ目であり、突帯より上方は調整がはっきりとしない。

甕の口縁径は42.4cm・頸径36.8cm・最大胴部径63.2（高53.6）cm底部径10.4cm、中型甕の底部径

（5）5号（小型甕＋短頸壺　第32図）

27区で確認された。断面すり鉢状の墓坑の中程に小型甕を据え、納棺後に短頸壺で蓋をする。短頸壺の最大胴部径が壺の頸径とが近似であり、写真のようにすっぽりと蓋として収まっている。

小型甕は、口唇部に刻目を施す平場を持った口縁で頸部でくの字に強く屈曲する。胴部は緩やかに張り出し、中頃で最大径を迎える。平底の底部に向かって上半とほぼ同程度の屈曲で集束する。

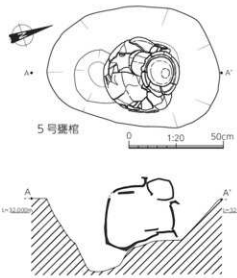
短頸壺は元からの形状に加えてさらに口縁を打ち欠くことにより、そろばんの玉の様な形状を呈する。外器面は屈曲部を境に下部は縦方向のハケ目であり、上方は頸部までは横方向のハケ目のち斜め方向のハケ目、頸から口縁にかけては縦方向のハケ目となる。概して整形・調整は丁寧である。

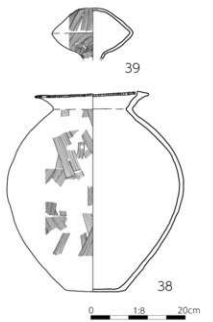
小型甕は口縁径24cm・頸部径16cm・底部径12cm・高さ32cm、短頸壺の底径は5.6cm・最大胴部径17.6（高22.4）cm・頸部径4.8cmを測る。

（6）6号（中型甕＋小型鉢　第33図）

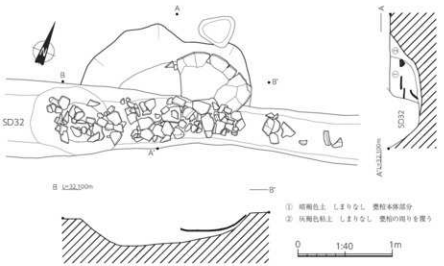
27区で確認された。墓坑の過半を溝（SD32）により切られる。棺もその際に破壊されており、溝の埋土中に散らばっている。かろうじて甕の一部が墓坑中に留まっており、長楕円形を呈することと甕を据えて納棺した後、鉢を蓋としてかぶせること、墓坑は鉢側が大きく空間が開くことなど、これまでに見られた甕＋鉢形態と共通する。

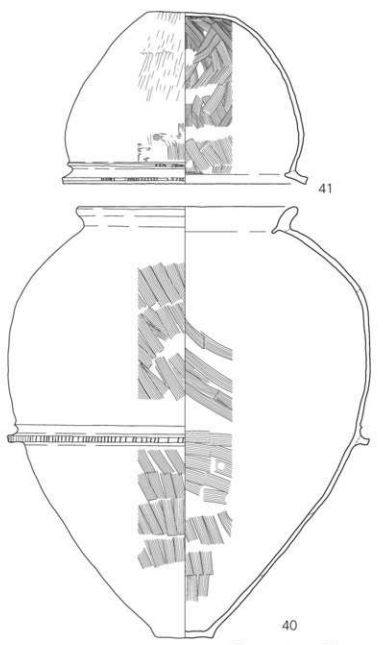
遺構中の遺物残存状況は前述の通り後世の遺





第32図　5号甕棺出土状況図及び遺物実測図





第 33 図　6 号甕棺出土状況図及び遺物実測図

構により切られているため良くない。ただし破壊後の遺物散乱はある程度で防がれたようで、復元は可能であった。

鉢はやや広めの平底で口唇部に刻目、口縁部下に一部に刻目を施す三角突帯が1条巡る。最大径は胴部上半にあり、そこから底部に向かってゆるやかに屈曲しつつ狭まっていく。外器面では底部から胴部中頃にかけて斜め方向のヘラミガキ、上半にもヘラミガキ痕が認められるが方向はランダムであり部分的に前調整であるハケ目が覗く。

甕は口唇部が肥厚する丁字とくの字の中間にあるような口縁部で、口縁下部の肩から胴部上半にかけて強く屈曲する形状を取る。胴部中頃あたりに省略された三角突帯とコの字の刻目突帯が1条ずつ巡る。外器面調整は突帯を境に下部では縦方向のハケ目、上部は斜め方向のハケ目となる。

鉢の底径は20cm・口縁部径は52cm・高さは36.8cm、甕の口縁径は48.6cm・頸部径は40cm・最大胴部径は73.6（高65）cm・底部径は12cm・高さは92cmを測る。

（7）7号（中型甕＋中型甕　第34図）

27区で確認された。6号と同様に溝（SD33）で遺構の大半を切られており、棺もそれに伴って破壊されたものと考えられる。6号と異なる点は溝内に棺の破片が散らばっておらず、復元がほとんど出来なかったところである。

かろうじて残存した口縁部付近から器種とある程度の計測値は得られるものの、器形は判然としない。

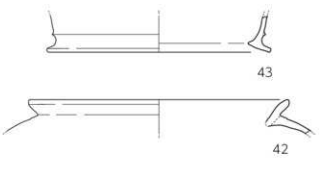
主棺の中型甕は鋤先状口縁で内側に大きく傾くことで頸部付近が強く湾曲する。口縁形56cm・頸径48cmを測る。

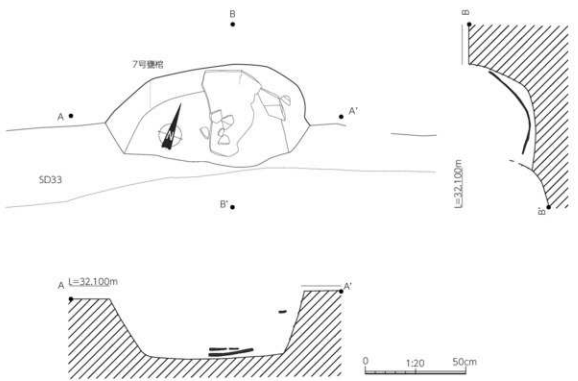
副棺の中型甕は口縁径48cmを測り、口縁下部に省略された三角突帯が巡る。

（8）8号（中型甕＋小型鉢　第35図）

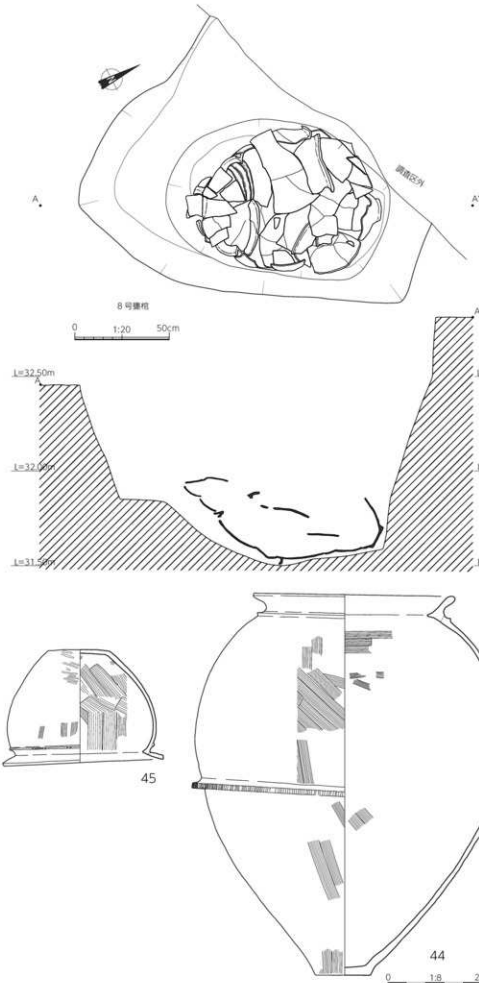
不定形の墓坑の最下面に中型甕を据え、納棺後小型鉢をかぶせて蓋をする。

中型甕は口縁径43.2cm・頸径34.4cm・最大胴部径64.8（高50.4）cm・底部12cm・高さ80cmを測る。口縁部は口唇が肥厚する鋤先状





第34図　7号甕棺出土状況図及び遺物実測図



第 35 図　8号甕棺出土状況図及び遺物実測図

で、内口縁は尖りつつ退化する。口縁直下に三角突帯を1条、胴部中央にコの字の刻目突帯を1条巡らす。外器面調整は底部を縦方向、中頃は斜めより之縦方向、中頃から肩にかけて斜め方向、口縁部付近を縦方向のハケ目を施す。

小型鉢は口縁径33.6cm・最大胴部径32（高17.6）cm・底部径13.6cmを測る。口縁はやや開き気味のくの字を呈し、口縁下部に刻目のある三角突帯を1条巡らす。器面調整は外部の底部付近にミガキ、内器面は下部を斜め方向・上部を縦方向のハケ目を施す。

(9)　9号（中型甕＋中型甕　第36図）

28区で確認された。傾斜する長楕円形の墓坑の一番深い部分に甕を据え、納棺後に中型甕を蓋としてかぶせたものである。中型甕側が広く空間が開ける。肩から上を打ち欠いて甕と合わせるようにしている。開口部径は32cmであり、甕の頸径よりも狭い。胴部上方に最大径があるため甕の中に入り込む形態になるかと思われたが実際は甕の口縁部に接する形で出土している。この位置だと径が合わないので、接合部に粘土で封をしていた可能性がある。

主棺である中型甕の底径は10.4cm・開口部径は32cm・最大胴部径51.2（高50.4）cm・高さ60cmであり、甕は口縁径44cm・頸部径37.6cm・最大胴部径68（高44）cm・底部径10.4cm・高さ84cmを測る。胴部上半で屈曲し、肩が張り出す形状をしている。胴部中頃にコの字の刻目突帯が1条巡る。外器面調整は縦方向のハケ目となる。形状や突帯の特徴から南筑後のKⅢa式として設定されているものと同等である。

副棺となる中型甕はくの字状口縁で口縁直下に三角突帯が1条巡る。胴部中頃よりやや下の辺りに小さい台形突帯と大きい台形の刻目突帯がそれぞれ1条巡る。外器面は縦方向のハケ目となる。これも型式的には主棺と同じものと考えられる。

(10)　10号（中型甕＋小型鉢　第37図）

29区で確認された。楕円形の墓坑で、中型甕を墓坑の底に設置し、納棺後小型鉢で蓋をする形態を取る。小型鉢の口縁径は中型甕の口縁径より大きく、甕の頭を鉢で覆う姿になる。

甕は口縁部径34.4cm・頸径28cm・最大胴部径53.6（高48）cm・底部径11.2cm・高さ65.6cmを測り、胴部の中頃に下向きに飛び出す角形の突帯（部分的に刻目がある）が1条巡る。口縁は肥厚する鋤先状であるが、きつく傾斜し、くの字に近い。外器面調整は斜め方向のハケ目を施す。

鉢は口縁部径38.4cm・頸径32cm・最大胴部径34.4（高12.8）cm・底部径13.6cmを測る。口唇部に刻目を有し、口縁下部に三角突帯を1条巡らせる。他の鉢形に比べて胴部の張り出しが強く、短胴で丸みを帯びた印象を受ける。

(11)　11号（中型甕＋中型甕　第38図）

28区で確認された。楕円形の墓坑で、溝（SD34）によって切られる。左側半分を破壊されており、溝にその破片が散らばっている。

主棺の中型甕を墓坑の堀方に沿わせた結果、開口部がやや下を向く。納棺後胴部の中程から打ち欠いた中型甕を蓋として設置する。

主棺の中型甕は開口部径28cm・最大胴部径48（高48）cm・底部径12.8cm・高さ60cmを測り、胴部の中頃に下向きに大きく飛び出す角形の刻目突帯が1条巡る。調整は内外ともに斜め方向のハケ目となる。

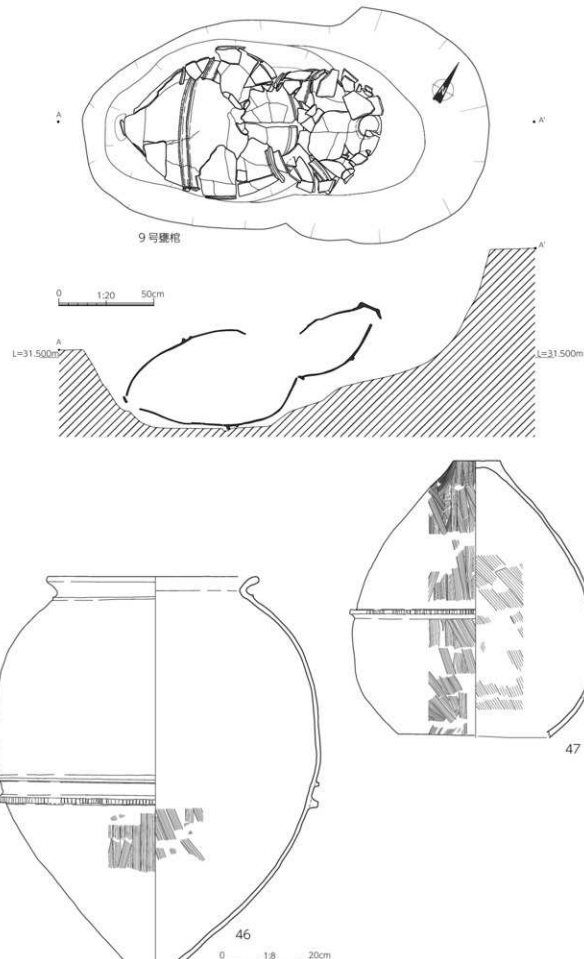
副棺となる中型甕は復元開口部径が40cm・高さ29.6cm・底部径8.8cmを測り、最大胴部径40.8（高25.6）cmを測る。最大径を迎えたあたりより少し上の部分で打ち欠かれている。

(12)　12号（甕＋中型甕　第39図）

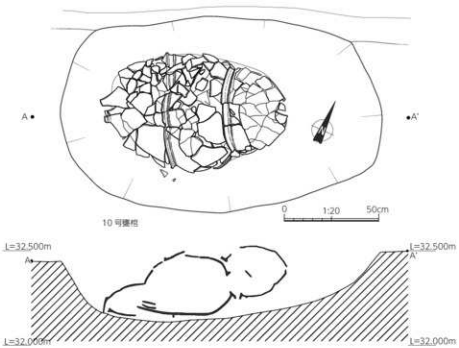
29区で確認された。楕円形の墓坑で最下部に甕を据えて、納棺後鉢をかぶせる形態を取る。主棺の胴部中頃に頭蓋骨の一部が出土しているとある。人骨については所在不明である。

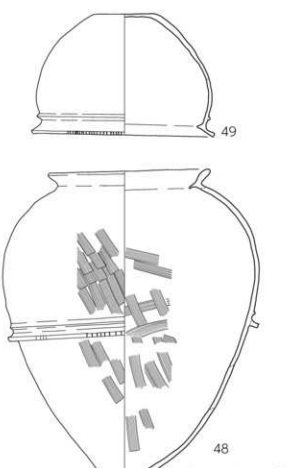
甕は口縁径34.4cm・頸径27.2cm・最大胴部径53.6（高51.2）cm・底部径11.2cm・高さ70.4cmを測り、胴部中頃に刻目突帯を1条、その上に三角刻目を1条巡らす。口縁はくの字に近い鋤先状で、10号と比較して内口縁が屈曲部とほぼ同化しつつある。その様は10→12の順でくの字へと移行しつつある過程を見ているようである。

中型甕は口縁部径50.4cm・頸径40cm・最大胴部径44（高25.6）cm・底部径14.4cm・高さ39.2cmを測る。口縁はややラッパ形に開き、



第 36 図　9 号甕棺出土状況図及び遺物実測図





第 37 図　10 号甕棺出土状況図及び遺物実測図

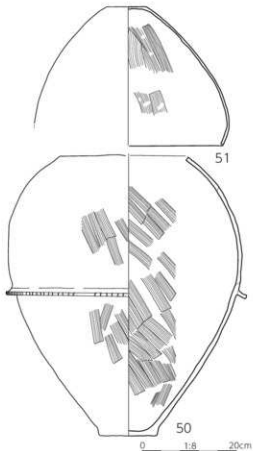
口唇部をナデて口縁下部に刻目突帯を１条巡らす。外器面はミガキ、内器面は明瞭でないが底部付近で縦方向のハケ目、口縁部付近で横方向のハケ目となる。

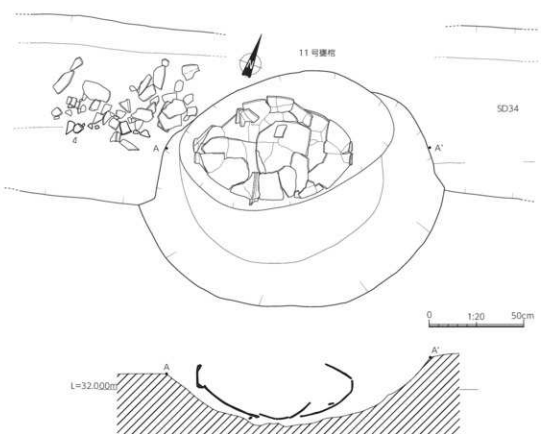
(13)　13号（中型甕＋中型甕　第40図）

28区で確認された。底部がほぼ平坦な面を持つ長楕円形の墓坑の片側斜面に甕を据え、納棺後中型甕で蓋をする形態である。中型甕側は作業領域として広い空間を持っている。他の例と比較してやや墓坑の残りが良い。そのため後世の破壊をほとんど受けずに、埋葬後の自壊のみでパーツは揃っている。

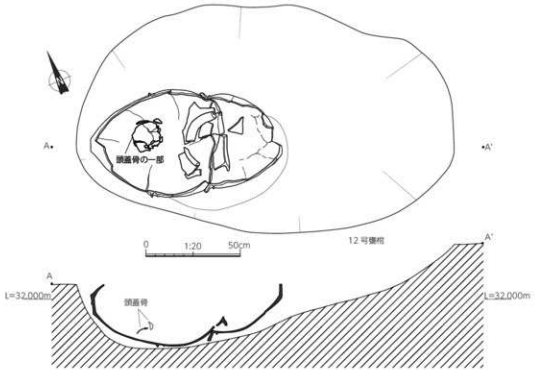
双方ともに基本的な形状は似通ったもので厳密な違いはその大きさと口縁の形状くらいである。また、口縁部径はそれぞれ揃っており、打ち欠いたりするなどの調整を必要とせずに口縁で合わせられたものと思われる。

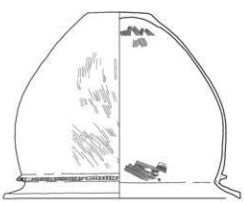
中型甕はくの字に近い撥先状口縁で胴部上半に最大径を持つ。胴部中頃に刻目に下方に伸びる角形の刻目突帯が１条巡る。調整は突帯を境に下部は縦方向に近いハケ目、上部は斜め方向



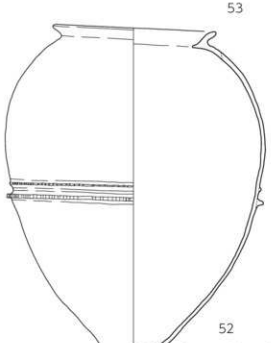


第38図　11号甕棺出土状況図及び遺物実測図

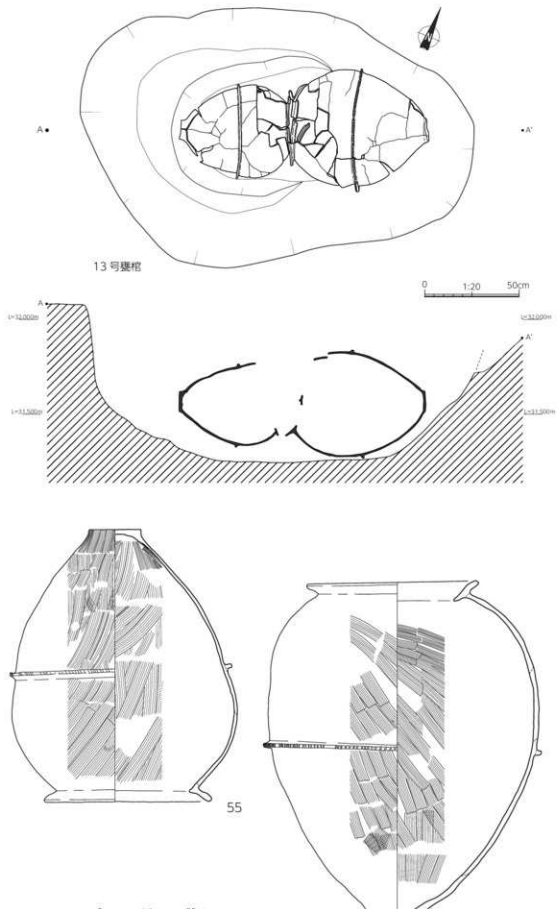




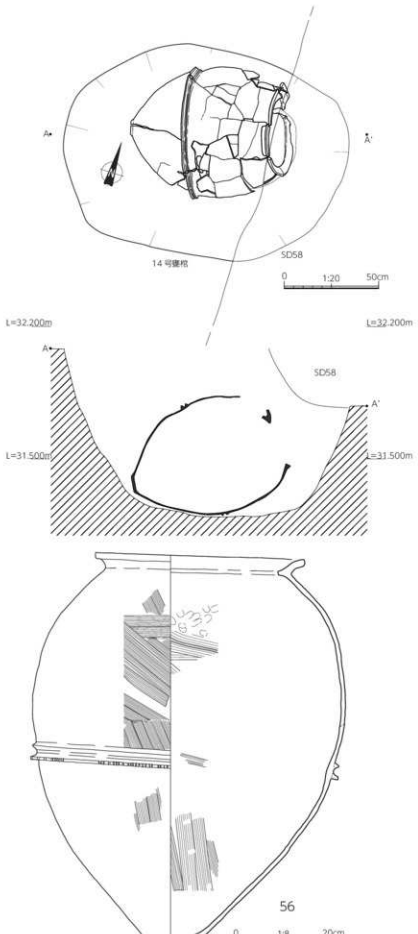
53



第 39 図　12 号甕棺出土状況図及び遺物実測図



第 40 図　13 号壜棺出土状況図及び遺物実測図



第 41 図　14 号甕棺出土状況図及び遺物実測図

のハケ目となる。

甕は鋤先状口縁で中型と同様胴部上半に最大径を持つ。胴部中頃に下方に伸びる角形の刻目突帯が巡る。調整は内外ともに斜め方向を主とし、底部付近は縦方向のハケ目となる。

中型甕の底部径 11.2cm・最大胴部径 48cm・頸部径 28cm・口縁部径 36cm・高さ 57.6cm、甕は口縁径 36cm・頸部径 28cm・最大胴部径 53.6（高 36）cm・底部径 11.2cm・高さ 73.6cm を測る。

(14)　14 号（中型甕　第 41 図）

28 区で確認された。やや小規模な楕円形墓坑に単棺で配置される。土坑の底に甕を据えて、納棺後は木などで蓋をした可能性はあるが、残存していない。

甕は口縁部径 44cm・頸径 36.8cm・最大胴部径 64.8cm（高 52.8）・底部径 10.4cm・高さ 83.2cm を測る。胴部中央にコの字の刻目突帯、その上部に三角突帯をそれぞれ 1 条巡らせる。ゆがみのため全体がやや右に傾く。口縁は鋤先状で口唇はやや肥厚し内口縁は角張る。最大胴部径が胴部の底から 2/3 程度の位置にあり、若干怒り肩のようであるが頸の直下付近に最大径が来るものに比べてやや落ち着く。外器面調整は下半部を縦方向のハケ目、上部を斜め方向のハケ目となる。

(15)　15 号（中型甕　第 42 図）

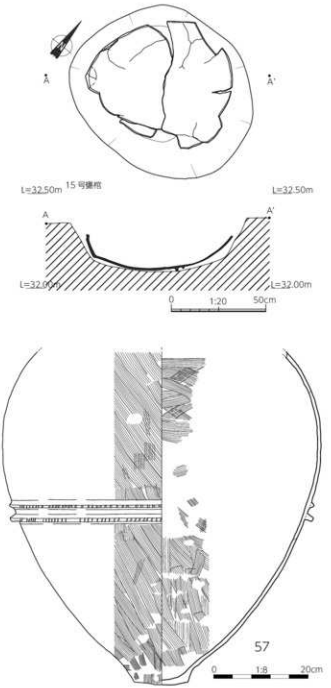
28 区で確認された。楕円形土坑の底に甕を据える。残存状況が悪く、甕の半分しか残存していない。単棺の可能性もあるが、副棺が消失した可能性も否定できない。

甕は最大胴部径 66cm・底部径 12cm を測る。肩から上を欠いており、詳述できないが最大胴部径が底から 2/3 の高さにありやや怒り肩気味の器形である。外器面調整は上下ともに斜め方向のハケ目、内器面は下部を縦方向、上部を斜めのち横方向のハケ目となる。

(16)　16 号（中型甕＋小型甕　第 43 図）

28 区で確認された。長楕円形の土坑の底に甕を据え、納棺後小型の甕で蓋をする。主棺の頸径と副棺の口縁部径が同等であり、主棺の口縁に乗る形で合わせられたものと思われる。

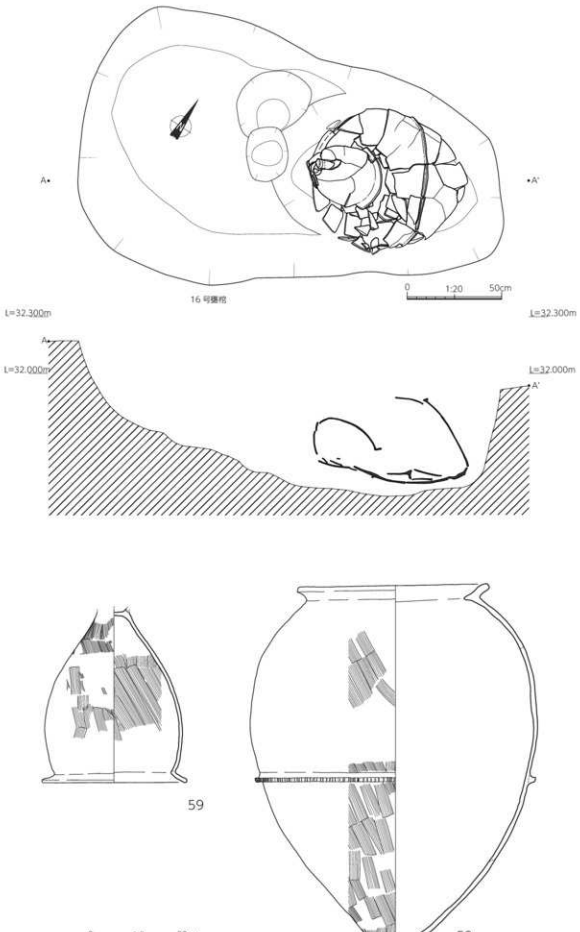
甕は、口縁部径 40cm・頸径 32cm・最大胴部径 60（高 48）cm・底部径 11.2cm・高さ



第 42 図　15 号甕棺出土状況図及び遺物実測図

76cm を測る。口縁は鋤先状で内口縁は丸みを帯びてくの字に近い。胴部の中央にコの字の刻目突帯を 1 条巡らす。最大胴部径は同部中心よりやや上に位置し、胴が孕む形態である。外器面調整は下部を斜め寄りの縦方向のハケ目、上半部を斜め方向のハケ目となる。

小型甕は、上げ底のいわゆる黒髪式とされる甕である。底部を欠くため細かい点については不明であるが口縁径 32cm・最大胴部径 28.8cm を測る。外器面調整は縦方向のハケ目、内器面



第 43 図　16 号甕棺出土状況図及び遺物実測図

調整はややストロークの長い斜め方向のハケ目となる。

(17)　17号（小型甕＋小型甕　第44図）

29区で確認された。楕円形の墓坑の底部に小型甕を据え、納棺後やや大きな小型甕で蓋をするものである。通常大きい方が主、小さい方が副となるように思えるが、これについては逆転している。

とはいえ合わせ方は小型の方の口縁を打ち欠いている。判断に苦しむところではあるが小型の方が土坑との接地面が大きいこと、結果としてやや大きい方に作業領域が確保されており口縁が下方を向くことから判断して小さい方を主、やや大きい方を副とした。

主棺となる小形甕は口縁を打ち欠いたものであり、開口部径16.8cm・最大胴部径32cm・底部径8cmを測る。胴部が最大化する部分に三角に近い刻目突帯を1条巡らす。外器面調整はあまり判然とせず底部付近に縦方向のハケ目、口縁部付近に斜め方向のハケ目が認められる。内器面は底部から胴部中央にかけてミガキ、口縁付近は斜め方向のハケ目となる。

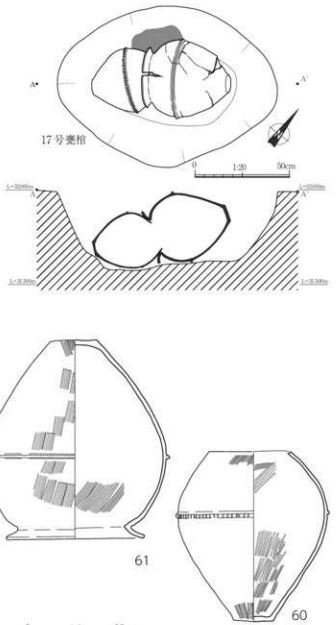
副棺となる小型甕は口縁部径27.2cm・頸径22.4cm・最大胴部径40（高24）cm・底部径10.4cm・高さ42.4cmを測る。口縁はややきつく曲がるくの字であり、最大胴部径の部分に三角突帯を1条巡らす。外器面調整は斜め寄りの縦方向ハケ目、内器面は口縁部付近に斜め方向のハケ目となる。

(18)　18号（中型甕＋中型甕　第45図）

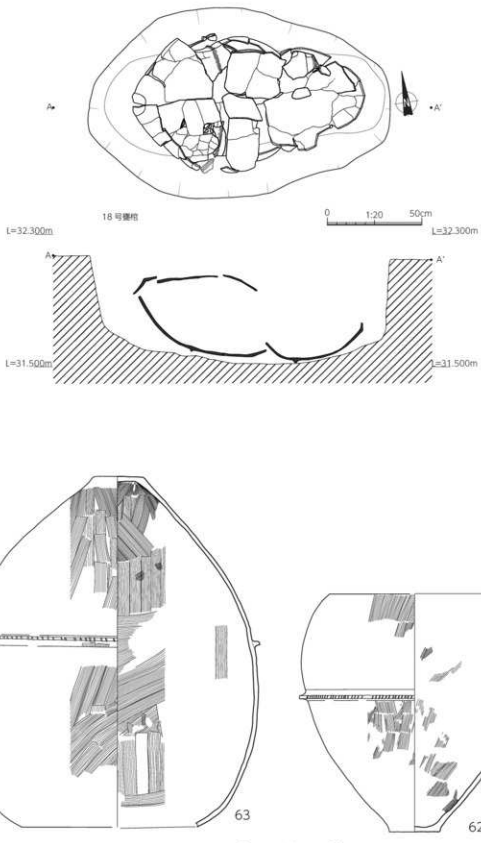
28区で確認された。楕円形の墓坑の底に中型甕を据え、納棺後に甕で蓋をする。これについても17号と同様に小型の方が主となり、大型の方が副となる逆転例と考える。

主棺となる中型甕は開口部径34.4cm・最大胴部径45.6（高36.8）cm・底部径11.2cmを測る。口縁部は打ち欠かれる。胴部の中央にコの字の刻目突帯を1条巡らす。外器面調整は縦方向のハケ目であり、内器面は斜め方向のハケ目である。

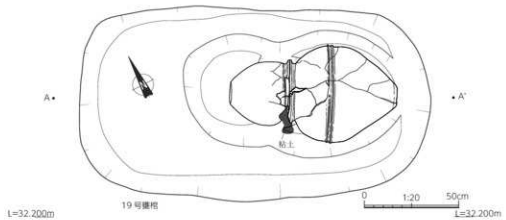
副棺となる甕は主棺と同様に口縁を打ち欠いたものである。開口部径37.6cm・最大胴部径64（高44）cm・底部径11.2cmを測る。胴部中頃よりやや下部にコの字の刻目突帯を1条巡ら

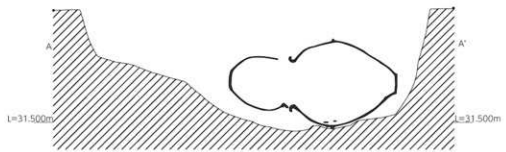


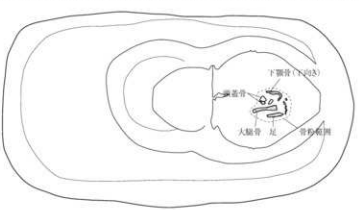
第44図　17号甕棺出土状況図及び遺物実測図

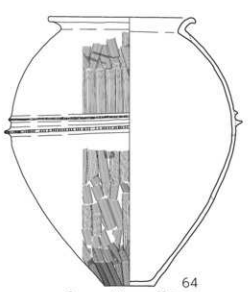


第 45 図　18 号甕棺出土状況図及び遺物実測図









第 46 図　19 号甕棺出土状況図及び遺物実測図

す。外器面調整は下部を縦方向、上部を斜め方向のハケ目となり、内器面は底部付近斜め方向、中頃を縦のち横方向、上半部を斜めのち縦方向のハケ目となる。

(19) 19号（中型甕＋小型甕　第46図）

隅丸の長方形墓坑の底部に中型甕を据え、納棺後小型甕により蓋をする。人骨が出土しており、主棺の胴部中頃に頭蓋骨と脚の骨が集積する様子である。これについても人骨の所在は不明である。　中型甕は口縁径31.2cm・頸径24.8cm・最大胴部径48（高32.8）cm・底部径11.2cmを測る。口縁部は口唇がめくれて下方を向く"くの字形"で胴部中央よりやや上、最大径を迎えるところに三角の刻目突帯を2条巡らす。器面調整は縦方向のハケ目である。

小型甕は口縁径30.4cm・頸径24cm・最大胴部径30.4（高21.6）cm・底部径11.2cmを測る。口縁はやや肥厚するくの字で直下に断面三角の刻目を1条巡らす。外器面は胴部中頃に横方向のミガキ、口縁付近は縦方向のハケ目、内器面はややストロークの長い斜め方向のハケ目を施す。

(20)　20号（中型甕　第47図）

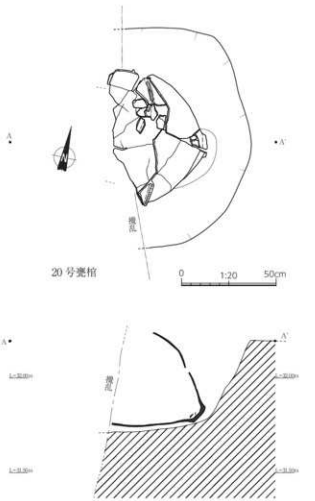
28区で確認された。撹乱で大部分を削られており、全容は明らかではない。主棺と思しきものの半分が残存する。甕の底部径は12cm、最大胴部径は突帯があるところよりも上部にあると思われ不明である。外器面調整は底部付近は斜め方向・それより上は縦方向のハケ目、内器面は判然としないが縦～斜め方向のハケ目がランダムに入る。

(21) 21号（大型甕＋中型甕　第48, 49図）

33区で確認された。長楕円形を呈する墓坑の最下部は、上端より地中に潜り込む副土坑がある。副土坑中に主棺の底部を設置し、納棺後中型甕で蓋をする。

大型甕はKⅢa（須玖Ⅱ）式の甕であり、口縁径72cm・最大胴部径73.6cm・底部径14.4cm・高さ120cmを測る。口縁部はT字で口唇部・内口縁ともに下方に流れる。口縁下部に三角突帯を1条、胴部中央に三角突帯を2条巡らす。

中型甕は在地系とされる黒髪式の甕で口縁部を打ち欠き、主棺の口縁に乗せるような形で設置したものと思われ、出土状況図を見る限りで



第47図　20号甕棺出土状況図及び遺物実測図

もそのようであるが、復元開口部径が40cmと明らかに主棺の口縁径と合っていない。

(22) 22号（中型甕＋中型甕　第50図）

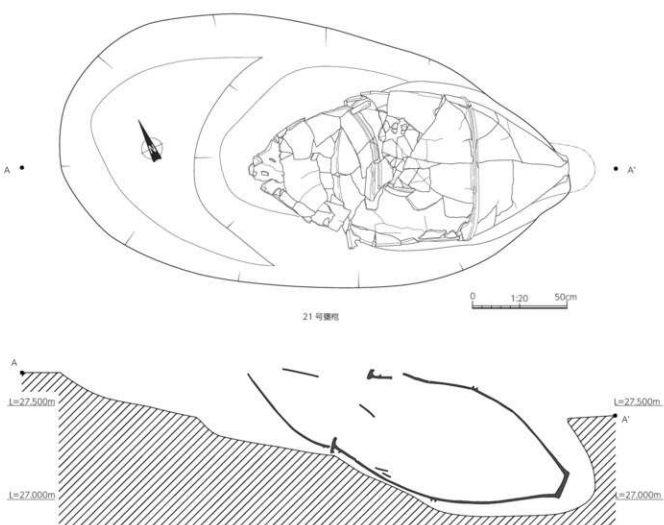
33区で確認された。ひょうたん形の墓坑で半分を耕作により削られている。最下面に壷を設置し、納棺後口縁を打ち欠いた中型甕をかぶせて蓋とする。

主棺となる中型甕の口縁径は28.8cm・頸径19.2cm・最大胴部径39.2（高30.4）cm・底部径6.4cm・高さ52.8cmを測る。水平な鋤先状の口縁で頸部・肩部・胴部中央よりやや上に各1条三角の刻目突帯が巡る。外器面調整は下部に斜め方向のミガキ、それより上面を屈曲する縦方向のハケ目、突帯の上下では横方向のハケ目、内器面は肩部辺りを横寄りの斜め方向、口縁を横方向のハケ目を施す。突帯のあり方は黒髪三式に近いが、器形がやや丸みを帯びたものであり、やや新しいように見える。

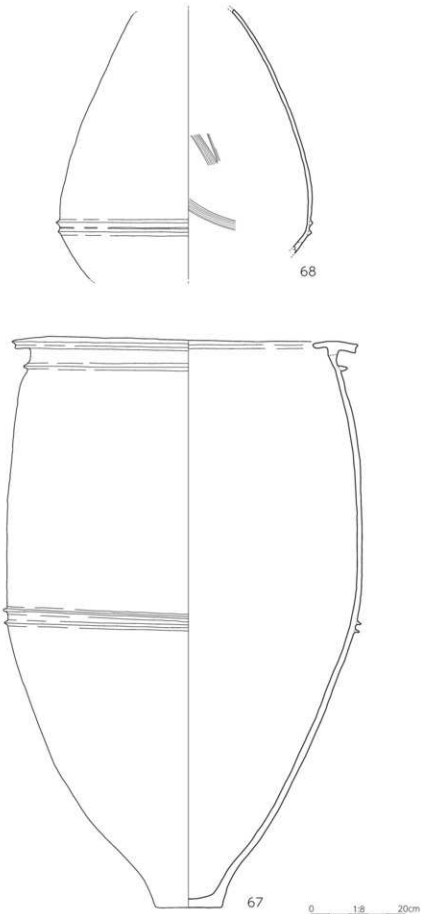
中型甕は最大胴部径付近で打ち欠き、開口部径25.6cm・最大胴部径28.8（高29.6）cm・底部径4cmを測る。最大径を迎えるところに三角突帯を1条巡らせている。輪積み整形の痕跡が残り、ほこほことした器面であり、主棺に比べて雑な印象を受ける。

(23) 23号（中型甕　第51図）

33区で確認された。耕作痕でずたずたにされており、残存状況はきわめて良くない。主棺が据えられた部分がかろうじて残存していたが、元は長楕円形の墓坑であったのではないだろうか。復元しようにも主要部分を大きく欠くことから断片的な情報からおよその形状を導き出すことしかできなかったが後述する24号と



第48図　21号甕棺出土状況図



第 49 図　21 号甕棺実測図

類似するものであったのであろうと推測する。

中型甕は最大胴部径 43.2cm・底部径 6.4cm を測る。

(24) 24 号（中型甕＋小型甕　第 52 図）

33 区で確認された。こちらも 23 号と同様、耕作による削平を受けている。23 号に比べて残りはよく、一部を欠くものの棺の設置状況は確認できる。中型棺の形状に合わせて掘られたような楕円形の墓坑に据え、結果的に水平となる。納棺後口縁を打ち欠いた小型甕をかぶせて蓋とする。

中型甕は口縁部径 35.2cm・頸径 24.8cm・最大胴部径 52cm を測る。撫先状口縁で若干口唇部側が下方を向く。頸部に三角突帯を 1 条、最大胴部径を迎えるところに三角の刻目突帯を 1 条巡らせている。外器面は縦方向のミガキ、口縁部には縦方向のハケ目のち赤色顔料でミガキ状の線を入れる。

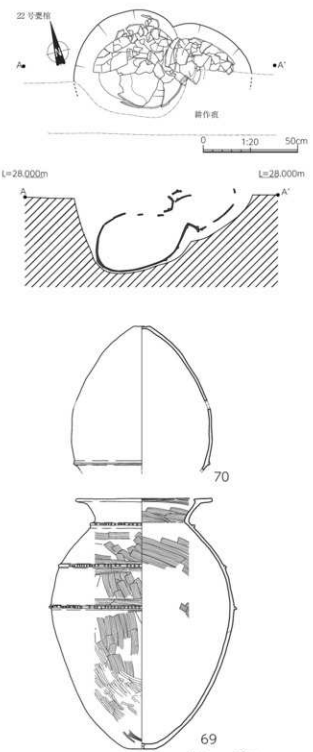
小型甕は開口部径 15.2cm・最大胴部径 28cm（高 26.4）・底部径 5.6cm を測る。最大径を迎えるところに三角突帯を 1 条巡らす。器面調整は胴部にミガキ、口縁部付近は縦方向のハケ目のちミガキを施す。

(25) 25 号（大型甕＋大型鉢　第 53, 54 図）

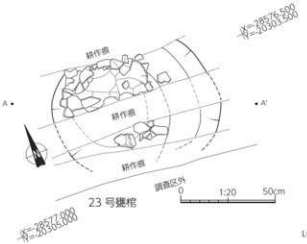
33 区で確認された。先がすぼまる亜三角形の墓坑の最下部に副土坑を設け、その中に主棺を設置し納棺後に鉢で蓋をする。

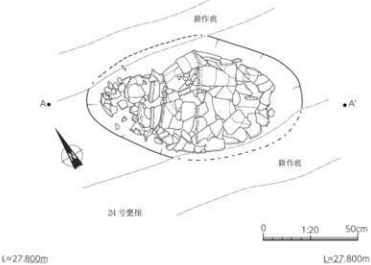
大型甕は K Ⅲ a（須玖Ⅱ）式の甕であり、口縁径 74.4cm・最大胴部径 72cm（高 82.4）・底部径 16cm・高さ 124cm を測る。口縁はやや下方に流れる T 字形、口縁下部に 1 条、胴部中央付近に 2 条三角突帯を巡らせる。

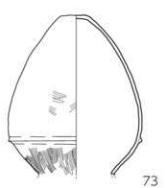
大型鉢は口縁径 64cm・底部径 12cm・高さ 28cm を測る。口縁は撫先状で、両側ともに角張る。外器面調整は縦方向のハケ目が施される。

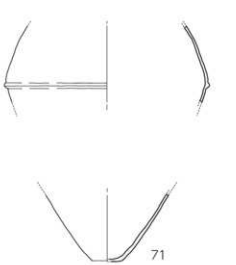


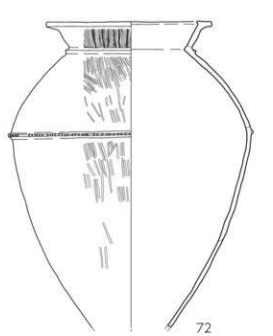
第 50 図　22 号甕棺出土状況図及び遺物実測図





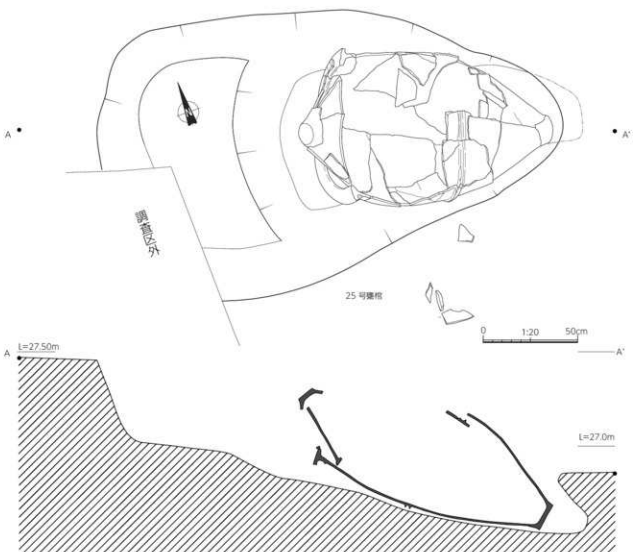




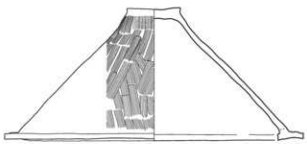


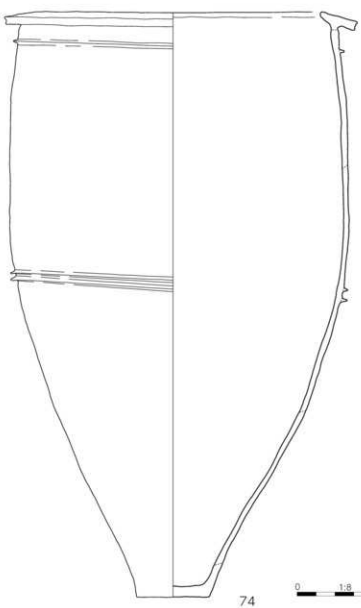
第 51 図　23 号甕棺出土状況図及び遺物実測図

第 52 図　24 号甕棺出土状況図及び遺物実測図



第 53 図　25 号鏃棺出土状況図





第 54 図　25 号甕棺実測図

第5表　塔ノ木遺跡出土甕棺観察表

挿図番号	区	遺構番号	グリッド	区分	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	最大胴径(cm)	混和材	色調（外）	色調（内）	調整（外）	調整（内）	焼成	備考
30	25	1号甕棺	M19-14	主棺	口縁～底部	37.7	77.9	9.4	65.3	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	黄橙 Hue7.5YR7/8	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	胴部突帯1条,胴部刻み目突1条,突帯下部黒斑
31	25	1号甕棺	M19-14	副棺	口縁～底部	43.7	35.3	15.0	41.6	長石,角閃石,雲母	橙 Hue5YR6/8	橙 Hue5YR6/6	ナデ,ミガキ	暗文様ミガキ,ナデ,ハケ目	良好	口縁刻み目,頸部刻み目突帯1条,外面に煤付着,内面磨してある
32	25	2号甕棺	M19-20	主棺	口縁～底部	26.6	66.5	(11.6)	54.9	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue5YR6/8	黄灰 Hue2.5Y6/1	ナデ,ハケ目	ナデ ハケ目	良好	胴部刻み目突帯1条,底部に黒斑
33	25	2号甕棺	M19-20	副棺	口縁～胴部	(32.4)	(11.2)	-	(28.6)	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	橙 Hue5YR6/8	橙 Hue5YR6/6	ナデ	ナデ,ハケ目	良好	
34	25	3号甕棺	M19-20	主棺	口縁～底部	38.9	80.1	10.0	64.0	長石,石英,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	明黄褐 Hue10YR6/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良	胴部刻み目突帯2条,外面黒斑
35	25	3号甕棺	M19-20	副棺	口縁～底部	37.4	31.0	11.3	35.9	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue5YR7/8	浅黄橙 Hue7.5YR8/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	頸部突帯1条,胴部下部に黒斑
36	25	4号甕棺	M19-20	主棺	口縁～底部	43.1	77.7	10.1	63.0	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR6/8	橙 Hue7.5YR6/8	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	胴部刻み目突帯1条,外面に煤付着,突帯下部黒斑
37	25	4号甕棺	M19-20	副棺	頸部～胴部	-	(41.2)	10.2	44.6	長石,角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	胴部刻み目突帯1条
38	27	5号甕棺	M20-12	主棺	口縁～底部	24.0	42.3	12.4	37.2	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	橙 Hue7.5YR7/6	暗青灰 Hue5B4/1	ナデ,ハケ目	ナデ	良好	内外の口縁刻み目
39	27	5号甕棺	M20-12	副棺	頸部～底部	-	(10.6)	6.0	17.1	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR6/8	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	ナデ,ハケ目	ナデ	良好	丹塗痕
40	27	6号甕棺	M20-12	主棺	口縁～底部	46.8	90.7	11.8	76.5	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR6/8	橙 Hue7.5YR6/8	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	胴部刻み目突帯1条,胴部黒斑
41	27	6号甕棺	M20-12	副棺	口縁～底部	51.8	36.2	10.5	50.3	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	橙 Hue2.5YR6/8	明赤褐 Hue5YR5/8	ナデ,ミガキ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	口縁刻み目,頸部刻み目突帯1条,底部周辺に黒斑
42	27	7号甕棺	M20-13	主棺	口縁	(35.4)	(7.3)	-	-	長石,角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ	ナデ,ハケ目	良好	
43	27	7号甕棺	M20-13	副棺	口縁	(47.5)	(7.7)	-	-	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	頸部突帯1条
44	28	8号甕棺	M20-18	主棺	口縁～底部	42.5	86.8	11.4	65.2	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	橙 Hue7.5YR6/6	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	頸部突帯1条,胴部刻み目突帯1条,突帯上部に黒斑
45	28	8号甕棺	M20-18	副棺	口縁～底部	33.9	24.4	13.1	31.5	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	橙 Hue2.5YR7/8	緑黒 Hue10GY2/1	ナデ,ハケ目,ミガキ	ナデ,ハケ目	良好	頸部刻み目突帯1条
46	28	9号甕棺	M20-21	主棺	口縁～底部	44.7	83.0	10.2	66.7	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	明黄褐 Hue10YR6/6	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	頸部突帯1条,胴部突帯,刻み目突帯2条,突帯一部に煤付着
47	28	9号甕棺	M20-21	副棺	頸部～底部	-	(38.3)	9.9	31.7	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	浅黄橙 Hue10YR8/4	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良	胴部刻み目突帯1条,突帯付近黒斑
48	29	10号甕棺	M20-22	主棺	口縁～底部	34.1	65.5	10.7	54.1	長石,石英,雲母	橙 Hue7.5YR6/6	橙 Hue7.5YR6/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	胴部突帯,刻み目突帯2条,突帯上部に黒斑
49	29	10号甕棺	M20-22	副棺	口縁～底部	38.7	25.7	13.7	37.1	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR6/8	橙 Hue5YR6/8	ナデ	ナデ	良好	口縁刻み目1条,頸部突帯1条
50	28	11号甕棺	M20-22	主棺	頸部～底部	-	56.5	12.1	49.4	石英,角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	胴部刻み目突帯1条,突帯下部に黒斑,外面の一部煤付着
51	28	11号甕棺	M20-22	副棺	胴部～底部	-	29.3	8.3	-	長石,角閃石,雲母		にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ	ナデ,ハケ目	良好	底部黒斑
52	29	12号甕棺	M20-22	主棺	口縁～底部	34.4	69.9	10.5	54.8	長石,石英,角閃石,褐色土粒	橙 Hue2.5YR6/8	橙 Hue2.5YR6/8	ナデ	ナデ	良好	胴部刻み目突帯2条,胴部上部,下部に黒斑
53	29	12号甕棺	M20-22	副棺	口縁～底部	50.0	38.2	13.1	44.4	長石,石英,角閃石,褐色土粒	赤 Hue10R5/8	明赤褐 Hue2.5YR5/8	ナデ,ミガキ	ナデ,ハケ目	良好	頸部刻み目突帯1条,胴部に黒斑
54	28	13号甕棺	L20-01	主棺	口縁～底部	36.2	71.7	10.2	57.6	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	明黄褐 Hue10YR7/6	明黄褐 Hue10YR6/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	胴部刻み目突帯1条,突帯に黒斑
55	28	13号甕棺	L20-01	副棺	口縁～底部	35.2	37.4	10.8	47.3	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue5YR7/8	明赤褐 Hue5YR5/8	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	胴部刻み目突帯1条
56	28	14号甕棺	L20-01	主棺	口縁～底部	44.2	83.3	10.3	65.8	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	明黄褐 Hue10YR7/6	明黄褐 Hue10YR6/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目,指頭圧痕	良好	単棺,胴部突帯,胴部刻み目突帯2条
57	28	15号甕棺	L20-02	主棺	口縁～底部	-	(69.6)	11.3	67.3	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue2.5YR6/8	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	単棺,胴部刻み目突帯2条,外面に黒斑
58	28	16号甕棺	L20-02	主棺	口縁～底部	40.6	76.0	10.5	60.6	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	橙 Hue7.5YR6/6	ナデ,ハケ目	ナデ	良好	胴部刻み目突帯1条,突帯上部に煤付着,突帯上部,下部に黒斑
59	28	16号甕棺	L20-02	副棺	口縁～胴部	30.6	(36.6)	-	29.6	石英,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR7/6	浅黄橙 Hue7.5YR8/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	内底面・胴部外面に煤付着
60	29	17号甕棺	L20-03	主棺	頸部～底部	-	(33.8)	8.3	31.4	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	黄橙 Hue7.5YR7/8	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目,ミガキ	良好	胴部刻み目突帯1条,口縁打欠き
61	29	17号甕棺	L20-03	副棺	口縁～底部	29.2	42.1	9.9	38.3	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	胴部突帯1条,胴部下部に黒斑
62	28	18号甕棺	L20-11	主棺	頸部～底部	-	(50.1)	10.7	46.1	長石,石英,角閃石,雲母	黄橙 Hue7.5YR7/8	橙 Hue7.5YR6/6	ナデ,ハケ目	ハケ目	良好	胴部刻み目突帯1条,胴部上部に黒斑
63	28	18号甕棺	L20-11	副棺	口縁～底部	-	(73.6)	10.6	63.6	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	浅黄橙 Hue10YR8/4	明黄褐 Hue10YR7/6	ナデ ハケ目	ハケ目	良好	胴部刻み目突帯1条,突帯下部に黒斑
64	28	19号甕棺	L20-12	主棺	口縁～底部	31.3	56.6	10.6	47.5	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	明赤褐 Hue5YR5/6	明黄褐 Hue10YR7/6	ナデ,ハケ目	ナデ	良好	人骨,胴部刻み目突帯2条,胴部中心に黒斑
65	28	19号甕棺	L20-12	副棺	口縁～底部	29.5	31.0	11.3	30.2	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土	橙 Hue7.5YR7/6	明赤褐 Hue2.5YR5/8	ナデ,ハケ目,ミガキ	ハケ目	良好	頸部刻み目突帯1条,外底面に黒斑
66	28	20号甕棺	L20-13	主棺	胴部～底部	-	(46.7)	11.1	-	長石,石英,角閃石,褐色土粒	明黄褐 Hue10YR6/6	橙 Hue7.5YR6/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良	頸部刻み目突帯1条,突帯下部に黒斑
67	33	21号甕棺	I21-10	主棺	口縁～底部	72.8	120.4	14.0	74.6	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR6/6	明黄褐 Hue10YR6/8	ナデ	ナデ	良好	頸部突帯1条,胴部突帯2条,胴部上部,底部黒斑
68	33	21号甕棺	I21-10	副棺	胴部	-	(36.9)	-	32.1	長石,石英,角閃石,褐色土粒	にぶい赤褐 Hue5YR4/3	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ,ハケ目	良好	胴部突帯2条,底部黒斑
69	33	22号甕棺	I22-07	主棺	口縁～底部	28.8	52.8	(6.2)	(30.5)	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR6/6	明黄褐 Hue10YR6/6	ナデ,ハケ目,ミガキ	ナデ,ハケ目	良好	頸部刻み目突帯1条,胴部刻み目突帯2条,胴部に黒斑
70	33	22号甕棺	I22-07	副棺	頸部～底部	-	推定(30.4)	4.0	29.6	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR6/8	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	ナデ	ナデ	良好	胴部突帯1条
71	33	23号甕棺	I22-15	主棺	胴部～底部	-	推定(50.8)	6.4	42.5	長石,角閃石,雲母	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR6/6	ナデ	ナデ	良好	胴部突帯1条,外底面に,黒斑
72	33	24号甕棺	I22-11	主棺	口縁～胴部	34.9	(64.7)	-	56.1	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	浅黄橙 Hue2.5Y7/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ハケ目,暗文様ミガキ,ナデ,ミガキ	ナデ	良好	頸部突帯1条,胴部刻み目突帯1条,胴部に黒斑
73	33	24号甕棺	I22-11	副棺	頸部～底部	-	(33.8)	6.2	(28.1)	石英,角閃石,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ハケメ,ミガキ,ナデ	ナデ	良好	胴部突帯1条,外底面に黒斑
74	33	25号甕棺	I22-11	主棺	口縁～底部	74.6	123.0	15.2	71.8	長石,石英,雲母	明赤褐 Hue5YR5/8	明赤褐 Hue5YR5/8	ナデ	ナデ	良好	頸部突帯1条,胴部突帯2条,突帯上部に黒斑
75	33	25号甕棺	I22-11	副棺	口縁～底部	63.0	28.1	11.1	-	長石,石英,雲母	明赤褐 Hue5YR5/8	明赤褐 Hue5YR5/6	ナデ,ハケ目	ナデ,指頭圧痕	良好	

2　土壙墓

（1）塔ノ木遺跡に於ける土壙墓

通常の土坑と土壙墓を区別する上で重視したのは平面形状と規格性である程度類型化できたものを土壙墓として認定している。

25～29区では甕棺群とほぼ位置を同じくして多数の弥生時代に属する土壙墓と考えられる土坑群を確認した。特に25,27,28,29区において集中しており、墓壙の形態も様々なものが混在している。

時期については判別が困難であったが、共伴する遺物や甕棺やそのほか時期が特定可能な遺構との切り合い関係から判断して弥生時代のものと位置づけを行った。

加えてそれら土壙墓と同じような特徴を有するものについても類推でこの時期と位置づけている。

ただ、出土遺物について出土層位や出土状況から時期を判断すべきではあるが、あろうことにかそれらを判断するための資料（断面図・遺物出土状況図・写真）が存在しないので先述した基準により判断するほかになかった。

（2）土壙墓の類型化

本遺跡から確認された土壙墓は、弥生時代～中世まで連綿と存在し、時代や時期によって様々な形態を見せる。特に特徴的なのが弥生時代～古墳時代にかけての土壙墓であり、以下のように分類を行った。

A類　墓坑の片側に埋葬主体があり、その逆側に足場状の中位段を設けるもの

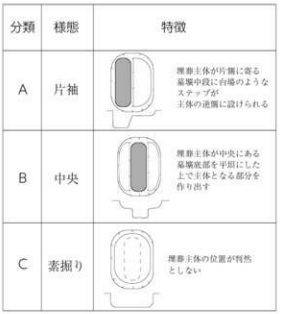
B類　墓坑の中心に埋葬主体があるもの

C類　素掘りのもの

これを図化したものが第55図となる。

（3）弥生時代土壙墓の判断基準

当時代における土壙墓として認定した根拠として、時期がはっきりしている遺構との切り合い関係を重視したのは前述のとおりで、重要な切り合い関係を示すものとして①第27区で確認されたST151と6号甕棺



第55図　塔ノ木遺跡における弥生時代・古墳時代土壙墓の形態分類

との関係、②ST66と小土坑中から出土した高坏、③ST134と弥生時代中期後葉の土器を含むSK252、④ST34とST19における切り合い関係である。

①ST151

C類の土壙墓であり、その後6号甕棺がこれを切る形で存在する。つまり、この形状のD類は弥生時代中期後葉の甕棺に先行する一群として捉えられる。

②ST66

C類の土壙墓であり、その隅あたりに小土坑（遺構番号なし）によって切られ、その土坑中から7世紀の高坏が出土している。

③ST134・SK252

やや不定形のC類から弥生時代中期前葉の甕口縁が出土している。それを切る形でSK252が入り、その土坑から弥生時代中期後葉の甕・高坏が出土している。

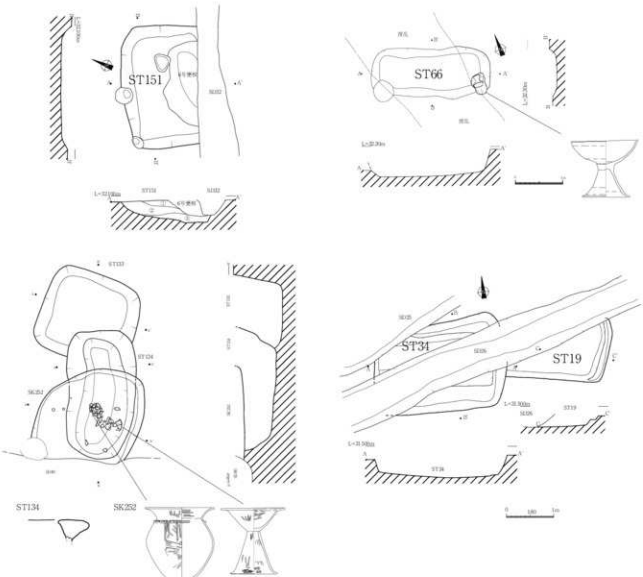
④ST34・ST19

ST19はC類の土壙墓で、隣接するB類の土壙墓であるST34によって切られる。さらにSD26が両者を通過している。

⑤埋土中に含まれる土器

また、埋土中に弥生時代の土器片が含まれる例なども踏まえてこの時期として評価をしている。ただし、土壙墓内から出たとはいえ床面からなのか埋土の上方からなのかの情報が欠けて

第 56 図　土壙墓最密集域と形態区分



第 57 図　土壙墓の先後関係を示す遺構

おり、明らかにこうだと言えないのが難点である。

（4）木棺墓との関係

素掘りのものを除いて土坑中に埋葬区画を有していることは、棺の存在を自然と想定する。ただし、木質が残存しないため土壙墓と明確に区別することが困難である。

今回は板を立てたと判断される溝状の痕跡が残るものを木棺墓とし、それ以外のものについては便宜上土壙墓として扱うこととする。

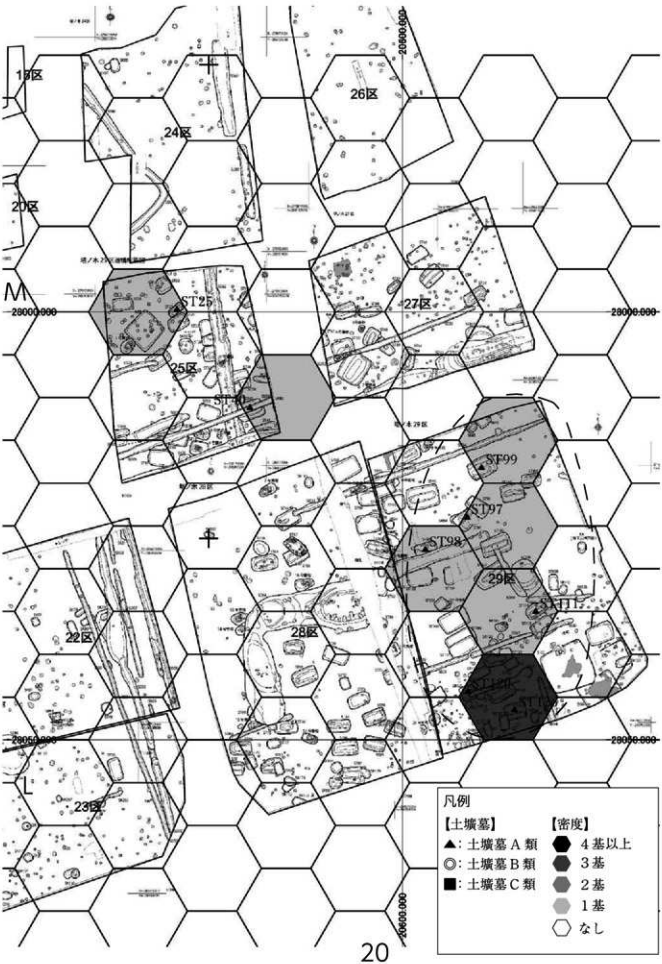
（5）土壙墓 A 類

土坑の片側に埋葬区画と考えられる掘込みを有するものである。掘込みの程度には明確に掘込みを持つものと、段差程度のものと差はあるが、その程度に関わらず土坑の下端に段を有するものとして扱うものとする。ここで重要視するのは土坑内に埋葬目的とは異なる「作業場」のような区画を持っていることである。副葬品を供える場所とも取れるが、物的な証拠が見当たらないためこの場所の機能についての言及はこの時点では避けることにする。

全体で 9 基確認され、位置については 29 区が 8 基と最も多く、ほかは 25 区に 1 基という状況であり、ある程度固まった位置にあると言える。

ア　ST99（第 59 図 - 上）

29 区で確認された。土坑の形状としては長軸約 3.2 m、短軸約 2.2 m の長方形を呈し、段部幅約 65cm、埋葬区画幅約 1.5 m を測る。土坑上端から約 30cm の深さで埋葬区画への掘込みが行われている。掘込みは壁面が鈴直というわけではなく土坑状に鈍角に掘られている。



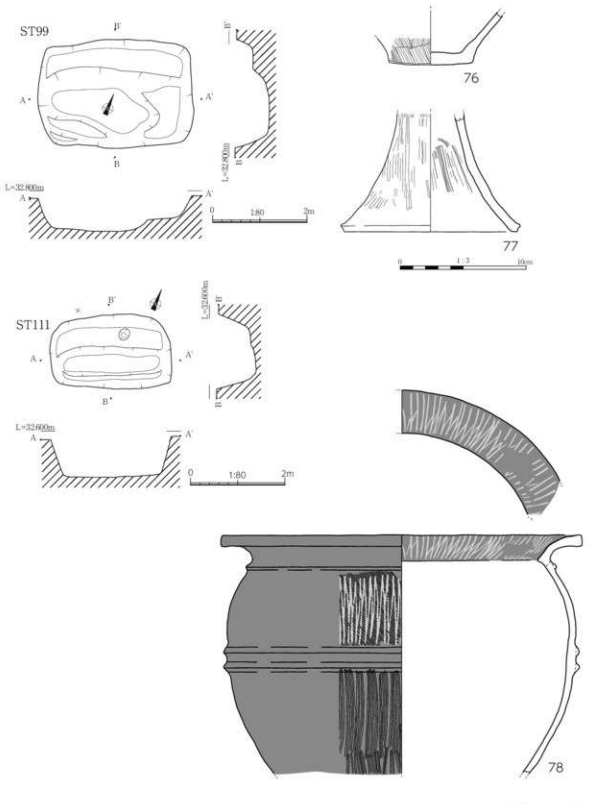
第 58 図　土壙墓 A 類の分布と密度

埋土中から弥生時代の土器底部および高坏の脚が出土している。

イ　ST111（第59図-下）

29区で確認された。土坑の形状としては長軸約2.5m、短軸約1.6mの長方形を呈し、段部幅約70cm、埋葬区画幅約90cmを測る。土坑上端から約70cmの深さで埋葬区画への掘込みが行われている。明確に下がるというよりもスロープ状に傾斜するように掘りくぼめてあるという方が正確かもしれない。

埋土中から弥生時代中期後半台の赤彩精製甕が出土した。内傾するくの字状口縁で中頃が湾

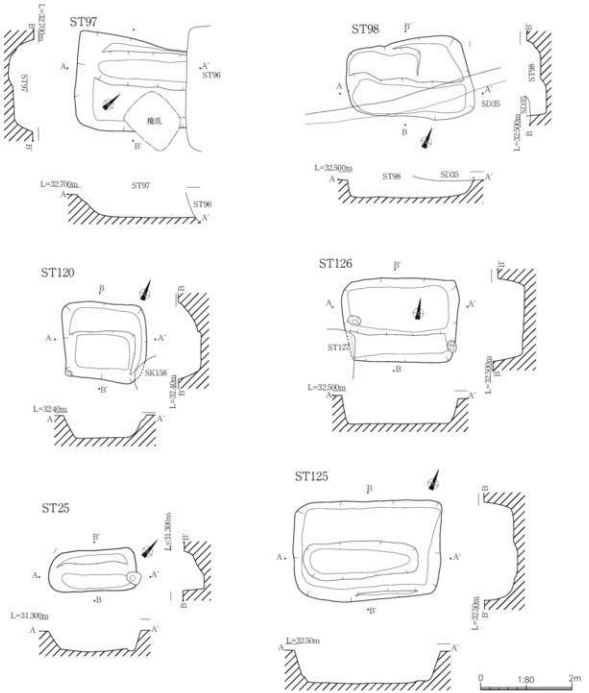


第59図　弥生時代の土壙墓（A類）①

曲する。口縁下部に１条と胴部中頃に２条断面三角の突帯が施される。調整は胴部下半は縦方向、上半は斜め方向のハケ目で規則的であり丁寧な印象を受ける。また胴部上半には上下に連続して動かしたヘラミガキ、口縁にも同様の運動によるヘラミガキが認められる。外器面全体、及び口縁部に赤色顔料により赤彩される。

ウ　その他Ａ類

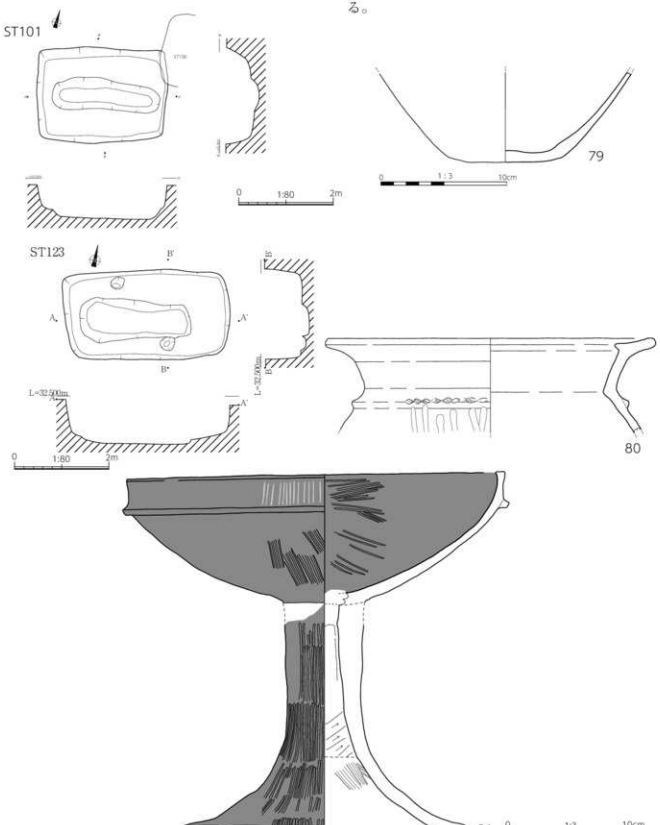
ST97,98,25 は比較的明確な段差を有する。一方で ST120,126 はわずかに段を認めるものの前掲のものに比べては明瞭ではない。この差を議論するには土層断面による検討が必要となるが図面が悉く存在しないので話にならない。



第 60 図　弥生時代の土壙墓（Ａ類）②

（6）土壙墓B類

数は少ないが弥生時代の土壙墓B類として抽出した。基本抹角方形に近い形状のものであるが不定形のもの、長楕円形のものもこれに含めている。後述する古墳時代の土壙墓B類に比べてやや規格性に乏しいところがあり、特に墓壙内の主体部形状が土坑の一部に留まっていたり不定形の印象が強い傾向にある。また、ST42のように元が甕棺墓であったような掘り方を示しているようにも見えるものも含まれる。



第61図　弥生時代の土壙墓（A類）③

問題としては土器の共伴関係が土壙墓の形状の差異に沿うものであるか、という点は何度も繰り返すことになるが遺物の出土層位を検討できる根拠を欠く以上、検証できない。

ア　ST101（第 61 図 - 上）

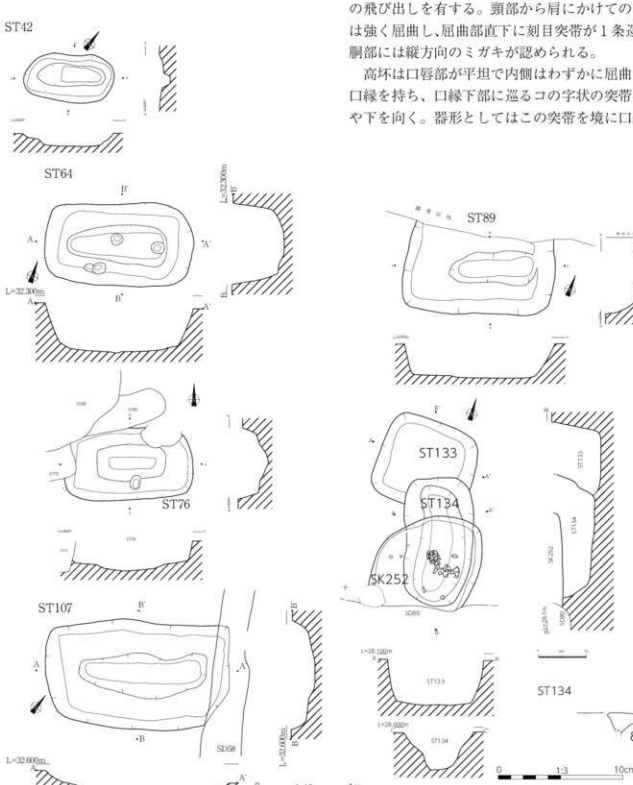
やや幅広な長方形の土坑中央部に埋葬主体と思われる浅い窪みが認められるものである。埋土中から甕の底部が出土している。

イ　ST123（第 61 図 - 下）

抹角長方形の土坑に対し中央部に埋葬主体となる窪みを有するものである。土坑の規模に比して窪みはやや寸足らずのように見える。埋土中から甕と精製高坏が出土している。

甕は口縁内部が中央でくぼみつつ傾斜し、若干の飛び出しを有する。頸部から肩にかけての部分は強く屈曲し、屈曲部直下に刻目突帯が 1 条巡る。胴部には縦方向のミガキが認められる。

高坏は口唇部が平坦で内側はわずかに屈曲する口縁を持ち、口縁下部に巡るコの字状の突帯はやや下を向く。器形としてはこの突帯を境に口縁が



第 62 図　弥生時代の土壙墓（A 類）④

直立する。脚部は坏部に対して比が1：2と長めであり裾端部において段を持ち角張る。調整は概して丁寧であり、脚部は縦方向のハケ目、坏部はやや斜め方向のハケ目と突帯を境に口縁部までで縦方向の暗文様ヘラミガキが施され、全面的に赤彩される。後述する土壙墓C類においても類似する高坏が見られ、脚部を欠くのでそれらも元はこうした形であったものと思われる。

（7）土壙墓C類

素掘りで平坦な底面をなすものを土壙墓Cとして扱う。分布は25,28,29区にかけて帯状に集中しており、特に25, 29区において密集する。帯状に分布する群をいくつかに分けることも出来そうであるが、明確に分布が途切れることがないため、ピークを中心に3箇所程度あるようにも見える。

形状は概ね隅丸の長方形を呈し、規模は長軸m、短軸m程度のものが多勢を占める。これも埋葬対象の体型を反映したものであり、極端に長短が見られる例は少ない。AB類と大きく異なる点は墓壙底部に埋葬主体となる窪みを有しないことであり、平坦な面に埋葬されたものと思われる。遺物共伴が認められる例はア～オの5例であり、遺物の特徴から弥生時代中期後半から後期前葉にかけてと判断しており、甕棺の時期と並行的である点も特徴と言える。ただし、他の例においては遺物が出土していないため確実にこの時期に収まるかについては断言できない。

ア　ST27（第65図-上）

25区にあり、B類の土壙墓であるST28によって切られる。墓壙形状は隅丸の長方形である。埋土中から精製の高坏片が出土している。坏部の中程にコの字状の突帯を持つ。口唇部は平坦で、内器面はやや内湾し膨らみを帯びる。突帯を境に外器面下部はハケ目が残り、上部は交差する線状のヘラミガキが施される。内器面はミガキで整えられる。

イ　ST32（第65図-下左）

ST32から口縁部～胴部までの甕が出土した。T字形に近いが、やや内傾する。

ウ　SK46（第65図-下右）

調査時は土坑として扱っていたため土坑の遺構記号が用いられているが形状から隅丸長方形の土壙墓であると判断した。埋土中から精製の短頸壺と思われるものが出土している。

そろばんの珠状に屈曲した胴部を持ち断面は菱形を呈する。底部はやや平底に近く、胴部への立ち上がりはやや丸みを帯びる。調整は底部付近で内外面ともに斜め方向、外器面胴部付近は横、上半を縦方向の暗文様ヘラミガキが施される。内器面は下部とは反対方向のハケ目が見られる。

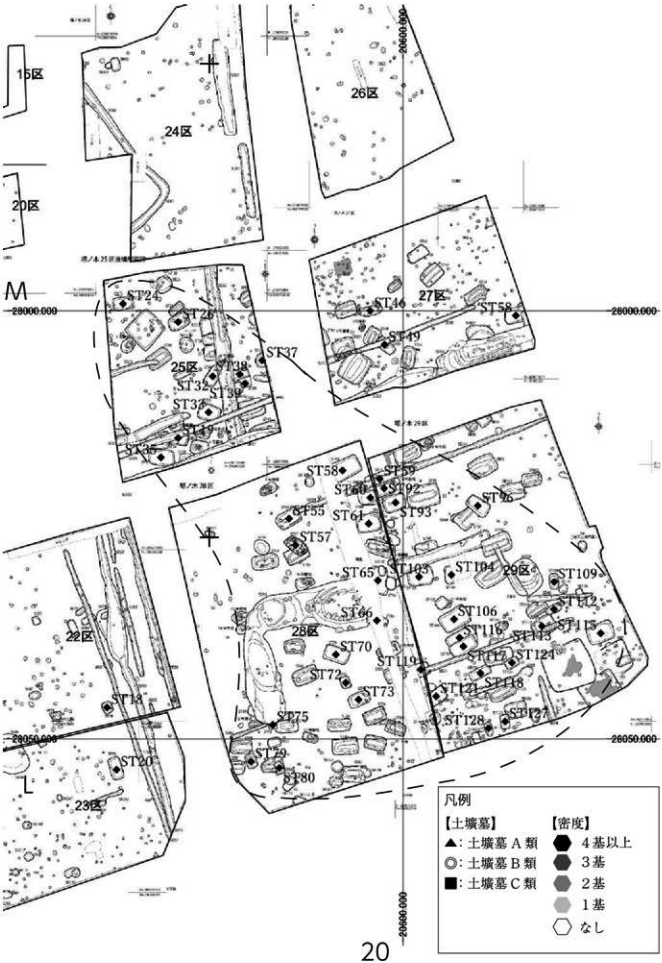
エ　ST113（第67図-上）

ST113は若干幅広の隅丸長方形を呈する。埋土からは精製甕と精製高坏が出土している。甕は口縁内部が強く傾斜し屈曲面を持つくの字を呈する。飛び出しはやや弱い。口縁下部に1条、胴部に2条の断面三角形の突帯が巡る。胴部はゆるく張り出し、胴部中央でピークを迎えた後底部へ向かってすぼまっていく。恐らく平底であるが底部を欠いており不明である。外器面上部に斜め方向のハケ目ののち縦方向の連続した暗文様ヘラミガキが、内器面は縦方向のハケ目、口縁部に放射状の暗文様ヘラミガキが施される。内外器面ともに赤彩される。

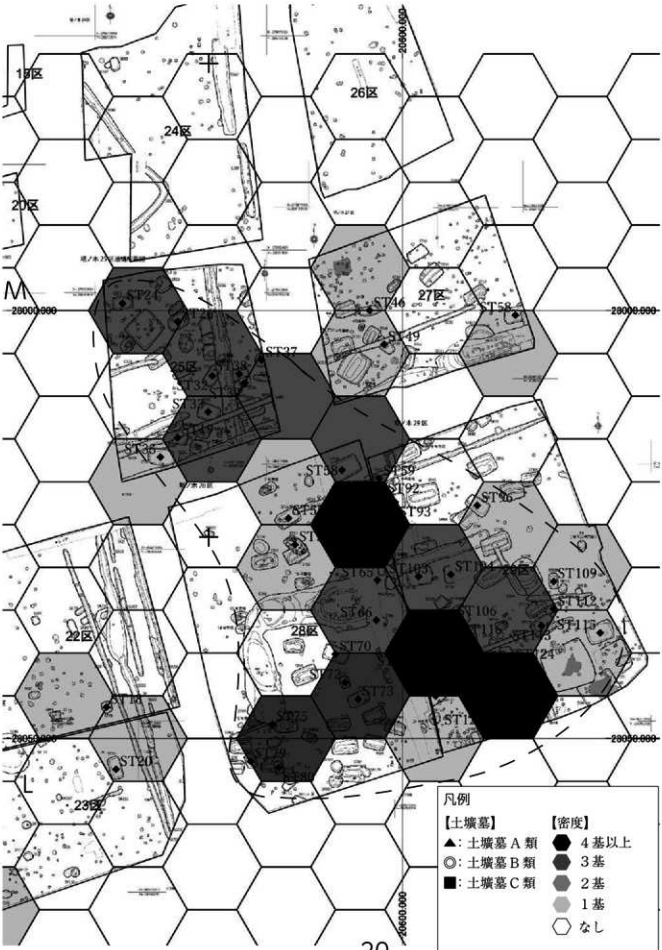
高坏はST27のものに似通った特徴であり、口唇部は平坦であるがやや指押さえにより中央が窪み外端がわずかに突き出る。胴部にコの字状の突帯が1条巡る。中央部も口唇部同様指押さえで軽くくぼむ。坏部下方から脚部にかけては欠く。調整は外器面胴部中央は斜め方向のハケ目、上部はナデ、内器面は横方向を基調としたミガキが施され、内外器面ともに赤彩される。

オ　ST128（第67図-下）

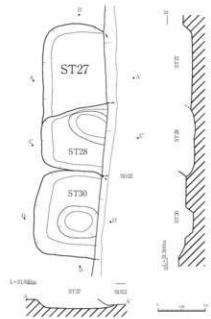
ST128は長楕円形のもので長軸・短軸ともにやや小さめの印象を受ける。埋土中から甕が出土している。赤彩はされていないが土器の特徴は胴部の突帯がないなどの違いはあるもののST113のものに近い。胴部の張り出しが__よりも強い。口唇部は直立し口縁内部は強く傾斜する。内端に至るまでに中間付近で屈曲する。口縁下部に断面三角形の突帯が1条巡る。胴部下方から底部を欠く。

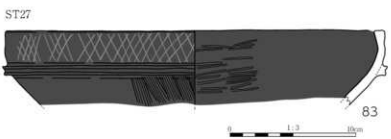


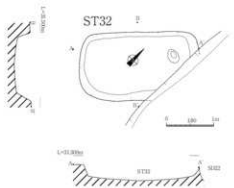
第63図　土壙墓Ｃ類の分布

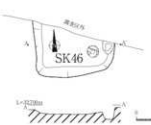


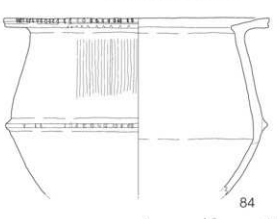
第64図　土壙墓Ｃ類の遺構密度

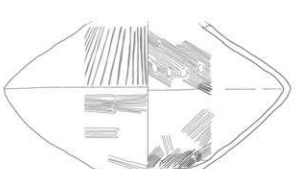






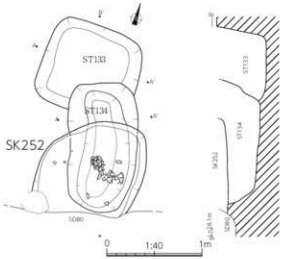


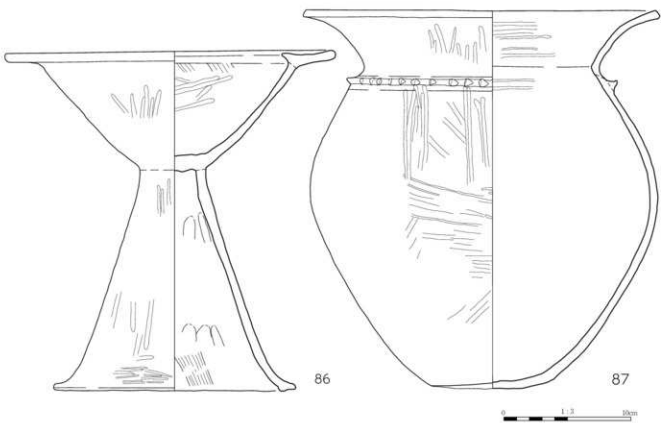




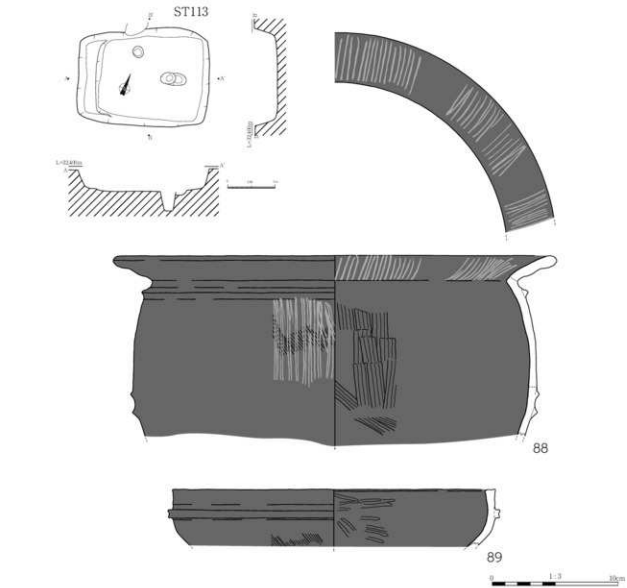
第 65 図　弥生時代の土壙墓（C 類）①

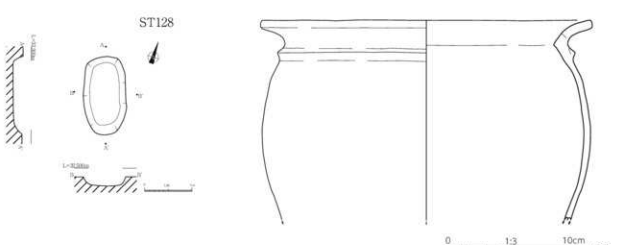
SK252



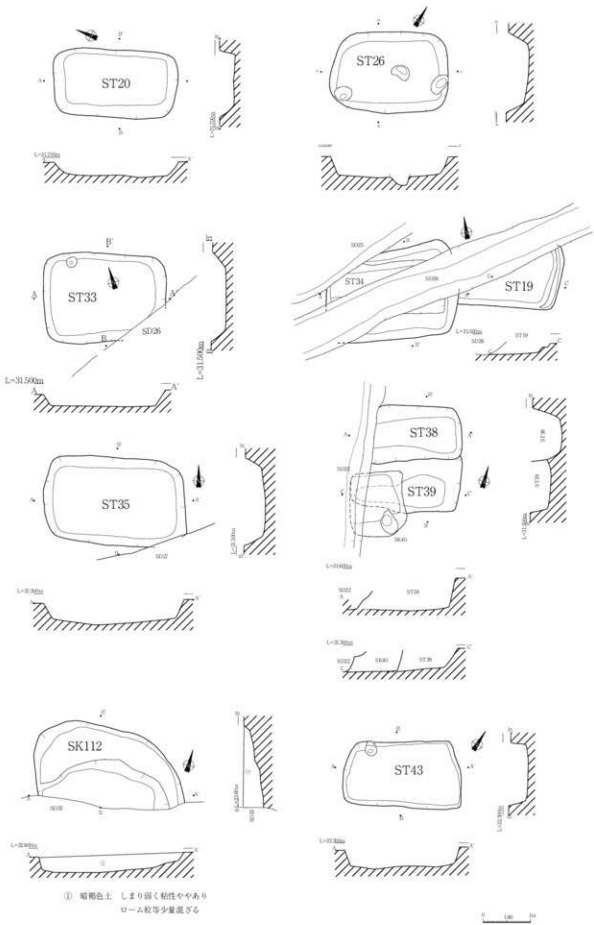


第 66 図　弥生時代の土壙墓（C 類）②

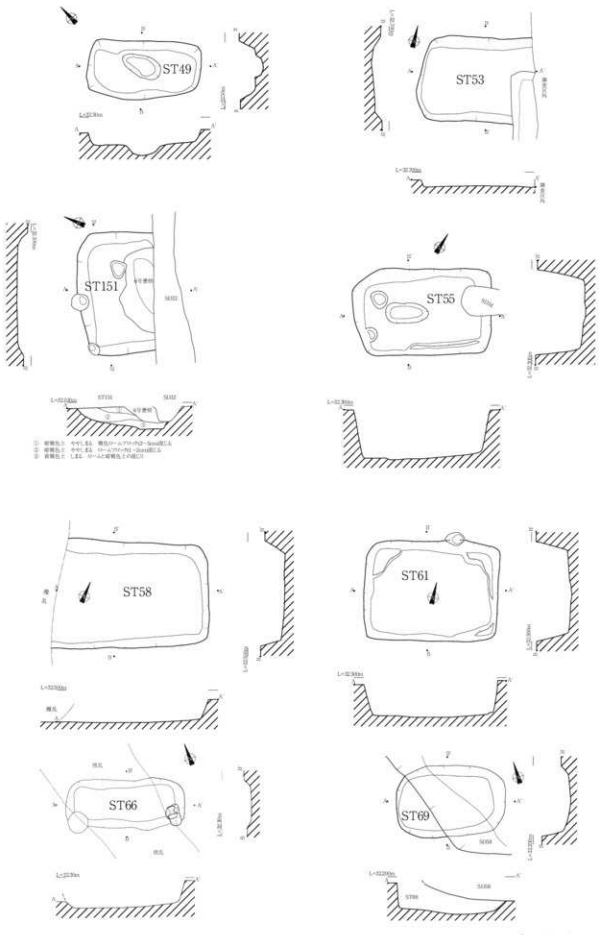




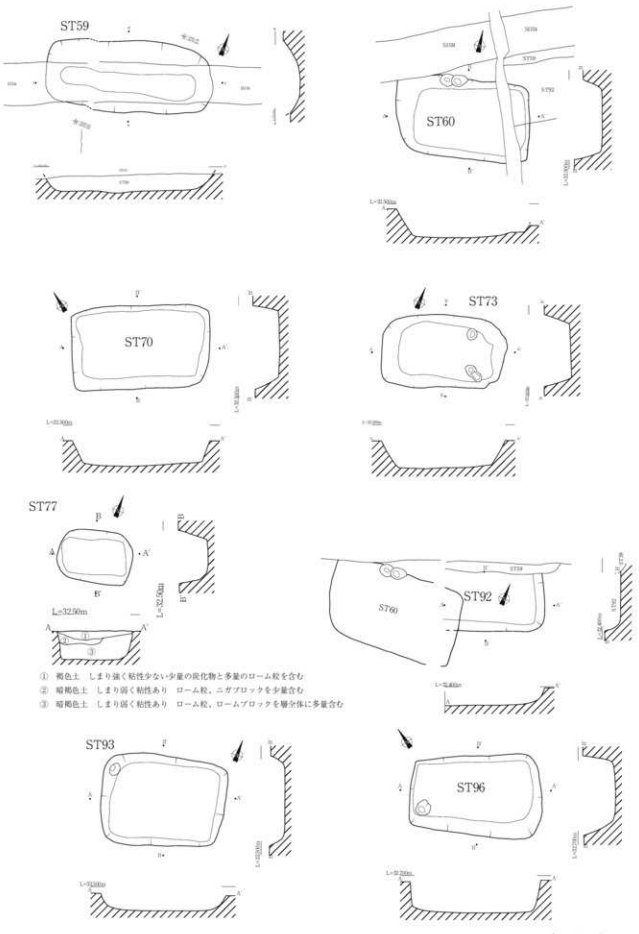
第 67 図　弥生時代の土壙墓（C 類）③



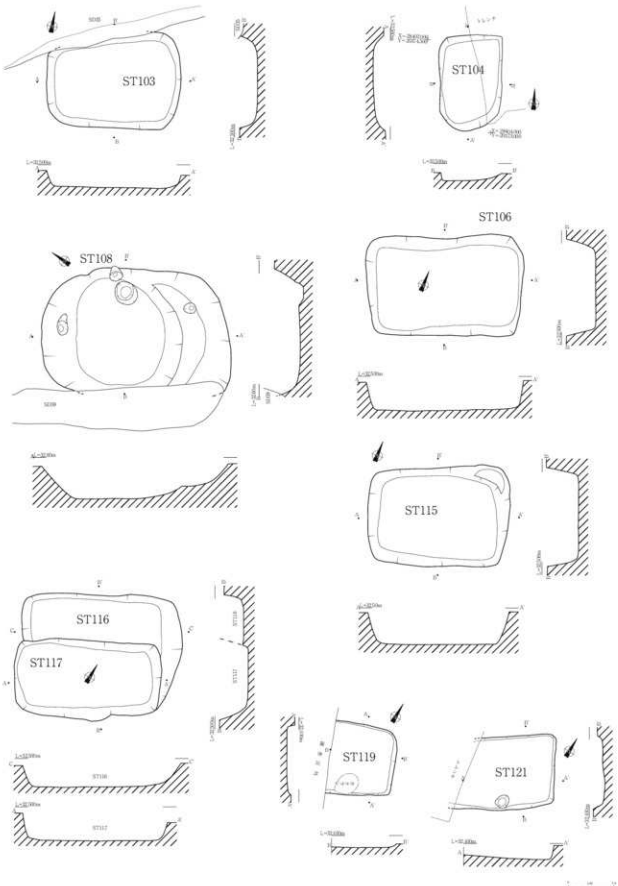
第 68 図　弥生時代の土壙墓（C 類）④



第 69 図　弥生時代の土壙墓（C 類）⑤



第 70 図　弥生時代の土壙墓（C 類）⑥



第 71 図　弥生時代の土壙墓（C 類）⑦

第３節　弥生時代の遺物

弥生時代の土器は中期～後期前半に属するものがほとんどであり、逆にそれを遡る・後に続く時期のものはほとんど見受けられない。

中期は土器の様相により最低でも３つの段階に分けられる。実際これよりも細分することは可能であるが、遺構における一括性などの検討を経ないと困難な部分が多くあり、以下で扱う包含層出土遺物については①中期初頭～前半・②中期中頃・③中期後半の３区分で整理しておこうと思う。

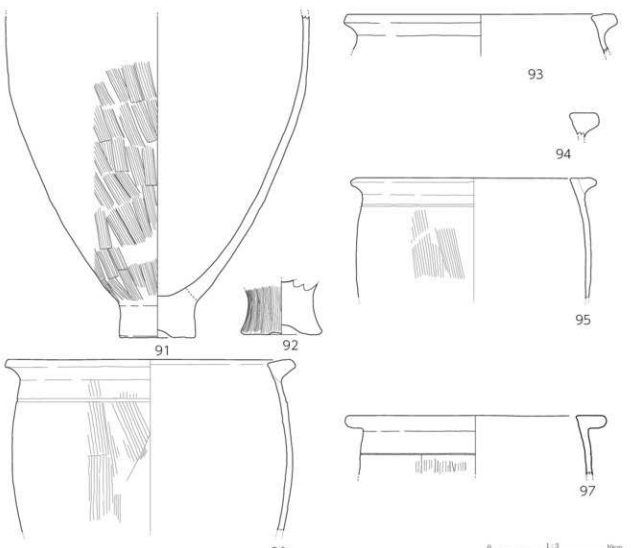
１　弥生時代中期初頭～前半の土器（第 72 図）

中期の始め辺りに比定される城ノ越式系統と見られる甕及びそれらに後続する土器の一群である。全体を残すものはなく、数もそれほど多くない。器種は甕に限定され、全て包含層中からのものであり、甕棺等遺構に伴うものではない。出土位置としては 32 区に集中し、一部８区での出土が見られるなど分布に明確な偏りが見られる。

甕は肥厚する口縁及びわずかに上げ底を呈する底部を特徴とする。平坦な口縁でありながら接ぎの時期のものに比べて若干肥厚するものまでを初頭のものとして扱う。

96 は口縁下部に沈線文が巡らされる。それ以外の目を引く特徴はなく簡素である。

外器面の調整は縦方向のハケ目を基調とする。また、91，92 に見られる上げ底の底部は径の細い角張った裾から中心に向かってわずかにくぼませる程度のものであり、後続する黒髪式はこれの影響を受けていると考えられているものである。



第 72 図　弥生時代の土器①

2　弥生時代中期後半～後期初頭の土器（第73～78図）

中期後半～後期初頭にかけての土器は、前述した中期の前半までとは様相の異なる土器の一群である。前半期に比べて遺物の量も多い。後半と言っても時期幅があり、特徴もそれに応じて異なっている。本遺跡では後半の後葉、つまり中期末から後期初頭あたりにそのピークが認められる。

器種構成は甕、鉢、高坏が主体となるが、精製のものや赤彩されたものなど非生活的なものが多い傾向にある。出土位置も甕棺ないしは土壙墓群が認められる区域に集中していることも儀礼的な利用を目的とした土器構成であった可能性が高い。

（1）甕

ア　中期後半

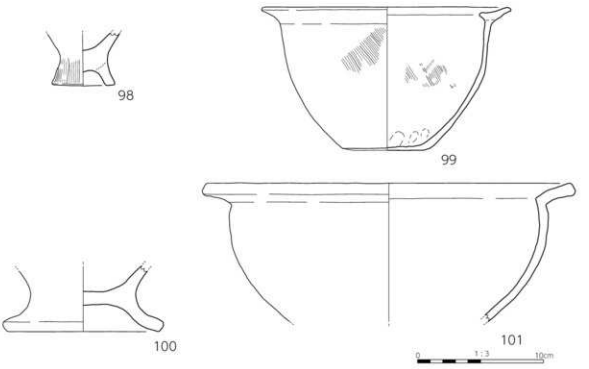
中型甕と小型甕に分かれる。98は甕の底部である。底部形状から比較的小型の甕であったと思われる。胴部を欠くので判然としないが黒髪系の甕であると思われる。100は中型の甕の底部である。上げ底であり内部は接地面よりやや上の部分で屈曲しドーム状の底となる。

102～105は黒髪三ないしは四式に位置づけられる甕である。口唇部に刻目を有する鋤先状口縁を有し、口縁下の屈曲部、胴部にも刻目突帯を巡らせる。多くは口縁～底部まで残存する資料がないため胴部の形状については不明な点が多いが、を見る限り胴部中頃で強く張り出すなど甕棺で用いられている黒髪三式系統の形態とは大きく異なっている。これを見る限りは四式に位置づけるべきかと考えるが、口縁下部の突帯より下位の様相が判然としないため時期については幅を持たせている。

107は肥厚した口縁に穿孔を施す甕である。口縁内側の部分が最も径が小さくすぼまった断面をなし、そこから最大胴部径を測る胴部中央上段あたりに向けて大きく膨らむ。そこから平底の底部へ向かって緩やかに湾曲するため、やや肩が張った形態となる。南筑後K Ⅲ式系統の特徴と似通っており、甕棺ではなく包含層出土ではあるがこれらの系譜を汲むものと思われる。

イ　中期末～後期初頭

109～193は中期末～後期初頭の甕である。鋤先状口縁に見られる口縁内部の飛び出しがほぼ無くなりくの字を呈する屈曲した口縁を有する。口縁下部に刻目突帯が巡り、胴部にも1条



第73図　弥生時代の土器②

巡ることもある。胴部は強く張り出す傾向がある。は角張った口唇部に刻目を二段に分けて施し口縁下から胴部最大径に至るまでに直線的に広がりを見せ、その部分に断面三角形の刻目突帯を巡らせる。そこを境に底部に向かって緩やかに湾曲する胴部形状を有する。底部を欠くため不明であるが平底と思われる。

（2）鉢（第73図99）

甕棺の蓋に用いられる鉢と類似する。鋤先状で内側がやや傾斜する口縁を持ち、底部径は広く平底を呈する。調整は内外ともに斜め方向のハケ目が残る。はくの字形口縁で胴部は緩やかに湾曲し底部へ至る。底部を欠いており形状は不明である。

（3）穿孔鉢（第77図118～122）

口縁部に穿孔を持つ鉢類である。ア）甕の口縁に似たものが付くもの（118～120）とイ）付かないもの（121，122）がある。

ア）口縁下部のくびれ若しくは口縁あたりに穿孔される。口縁は鋤先状・くの字形がある。胴部中頃より上のものに限られているため底部形状は不明である。

イ）内湾する口縁を持ち、口縁下部に最大胴部径が来る。その後底部へ向かって緩やかに湾曲する。恐らく平底と思われるが底部を欠く。

（4）短頸壺（第77図123～126）

口縁が内傾して口唇部直下にくびれ状の段を有しているのは共通しているが、口縁内部の飛び出しの有無などに差異が見られる。胴部の形状も強く飛び出した後同程度の傾斜で底部へ至るものと緩やかに湾曲していくもので器高に差があり、後者は器高が高くなる。ともに平底で、胴部上半にミガキあるいは暗文様ヘラミガキが施される。

（5）ひょうたん形土器（第75図108）

壺状の胴部を持ち、頸付近に円孔状の窓を有する土器で、首より上を欠いているため不確かではあるがひょうたん形土器として扱う。一部にミガキが認められ丁寧な作りのようであるが全体的に見れば器面が荒れており、粗く見える。

（6）小形鉢（第75図108）

くの字形または丸く外反する口縁部をもつ。胴部中頃が最大胴部径となり、上部と下部の屈曲具合はほぼ同等である。

（8）精製甕（第78～81図）

129～143は赤彩・暗文様ヘラミガキを施された祭器的性格の強い甕である。口縁も水平な鋤先状口縁のものから内傾化、くの字形化の流れが見え、中期後半～後期初頭にかけての特徴が見られる。口縁部には放射状の暗文様ヘラミガキ、口縁下部と胴部に設けられた突帯の間に縦方向のミガキが施され、その間隔は個体によって差がある。突帯の断面形状はM字、コの字、三角それぞれあるが三角が優勢のように思える。外器面は全体的に赤彩される。

（9）精製高坏（第82～84図）

精製甕と同様に赤彩・暗文様ヘラミガキを有する高坏と、赤彩等はないが形態がそれらと似通ったものを精製高坏とする。ア）水平な口縁部を持つものとイ）持たないものがある。また、坏部を欠いた脚部もある程度出土しているため、個体数はある程度あったのではないかと推測する。

（ア）水平な鋤先状口縁を有するもので、坏部の深さは10cm前後と比較的浅めのものが多い。調整は概して丁寧であり、内器面にはミガキ、外器面はハケ目で平坦な口縁に放射状の暗文様ヘラミガキが施される。内外器面ともに赤彩される。

（イ）口唇部が指押さえによりつぶれた形状の口縁で内器面の内湾に影響を与えているものとそうでないものとがある。口縁下部に突帯が巡るが断面がM字・コの字のものと三角のものがあり、数も2条のものと1条のものがある。突帯の変化として2条→1条、コの字→三角へと遷り、退化していく傾向にある。

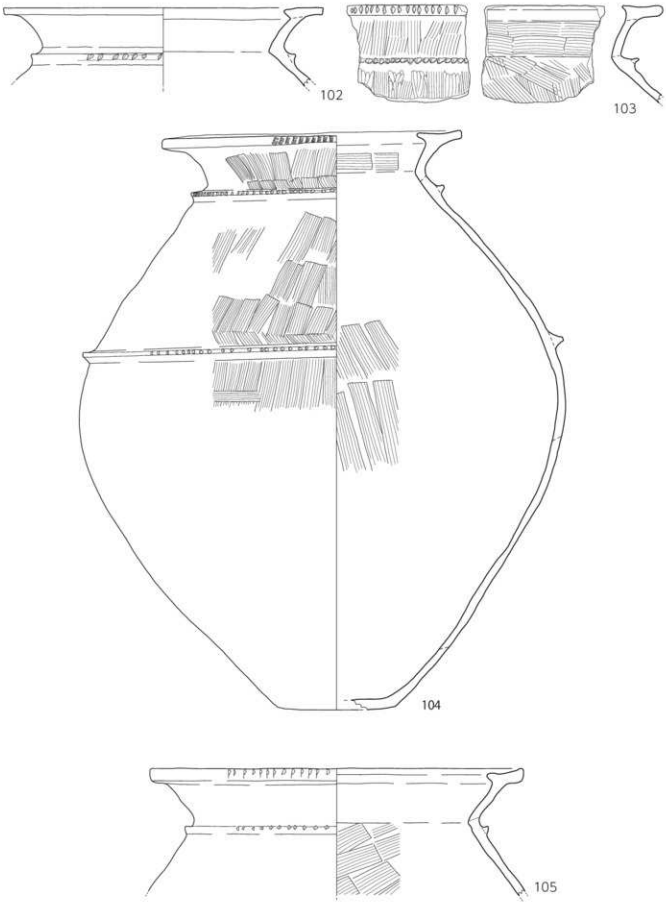
（9）袋状口縁壺（第85図）

185～193は袋状口縁壺である。口縁下部の袋部の屈曲や頸の長さ、突帯の有無や数、装飾の在り方で大きく幅がある。

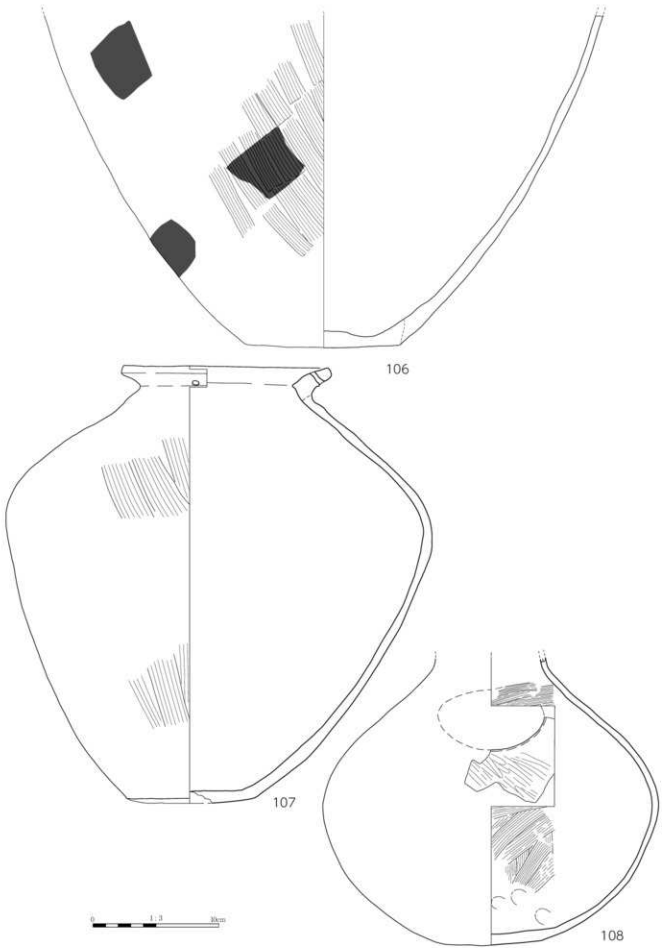
古い段階のものは袋部があまり発達しておらず広口に近く、時期を追うにつれ袋部の屈曲が強調されること、胴部に突帯が巡るようになることや突帯間に暗文様ヘラミガキが施されるなど装飾感が増すこと、長頸化などが挙げられる。

（10）線刻のある甕（第86図）

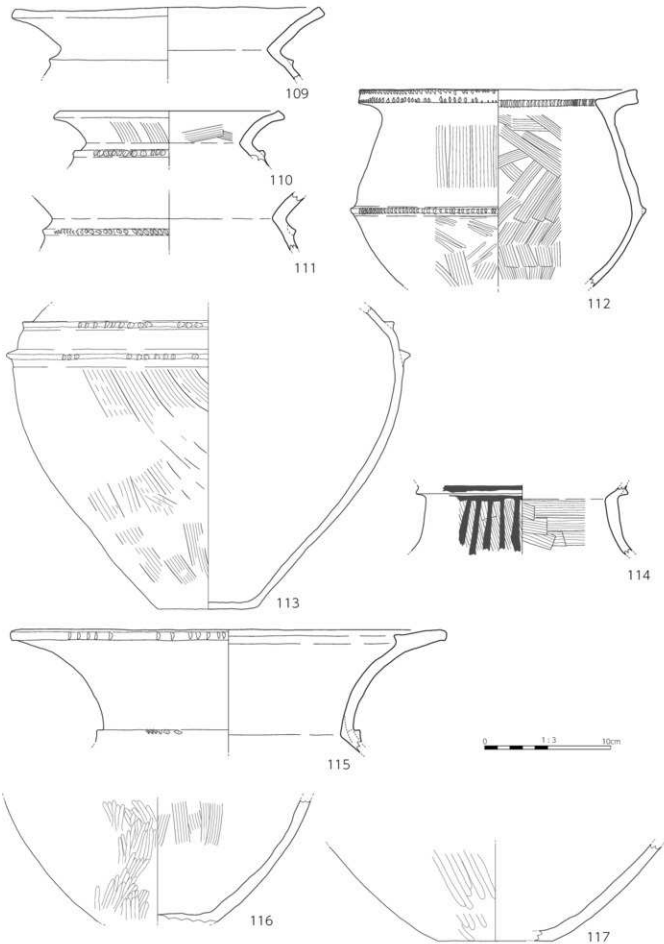
33区で出土している。本来甕棺に用いられる大形の甕であり、何かの拍子に破壊され動い



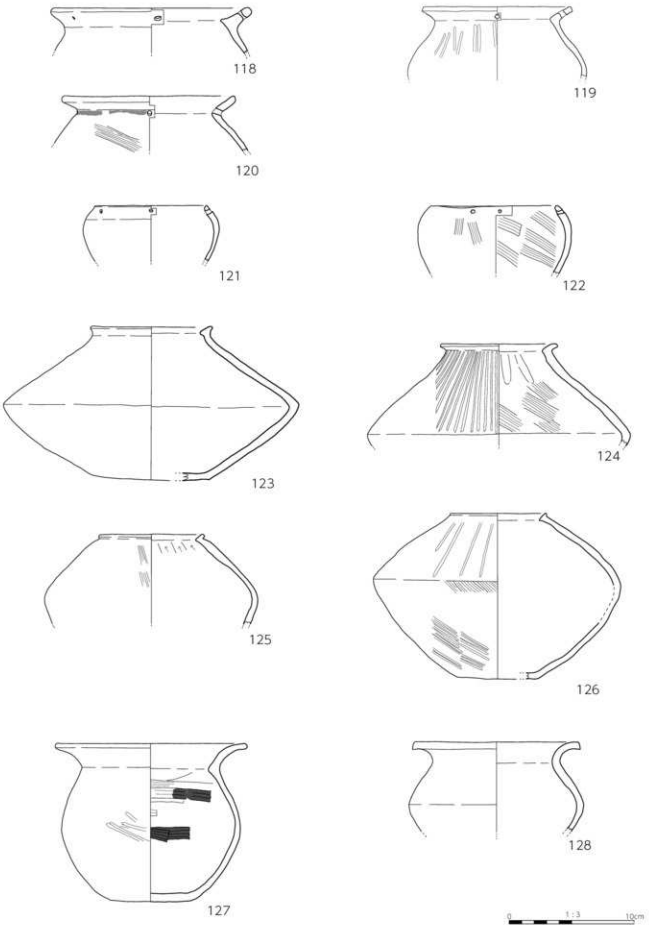
第 74 図　弥生時代の土器③



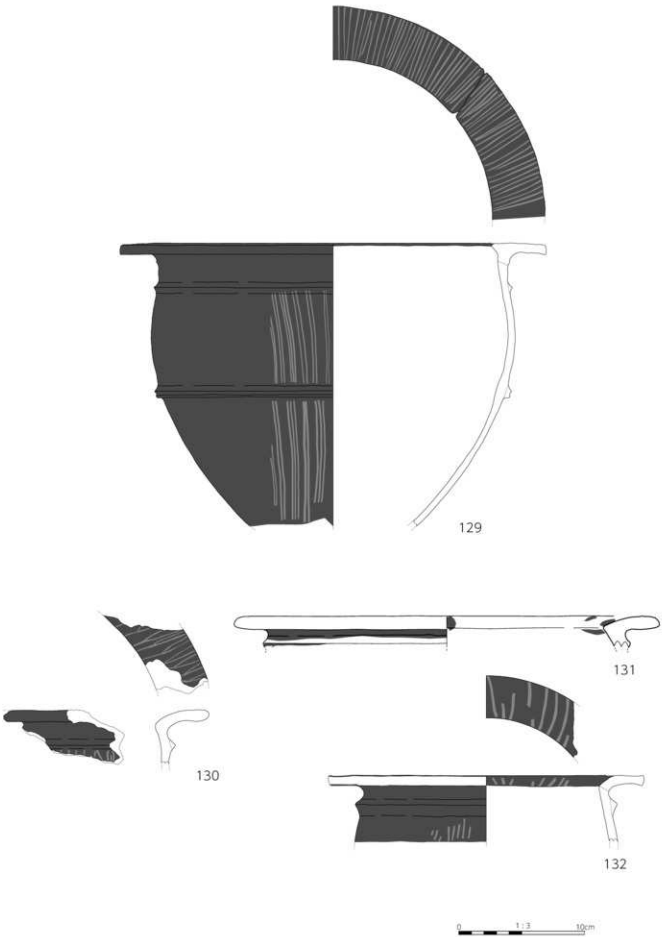
第 75 図　弥生時代の土器④



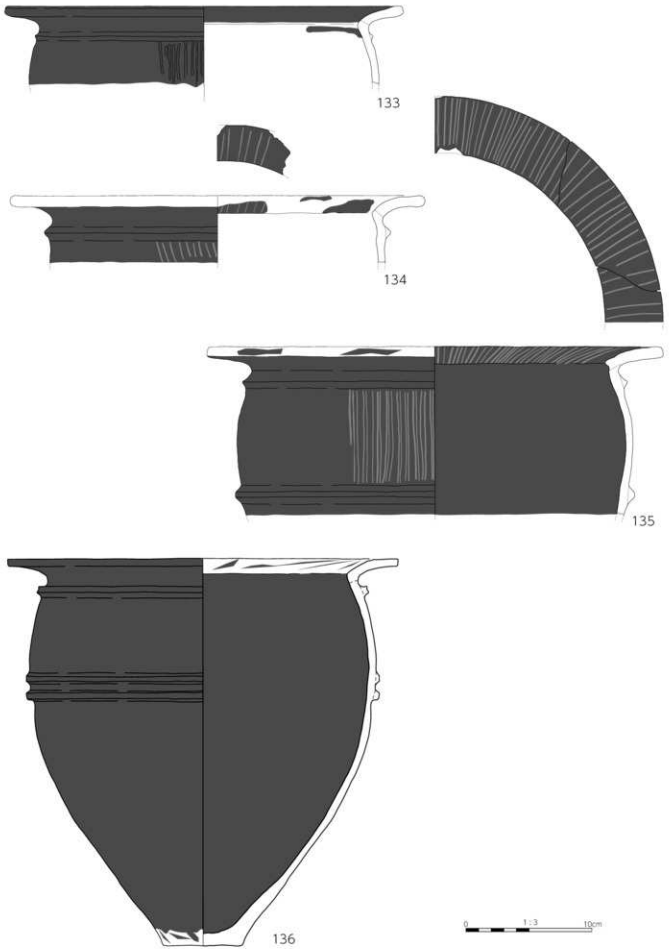
第 76 図　弥生時代の土器⑤



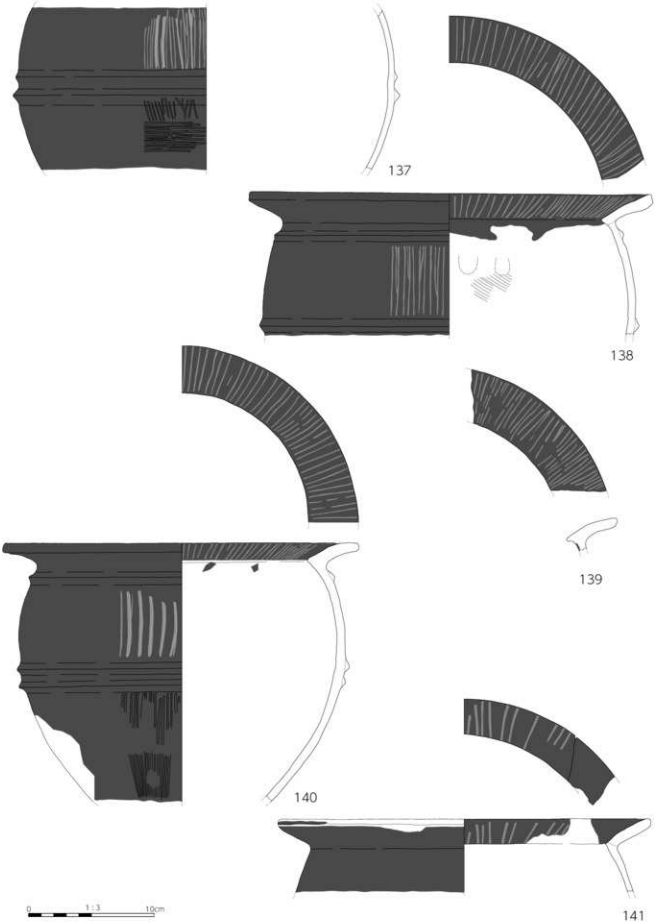
第 77 図　弥生時代の土器⑥



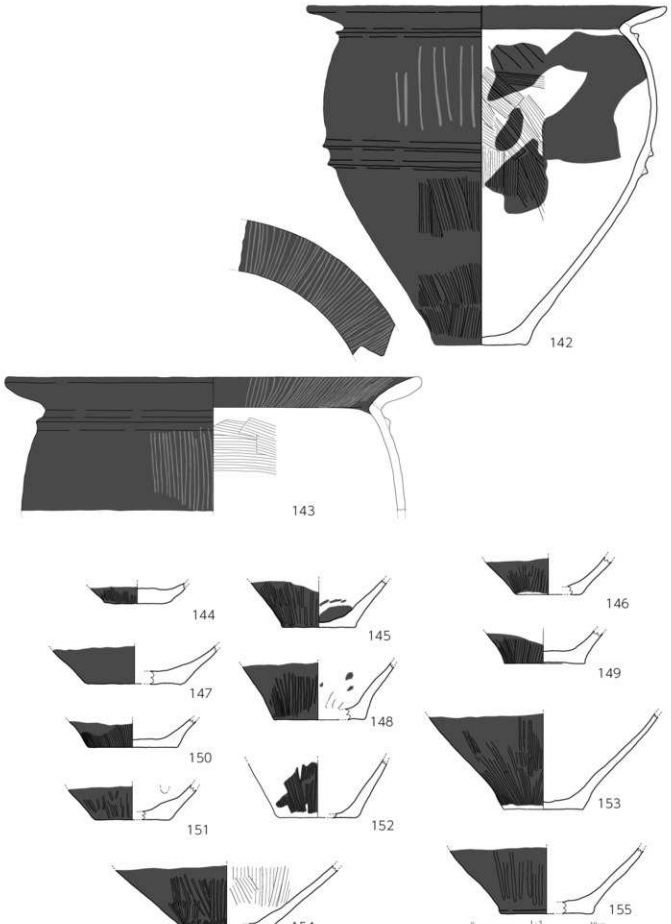
第 78 図　弥生時代の土器⑦



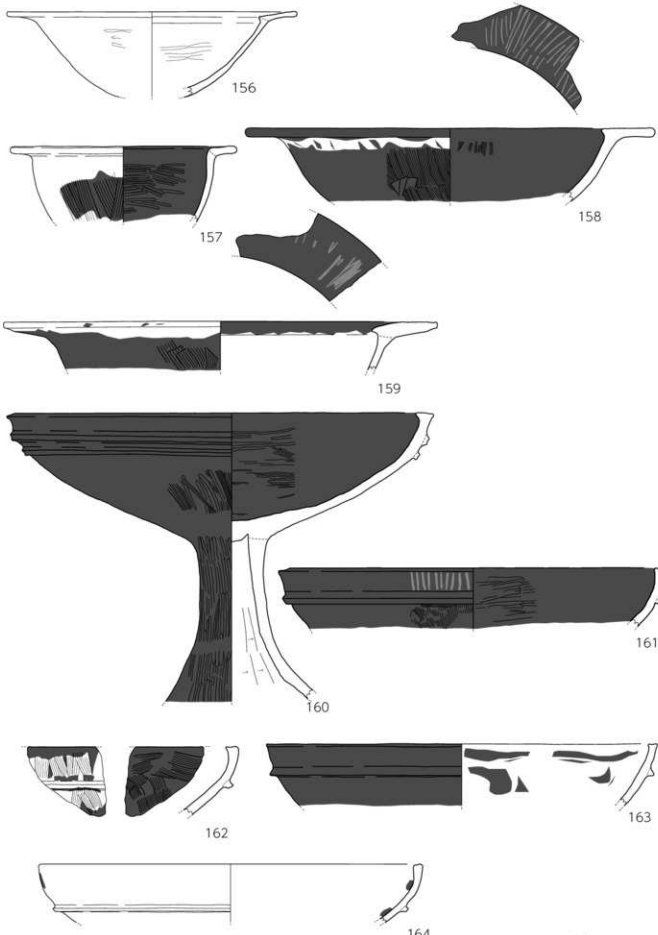
第 79 図　弥生時代の土器⑧



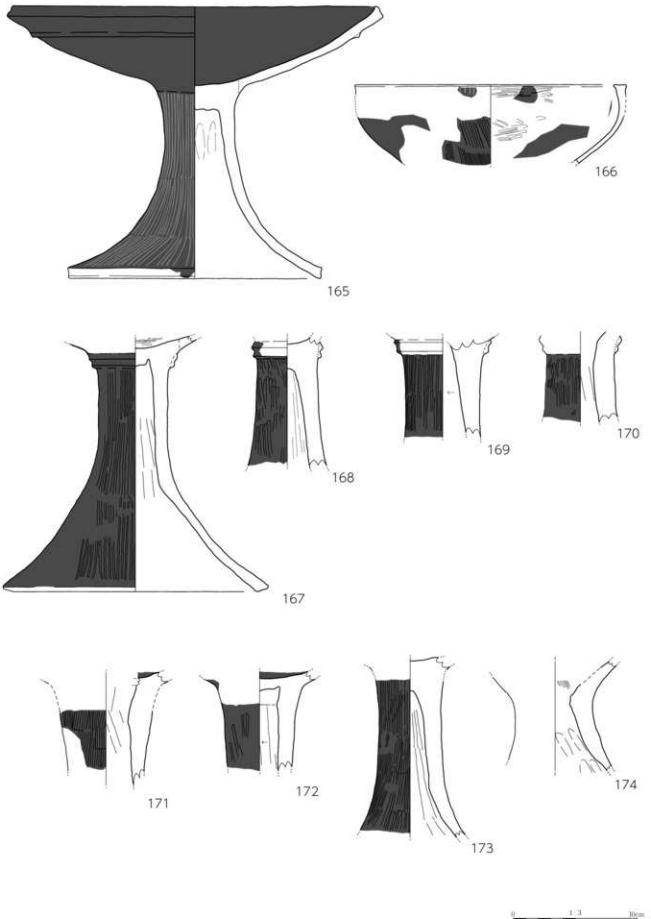
第 80 図　弥生時代の土器⑨



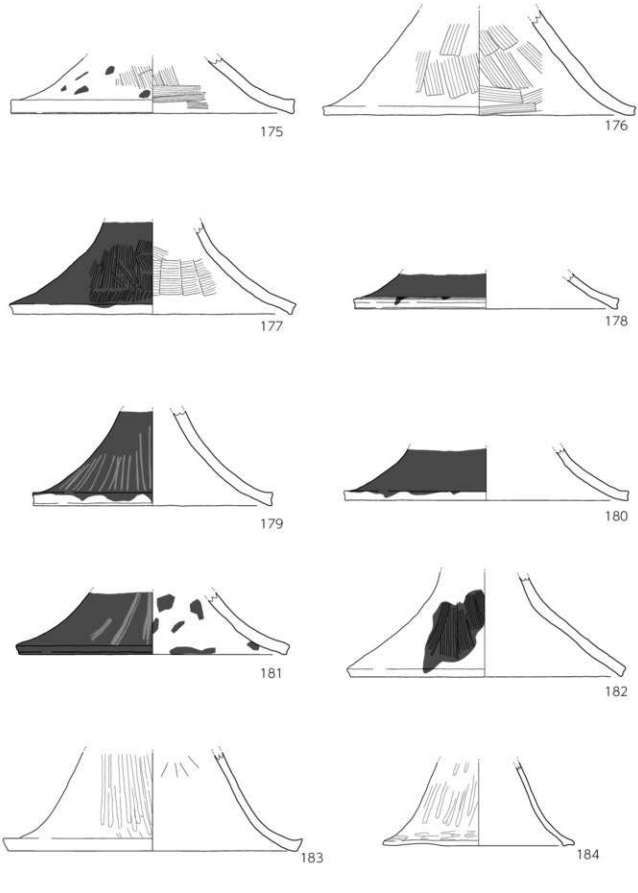
第 81 図　弥生時代の土器⑩



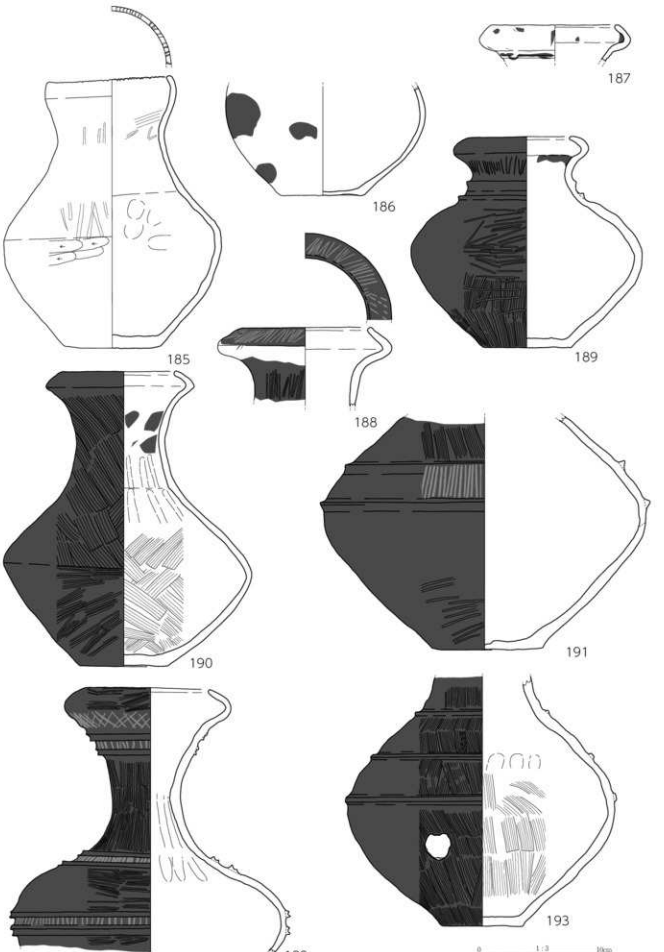
第 82 図　弥生時代の土器⑪



第 83 図　弥生時代の土器⑫



第 84 図　弥生時代の土器⑬



第 85 図　弥生時代の土器⑭

たものである可能性が高い。

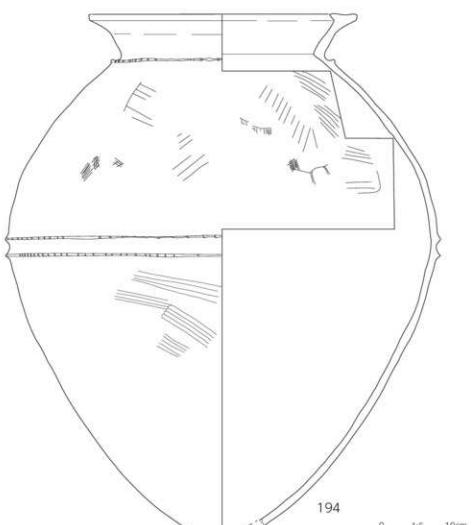
形状は肥厚する平坦で口縁内側に張り出す口縁部であり、口縁部直下で内側へ屈曲し、肩付近でくの字状に折れて胴部中頃まで球状に強く張り出す。胴部中頃が最大胴部径となりその付近に刻目突帯が２条巡る。突帯は他にも肩の屈曲部直下に１条の刻目突帯がある。底部は欠くため不明であるが平底と考えられる。大部分を欠損している。

調整は全体的にミガキが施され、２条の突帯よりも下部については斜め方向のストロークの長いミガキが連続的に、突帯よりも上部は下部に比べると短いストロークで横方向に施される。そうして整えられたものに対して鋭利なもので ひっかいたような線刻が施される。

形状には２～３のパターンがあり、①軸状のものを中心に斜め方向の連続した沈線をほどこすもの、②４本脚の動物状のもの、③網線状のもので構造物ではなさそうなものに分かれる。①は特に多く、図示している部分で４つほど見られる。②は見る限り１個で、頭付近には網線が掛けられている。脚のほか首が長く描かれており、シカのようである。③はランダムであり、意図は不明である。

２条ある突帯の下及び肩の突帯より上にはそうした線刻は見られず、ちょうど突帯を境とした胴部上半が縄文土器における施文帯のように扱われているように思われる。

ある程度の範囲にまとめられて描かれている点は①を竪穴住居の外観、②を動物とするならばさしずめ竪穴住居が並ぶ集落中にシカが迷い込んできたような図であり、記号の集合と言うよりは一場面を切り取った絵画のようである。



第 86 図　線刻のある甕

3　弥生時代の石器

（1）磨製石斧（第87～88図）

L44～L58は磨製石斧である。分厚い素材を加撃・剥琢により整形し、刃部に限らず全体的に研磨して仕上げる。一部に整形の際に生じた剥離痕及び剥琢痕を残す。断面形状は亜楕円形を呈し、刃部は両面からの研磨により角度の鈍い蛤刃を形成する。主にこれらは樹木の伐採に使用されたものと見られるが、57，58のように小型のものも見られ用途が異なると推定されるものも存在している。また、一部には使用による破損の痕跡、刃部に対する剥離・折断が生じているものもある。一方で着柄部において破損が生じた可能性があるものも見られる。

石材は片岩系、蛇紋岩系、砂岩系など変成岩・堆積岩が多い。いずれにせよ近傍で産する石材ではないので、外部からもたらされたものと思われる。

（2）砥石（第88図L59,60）

59，60は砥石である。板状の石材の広い面を主に使用する。時として側面にもその使用は及び、そうした場合の結果である表面の摩滅が見られる。方向については明確な痕跡を持たないため摩滅痕は把握できても方向はほとんど見えない。

（3）磨石（第88図L61）

は研磨作業により本来楕円形であったものがすり減って角柱に近い形状まで摩滅が進んだものである。安山岩で本来は研磨に向く石材ではないが、ここまで摩滅が進んだものはあまり見ない。磨石の類は広い面をよく利用する傾向にあるがこれについては側面に限らず上下端部にもその使用の痕跡が見られ原形を留めないほどに摩滅しているのが見て取れるため、この石器に執着しているかのようである。

（3）磨製石鏃（第89図L63~L71）

～は磨製石鏃である。薄く節理で剥離する石材（片岩系）を使用し、研磨により刃部及び切っ先を作り出している。平面形状を見ると基部は平基のものと凹基のものが見られ、比率としては半々といったところである。一部には使用の結果と見られる刃部先端の欠け、側縁の刃こぼれがあるものもある。

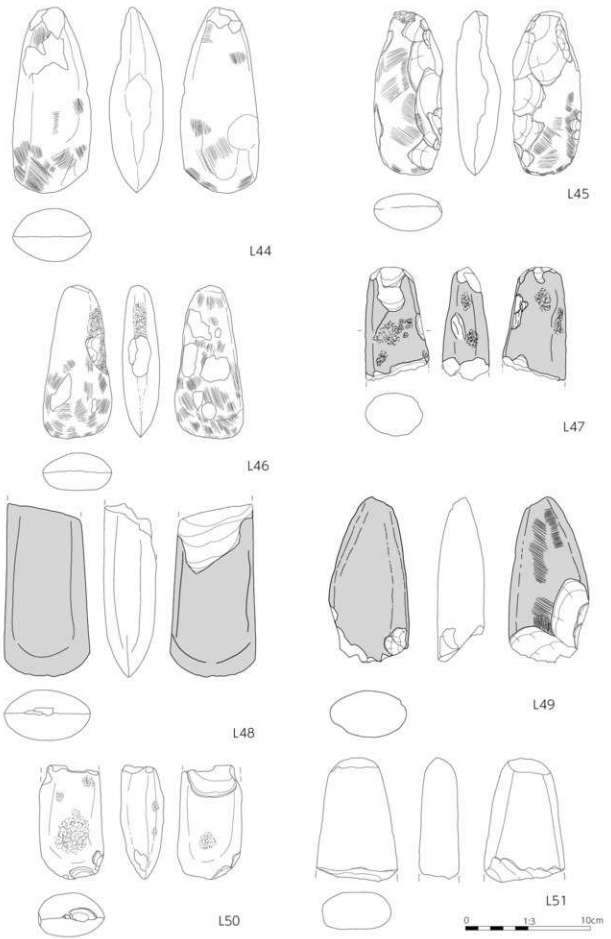
（4）石製穂摘具（第89図L72,73）

，は石製穂摘具である。破片であるため全体の形状は不明である。

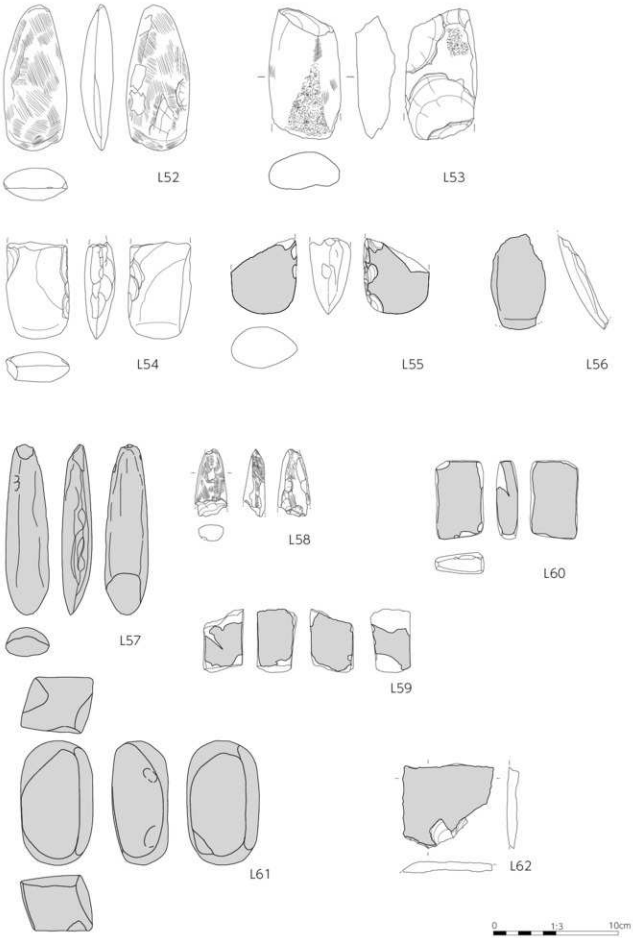
（5）不明石製品（第89図L74,L75）

L74，L75は不明石製品である。L74は軽石製のもので、紐を巻き付けるためのような抉り込みを有する。石錘のようなものを想定するが上下非対称な形状であり、決め手に欠ける。重心の方向が丸い縁辺を残す下部にあると見え、吊すような機能が想定される。そういった点では石錘と見るべきなのかもしれない。

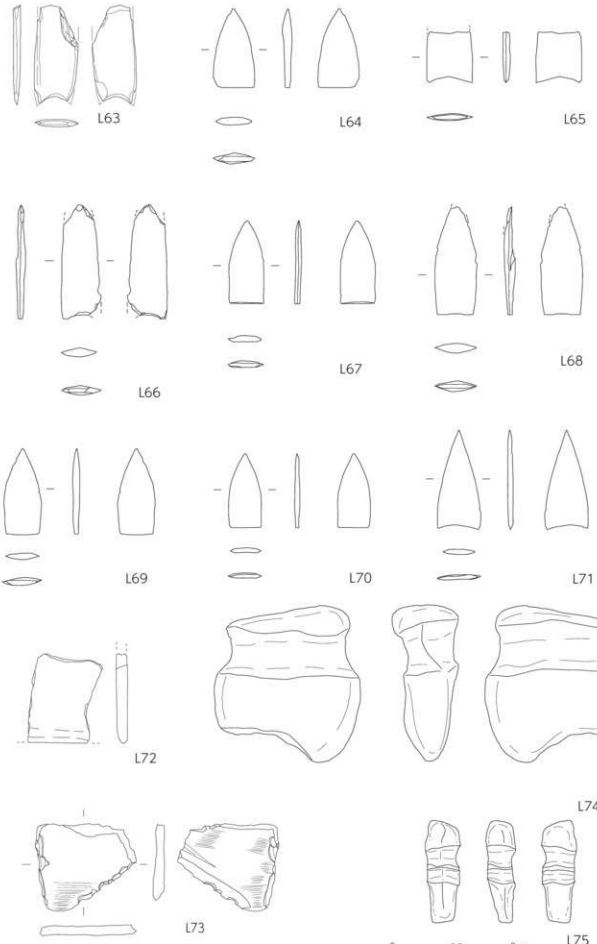
L75は主に砥石に使用される石材を使用しており、中心部に抉り込みを有する。砥石としては不要な抉り込みを有することや形状が通常の砥石に比べて小さすぎる点、角柱状と言うよりも円柱に近いということもあり、砥石ではないと判断した。



第 87 図　弥生時代の石器①



第 88 図　弥生時代の石器②



第 89 図　弥生時代の石器③

第6表　弥生土器（遺構出土）観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
76	29	ST99	L20-24		弥生土器		甕	底部	-	(4.2)	6.6	長石,石英	にぶい赤褐 Hue5YR4/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ハケ目,ナデ	ナデ	良好	赤彩
77	29	ST99	M20-24		弥生土器		高坏	脚部	-	(9.3)	(14.2)	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	橙 Hue7.5YR 7/6	ミガキ	ハケ目	良好	
78	29	ST111	L20-4		弥生土器		甕	口縁~胴部	(29.0)	(10.2)	-	長石,雲母,褐色土粒	赤褐 Hue2.5YR4/6	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	ナデ,ハケ目,暗文様ミガキ,ミガキ	暗文様ミガキ,ナデ	良好	赤彩,外面一部に煤
79	29	ST101	M20-24		弥生土器		壺	底部	-	(7.1)	(9.0)	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	灰黄 Hue2.5Y6/2	ナデ	ナデ	良好	
80	29	ST123	L20-9		弥生土器		甕	口縁~頸部	(26.4)	(7.6)	-	長石,石英,角閃石,雲母	明赤褐 Hue5YR5/8	橙 Hue5YR 6/8	ナデ,暗文様ミガキ	ナデ	良好	頸部刻目突帯1条
81	29	ST123	L20-9		弥生土器		精製高坏	口縁~底部	30.4	29.1	22.7	長石,角閃石,雲母	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	ナデ,暗文様ミガキ,ハケ目,ミガキ	ミガキ,ナデ,ハケ目,ケズリ	良好	口縁部突帯1条
83	25	ST27	M19-15		弥生土器		精製高坏	杯部	(30.0)	(5.9)	-	石英,角閃石,雲母	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	ナデ,暗文様ミガキ,ハケ目	ナデ,ミガキ	良好	口縁突帯1条,赤彩
84	25	ST32	M19-15		弥生土器		甕	口縁~胴部	(21.1)	(14.0)	-	角閃石,雲母,褐色土粒	浅黄橙 Hue10YR8/3	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	ナデ,ハケ目	ナデ	良好	口縁部に刻目,胴部刻目突帯1条,頸部・胴部に黒斑
85	29	SK46	M20-19		弥生土器		細頸壺	胴部~底部	-	(12.1)	8.4	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5Y 7/6	橙 Hue5Y 7/6	ナデ,暗文,ミガキ	ハケ目,指頭圧痕	良好	
86	33	SK252	I22-7		弥生土器		高坏	完形	26.1	26.8	(19.1)	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	浅黄橙 Hue7.5YR8/6	ナデ,ミガキ	ナデ,ハケ目,ミガキ,指頭圧痕	良好	底部外面黒斑
87	33	SK252	I21-9		弥生土器		甕	完形	(28.2)	29.8	9.6	長石,石英,角閃石,雲母	浅黄橙 Hue10YR8/4	浅黄橙 Hue10YR8/3	ナデ,ミガキ	ミガキ,ナデ	良好	胴部刻目突帯1条,底部外面黒斑
88	29	ST113	L20-4		弥生土器		精製甕	口縁~胴部	(37.6)	(14.4)	-	長石	赤褐 Hue2.5YR4/6	にぶい黄橙 Hue10YR7/2	ナデ,ハケ目,暗文様ミガキ,ミガキ	暗文様ミガキ,ナデ,ハケ目	良好	頸部突帯1条,胴部突帯2条,赤彩
89	29	ST113	L20-4		弥生土器		精製高坏	杯部	(25.8)	(4.3)	-	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	赤褐 Hue5YR4/8	暗赤褐 Hue 5 YR3/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ミガキ	良好	口縁突帯1条,赤彩
90	29	ST128	-		弥生土器		甕	口縁~胴部	(26.6)	(16.0)	-	長石,石英,角閃石,褐色土粒	橙 Hue5YR 7/6	橙 Hue5YR 7/6	ナデ	ナデ	良好	

第7表　弥生土器（包含層出土）観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
91	32	-	I22-10		弥生土器	甕	胴部~底部	-	(25.4)	6.0	長石,石英,角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	ハケ目,ナデ	ナデ	良好	
92	8	-	-		弥生土器	甕	脚部	-	(4.3)	6.4	長石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	灰白 Hue10YR8/2	ハケ目,ナデ	ナデ	良好	
93	32	-	J22-10		弥生土器	甕	口縁	(21.2)	(3.2)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue5YR6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	ナデ	ナデ	良好	
94	32	-	-		弥生土器	甕	口縁	-	(1.9)	-	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	明黄褐 Hue10YR7/6	ナデ	ナデ	良好	
95	32	-	I22-8		弥生土器	甕	口縁~胴部	(19.6)	(9.7)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	浅黄橙 Hue7.5YR8/6	橙 Hue2.5YR7/8	ナデ,沈線,ハケ目	ナデ	良好	口縁沈線1条
96	32	-	I22-5		弥生土器	甕	口縁~胴部	23.2	(13.7)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	灰褐 Hue7.5YR6/2	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	ナデ,沈線,ハケ目	ナデ	良好	頸部沈線1条
97	32	-	-		弥生土器	甕	口縁~胴部	(20.8)	(4.7)	-	長石,石英,角閃石,褐色土粒	黄褐 Hue10YR5/6	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	ナデ,ハケ目	ナデ	良好	頸部沈線1条
98	28	-	-		弥生土器	甕	脚部	-	(4.1)	5.0	長石,輝石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ,ハケ目	ナデ	良	
99	28	-	M19-25		弥生土器	鉢	完形	19.8	11.3	7.0	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目,指頭圧痕	良好	黒斑
100	25	-	M20-11		弥生土器	甕	脚部	-	(5.2)	(12.7)	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue5YR6/6	ナデ	ナデ	良好	
101	25	-	M20-11		弥生土器	高坏	坏部	(29.6)	(10.9)	-	石英,角閃石,雲母	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	
102	28	-	M20-22		弥生土器	甕	口縁~頸部	(25.4)	(6.2)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR6/8	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ	ナデ	良好	頸部刻目突帯1条
103	28	-	-		弥生土器	甕	口縁~頸部	(23.6)	(7.7)	-	長石,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ,ハケメ,暗文	ナデ,ハケ目	良好	口縁刻目,頸部刻目突帯1条
104	29	-	L20-4		弥生土器	甕	口縁~底部	24.2	46.8	9.6	長石,角閃石,雲母	橙 Hue2.5YR6/8	橙 Hue7.5YR 6/6	貝殻文,ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	頸部刻目突帯1条,胴部刻目突帯1条,煤
105	25	-	M19-20		弥生土器	甕	口縁~頸部	(29.6)	(10.0)	-	長石,石英,角閃石,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	ナデ	ナデ,ハケ目	良好	口縁刻目,胴部刻目突帯1条
106	28	-	M20-22		弥生土器	甕	胴部~底部	-	(26.6)	12.4	長石,角閃石,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	ハケ目,ナデ	ナデ	良好	赤彩
107	29	-	L20-9		弥生土器	甕	口縁~底部	16.9	35.4	10.1	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	ハケ目,ナデ	ナデ	良好	穿孔1箇所,最大胴径 34.1cm
108	33	-	I22-12		弥生土器	ひょうたん形土器	頸部~底部	-	(22.8)	-	長石,角閃石,雲母	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	ナデ,ミガキ	ナデ,ハケ目,指頭圧痕	良好	有窓で丸底
109	29	-	M20-23		弥生土器	甕	口縁~頸部	24.8	(5.7)	-	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR 6/8	橙 Hue5YR6/8	ナデ	ナデ	良好	頸部突帯1条
110	28	-	L19-5		弥生土器	甕	口縁~頸部	(18.2)	(4.3)	-	長石,石英,角閃石	橙 Hue5YR7/8	にぶい赤褐 Hue5YR5/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良	頸部刻目突帯1条
111	28	-	-		弥生土器	甕	頸部	-	(4.5)	-	長石,角閃石,褐色土粒	灰黄褐 Hue10YR 4/2	にぶい赤褐 Hue5YR5/4	ナデ	ナデ	良好	頸部刻目突帯1条
112	25	-	M19-15		弥生土器	甕	口縁~胴部	22.2	(15.6)	-	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ハケ目,ナデ,ミガキ	ナデ,ハケ目	良好	口縁内外面刻目,胴部刻目突帯1条,赤彩
113	28	-	M20-21		弥生土器	甕	胴部~底部	-	(24.2)	8.0	長石,石英,角閃石,雲母	灰白 Hue5YR8/2	灰 Hue10Y4/1	ナデ,ハケ目	ナデ	良	胴部刻目突帯2条,黒斑
114	33	-	-		弥生土器	甕	頸部	-	(5.5)	-	長石,角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	内面に赤彩,外面に赤彩,頸部突帯1条
115	25	-	M19-15		弥生土器	甕	口縁~頸部	(34.5)	(9.7)	-	長石,石英,角閃石,雲母	にぶい褐 Hue7.5YR6/3	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ	ナデ	良好	
116	28	-	L20-2		弥生土器	甕	胴部~底部	-	(9.7)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	黄褐 Hue2.5Y5/3	ミガキ	ハケ目,ナデ	良好	
117	25	-	M19-20		弥生土器	甕	底部	-	(7.8)	(9.0)	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue2.5YR6/8	橙 Hue5YR7/8	ミガキ	ナデ	良好	
118	33	-	I22-6		弥生土器	穿孔鉢	口縁~頸部	(16.0)	(3.6)	-	角閃石,雲母	にぶい橙 Hue7.5YR 7/3	にぶい橙 Hue7.5YR 7/3	ナデ	ナデ	良好	穿孔2箇所
119	29	-	-		弥生土器	穿孔鉢	口縁~胴部	(12.0)	(5.6)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	橙 Hue5YR6/6	ナデ,暗文	ナデ	良好	穿孔
120					弥生土器	穿孔鉢	口縁~胴部										
121	28	SD08	-		弥生土器	穿孔鉢	口縁~胴部	(9.9)	(5.4)	-	石英,角閃石	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	穿孔2箇所
122					弥生土器	穿孔鉢	口縁~胴部										
123	29	-	L20-4		弥生土器	短頸壺	口縁~底部	(9.8)	12.2	9.4	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue5YR 6/8	オリーブ黒 Hue5Y3/2	ナデ	ナデ	良好	黒斑
124	29	-	M20-19		弥生土器	短頸壺	口縁~胴部	(9.4)	(8.1)	-	長石,角閃石,雲母	橙 Hue5YR6/6	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ,暗文様ミガキ	ナデ,ハケ目	良好	
125	29	-	M20-23		弥生土器	短頸壺	口縁~胴部	8.5	(7.1)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	ナデ,ハケ目	ケズリ,ナデ	良好	

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
126	29	－	L20-4		弥生土器	短頸壺	口縁～底部	7.7	13.2	6.7	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	灰黄褐 Hue10YR 5/2	ナデ,暗文様ミガキ,ハケ目,ミガキ	ナデ	良好	赤彩,外面に煤
127	33	－	I22-6		弥生土器	鉢	口縁～底部	(18.3)	12.6	6.7	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR6/8	オリーブ黒 Hue5Y3/1	ナデ,ミガキ	ナデ,ハケ目	良好	
128	29	－	L20-4		弥生土器	鉢	口縁～胴部	(13.3)	(7.2)	－	石英,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ	ナデ	良好	打欠き
129	28	－	L20-12		弥生土器	精製甕	口縁～胴部	(33.9)	(22.4)	－	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	暗文,ナデ	暗文,ナデ	良好	胴部突帯3条,赤彩
130	29	－	－		弥生土器	精製甕	口縁～頸部	－	(4.2)	－	石英,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ,暗文様ミガキ	暗文様ミガキ,ナデ	良好	頸部突帯1条
131	28	－	L20-1		弥生土器	精製甕	口縁	(33.8)	(2.2)	－	長石,石英,雲母	明黄褐 Hue10YR7/6	黄橙 Hue10YR7/8	ナデ	ナデ	良好	赤彩
132	28	－	L14-5		弥生土器	精製甕	口縁～頸部	(25.2)	(5.3)	－	長石,角閃石,褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	ナデ,暗文様ミガキ	暗文様ミガキ,ナデ	良好	頸部突帯1条,赤彩
133	28	－	L20-1		弥生土器	精製甕	口縁～頸部	(31.4)	(7.3)	－	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	橙 Hue7.5YR 7/6	ナデ,ミガキ	ナデ	良好	頸部突帯1条,赤彩
134	27	－	M20-18		弥生土器	精製甕	口縁～頸部	(33.2)	15.4)	－	長石,石英,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ,暗文様ミガキ	暗文様ミガキ,ナデ		頸部突帯1条,赤彩
135	28	－	L20-2		弥生土器	精製甕	口縁～胴部	(36.1)	(13.4)	－	長石,角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	赤褐 Hue2.5YR4/6	ナデ,暗文	暗文,ナデ	良好	頸部突帯1条,胴部突帯1条,赤彩
136	28	－	L20-2		弥生土器	精製甕	口縁～底部	(31.7)	31.2	6.3	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ	ナデ	良好	頸部突帯1条,胴部突帯2条,赤彩
137	25	－	M19-20		弥生土器	精製甕	脚部	－	(13.0)	－	長石	赤褐 Hue2.5YR4/6	橙 Hue7.5YR 7/6	暗文様ミガキ,ナデ,ミガキ	ナデ	良好	胴部突帯2条,赤彩
138	25	－	M19-20		弥生土器	精製甕	口縁～胴部	31.7	(11.2)	－	長石,石英,角閃石	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	ナデ,暗文様ミガキ	暗文様ミガキ,ナデ,指頭圧痕,ハケ目	良好	赤彩
139	25	－	M19-19		弥生土器	精製甕	口縁	－	(2.7)	－	長石,角閃石,雲母	明赤褐 Hue2.5YR5/8	明赤褐 Hue2.5YR5/8	ナデ	暗文様ミガキ	良好	赤彩
140	29	－	－		弥生土器	精製甕	口縁～胴部	28.4	(20.5)	－	長石,石英,角閃石,雲母	暗赤褐 Hue2.5YR3/6	橙 Hue7.5YR 7/6	ナデ,暗文様ミガキ,ミガキ,ハケ目	暗文様ミガキ,ナデ	良好	頸部突帯1条,胴部突帯2条,赤彩
141	27	－	－		弥生土器	精製甕	口縁～頸部	(29.0)	(5.9)	－	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ	暗文様ミガキ,ナデ		赤彩
142	29	－	L20-4		弥生土器	精製甕	口縁～底部	28.6	26.8	7.2	長石,石英,角閃石,雲母	浅黄橙 Hue10YR8/3	明黄褐 Hue10YR7/6	ナデ,暗文様ミガキ,ハケ目	ナデ,ヘラ工具,ハケ目	良好	頸部突帯1条,胴部突帯2条,赤彩
143	25	－	M19-15		弥生土器	精製甕	口縁～胴部	(23.0)	(10.6)	－	長石,雲母	赤褐 Hue2.5YR4/8	橙 Hue7.5YR 7/6	ナデ,暗文様ミガキ	ナデ,ハケ目	良好	頸部突帯1条,赤彩
144	28	－	－		弥生土器	精製甕	底部	－	(1.8)	(5.5)	長石,石英,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	灰白 Hue5/4/	ハケ目	指頭圧痕,ナデ	良好	赤彩
145	28	－	－		弥生土器	精製甕	底部	－	(3.7)	5.8	長石,石英,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR 7/6	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	ミガキ,ナデ	ナデ		赤彩
146	28	－	－		弥生土器	精製甕	底部	－	(3.0)	(5.2)	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	明黄褐 Hue10YR7/6	ミガキ,ナデ	ナデ	良好	赤彩
147	28	－	M20-21		弥生土器	精製甕	底部	－	(3.0)	(7.4)	長石,角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	暗灰 HueN3/	ナデ	ナデ,指頭圧痕	良好	赤彩
148	28	－	L20-1		弥生土器	精製甕	底部	－	(4.5)	(7.2)	長石,角閃石,雲母	にぶい橙 Hue10YR7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	ミガキ,ナデ	ナデ,指頭圧痕	良好	赤彩
149	29	－	M20-4		弥生土器	精製甕	底部	－	(2.6)	6.4	長石	赤褐 Hue2.5YR4/6	橙 Hue5YR6/6	ハケ目,ナデ	ナデ	良好	赤彩
150	29	－	L20-8		弥生土器	精製甕	底部	－	(2.2)	(7.2)	長石,石英	赤褐 Hue2.5YR4/8	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	ハケ目	ナデ,ナデ	良好	赤彩
151	28	－	－		弥生土器	精製甕	底部	－	(2.8)	(6.0)	長石,石英	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 8/6	ミガキ,ナデ	指頭圧痕,ナデ	良好	赤彩
152	28	－	L20-1		弥生土器	精製甕	底部	(4.6)	(6.4)	－	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	暗赤褐 Hue5YR3/6	浅黄橙 Hue10YR8/4	ミガキ,ナデ	ナデ	良好	赤彩,底部に黒斑
153	28	－	L20-2		弥生土器	精製甕	胴部～底部	－	(7.7)	(6.1)	長石,石英,角閃石	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	浅黄橙 Hue10YR8/3	ミガキ,ナデ	ナデ	良好	赤彩
154	28	－	L19-5		弥生土器	精製甕	底部	－	(5.2)	(7.0)	長石	赤褐 Hue5YR4/6	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	ミガキ,ナデ	ナデ,ハケ目	良好	赤彩
155	28	－	－		弥生土器	精製甕	底部	－	(5.2)	(7.4)	長石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	浅黄橙 Hue10YR8/4	ミガキ,ナデ	ナデ	良好	赤彩
156	33	－	I22-7		弥生土器	高杯	杯部	(23.0)	(6.8)	－	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	良好	口縁に黒斑
157	28	－	－		弥生土器	精製高杯	口縁～胴部	17.9	(6.0)	－	長石,石英,雲母	にぶい橙 Hue7.5YR 7/3	にぶい橙 Hue7.5YR 7/3	ナデ,ハケ目	ナデ,ミガキ	良好	赤彩
158	25	－	M19-20		弥生土器	精製高杯	杯部	(32.4)	(5.8)	－	長石,角閃石,雲母	明赤褐 Hue2.5YR5/6	赤褐 Hue2.5YR4/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ミガキ	良好	赤彩
159	28	－	L19-5		弥生土器	精製高杯	杯部	(34.4)	(3.7)	－	長石	赤褐 Hue2.5YR4/6	赤褐 Hue2.5YR4/6	ナデ,ハケ目	ミガキ,ナデ	良好	赤彩
160	29	－	L20-4,8		弥生土器	精製高杯	杯部～脚部	33.9	(22.6)	－	長石,角閃石,褐色土粒	暗赤褐 Hue2.5YR3/6	橙 Hue5YR6/6	ナデ,ミガキ,ハケ目	ナデ,ミガキ,工具痕	良好	口縁突帯2条,赤彩
161	29	－	M20-23		弥生土器	精製高杯	杯部	(30.9)	(4.7)	－	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	赤褐 Hue2.5YR4/8	暗赤褐 Hue2.5YR3/6	暗文様ミガキ,ナデ,ミガキ	ナデ,ミガキ	良好	口縁突帯1条,赤彩
162	28	－	－		弥生土器	精製高杯	杯部	－	(5.4)	－	長石,雲母	赤褐 Hue2.5YR4/4	赤褐 Hue2.5YR4/6	ハケ目	ナデ,ハケ目	良好	赤彩
163	28	－	L20-1		弥生土器	精製高杯	杯部	(31.0)	－	(4.9)	角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ	ナデ	良好	口縁突帯1条,赤彩
164	25	－	M17-10		弥生土器	精製高杯	杯部	(30.4)	(4.6)	－	長石,石英,角閃石	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ	ナデ	良好	口縁部突帯1条,赤彩
165	25	－	M19-20		弥生土器	精製高杯	口縁～底部	(30.3)	(20.4)	21.8	長石,石英,角閃石	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ,暗文様ミガキ	ミガキ,ナデ,ナデ	良好	口縁突帯1条,赤彩
166	29	－	L20-4		弥生土器	精製高杯	杯部	(21.8)	(6.3)	－	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	暗赤褐Hue5YR3/3	ナデ,暗文様ミガキ,ハケ目	ナデ,ミガキ	良好	赤彩,内面を燻している
167	29	－	L20-4		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(20.5)	(21.3)	長石,石英	赤橙 Hue10R6/8	橙 Hue5YR6/8	ミガキ,ナデ	工具痕,ナデ	良好	突帯1条,赤彩
168	25	－	－		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(10.3)	－	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	赤褐 Hue2.5YR4/8	橙 Hue5YR5/6	ミガキ	工具痕	良好	脚部突帯1条,(突帯は一部のみ残存),赤彩
169	29	－	－		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(7.8)	－	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	暗赤褐 Hue2.5YR3/6	橙 Hue2.5YR6/8	ミガキ	ナデ,工具痕	良好	赤彩,突帯は一部を残して剥離
170	29	－	L20-4		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(7.3)	－	長石,角閃石,褐色土粒	暗赤褐 Hue2.5YR3/6	にぶい赤褐 Hue5YR5/4	ミガキ	工具痕	良好	脚部突帯1条,赤彩
171	29	－	－		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(9.1)	－	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	赤褐 Hue2.5YR4/8	橙 Hue2.5YR6/8	ハケ目	ナデ,工具痕	良好	赤彩,突帯剥離
172	25	－	M19-10		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(8.0)	－	長石,石英,角閃石,褐色土粒	赤褐 Hue2.5YR4/6	橙 Hue5YR6/8	ミガキ	ハケ目痕跡,工具痕	良好	脚部突帯剥離痕,赤彩
173	29	－	M20-23		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(14.5)	－	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	暗赤褐 Hue2.5YR3/6	橙 Hue5YR7/6	ミガキ	ナデ,工具痕	良好	赤彩,突帯剥離
174	28	－	L20-2		弥生土器	高杯	脚部	－	(8.8)	－	長石,石英,角閃石,雲母	明赤褐 Hue5YR5/6	橙 Hue5YR6/8	ナデ	ナデ,しぼり痕,ナデ	良好	
175	29	－	－		弥生土器	高杯	脚部	－	(4.4)	(22.4)	長石,石英,角閃石	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	ハケ目,ナデ	ハケ目	良好	赤彩
176	25	－	M20-11		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(8.3)	(24.8)	角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ハケ目,ナデ	ハケ目,ナデ	良好	
177	29	－	L20-8		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(7.3)	(22.6)	石英,角閃石,雲母,褐色土粒	赤褐 Hue2.5YR4/8	橙 Hue2.5YR 6/8	ハケ目,ミガキ	ハケ目,ナデ	良好	赤彩
178	25	－	M19-15		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(2.8)	(20.8)	長石,雲母,褐色土粒	赤褐 Hue2.5YR4/8	橙 Hue5YR6/8	ナデ	ナデ	良好	赤彩
179	28	－	L20-2		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(7.5)	(19.0)	石英,角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	暗文様ミガキ,ナデ	ナデ	良好	赤彩,煤付着
180	34	－	I22-14		弥生土器	精製高杯	脚部	－	(4.1)	(22.4)	長石,石英,雲母褐色土粒	明赤褐 Hue2.5YR5/8	橙 Hue5YR6/6	ナデ	ナデ	良好	赤彩

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
181	28	－	L20-11		弥生土器	精製高坏	脚部	－	(4.9)	(21.2)	長石、雲母	明赤褐 Hue2.5YR5/6	明黄褐 Hue10YR7/6	暗文様ミガキ、ナデ	ナデ	良好	赤彩
182	29	－	L20-4		弥生土器	精製高坏	脚部	－	(8.3)	(22.0)	長石、石英、角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	橙 Hue7.5YR 7/6	ハケ目、ナデ	ナデ	良好	赤彩
183	33	－	I22-7		弥生土器	高杯	脚部	－	(7.8)	(23.6)	長石、角閃石、雲母、褐色土粒	明黄褐 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ミガキ	工具痕、ナデ	良好	
184	33	－	I22-7		弥生土器	高杯	脚部	－	(6.6)	(15.2)	長石、角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ミガキ	ナデ	良好	
185	33	－	I22-7		弥生土器	広口壺	口縁～底部	10.0	21.5	(7.7)	長石、石英、角閃石、雲母、褐色土粒	橙 Hue7.5YR 7/6	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	ナデ、ミガキ、ヘラケズリ	ナデ、指頭圧痕	良好	口縁上面刻目、底部黒斑
186	29	－	L20-4		弥生土器	壺	胴部～底部	－	(8.7)	6.5	石英、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	橙 Hue7.5YR 7/6	ナデ	ナデ	良好	赤彩
187	25	－	M19-15		弥生土器	袋状口縁壺	口縁	(12.0)	(2.9)	－	長石、石英、角閃石、雲母	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	ナデ	ナデ	良好	赤彩
188	29	－	L20-4		弥生土器	袋状口縁壺	口縁～頸部	13.8	(6.3)	－	角閃石、雲母	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	暗文様ミガキ、ミガキ	ナデ	良好	赤彩
189	29	－	L20-4		弥生土器	袋状口縁壺	口縁～底部	(10.7)	16.7	7.0	石英、雲母	浅黄橙 Hue10YR8/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ、ミガキ、ハケ目	ナデ	良好	頸部突帯2条、赤彩
190	29	－	M20-23 №2		弥生土器	袋状口縁壺	完形	11.8	23.4	7.0	石英、角閃石、雲母	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ、ハケ目、ミガキ	ナデ、ナデ、ハケ目	良好	赤彩
191	29	－	L20-4		弥生土器	袋状口縁壺	胴部～底部	－	(18.5)	8.8	石英、角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/2	ハケ目、ナデ、暗文様ミガキ、ミガキ	ナデ	良好	胴部突帯2条、黒斑
192	29	－	L20-4		弥生土器	袋状口縁壺	口縁～胴部	13.2	(20.9)	－	石英、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ミガキ、暗文様ミガキ	ナデ、しぼり痕、ナデ	良好	口縁部突帯2条、胴部突帯2条、赤彩
193	29	－	M20-23 番№1		弥生土器	袋状口縁壺	頸部～底部	－	(19.8)	6.4	長石、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/2	灰白 Hue2.5Y7/1	ナデ、ハケ目	ナデ、指頭圧痕、ハケ目	良好	赤彩
194	33		I22-12		弥生土器	甕	口縁～胴部	(35.2)	(70.0)	－	角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	ナデ、暗文様ミガキ、ミガキ	暗文様ミガキ、ナデ	良好	線刻（胴部上面）、頸部刻目突帯1条、胴部刻目突帯2条

第８表　石器計測表（弥生時代）

挿図番号	実測No.	出土区	グリッド	遺構番号	出土層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
L44	72	29	L20-9	－	－	太型蛤刃石斧	14.80	6.20	4.20	529.77	
L45	46	32	I23-6	－	－	太型蛤刃石斧	13.00	5.40	3.60	323.44	
L46	34	30	J22-20	－	－	太型蛤刃石斧	12.20	5.50	2.90	299.32	
L47	85	33	I22-11	－	－	太型蛤刃石斧	9.16	5.17	3.80	230.80	
L48	87	29	L20-3	－	－	太型蛤刃石斧	13.90	6.90	4.03	562.44	
L49	65	6	K16-14	－	－	太型蛤刃石斧	13.20	6.40	3.80	365.11	
L50	105	13	－	－	－	太型蛤刃石斧	8.68	5.00	3.56	233.11	
L51	37	31	－	－	－	太型蛤刃石斧	9.80	6.50	3.00	306.49	
L52	31	31	J21-25	－	－	太型蛤刃石斧	11.60	5.00	3.70	216.51	
L53	39	31	－	－	－	太型蛤刃石斧	10.40	5.80	3.10	255.19	
L54	90	11	L18-12	－	－	太型蛤刃石斧	7.80	5.10	2.45	132.71	
L55	89	10	K18-2	－	－	太型蛤刃石斧	6.12	5.34	3.32	111.44	
L56	96	19	L19-16	－	－	太型蛤刃石斧	7.69	4.43	4.01	46.82	
L57	86	27	M20-12	－	－	磨製石斧	13.29	3.50	2.31	142.95	
L58	2	1	調査区内	－	－	磨製石斧	5.43	2.63	1.76	26.76	
L59	110	23	－	－	－	砥石	5.10	3.21	3.48	90.84	
L60	104	19	L19-17	－	－	砥石	6.20	3.75	1.70	62.07	
L61	33	32	J22-23	－	－	砥石	10.00	5.80	4.50	219.53	
L62	103	34	I22-19	－	－	砥石	6.80	7.30	0.98	54.06	
L63	1	1	調査区内	－	－	磨製石鏃	3.86	1.75	0.33	3.36	
L64	28	25	M19-20	－	－	磨製石鏃	3.11	1.62	0.42	2.03	
L65	16	28	L20-12	－	－	磨製石鏃	2.00	1.79	0.31	1.52	
L66	22	25	M19-20	－	－	磨製石鏃	4.51	1.58	0.38	2.82	
L67	23	25	M19-20	－	－	磨製石鏃	3.27	1.38	0.25	1.69	
L68	24	25	M19-20	－	－	磨製石鏃	4.26	1.65	0.49	3.34	
L69	25	25	M19-20	－	－	磨製石鏃	3.39	1.48	0.28	1.67	
L70	26	25	M19-20	－	－	磨製石鏃	2.90	1.29	0.21	1.08	
L71	27	25	M19-20	－	－	磨製石鏃	3.89	1.72	0.21	1.66	
L72	209	32	I22-3	－	－	石製穂摘具	3.42	2.59	0.43	7.19	
L73	9	17	調査区内	－	－	石製穂摘具	4.01	3.44	0.43	8051.00	
L74	225	33	I22-7	－	－	不明石製品	6.02	5.62	2.32	71.37	
L75	226	33	I22-7	－	－	不明石製品	3.93	1.34	1.14	5.79	

第4章 古墳時代

第1節 概況

古墳時代の遺構は、調査区の西端付近と東端付近に分布する。その中間あたりでは確認されておらず、遺構の性質も古墳（西）、土壙墓・住居（東）と差があるようにも思える。むしろ古墳が集落域から外れた位置にあると見るべきか。調査区西端付近は飯田溝により北甘木丘陵の尾根が分断されるところに面しており、地形的には丘陵端部と見なすこともでき、これにより古墳の選地に影響を受けているのは想像に難くない。

第2節 古墳

調査区の西端付近で3基の古墳を確認した。周溝を持ち、主体となる埋葬施設を有する。比較的近接した位置にかたまっており、道路を挟んで南側には現存墳丘が残る御前塚古墳があるなど、塔ノ木古墳群と呼んでも差し支えないような様相を呈している。

1 塔ノ木1号墳（SZ01）

（1）概況

1区と4区の境界付近に位置し、周溝は各区をまたいでいる。内部主体は石棺と推測されるが既に破壊されており、箱式石棺の板石は取り除かれている。墳丘は削平により失われている。

（2）周溝（第91図）

上面を削平されているため、現存した部分で外周径約22m、内周径約18mを測る。西側に陸橋を設けており、西に向かって開口する形となる。形状は円形であり、これにより円墳とする。

（3）内部主体（第92，93図）

中央に1基存在する。それ以外については確認できなかったことから複数の主体を持つ可能性は低い。墓壙状の坑に箱式石棺が設置されたものと思われるが、前述したように主体は破壊されており、破片が墓壙内に散乱する。つまり、破壊を受けた後の残骸の体をなしており、ほとんど当時の姿とは言えないものであるが、以下において可能な限り情報を拾おうと試みた。

ア 検出面付近の粘土

遺構検出面付近に帯状の粘土の分布が見られる。断面図を見るとほとんど表層に分布しており、ある程度線状に分布はしているものの後述する石棺の長軸とはずれている。

石棺には元々蓋がかぶせられていたものが破壊の際引きはがされ、石棺と蓋石との間に充填されていた粘土がそれに伴って移動したものと思われる。石棺の所で述べるが南北断面図において縦方向に深く分布する粘土とは機能を異にするものと思われる。

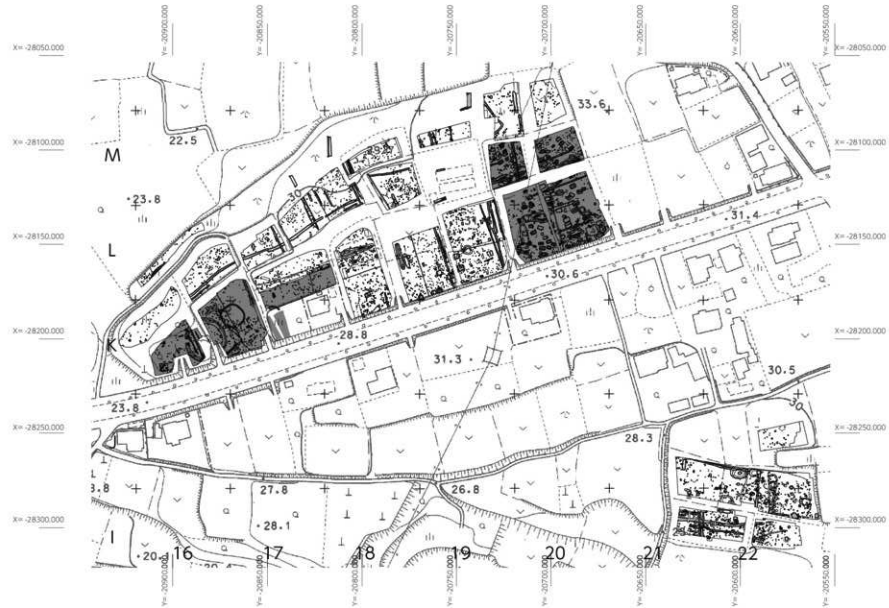
イ 墓壙

断面図を見る限り墓壙状の坑を掘って石棺を設置していることから検出面においてその上端を記録されて然るべきにも関わらず、図面にその記載はなかった。ひどく撹乱を受けているためとも思われる。石棺の抜き取り痕の図面及び断面図を見る限り、石棺よりもやや幅広の長方形土坑を掘り、その中央部をさらに掘りくぼめて石棺の設置位置としたものである。前章で述べた土壙墓で言えばB類のようなかたちである。

ウ 石棺

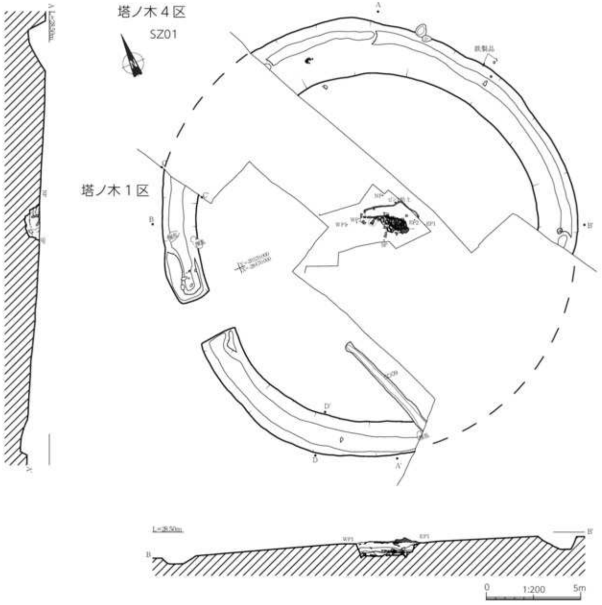
完全に抜き取られており、抜き取り痕から推測される大きさの板材は墓壙中から見つかっていない。墓壙内に残る破片からこれら板材が砕かれたか、持ち去られたものと思われる。

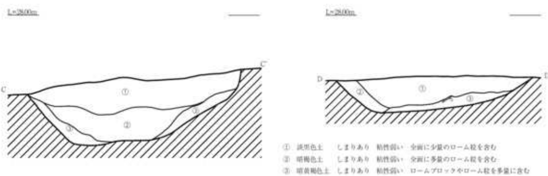
抜き取り痕から推測するに、板石を複数枚組み合わせており、小口側は側縁の中に入る所謂



※グリッドは旧測地系（Tokyo Datum）で設定されたものであるため、JGD2011 における数値との間に差が生じている

第 90 図　古墳時代の遺構が多く見られる地点

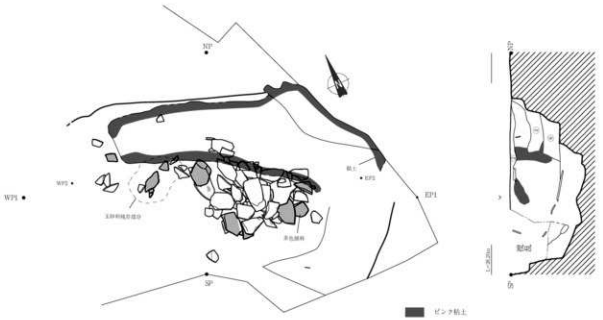


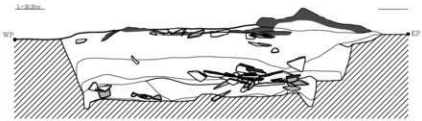


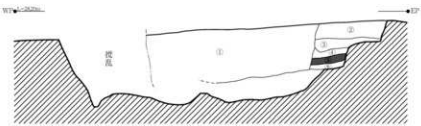
①　淡黒色土　しまりあり　粘性弱い　全面に少量のローム粒を含む
②　暗褐色土　しまりあり　粘性弱い　全面に多量のローム粒を含む
③　暗黄褐色土　しまりあり　粘性弱い　ロームブロックやローム粒を多量に含む

0　1:40　1m

第 91 図　1 号墳（SZ01）平面図及び周溝断面図







① 暗褐色土　ピンク粘土のブロック　ローム粒・玉砂利などを含む
② 暗褐色土　ピンク粘土はほとんど含まない　ローム粒・ニガブロックが多い
③ 暗褐色土　ピンク粘土のブロックを含む　下層はローム粒を多量に含む
④ 暗褐色土　ピンク粘土・ローム粒ともになし　ニガブロックのみを含む
⑤ 暗褐色土　ピンク粘土の塊を層全体に含む　ローム粒なし
⑥ 暗褐色土　ローム粒はほとんど含まない

S=1/80　0　1m

第 92 図　1 号墳（SZ01）散布石材実測図

H形と思われる。また、南側縁の東端側に隣接した中央部と思われる板石は東側よりも内側に入る。このことから北側縁の中央部は外側に板石が置かれると考えられるが抜き取り痕を確認できていない。また、西側の小口付近は撹乱等により確認できていない。

屍床についてもほとんど破壊されているため情報を得ることは出来ないが、西側の一部で玉砂利が残存している部分があったと注記されており、原位置を保っていたかについては定かではないが屍床は玉砂利が敷かれていたものと思われる。

また、破砕された石材が墓壙下部に遺棄されておりそれらに赤色顔料が塗布されていることから石棺内部は朱塗りであったものと思われる。

エ　被葬者・埋葬方法

屍床のほとんどを失っていることから被葬者が何体であったか、人骨の有無、性別、副葬品の有無、頭位方向については判断できない。

（4）遺構内出土遺物

石棺内部はほとんど破壊されているため、副葬品は出土しなかった。ただし、周溝内からは古墳時代に属する遺物が出土している。

ア　鉄刀（第94図11）

本来は主体部たる石棺から出て然るべきものではある。残念ながら周溝のどの位置・どの深さから出ているかの情報は欠落している。

長さは約25cm、身幅は約1.5cm程度、背部の厚みは約4mmである。柄付近の頸部に比べて身は細っており、研ぎ減らしにより湾曲した刃部となっている。刀身中程で折損する。

イ　穂摘鎌（第94図12）

穂摘鎌と思われる鉄器である。板状のものに左端に返りを有しているが、返った先は折れている。また右側は欠損している。加えて中程で外側に向かって曲げられており、折り曲げ鉄器の可能性も考えられる。

ウ　甕（第95図195～197）

3点図示する。いずれも球形であり胴部中頃が最も張り出す。はやや厚手で最大胴部径を測る部分を境に上下は対照的であり正円に近い。底部も円弧状を呈する丸底である。調整は外器面に斜め方向のハケ目が残る。196、197は195よりも若干小型で胴部も正円よりわずかに縦長気味である。

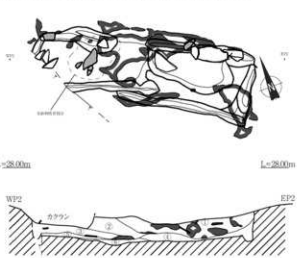
エ　複合口縁壺（第95図198，199）

198、199は複合口縁壺である。口縁部のみか、頸～胴部までであり全形は不明である。の口縁は強く外反している。の頸は直立したのち口縁に向かって明確に屈曲しており、と同じく強く反るものと思われる。器面調整は斜め方向のハケ目が残る。

オ　高坏（第95図200）

1点のみであるが高坏を図示する。脚の裾部で強く屈曲する。裾から坏接合部までは直線的に上る。脚と坏の高さの比は2：1と脚が長い。また接合部の径は比較的小さく結果として細身の印象を受ける。坏部は接合部から少し上辺りまでがなだらかな皿状の平坦に近い面をもち、そこから屈曲して口縁まで直線的に外反する。最終的に口縁は脚の裾部よりも広く、比率的に逆台形を呈する。

オ　小形丸底壺（第95図201）



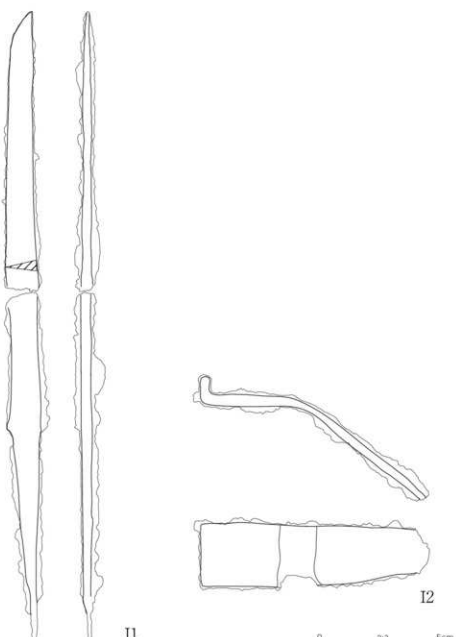
第93図　1号墳（SZ01）石材抜き取り痕実測図

口縁を欠くため胴部と口縁の高さの比を見ることはできない。胴部を見る限りは口縁との比は同等程度かと思われる。胴部は横方向に強く張り出すためやや横長の断面形を見せる。

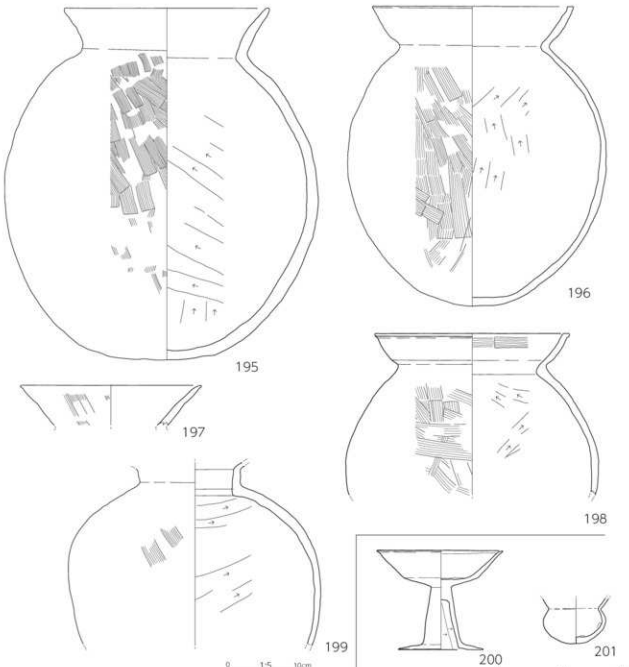
（5）塔ノ木1号墳の推定時期

主体部からは何も見つからなかったため、周溝内遺物を頼りにすることとなるが、埋土中からは古代の遺物が多く含まれており、これらの出土状況の層位的検討がなされておらず上記遺物についてもその原位置性が担保されていないため遺構内一括遺物として扱って良いか判断に迷うところである。

一方で土師器に大きな時期差が見られないこと、5世紀台の須恵器を含まないことは一つの特徴と言える。土師器のあり方から林田和人氏が設定した土師器による時期区分（林田 2002）で言うところの2期～3期（5世紀前半～中頃）の辺りを想定する。



第94図　1号墳（SZ01）周溝出土遺物実測図①



第95図　1号墳（SZ01）周溝出土遺物実測図②

第9表　SZ01 周溝内出土遺物観察表

挿図番号	区	グリッド	遺構番号	層位	器種	全長(cm)	刀身長(cm)	茎部長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
11	4	L16-10	1号墳		鉄刀	25.3	16.6	8.7	1.3	0.4	周溝内

挿図番号	区	グリッド	遺構番号	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
102	1	L16-14	1号墳	②	勾玉	(12.10)	3.79	0.29	周溝内

挿図番号	実測NO	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
195	353	4	SZ01	-		土師器	古墳	壺	口縁～底部	16.6	30.9	-	赤褐、角閃石、輝石 1.5㎜	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ	良好	胴部に2孔
196	361	4	SZ01	-		土師器	古墳	壺	頸部	15.6	26.3	-	赤褐、角閃石、輝石 1.5㎜	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	ナデ、ハケ目	ナデ、ヘラケズリ	良好	口縁・胴部に線刻書
197	351	4	SZ01	-		土師器	古墳	壺	口縁	16.6	(3.5)	-	赤褐、角閃石、輝石 1.5㎜	にぶい橙 Hue10YR7/4	にぶい橙 Hue10YR7/4	ハケ目	回転ナデ	良好	
198	224	4	SZ01	-		土師器	古墳	壺	口縁～胴部	(17.2)	(14.2)	-	赤石、石英、雲母、輝石 2㎜	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	灰黄褐 Hue10YR4/2	ナデ、ハケ目	ナデ、ハケ目、ヘラケズリ	良好	胴部に2孔
199	362	4	SZ01	-		土師器	古墳	壺	胴部～胴底	-	(16.4)	-	赤褐、角閃石、輝石 1.5㎜	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ、ハケ目	回転ナデ、ヘラケズリ	良好	胴部外面に黒斑
200	202	4	SZ01	-		土師器	古墳	高坏	口縁～底部	16.7	13.1	11.2	赤石、石英、角閃石、雲母、輝石 1.5㎜	にぶい橙 Hue7.5YR7/4	橙 Hue7.5YR6/6	ナデ	ナデ、ヘラケズリ	良好	
201	204	4	SZ01	-		土師器	古墳	小型丸底土器	胴部～底部	-	66.6	-	赤石、石英、雲母、輝石 2㎜	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	回転ナデ、ハケ目	回転ナデ、指頭圧痕	良好	

2　塔ノ木２号墳（SZ02）

（1）概況

２号墳は５区で確認され位置的に１号墳の東隣にある。墳丘は１号墳と同様失われており、周溝も下端付近が残る程度に削られているものと思われる。一方で内部主体である石棺は１号墳とは異なり完存している。そのため保存状態が良く、人骨が確認された。

（2）周溝（第 96 図）

残存する外周径は約 12m、内周径約 11 mと１号墳に比べ小さい。周溝の形状から円墳である。ほぼ南に近い南南東方向に陸橋がある。

（3）内部主体（第 97，98 図）

ア　石棺の位置と方向

周溝で区切られた領域のほぼ中央に石棺が１基存在する。方向は陸橋のある方向に長軸が沿う形となっており、周溝の開口部を意識したものか。

イ　石棺の特徴

石棺は箱式石棺であり、小口側の石材が長軸側の石材の内に入る所謂「H 字形」で、長軸側の板石も長目の石材を用いて片側２枚の組み合わせである。

蓋は大型の板状石材２枚に継ぎ目の上にやや小型の板石を載せ、粘土で目張りしている。また断面から箱式石棺と蓋が接する部分にも粘土を貼っていたと考えられ、これにより外部からの土壌や水の侵入を防いでいたものと考えられる。蓋を除去すると棺内に１体の人骨を確認した。屍床部は玉砂利が敷かれ、棺内全体が赤色顔料により塗られている。

ウ　墓壙

断面図を見る限り石棺の周りに設置するための墓壙を認めるが１号石棺と同様平面図に記録されていない。断面から判断するに長軸約 2.6 m、短軸 2.6 mと正方形に近いか。長軸方向の地山は屍床部分として残して小口の板石を置くための掘込みを行っており、短軸方向の断面もこれに習うかと思われるも長軸方向の石材の深さに大きな差が生じているためか東側を大きく掘り込んで高さを調整している。

（4）人骨

比較的良好な残存状況を示す人骨で、頭部は南方向を向いており、開口部に向かって頭を向けているような形となる。どういうわけか人骨の所在は不明であり、後述する３号墳の人骨は山口県の土井ヶ浜人類学ミュージアムに保管されているのに、と当時の資料管理体制の杜撰さを物語る。また、次で述べるが刀子・玉類などの副葬品が出土している。

（5）遺構内出土遺物

棺内からは刀子が１点、勾玉・管玉といった玉類、周溝からは土師器が出土している。

ア　刀子（第 99 図 I3）

１点が石棺内遺体の左手元から出土した。刀身は長さ約 10cm、顎部で約 1.5cm、厚み 1mm 程度を測る。研ぎ減らしによる刃の湾曲が見られる。

イ　勾玉（第 99 図 L77~L80）

４点石棺内から出土した。取り上げ番号は振られているようであるが平面図に位置が記されておらず、不明である。いずれもヒスイと思われる透明性のある緑色の石材を使用している。

L77 は４点のなかで特徴的な形状をしているもので、形態で分類するならば不定形勾玉である。頭頂部に２条の刻り込みが見られ、結果として三段の波形を呈する形状となる。抉り部は頭部に向かって明確に作り出されており、頭部と尾部の区別は明瞭である。また４点のうち最も明るい色調を持つ石材である。

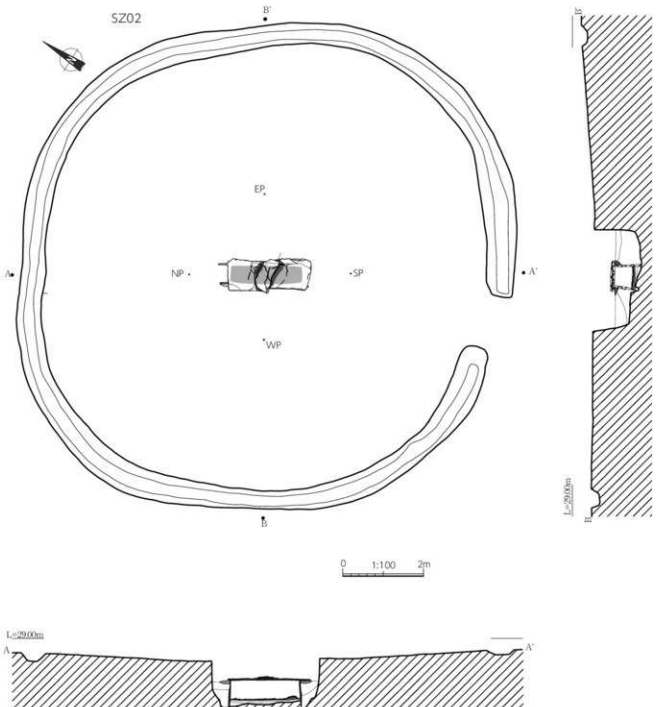
L78 ～ L80 は定形勾玉に分類されるもので、北陸の様相を持つとのことである（註１）。L78 は頭部に比べ尾部が長く、縦長な印象を受ける。抉り部は弧状になり屈曲する。頭部下の顎状部分はやや緩やかに刻り込まれている。胴部の一部及び孔部付近は他の玉と接触するためか他の部分に比べて光沢が強い。

L79，L80 は比較的よく似た形状のもので、頭部と尾部の比は同じ程度で他の２点に比べてやや小型である。頭部及び尾部端は直線的に仕上げられており、結果としてやや角張った形状となる。抉り部は顎状部分を直線的に仕上げており頭頂部における丸みとは明らかに異なる。

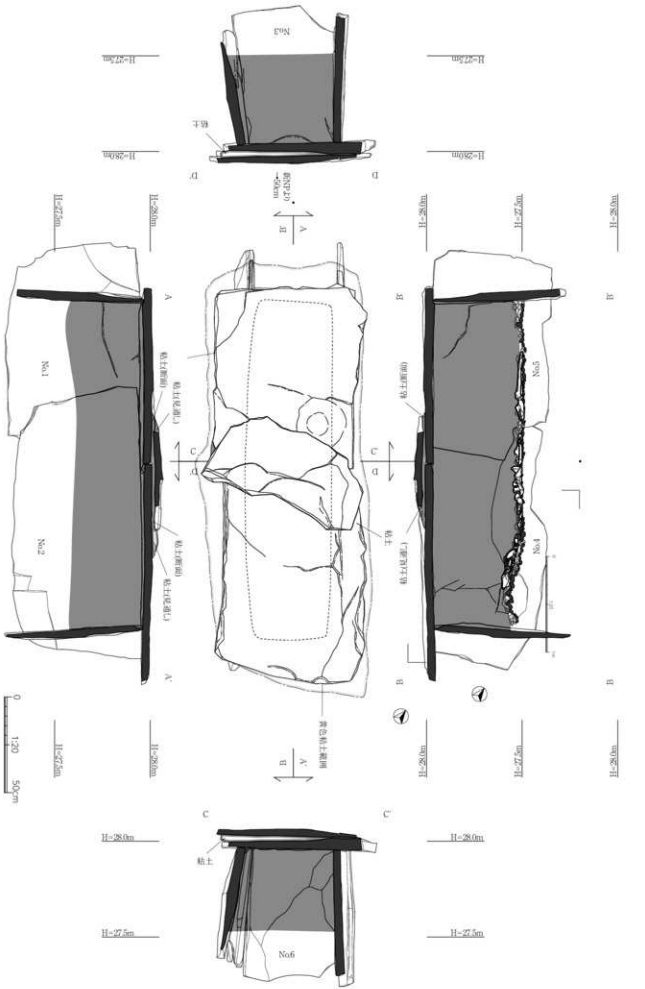
ウ　管玉（第 99 図 L81~107）

石棺内から出土した。一部破損するものの 27 個体存在する。いずれも碧玉製である。直径は３～ 6mm と全体的に細身である。長さは 0.6 ～ 2.5cm とばらつきがあり、一部は折損す

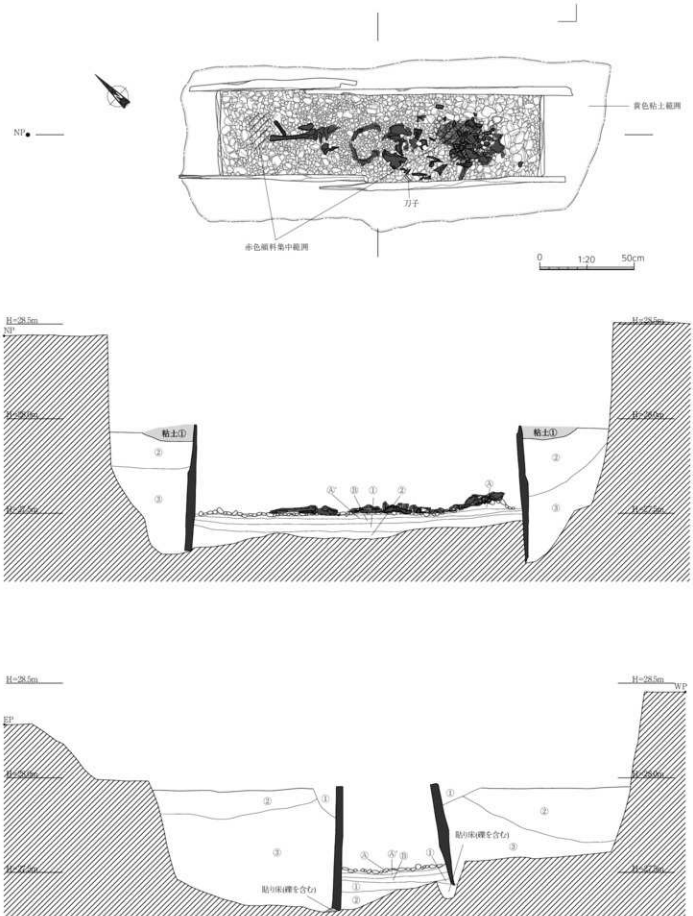
＊１　大坪志子氏のご教示による



第 96 図　2 号墳（SZ02）周溝及び石棺実測図



第 97 図　2 号墳（SZ02）石棺実測図



第 98 図　2 号墳（SZ02）石棺実測図（蓋除去後）

る。端部の磨り減りが認められるものは割合少なく端部の角は立っている。

エ　甕（第100図）

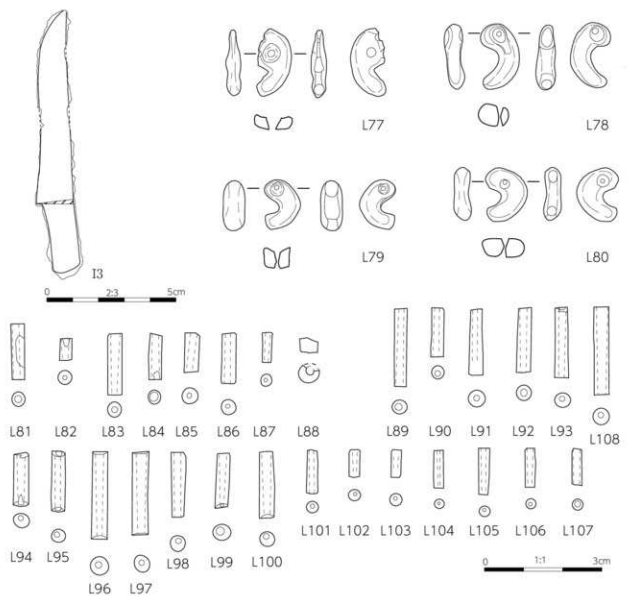
202は甕である。最大胴部径が胴部中央にあり、残存部位だけだと真円に近い。1号墳における甕と近似する。

（6）塔ノ木2号墳の性質及び推定時期

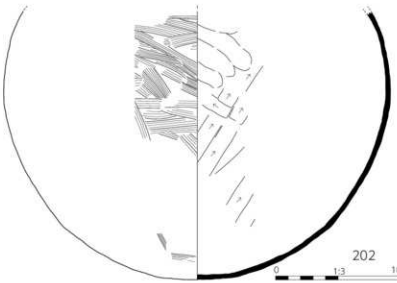
2号墳の被葬者について、周溝を有する石棺に埋葬されていること、2号墳被葬者のみ副葬品に勾玉などを有していることから高位にあって祭祀を担う者であった可能性がある。

時期については、石棺内出土遺物は時期を特定できるだけの特徴を持った遺物ではなく、周溝出土遺物も1号墳と同様原位置性の担保を欠いており、確定的ではない。そうでありつつも他の古墳時代遺物を認めないことから、周溝内出土の甕の時期である林田編年2期（5世紀前半）を当てるのが妥当かと思われる。これにより1，2号墳はほぼ同時期のもの、若干1号墳が後発するかと推定する。

これらから考えるに1号墳は主体部を失っていることや周溝内から鉄刀が出土するなど性質に確証が持てないが、鉄刀を1号墳のものであったと仮定するならば古墳の規模も加味して被葬者は男性であったと思われ、2号墳の被葬者と対をなす可能性がある。



第99図　2号墳（SZ02）石棺内出土遺物（鉄器は2/3、玉製品は等倍）



第100図　2号墳（SZ02）周溝内出土遺物実測図

第10表　2号墳（SZ02）棺内出土遺物観察表

挿図番号	区	グリッド	遺構番号	層位	器種	全長 (cm)	刀身長 (cm)	茎部長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
I3	5	K17-1	2号墳		刀子	(10.4)	(7.5)	2.9	1.5	0.3	石棺内

挿図番号	出土区	グリッド	遺構番号	出土層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
I.77	5	K17-1	2号墳	棺内	勾玉	1.60	0.80	0.40	0.90	片面穿孔
I.78	5	K17-1	2号墳	棺内	勾玉	1.62	1.08	0.47	1.20	両面穿孔
I.79	5	K17-1	2号墳	棺内	勾玉	1.24	0.82	0.43	0.90	両面穿孔
I.80	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.42	0.37	－	0.20	
I.81	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	0.64	0.38	－	<0.1	
I.82	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.59	0.41	－	0.40	
I.83	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.17	0.42	－	0.20	
I.84	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.19	0.45	－	0.30	
I.85	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.28	0.38	－	0.30	
I.86	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.25	0.34	－	<0.1	
I.87	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	(0.42)	0.49	－	<0.1	
I.88	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	2.01	0.36	－	0.30	
I.89	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.28	0.70	－	<0.1	
I.90	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.73	0.40	－	0.30	
I.91	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.65	0.41	－	0.30	
I.92	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.78	0.41	－	0.40	
I.93	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	2.25	0.43	－	0.40	
I.94	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.38	0.41	－	0.20	
I.95	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.53	0.42	－	0.30	
I.96	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	2.25	0.45	－	0.70	
I.97	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	2.12	0.44	－	0.70	
I.98	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.18	0.40	－	0.30	
I.99	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.43	0.41	－	0.40	
I.100	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.79	0.38	－	0.30	
I.101	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.19	0.29	－	<0.1	
I.102	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	0.68	0.30	－	<0.1	
I.103	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	0.69	0.29	－	<0.1	
I.104	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.17	0.26	－	<0.1	
I.105	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.18	0.31	－	<0.1	
I.106	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.07	0.28	－	<0.1	
I.107	5	K17-1	2号墳	棺内	管玉	1.06	0.32	－	<0.1	

第11表　2号墳（SZ02）周溝内出土遺物観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	遺和材	色調（外）	色調（内）	調整（外）	調整（内）	焼成	備考
202	4	SZ02	K16-5		土師器	古墳	壺	胴部～底部	－	(21.3)	－	長石、角閃石、雲母、黒色土粒	橙 5YR6/8	にぶい橙 5YR6/4	ハケ目、ナデ	ナデ、ヘラケズリ	良好	底部周辺穿孔1・壁付着、無底に器料か

3　塔ノ木３号墳（SZ03）

（1）概況

３号墳は７区及び８区にまたがって確認されている。これも他と同様墳丘を失っている。

（2）周溝（第 101 図）

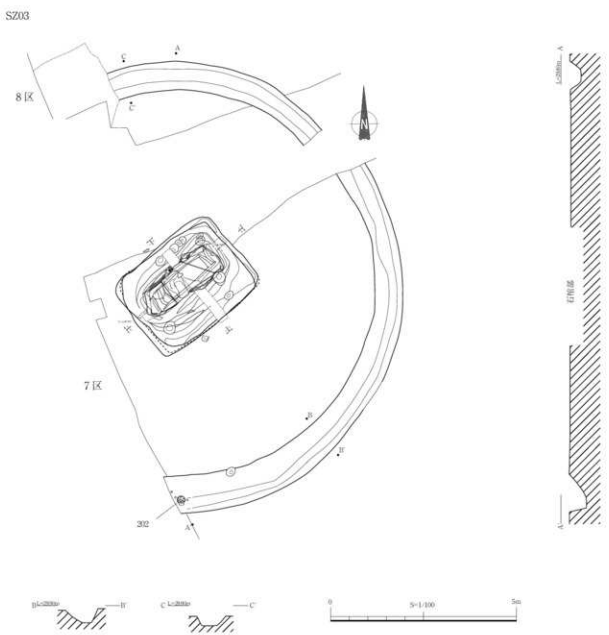
一部未掘を含むため全体の状況は不明であるが、外周径約 12 m、内周径約 10 mの円形と推定される。規模は２号墳よりもやや大きいくらいであるが、残存程度の差の可能性もあり、ほぼ同規模とみて良さそうである。陸橋は確認できていないが南北方向にないことや２号墳の開口方向が内部主体の長軸方向に沿う傾向から東西方向に開口すると見られ、北東側には陸橋へのせり上がりを見せないため南西に開口するものと推定する。

（3）内部主体（第 102 ～ 104 図）

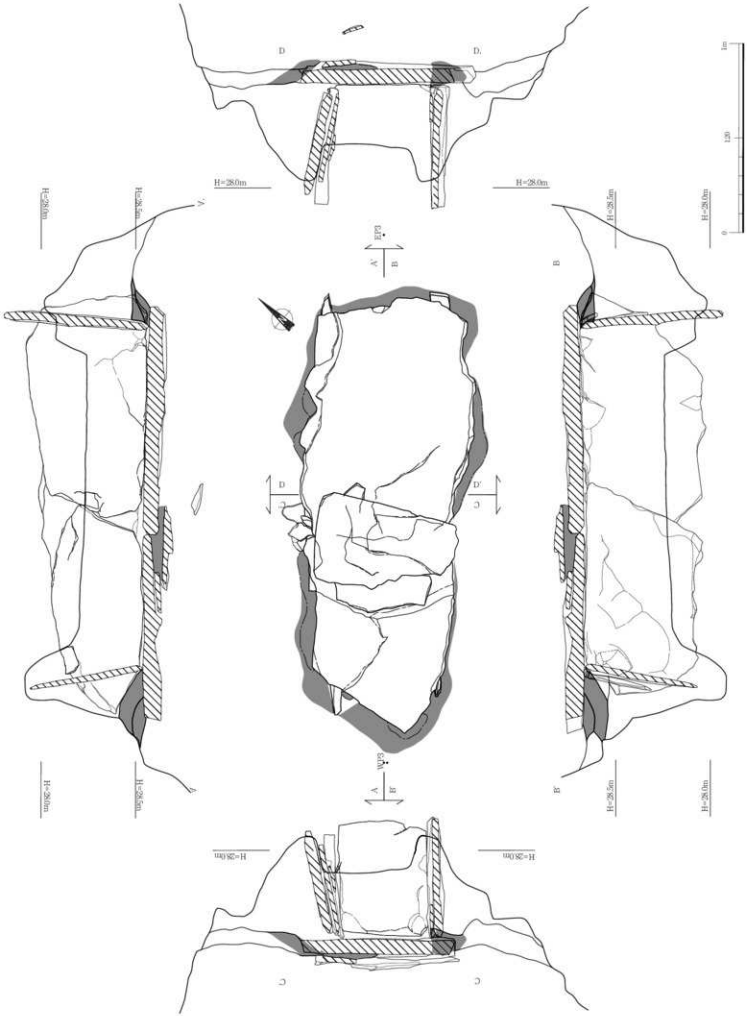
周溝で区切られた領域の中央部に１基認められる。珍しく墓壙の形状が記録されており、長さ約 3.3 m、幅約 2.5 mの長方形を呈する墓壙に１基の箱式石棺が納められる。

ア　墓壙

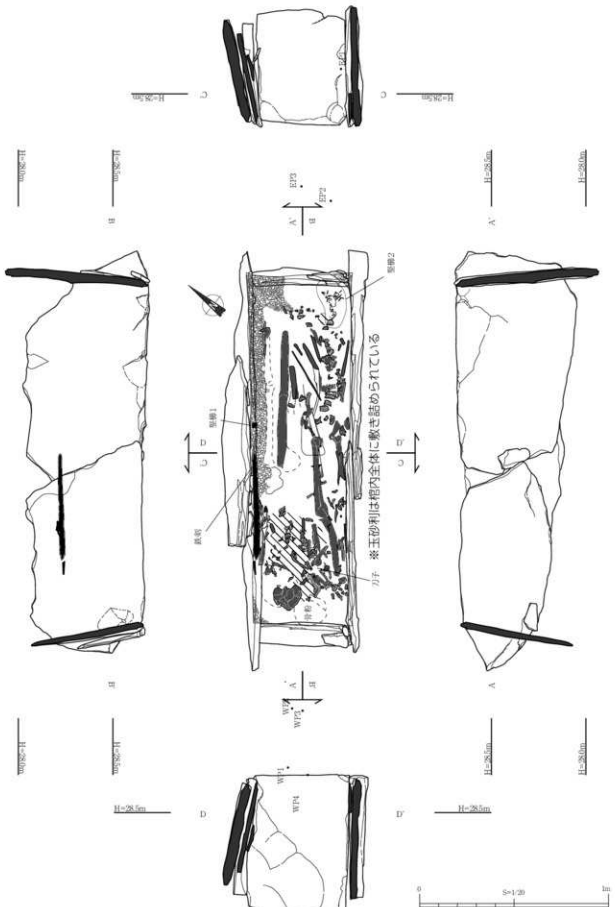
墓壙は北東 - 南西方向を軸としている。大きさについては前述のとおりである。墳丘を失っているためどの位置から墓壙が掘り込まれたかは不明であるが、検出面から約 50cm の墓壙を掘り、さらに石棺を設置するための坑を 20cm



第 101 図　３号墳（SZ03）周溝・石棺実測図



第 102 図　3号墳（SZ03）石棺石蓋実測図

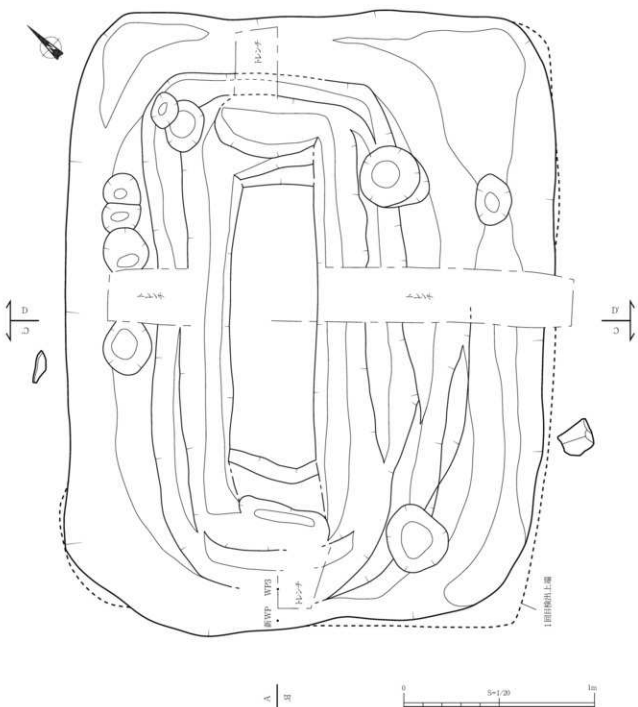


第 103 図　3号墳（SZ03）石棺実測図（石蓋除去後）

ほど掘り下げ、その面を屍床部とする。さらに石棺板石を設置するための堀方を設け、板石を設置する。墓壙は黄褐色粘質土を切り込んでおり、屍床部は粘土床となる。また、注記はないため詳細は不明であるが墓壙の埋土は棺蓋付近で分けられており、下層のものは石棺設置後の埋め戻し土と、上層のものは最終埋葬者の合葬に伴う再掘削後埋め戻された土ということであろう。

イ　石棺

石棺は長軸方向を4枚の大きな板石で構築し、小口面それぞれに1枚の板石を挟み込むH



第104図　3号墳（SZ03）石棺掘り方実測図

形のものである。南側の側壁は互いの端部が重なることで目地を塞いでいるが、北側壁では小口面を突き合わせたような形となっており目地どころか三角形の大きな隙間が上下２箇所開いている。前段で述べたが屍床部は粘土質の地山を利用し、その上に玉砂利を敷き込み屍床とする。第図にその状況を記しているが、玉砂利が石棺全面に敷き込まれた図面が作成されていないため人骨付近の図が省略されている。

蓋となる板石は全部で４枚あり、２枚の大きな板石で全体を覆い、目地周辺をもう２枚の小型石材で塞いでいる。さらに目地部分には粘土塊が置かれる。その範囲は断面図にその部分的なものが記されているほかはなく、板石直下に留まるものと思われる。また蓋周囲に棺部との接点の目地埋めに使用された粘土が分布する。

この粘土のほとんどは後述する複数回にわたる石棺の使用（合葬）の最終回のものであると思われるがいずれにしても似通った粘土を用いるであろうことから現場での判別は不可能であったと言える。

（４）人骨

石棺内部から人骨が確認されている。ただし保存状態が悪く、多くは繊維状の断片もしくは骨粉となっているほか合葬のため棺内の人骨を整理することから多くの骨が各段階の原位置を留めていない。

人骨に関する所見は第３部で詳細が述べられているためそちらを参照していただきたいが、結果だけ見ると人骨は小児骨を含めて４体分あり、成人の男性が2、女性が1、幼児１という構成であったこと、最終的に埋葬されたのは若い成人男性単体であったことが挙げられる。

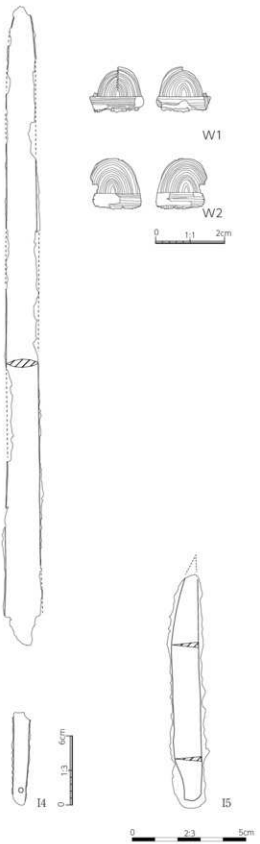
最終埋葬者以外の頭位方向は不明であるが、最終埋葬者の頭位は南西方向である。

（５）石棺内出土遺物

ア　鉄剣（第 105 図　I4）

副葬品として石棺内から鉄剣が出土している。位置は最終埋葬者の左手付近の石棺側壁に沿う形で置かれている。諸刃であり剣と判断した。刀身残存長約 55cm、幅約３cm を測る。柄部より上の刀身の一部を欠損するので実際の長さは不明である。

イ　刀子（第 105 図　I5）



第 105 図　３号墳（SZ03）棺内出土遺物実測図

棺内から刀子が出土している。図面ではその位置が示されていなかったが、記録写真を見ていると最終埋葬者の首元付近に転がっていたと見られ、状況的に最終埋葬者のものではないと考える。残存長約 10cm、幅約 1cm で２号墳石棺内出土のものと類似する。

ウ　櫛（第 105 図　W1,W2）

竪櫛が２点出土している。ともに歯をほとんど全て失っているため全長は不明である。竹ひご状の細長い材を束ねて折りたたみ、折りたたみ部付近を帯状のもので巻き付けて留める湾曲結歯式のもので、表面には黒の漆と思われる塗料が塗られている。

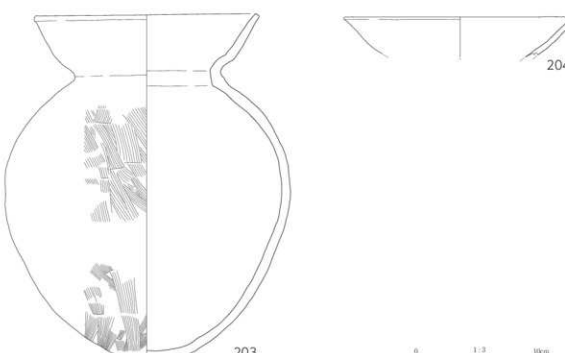
（６）周溝内出土遺物（第 106 図）

周溝からこの時期の遺物として壺が出土している。ともに畿内系土師器の複合口縁壺であり、口縁は疑似口縁から直線的に外反する。頸部はやや短く中期的な様相を示す。胴部は甕形と同様に球胴状を呈し、底部は丸底である。調整は外器面下部を縦方向、中頃より上方はやや斜め方向のハケ目を施す。

（７）塔ノ木３号墳の推定時期

周溝から出土する土器の形態から林田編年の２期（５世紀前半台）をその時期とする。ただし、３号墳は合葬であるためある程度の時期幅を有すると考えられ、築造時期においては３号墳がやや先行するものの利用期間の観点から見れば１・２号墳とほぼ並列的な関係にあると見ている。

以上のことから１～３号墳はほとんど時期を



第 106 図　３号墳（SZ03）周溝内出土遺物実測図

第 12 表　３号墳（SZ03）周溝内出土遺物観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
202	7	SZ03	K17-3		上師器	古墳	壺	口縁部～底部	18.9	27.6	-	長石、角閃石、雲母、褐色土粒	橙 5YR 7/8	橙 5YR6/8	ナデ、ハケ目	ナデ、ケズリ	良好	底部に穿孔
204	7	SZ03	K17-3		上師器	古墳	高杯	杯部	18.4	5.2	-	長石、石英、角閃石、雲母、褐色土粒	橙 5YR 7/8	橙 5YR 7/8	ナデ	ナデ	良好	

第 12 表　３号墳（SZ03）出土遺物観察表

挿図番号	区	グリッド	遺構番号	層位	器種	全長(cm)	刀身長(cm)	茎部長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
I4	7	K13-3	３号墳		鉄剣	不明	(55.5)	(8.1)	3.4	0.4	石棺内
I5	7	K13-3	３号墳		刀子	(9.7)	8.0	1.7	1.3	0.3	石棺内

同じく（5世紀前半台）しており、飯田溝を挟んで向こう側の高台に広がる毬原古墳群・上官塚古墳群の5世紀～6世紀後半というある程度の時期幅をもつ古墳群に比べて特定の時期に集中していることは本地域の古墳時代における墓域の在り方を考える上で注目すべき点であると思われる。

第3節　土壙墓・木棺墓

1　土壙墓

塔ノ木遺跡で確認された土壙墓のうち、形態分類によりB類の一部が古墳時代の遺構として判断している。

（1）土壙墓B類

土壙墓の中で墓壙底面に屍床状の掘込みがあるものをB類とする。

屍床状の窪みは木棺の存在を示唆するものである。また、先述したSZ02,03における墓壙形状は石棺という埋葬施設の有無があるとはいえ似通っており、木質の棺（土壙墓）と石質の棺（石棺墓）の差はあれど墓壙中に窪みを設けて屍床とするというアプローチの仕方は共通するものと考える。

なお、古墳時代に属する土壙墓B類については、遺物の共伴関係を基に類似形状のものを抽出したものである。

ア　ST05（第110図）

一部の土壙墓については東側ではなく古墳が分布する西側に点状に分布している。ST05はその一つで、SZ02の周溝南東付近に位置している。規模は長軸約2m、短軸約1.2mを測り、他のものに比べてやや幅が狭い。土坑の中心付近に約1.6m×0.5mの掘込みがあり、掘込みの南東隅付近から鉄器が出土している。特徴的なのはその掘込みの両端で粘土が確認されており、木質は朽ちて失っているものの石棺と同様に蓋がなされその付近に粘土を目張りしていたのではないかと考える。他の土壙墓では見られない特徴であり、鉄器が副葬されていること、古墳に隣接することなどから他に比べて厚葬の墓である。

副葬品である鉄器は刀子と鉄鏃2点が出土している。刀子は残存長約8cm、刀身幅約1cmのもので両端を欠く。先端側が軽く反っている。

分類	様態	特徴
A	片袖	埋葬主体が片側に寄る墓壙中段に台場のようなステップが主体の逆側に設けられる
B	中央	埋葬主体が中央にある墓壙底部を平坦にした上で主体となる部分を作り出す
C	素掘り	埋葬主体の位置が判然としない

第107図　土壙墓の区分

鉄鏃は頸部に関を持たない鏃身が圭頭形の有茎鏃である。I7は全長約10cm、鏃身長約6cmを測り鏃身中頃に緩いくびれを有するいわゆる鳥舌鏃と呼ばれるものである。I8は全長約10cm、鏃身長約6cmを測り、こちらはくびれを持たず茎へ向かって直線上に細くなる。刀子と同様に先端が軽く反っている。

これら鉄鏃の形態からST05の年代は5世紀前半台と見ており、近接する古墳と時期差がない。古墳被葬者の縁者のものかは定かでないが、いずれにせよ土壙墓B類が古墳時代のものであり、かつ木棺の存在が濃厚であることを示す好例である。

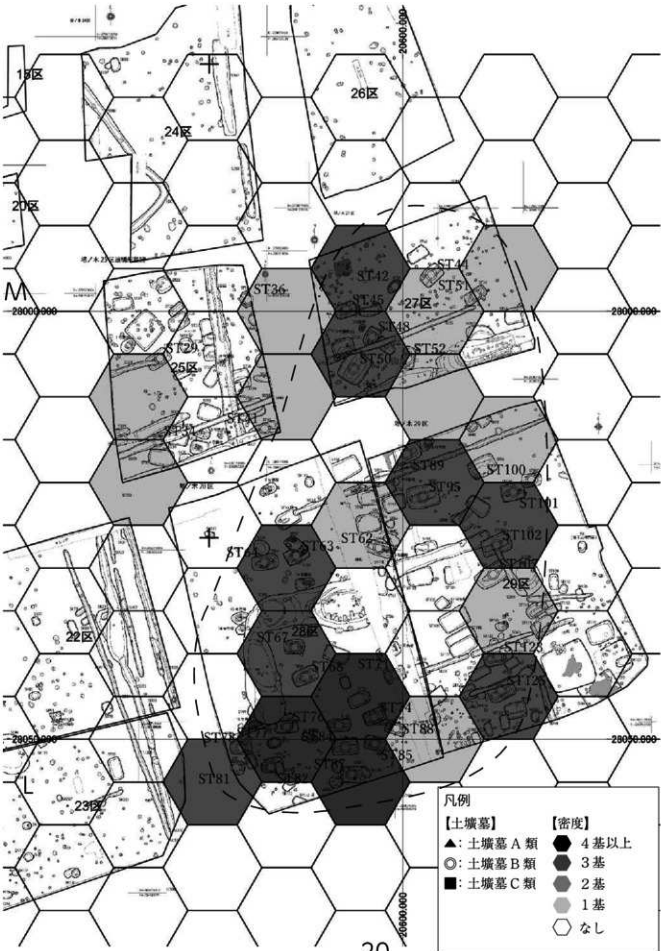
イ　ST95（第111図）

29区で確認された。ST95は長軸約2m、短軸約1.3mの抹角長方形を呈するものである。埋土中から古墳時代の高坏が出土している。脚部上面が皿状に作られ、そこから坏部の胴を形成するため縦ぎ目付近に段を有する。胴部は口縁まで直線的に伸び、口縁部付近でも外反はしない。脚部は皿状の台からくびれて脚裾まで直線的に伸び、裾付近で折れて裾端に至る。形態的な特徴から古墳時代中期、5世紀中頃のものと考える。

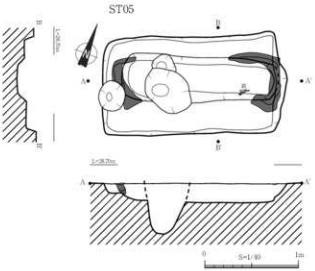
ウ　その他の土壙墓B類

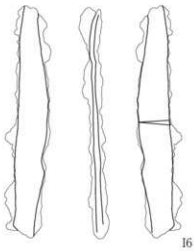
その他この時期の土壙墓B類に該当するものはそのほとんどが27,28,29区に集中してお

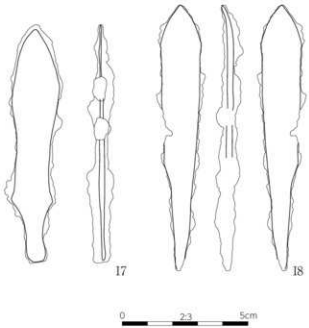
第 108 図　土壙墓（B 類）の分布



第 109 図　土壙墓（B 類）分布密度





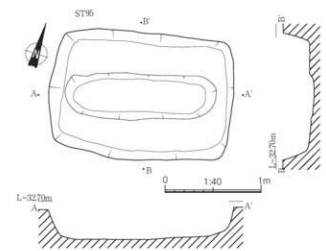


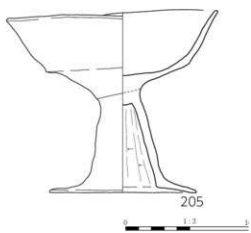
ST05 出土鉄器観察表

種別番号	区	グリッド	遺構番号	層位	器種	全長 (cm)	刀身長 (cm)	茎部長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
I6	1	K17-6	ST05		刀子	9.10	—	—	0.9	0.3	

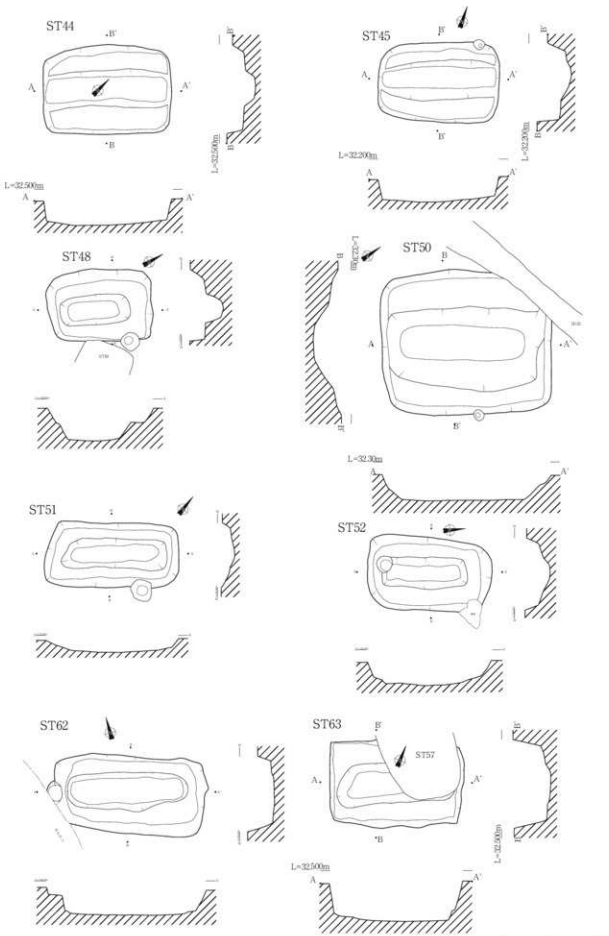
種別番号	区	グリッド	遺構番号	層位	器種	全長 (cm)	刀身部長 (cm)	関部長 (cm)	茎部長 (cm)	厚さ (cm)	備考
I7	1	K17-6	ST05		鉄鏃	9.10	6.70	0.65	1.75	0.32	
I8	1	K17-6	ST05		鉄鏃	10.40	6.30	—	4.10	0.23	

第 110 図　ST05 遺構・遺物実測図

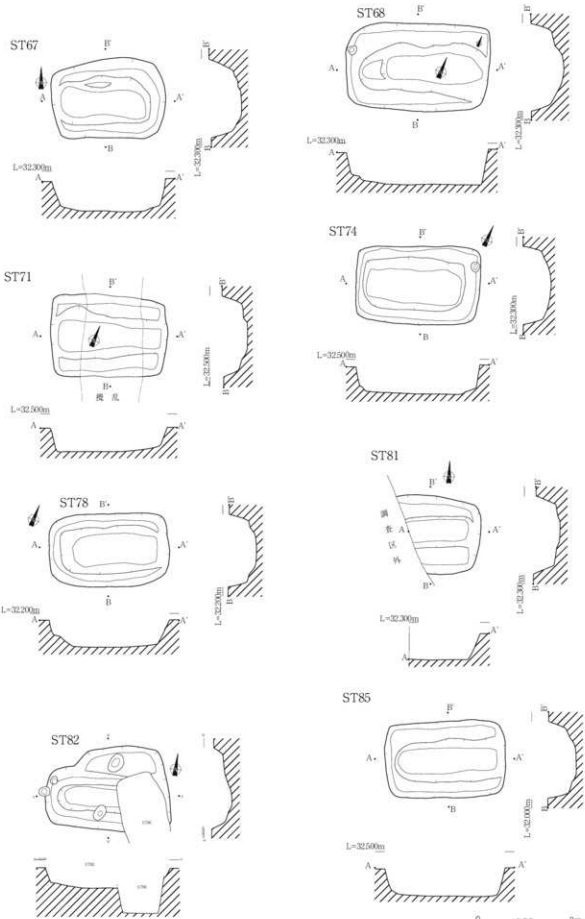




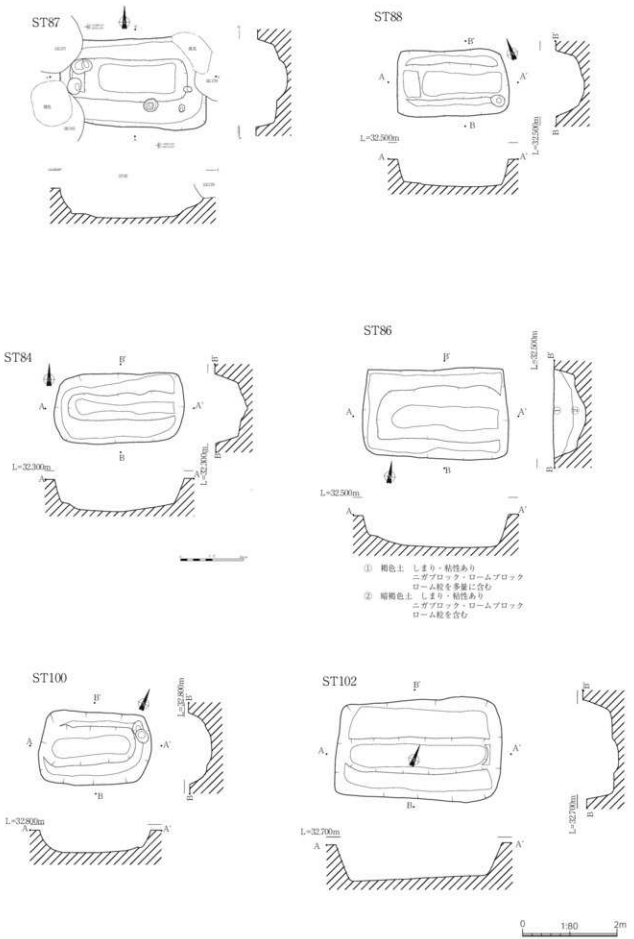
第 111 図　ST95 遺構・遺物実測図



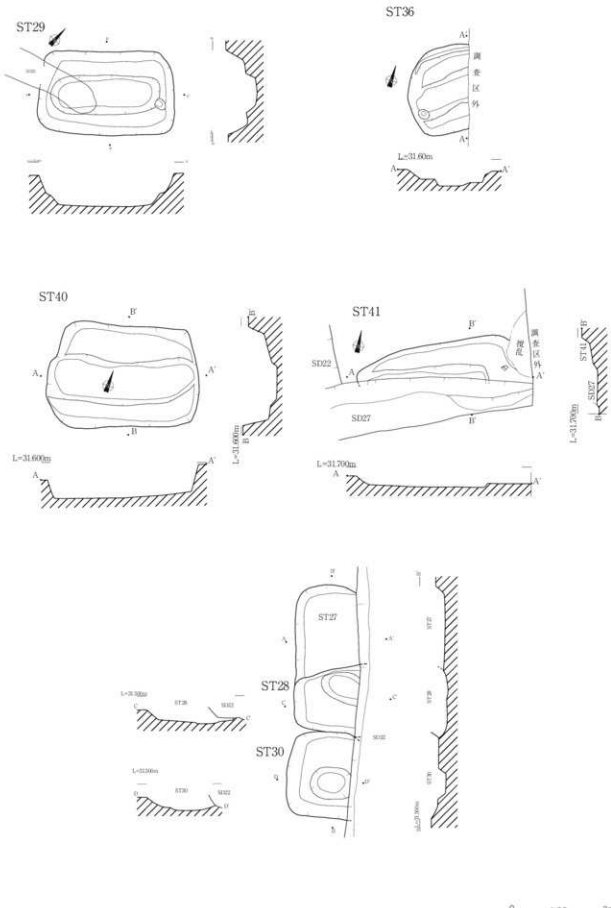
第112図　土壙墓（B類）遺構実測図①



第113図　土壙墓（B類）遺構実測図②



第114図 土壙墓（B類）遺構実測図③

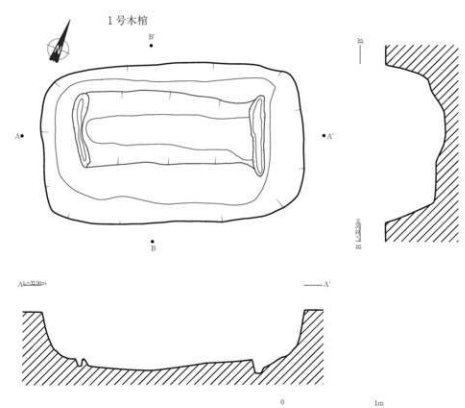


第115図　土壙墓（B類）遺構実測図④

り、特に28区においてかたまりが大きい。複数の区にまたがって分布しており、特に密集する部分を持ちながらもはっきりとその小群をわけることは出来ず、この辺り一帯に分布すると見た方が良さそうである。

2　木棺墓

木棺墓の例として、墓壙の形状は土壙墓B類のものと同じく長方形で長さ2.8ｍ、幅1.7ｍを測り、掘り方の中央部が緩やかに窪む。掘り方は長さ2ｍ、幅0.8ｍで、小口側両端に板状のものを差し込んだような溝状の落ち込みが認められる。これは他の土壙墓にはない点である。副葬品は特にないが、墓壙の形状から古墳時代のものとした。



第116図　木棺墓実測図

第４節　住居祉

１　竪穴住居祉

遺跡の南東部、調査区の最南東端である 32 区で４基確認された。いずれも目立った遺物が出土していないため確実な時期を捉えることが出来ないが、竈を有しない点・方形であることなどからこの時期に比定している。

（１）SI16,17（第 117 図）

抹角方形の竪穴住居である。SI16 は長軸約 4.2 m、短軸 3.6 m と若干長方形寄りの形状を呈する。柱穴は四隅と長軸側の中央部とに掘り込まれているが、北側のものについては浅く、柱穴であるかよくわからない。北東隅に焼土が分布する。遺物は小片のみであり図示できない。

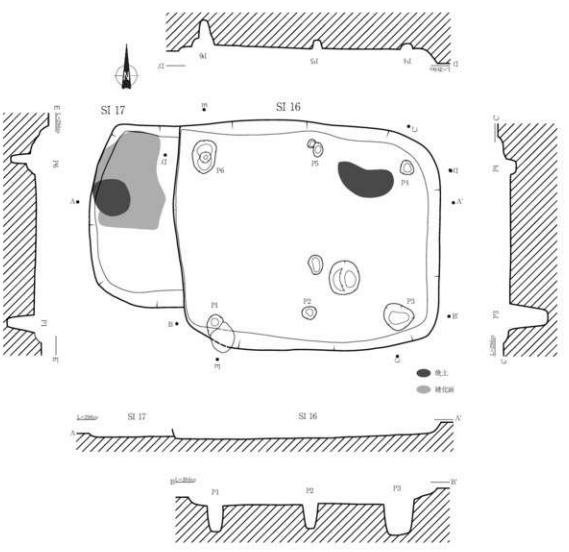
SI17 は SI16 によって切られるため全体が不明であるが短軸約 2.3 m と SI16 に比べて小さいものである。西隅に焼土集中が見られ、その周辺の床が硬化している。

（２）SI18（第 118 図）

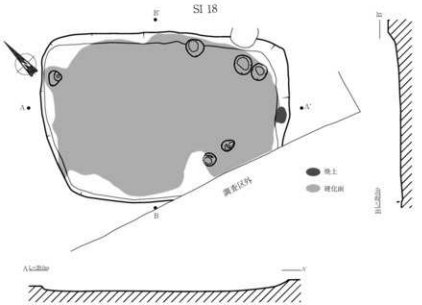
長軸約４m、短軸 2.6 m の長方形を呈する竪穴である。南西隅が不定形でありしっかりとした形ではないが床面全体に硬化面が見られること、東側小口に焼土が確認されたことから住居祉であると判断した。柱穴については住居内部からピットは確認されたものの規則的な配列ではないため柱穴ではないと判断されている。

（３）SI19（第 119 図）

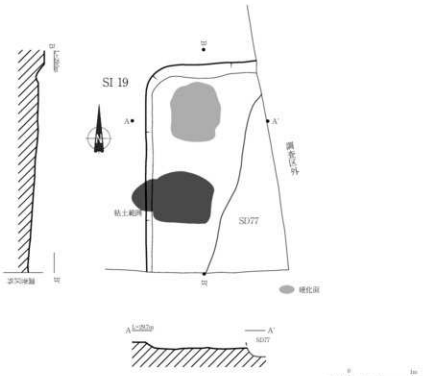
調査区の端にあるため全体を確認できていないことから長軸・短軸方向の大きさを出すことが出来ない上、中央部を SD77 によって切られている。北西隅に硬化面、西隅に焼土が分布する。柱穴は確認できていない。



第 117 図　SI16,17 遺構実測図



第 118 図　SI18 遺構実測図



第 119 図　SI19 遺構実測図

第5章 古代

第1節 概況

塔ノ木遺跡の古代における遺構は、第120図のとおり特に集中する部分を持たず満遍なく存在している。遺構の区分としては住居祉・溝・土壙墓であり、特に溝については区をまたいで相当な区間に及ぶものもある。

この時期に属すると考えられる住居も数件確認されているが、密度としては高くない。

第2節 遺構

遺跡から古代に属する遺構として竪穴住居祉、溝、土坑、土壙墓が確認された。

1 竪穴住居祉

住居祉は1，25，29区で確認された。29区が3基と最も多い。竈を有することや遺構内から出土する遺物によってこの時期に比定している。

（1）SI03（第121，122図）

ア 遺構

29区の南東隅付近にある。3.6ｍ四方の正方形を呈する隅丸プランで西壁付近を撹乱とSI04によって切られている。北壁中央に竈様の焼土分布が見られるが躯体を失っているため詳細は不明である。柱穴は確定的なものを確認できていない。土器片が散乱し、比較的埋土中資料が多い。

イ 遺物

須恵器及び土師器が出土している。須恵器は坏・長頸壺が、土師器は坏・甕・製塩土器が出土している。

（ア）須恵器

坏は坏と高台付坏双方が出土している。坏蓋は退化したかえりを有する。蓋には径7cmと坏のものではないものも含まれており、長頸壺等の細長い筒状のものに伴うものと思われる。長頸壺は胴部のみであり底部及び肩部より上を欠く。

（イ）土師器

坏は高台を持たないものに限られる。甕は破片が多く全形は不明である。は製塩土器であり、底部を欠く。手捏ね様で調整は粗く、薄手で脆い印象を受ける。

SI03についてはこれら遺物の特徴から7世紀後半台と考える。

（2）SI04（第123図）

ア 遺構

SI03の西に隣接し、SI04の一部を切る。北壁をSI02に切られる。北壁中央をSI02によって切られていることから竈がある部分を欠いておりその痕跡とおぼしき土坑を確認した。SI03同様確定的な柱穴は確認できなかった。住居中央から竈跡周辺に硬化面が分布する。

イ 遺物

遺物はSI03に比べると須恵器坏、土師器坏に限られるなど圧倒的に少ない。

（ア）須恵器

高台付の坏であり、底部付近のみで上部を欠く。底部付近はやや広い。

（イ）土師器

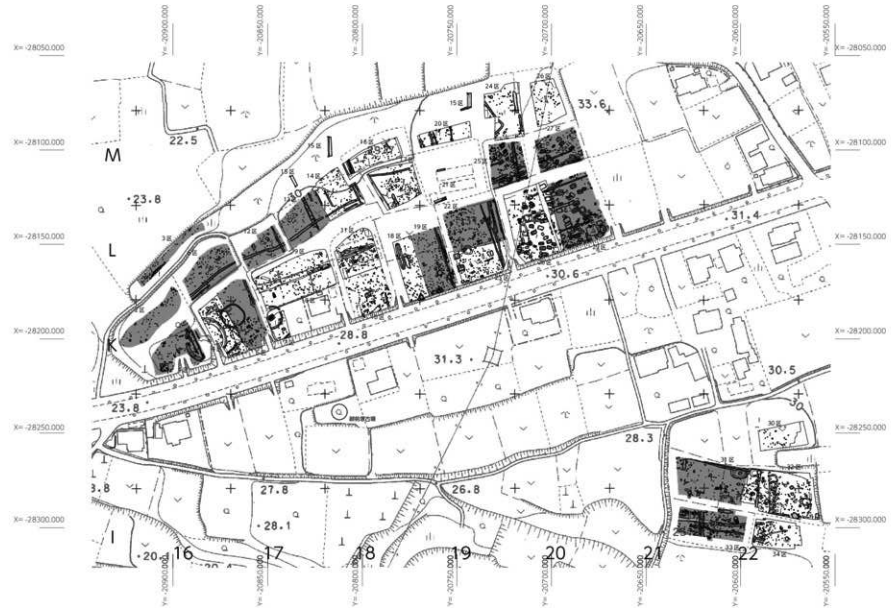
坏身が出土している。底部から胴部中頃にかけては緩やかに広がるが、中頃から上は鉛直方向に屹立する。

（ウ）鉄器

遺構の西端付近から鉄斧が出土している。裾広の台形を呈し基部は折りたたまれて着柄部を形成する。全長約6cm、幅3cmを測る。

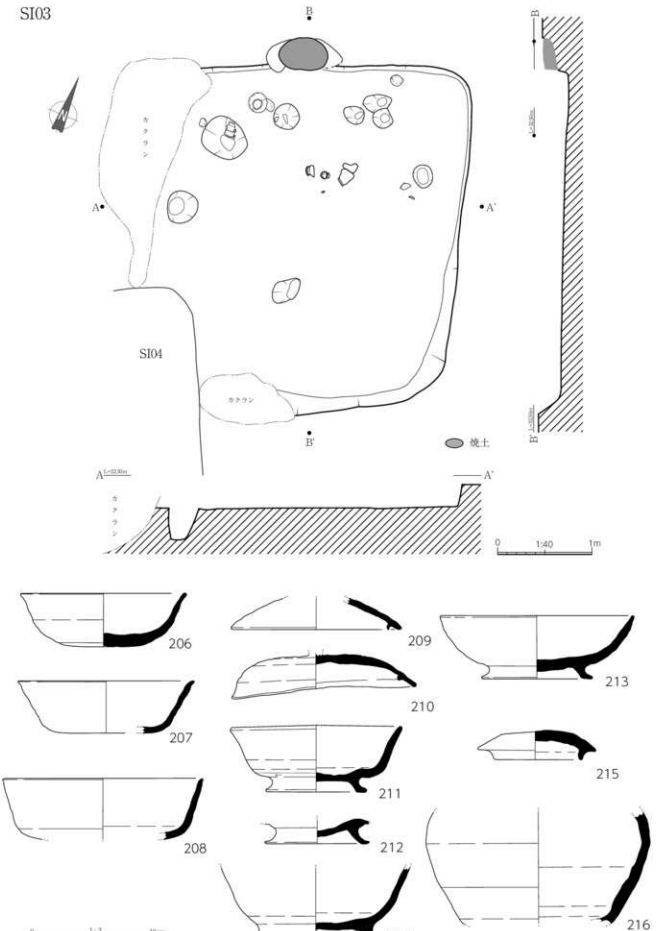
SI04は遺物の特徴からSI03とあまり変わらないかやや後と見るため、7世紀末～8世紀初頭に位置づける。

（3）SI02（第124，125図）



※グリッドは旧測地系（Tokyo Datum）で設定されたものであるため、JGD2011 における数値との間に差が生じている

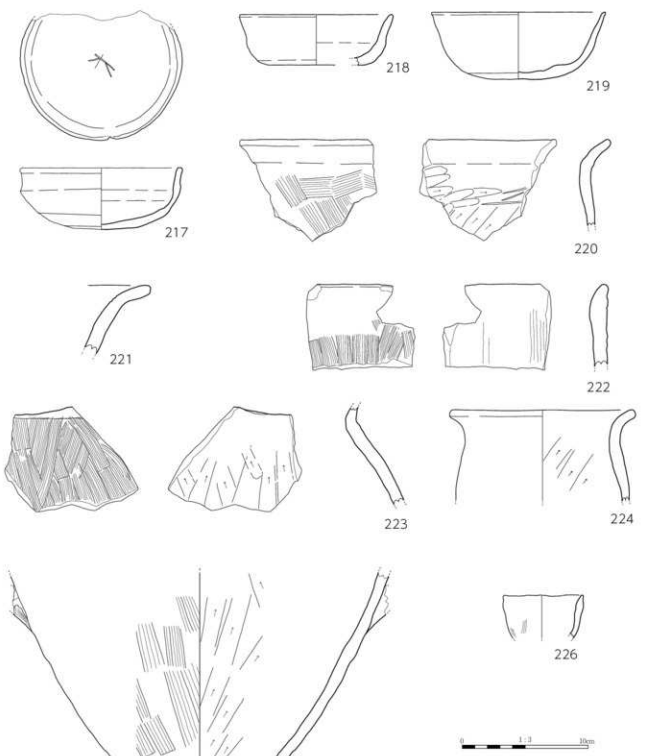
第 120 図　古代の遺構が多く見られる地点



第 121 図　SI03 遺構及び遺構内出土遺物実測図

ア　遺構

29区の南東隅付近にある。約5m四方の正方形に近い隅丸のプランで、床付近以外を削平により失っている。SI04とは切り合い関係にあり、SI02が後発である。竈が北壁中央に配置され、煙道が住居外に飛び出る。柱穴は3基確認され、本来は北西隅付近にもあるかと思われたが確認されていない。住居中央付近床面が硬化している。竈は住居同様検出面より上を失っている。よって基底部付近の記述となるが粘土を両袖に配し、中央に焚き口を設けている。焚き口の中央に窪みがあり、その付近で焼土塊が認められるためこの部分が燃焼部と考える。焚き口付近の土層を見る限り粘土塊を含んでい



第122図　SI03出土遺物実測図

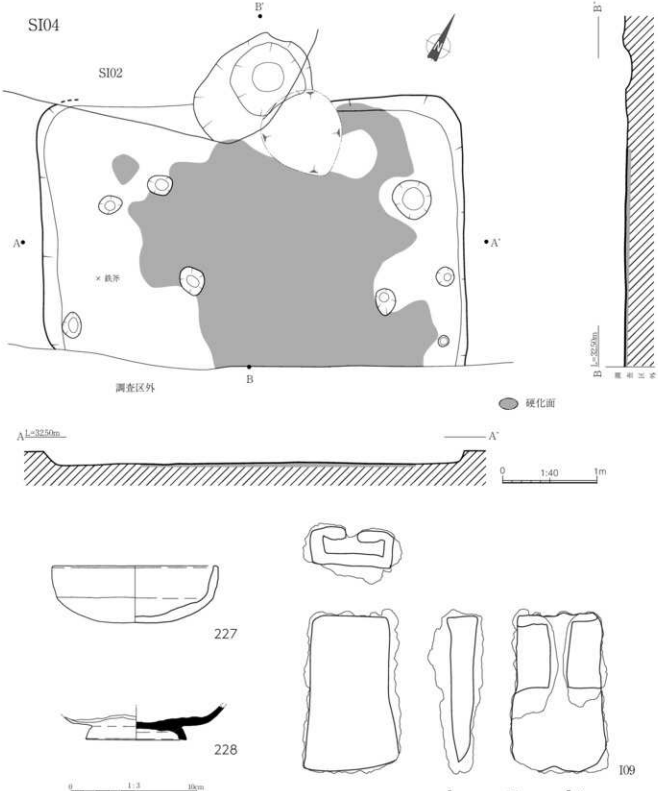
ないため、廃棄時に破壊されていない可能性もある。

イ　遺物

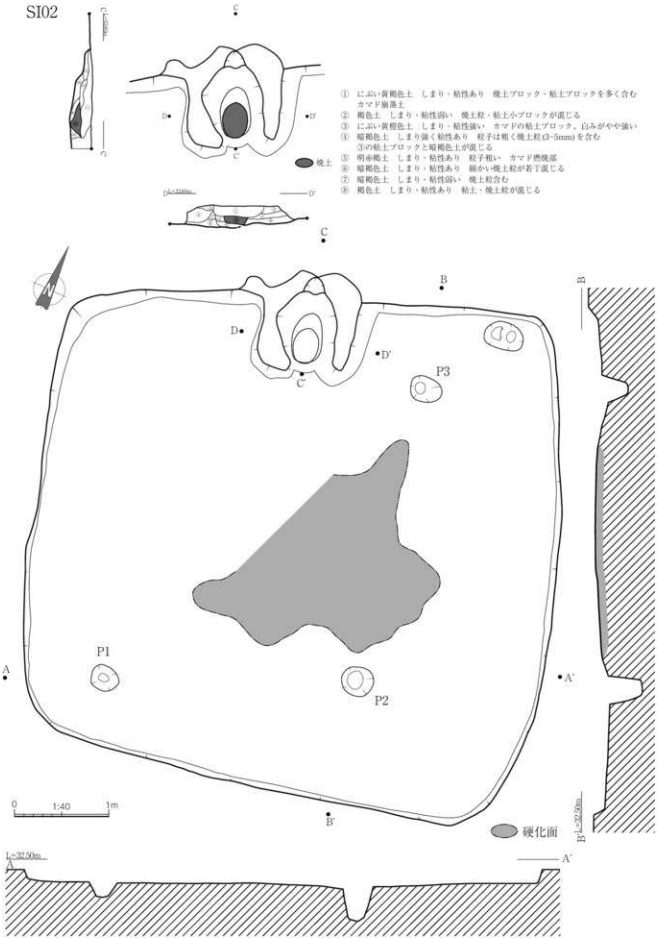
須恵器、土師器が出土している。須恵器は高台付の坏で、底部より胴部への立ち上がりは比較的急である。高台は接地部が幅広く、その上で一端くびれて底部に接着する。

土師器は皿、甑が出土している。皿は口径約17cm、器高2.7cmを測る。

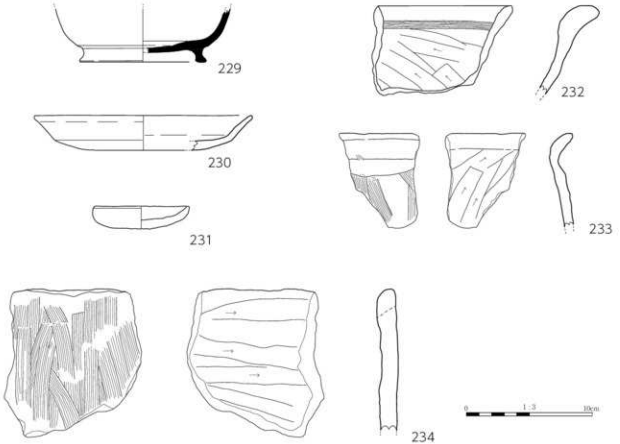
遺物の特徴からSI02の時期は8世紀後半台と思われることから、29区において集中する住居址はSI03→SI04→SI02の順で連続的に



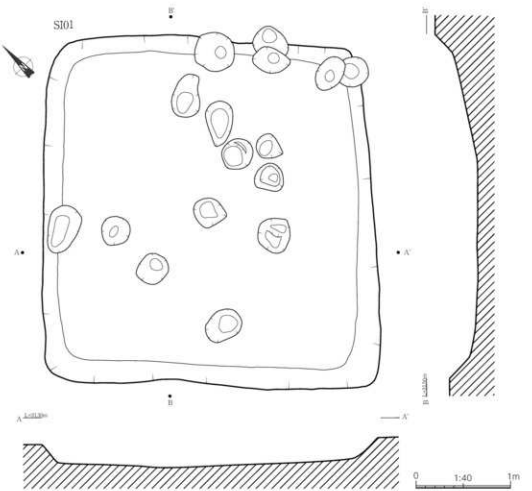
第123図　SI04遺構及び出土遺物実測図



第 124 図　SI02 遺構実測図



第 125 図　SI02 出土遺物実測図



第 126 図　SI01 遺構実測図

置き換わったものと考える。

（5）SI01（第126図）

SI01は25区、SI03等が位置するところの北西に存在する。竈を有しておらず、遺物もめぼしいものが存在しないため不明な点が多いが、遺構の形状や規模から同時期のものとして扱うこととする。約3.6m四方の正方形で、柱穴は確認できていない。硬化面も確認されていない。居住用の竪穴ではなかった可能性もある。

（4）SI15（第127，128図）

ア　遺構

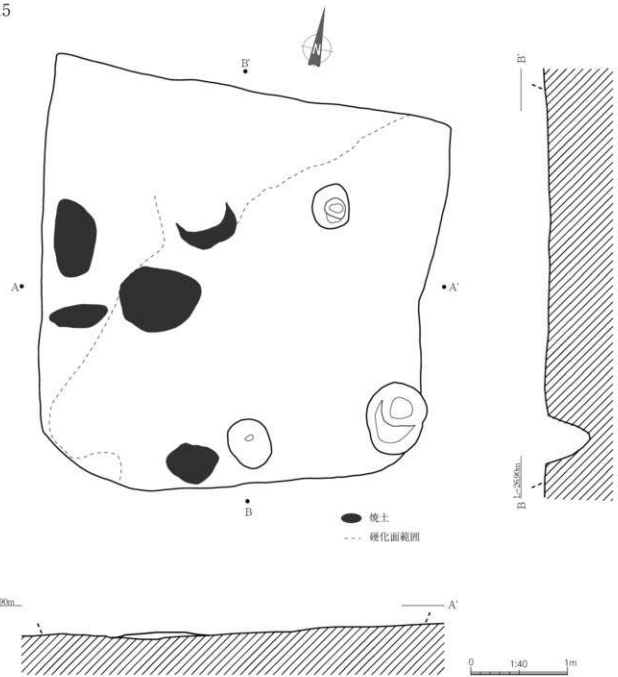
SI15は遺跡の西端、1区に存在する。床面を除いて上部を全て失っている。床には焼土と硬化面の分布が見られる一方、竈は確認されていない。また、確実に柱穴と呼べるものは確認できていない。遺構からは須恵器及び土師器のほか鉄器が出土している。

イ　遺物

出土した須恵器は坏で占められる。坏蓋のかえりは失われており、この特徴から8世紀台と判断する。坏身については高台付となしのものがそれぞれある。

鉄器は鉄斧と刀子が出土している。鉄斧は平面形が刃部と柄部の幅がほぼ同じの分銅形を

SI15



第127図　SI15遺構実測図

呈し着柄部は丸く筒状をなす。刀子は全長約10cm、幅約0.7cmで研ぎ減らしによりずいぶんと痩せている。

2　溝

遺跡内に大小様々な溝が相当数存在する。多くは時期不明であるが、出土遺物により古代に属すると判断したものについて扱うものとする。

SD39（第129図）

6区で確認された。北東-南西方向に延びており、北側の斜面境界に沿って走っているように見える。幅は約100～140cm、深さは約1mである。埋土から高台付須恵器碗が出土している。

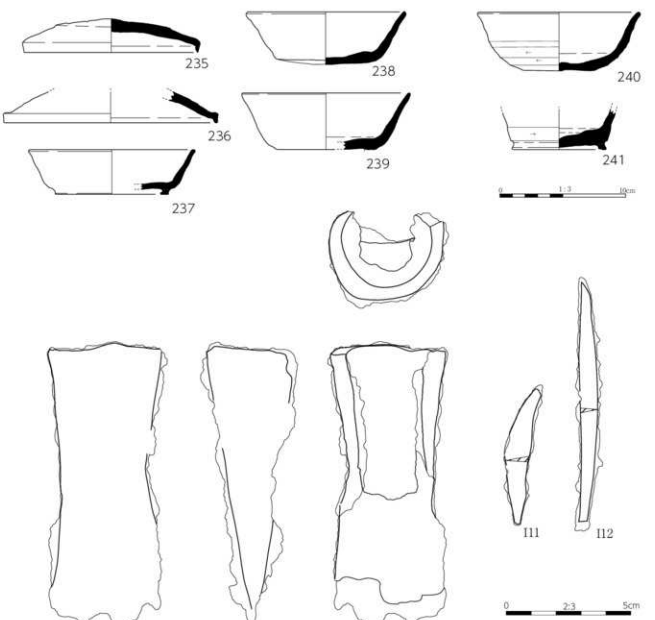
3　土坑

（1）SK204（第131図）

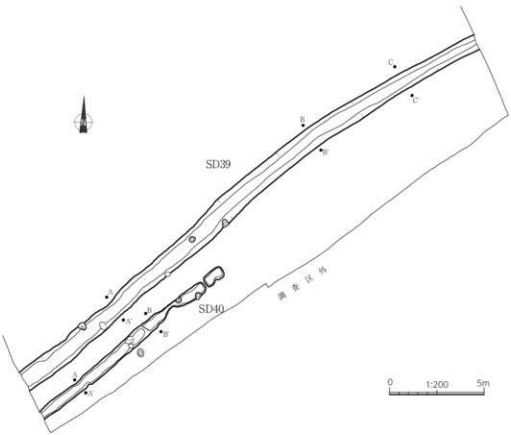
長軸約8m、短軸は溝に切られるため不明確であるが残存プランにより6mを超えそうである。大型不定形の土坑で、中央部がくぼむほか段が複数にわたってついている。ほかにこれといった特徴は無く、遺構の性格は不明である。出土遺物としては玉及び須恵器が出土し、須恵器は口台付碗であるためこの時期のものとした。

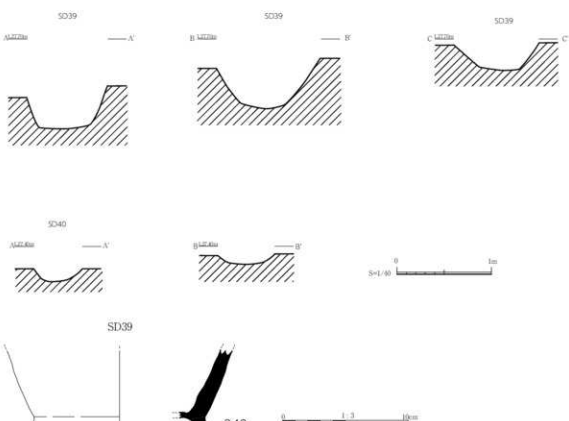
（2）SK218（第132図）

遺構の一部が確認されたに過ぎないため全容



第128図　SI15出土遺物実測図





第129図　SD39,40 遺構実測図

は不明であるが規模にして７ｍ前後の不定形土坑である。断面形状から最深部で60cm 程度のすり鉢状をなし、検出面付近ではあまり立ち上がりを見せずゆるやかに検出面と交わることから上面をいくぶくか消失しているものと推定する。埋土中から土師器坏が出土している。

４　土壙墓

古代の土壙墓として分類したものとしてＣ類（素掘り）のものを挙げている。

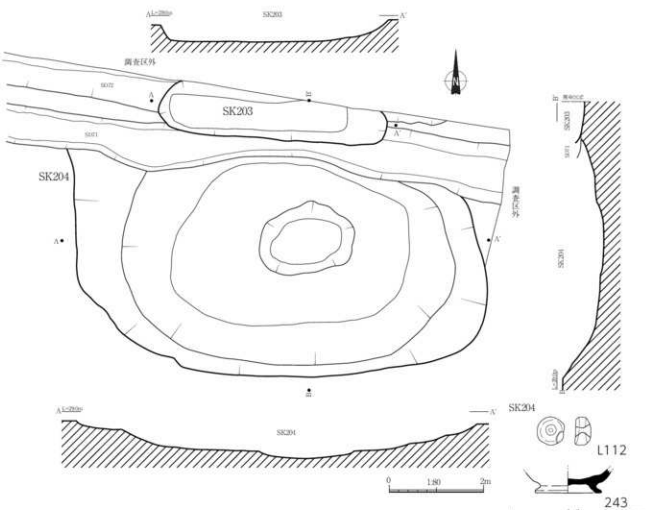
一口に素掘りと言っても平面形状及び遺体を安置した屍床となる底面の断面形状などに差が見られる。そこで土壙墓の平面形状に基づいて第図のように分類を行った（第 130 図）。結果古代における土壙墓は１ｂ・２ｂ類に区分される。

（１）１ｂ類

四隅を持たない長細い形状の土坑で、長軸は概ね２ｍを超え３ｍに及ばない。短軸は 80cm ～１ｍ程度がほとんどで、SK187 のみ 40cm 程

分類	小分類	様態	特徴
1	a	円	平面形状が円・楕円形
	b	楕円	平面形状が円・楕円形
2	a	方形	平面形状が隅角の方形
	b	長方形	平面形状が長方形

第 130 図　土壙墓の区分



第 131 図　SK204 遺構・遺物実測図

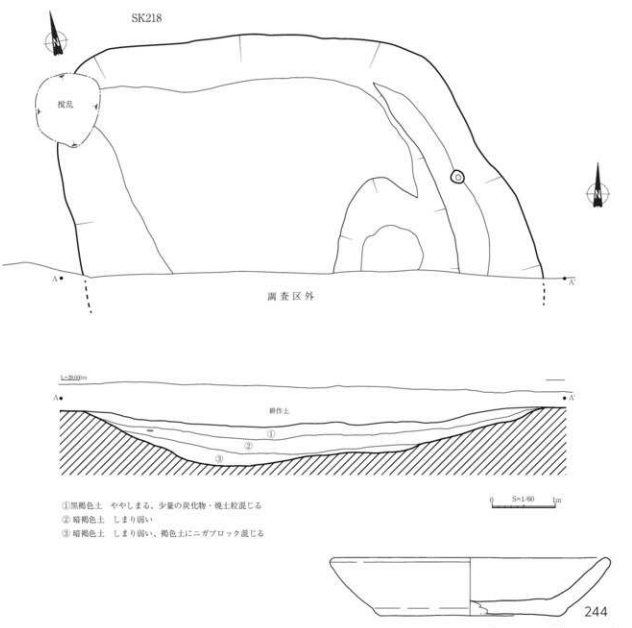
度と細い。長軸における底面からの立ち上がりは鉛直に近いもの（SK186）のほかはやや急角度でありながらも鉛直よりは緩く、底面と壁の境界付近はやや丸みを帯びる。底面のみの長さは180cm ～ 240cmとやや幅がある。

（2）2b類

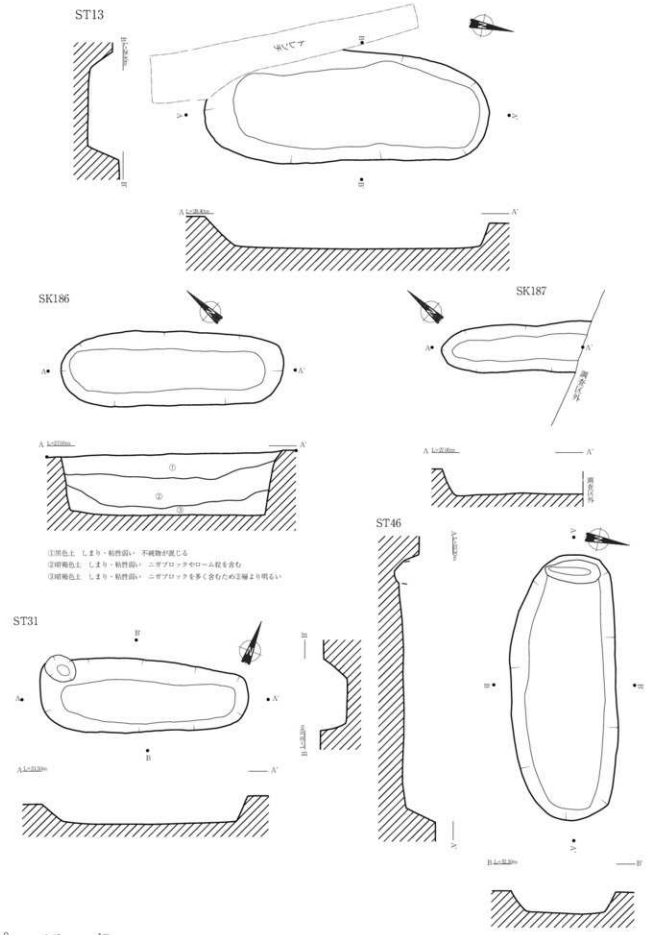
四隅があるが角は立っておらずゆるい方形を呈する。長軸は160cm ～ 200cm、短軸は70 ～ 120cmの幅がある。1b類における状況と同じく、底面からの立ち上がりは鉛直方向のものが少なく、底面と壁の境界付近は丸みを帯びる。埋土中から土師器及び黒色土器が出土している。

○ST15（第134図）

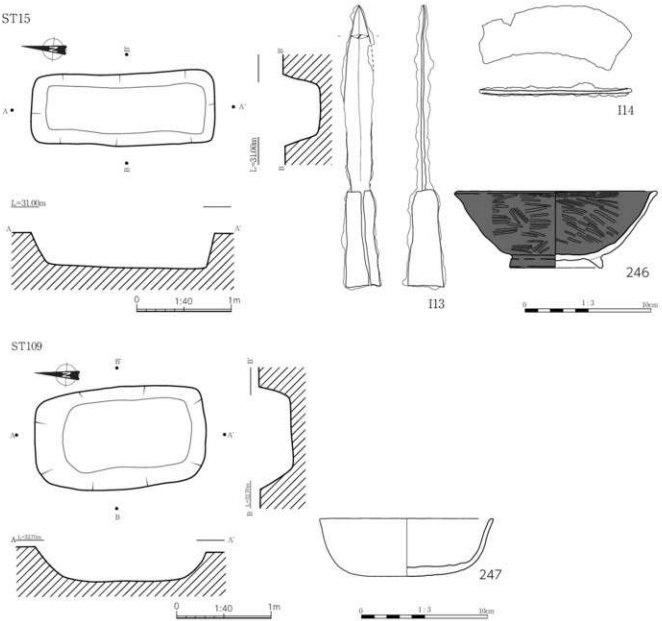
28区で確認された。長軸約2m、短軸約80cmの長方形で、断面形状は逆台形を呈し深さは約80cmを測る。床面付近から鉄鎌と鉄鉾が出土している。また、位置や状況は不明であるが完形の黒色土器（両黒）が出土している。鉄鉾は全長22.5cm、身部長15cm、袋部長7.5cmを測り、身部は両丸式、袋部は円筒袋式である。鉄器だけ見ると古墳時代のものであると判断しそうになるが、土壙墓の形態が古墳時代におけるそれとは異なること、黒色土器を伴っている点から古代のものと判断した。



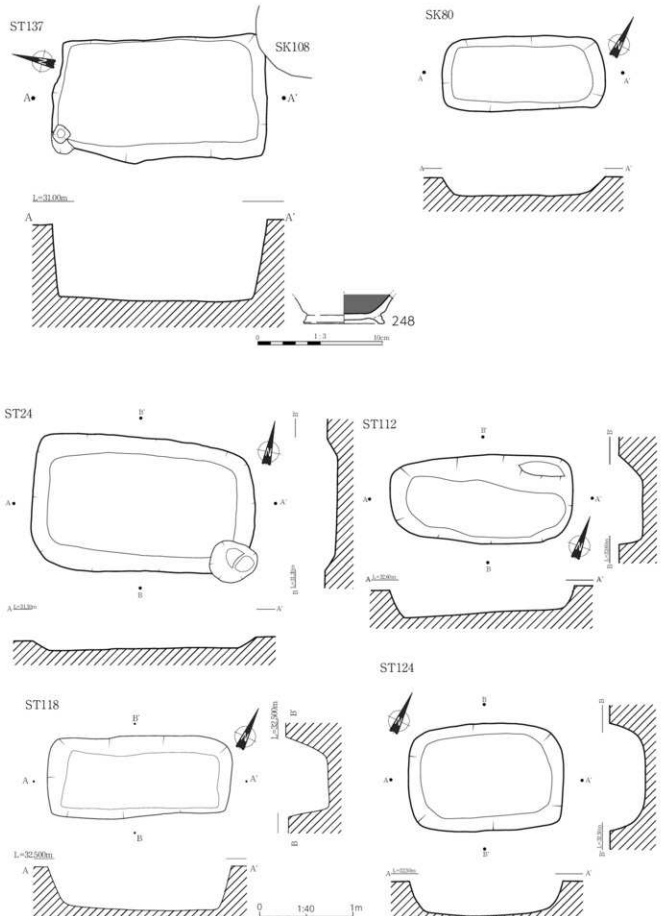
第132図　SK218遺構実測図



第133図　土壙墓（1b類）実測図



第 134 図　土壙墓（2ｂ類）実測図①



第135図　土壙墓（2b類）実測図②

第 13 表　遺構出土器（古代）観察表

掲図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調（外）	色調（内）	調整（外）	調整（内）	成形	備考
206	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	杯-身	口縁～底部	(13.2)	4.3	(7.2)	石英、角閃石	灰白 Hue 5Y7/1	灰白 Hue 5Y7/2	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	良好	
207	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	杯-身	口縁～底部	(14.0)	4.1	(8.2)	長石、石英、角閃石、雲母	灰白 Hue10YR8/1	灰白 Hue10YR8/1	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	良好	
208	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	杯-身	口縁～底部	(15.9)	(4.9)	(13.3)	長石、角閃石、雲母	灰白 Hue10YR8/1	灰白 Hue10YR8/1	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良好	
209	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	杯-蓋	口縁～天井部	(13.6)	(2.5)	-	角閃石、雲母	灰 Hue10YR5/1	灰 Hue7.5YR5/1	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	良好	
210	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	杯-蓋	口縁～天井部	14.6	(3.3)	-	長石	灰白 Hue10YR7/1	灰 Hue7.5YR7/1	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	
211	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	瓦付杯	口縁～底部	13.6	5.3	8.0	長石	灰黄 Hue2.5Y7/2	灰黄 Hue2.5Y7/2	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	良好	
212	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	瓦付杯	底部	-	(1.9)	8.3	長石、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR6/3	にぶい橙 Hue7.5YR6/3	回転ナデ、ナデ	-	良好	
213	29	SI03	I-20-9		竪穴器	古代	瓦付杯	口縁～底部	(15.4)	5.6	(9.6)	長石	灰 Hue 7/0.5	灰 Hue 7/1.2	回転ナデ	回転ナデ	良	
214	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	瓦付杯	杯部～底部	-	(5.9)	9.6	長石、石英、角閃石、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	灰褐色 Hue10YR 6/2	回転ナデ	回転ナデ	良好	
215	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	蓋	天井	9.4	2.3	-	長石、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	
216	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	蓋	脚部	-	(0.9)	-	不明	灰白 Hue5YR8/1	灰黄 Hue2.5Y6/2	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	良好	底部打欠き
217	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	杯-身	受部	12.9	4.9	-	長石、石英、角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	良好	天井部にヘラ記号
218	29	SI03	I-20-10		竪穴器	古代	杯-身	口縁～天井部	12.2	4.0	-	長石、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	にぶい黄橙 Hue10YR 7/4	回転ナデ	回転ナデ	良好	外面の一部に煤
219	29	SI03	I-20-10		土師器	古代	杯-身	受部	13.8	5.3	8.2	長石、雲母、褐色土粒	橙 Hue5YR 6/4	橙 Hue5YR 7/4	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、ナデ	良好	
220	29	SI03	I-20-10		土師器	古代	蓋	口縁部	-	(0.6)	-	長石、角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、ヘラケズリ	良好	煤
221	29	SI03	I-20-10		土師器	古代	蓋	口縁部	-	(5.4)	-	石英、雲母、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ	良好	
222	29	SI03	I-20-10		土師器	古代	蓋	口縁部	-	(6.8)	-	長石、石英、角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR5/3	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ、ヘラケズリ	良好	
223	29	SI03	I-20-10		土師器	古代	蓋	脚部～底部	-	(7.7)	-	長石、石英、角閃石、褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ、ヘケ目	ナデ、ヘラケズリ	良好	
224	29	SI03	I-20-10		土師器	古代	蓋	口縁～脚部	(14.7)	(7.2)	-	長石、石英、角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR5/3	黄橙 Hue10YR7/6	回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ	良好	煤
225	29	SI03	I-20-10		土師器	古代	蓋	脚部～底部	-	(15.6)	(12.2)	長石、石英、角閃石、褐色土粒	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue7.5YR 7/6	ヘケ目、ナデ	ヘラケズリ	良好	
226	29	SI03	I-20-10		土師器	古代	製塩土器	口縁～脚部	6.0	(3.4)	-	長石、石英、角閃石、褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ、ヘケ目	ナデ	良	
227	29	SI04	I-20-10		竪穴器	古代	杯-身	口縁～天井部	(13.2)	(4.5)	-	長石、角閃石、輝石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	ヘラケズリ、ナデ	ナデ、工具痕	良好	
228	29	SI04	I-20-10		竪穴器	古代	瓦付杯	杯部～底部	-	(2.6)	8.0	長石、褐色土粒	灰黄 Hue2.5Y7/2	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	回転ナデ	回転ナデ	良好	
229	29	SI02	I-20-9		竪穴器	古代	瓦付杯	杯部～底部	-	(4.2)	(10.0)	長石	灰白 Hue 7/1.2	灰白 Hue 7/1.2	回転ナデ	回転ナデ	良	
230	29	SI02	I-20-9		土師器	古代	蓋	口縁～脚部	(17.4)	(3.5)	-	長石、石英、褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ	ナデ	良好	
231	29	SI02	I-20-9		土師器	古代	小皿	口縁～底部	-	1.8	(3.8)	長石、石英、輝石、褐色土粒	橙 Hue 7.5YR7/4	橙 Hue 7.5YR 7/6	未調整	ナデ	良	
232	29	SI02	I-20-9		土師器	古代	蓋	口縁～脚部	(25.6)	(7.6)	-	長石、石英、角閃石	にぶい橙 Hue7.5YR5/4	にぶい橙 Hue10YR 6/4	ナデ	回転ナデ、ヘケ目、ヘラケズリ	良	
233	29	SI02	I-20-9		土師器	古代	蓋	口縁～脚部	(15.6)	(7.4)	-	長石、石英、角閃石、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/3	橙 Hue7.5YR 7/6	ナデ、ヘケ目	回転ナデ、ヘラケズリ	良	
234	29	SI02	I-20-9		土師器	古代	蓋	口縁～脚部	(25.6)	(11.2)	-	長石、石英、角閃石、輝石	明黄褐 Hue10YR6/6	灰黄褐 Hue10YR5/2	ヘケ目	ナデ、ヘラケズリ	良	
235	1	SI15	K16-17		竪穴器	古代	坏-蓋	口縁部～天井部	14.0	2.6	-	長石	灰 Hue10YR5/1	灰 Hue5/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	天井部に自然釉
236	1	SI15	K16-17		竪穴器	古代	坏-蓋	口縁～天井部	17.0	(3.5)	-	雲母	灰 Hue5/0/	灰 Hue5/0/	回転ナデ	回転ナデ	良好	
237	1	SI15	K16-17		竪穴器	古代	瓦付杯	口縁～底部	(13.2)	3.5	(9.0)	長石	灰 Hue5/0/	灰 Hue 7.5YR/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	外面に自然釉
238	1	SI15	K16-17		竪穴器	古代	杯-身	受部	12.7	4.2	8.0	長石	灰白 Hue7.5Y7/1	灰 Hue7.5Y7/1	回転ナデ、未切り	回転ナデ	良好	
239	1	SI15	K16-17		竪穴器	古代	杯-身	口縁～底部	(13.4)	4.3	(8.3)	長石	灰白 Hue5Y7/1	灰白 Hue5Y7/1	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	良好	
240	1	SI15	K16-17		竪穴器	古代	杯-身	口縁～底部	(12.9)	4.7	(7.4)	長石、石英、雲母	明黄褐 Hue10YR7/6	にぶい黄 Hue2.5Y6/3	回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナデ	良好	
241	1	SI15	K16-17		竪穴器	古代	瓦付杯	杯部～底部	-	(3.2)	(7.4)	長石、角閃石	灰 Hue7.5Y6/1	灰白 Hue7.5Y7/2	回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナデ	良好	
242	6	SK09	L16-22		竪穴器	古代	瓦付杯	脚部～底部	-	(6.3)	(14.0)	長石	灰 Hue10Y4/1	灰 Hue5/1/	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	
243	31	SK204	J21-22		竪穴器	古代	杯-蓋	口縁～底部	-	(1.6)	5.3	長石、雲母	灰 Hue7.5Y5/1	灰 Hue7.5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	
244	31	SK218	-		土師器	古代	坏	口縁～底部	(22.2)	4.6	(14.4)	石英、角閃石、雲母	橙 Hue7.5YR 7/6	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良好	須恵物付着
245	19	ST15	L19-16		黒色土器	古代	杯-蓋	口縁部	16.0	6.1	7.4	長石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	黒	ヘラミガキ	ヘラミガキ	良好	漆黒
246	29	ST109	L20-4		土師器	古代	杯-身	受部	(13.7)	4.6	10.4	長石、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	回転ナデ	回転ナデ	良好	内面・外底面に煤
247	29	ST137	L19-17		黒色土器	古代	瓦付杯	杯部～底部	-	(2.3)	(6.5)	長石、角閃石、褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue5.5Y3/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	内黒

第３節　包含層出土遺物

調査区の東西を問わず満遍なく遺物が出土している。遺構があまり見られないところにも分布しており、かつての人の存在が遺跡全体に及ぶことを示唆するものである。

１　土師器（第 136 ～ 138 図）

土師器の器種構成は椀、坏、甕、高坏、甕などが見られ炊飯具・供膳具の傾向が強い。特筆すべき事項としては少ないが、時期的な幅としては７世紀～９世紀にかけてであり、特に８～９世紀の遺物が多い傾向にある。

２　須恵器

（１）構成

須恵器の器種構成は椀･坏のほか、台付き壺、鉄鉢形、硯などが含まれる。

は鉄鉢形と呼ばれるものである。緩い尖底の底部に口縁下部の屈曲部に向かって円錐状を呈するように斜行し、屈曲した先は短く口は大きく開く。外器面はやや斜め方向のナデ、内器面は斜め方向のケズリに縦方向及びランダムなミガキが施される。

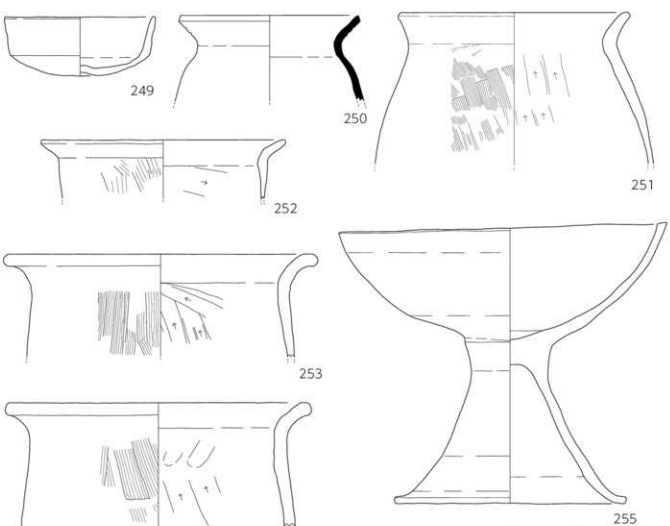
３　黒色土器（第 139 図）

遺跡の西側である４，７区を中心に黒色土器が出土している。ほとんどは高台付の椀であり、燻されて黒色となるのは内器面に限られる。内外ともに整形・調整は精緻で、内器面にはミガキが見られる。　，は高台がほかのものに比べて一段と高く、また器高も高い。

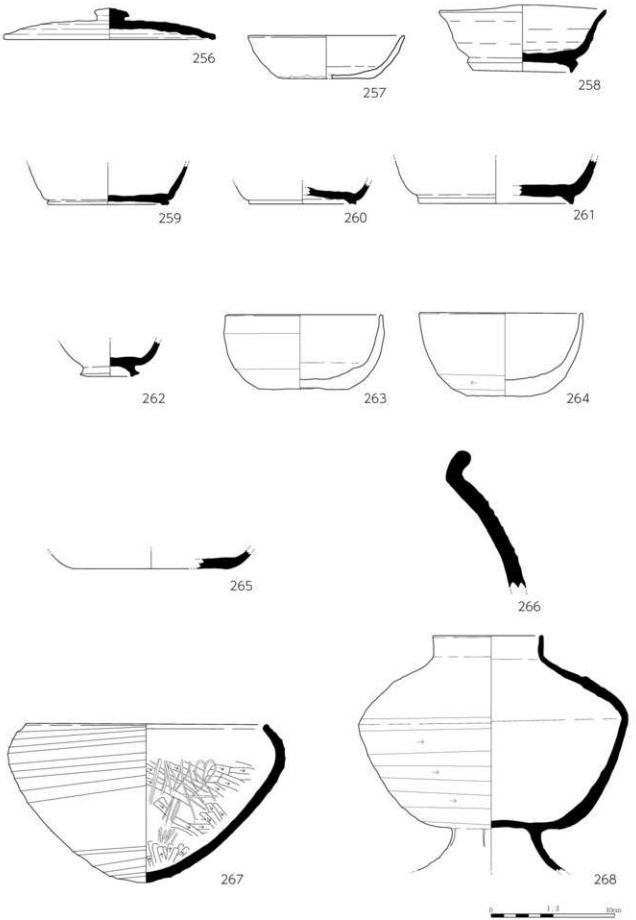
４　刻書土器（第 140 図　301）

土師器皿と思われるものの見込に「西」と彫られている。出土位置も遺跡の西側である４区であるが、このことを指しているのかは不明である。

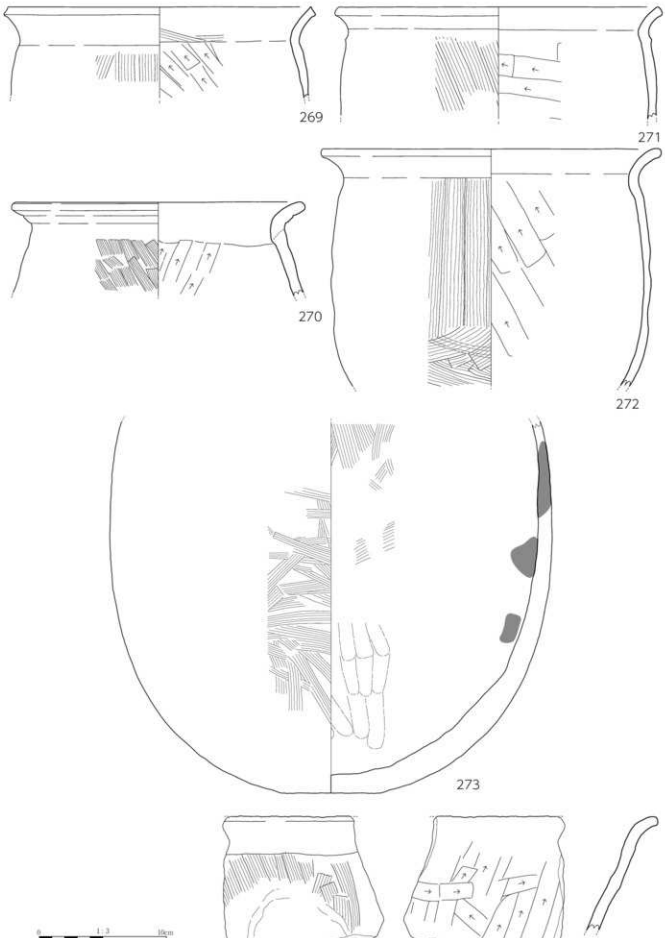
５　墨書土器（第 140 図　302）



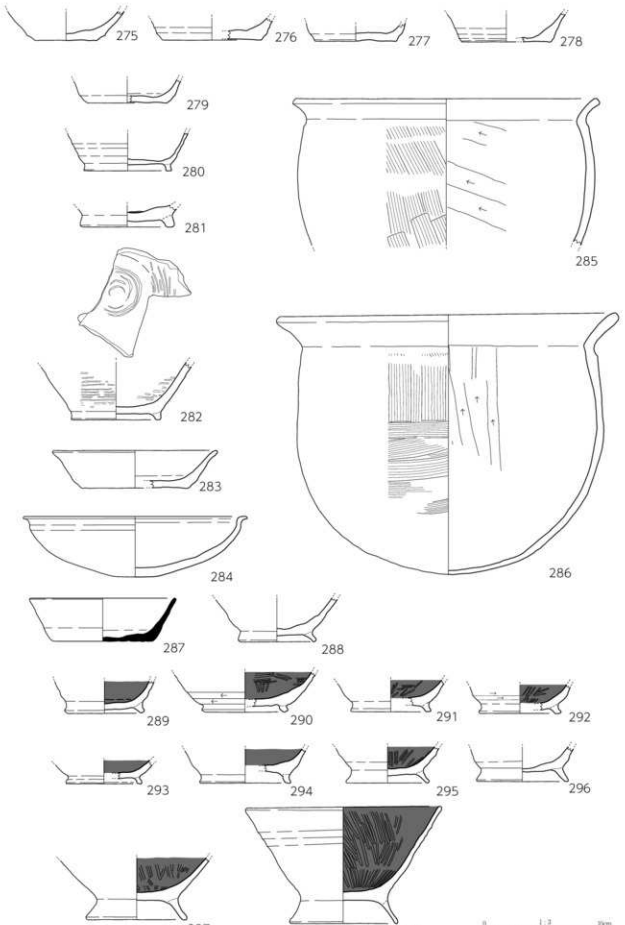
第 136 図　包含層出土遺物（古代）①



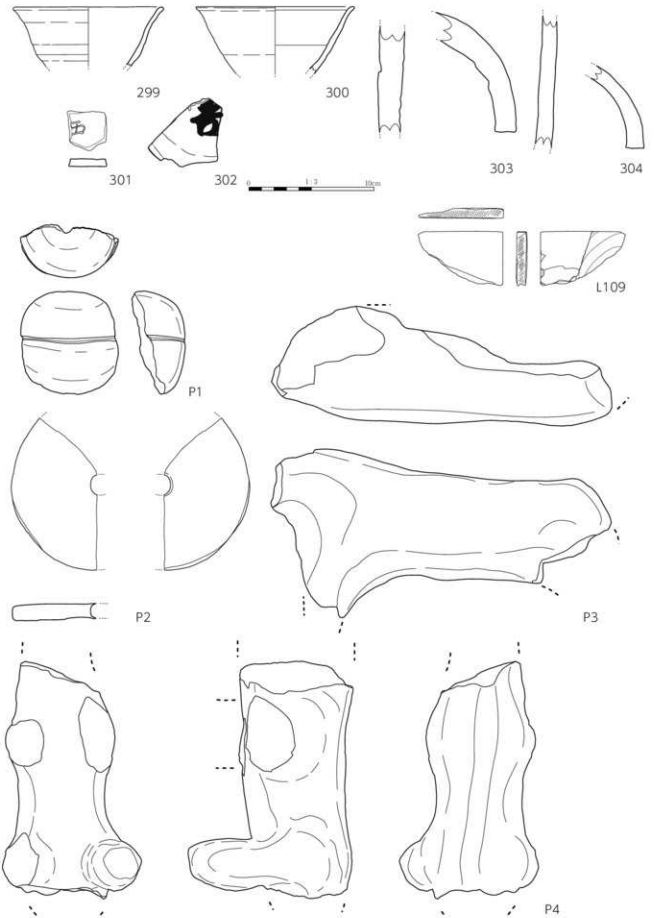
第 137 図　包含層出土遺物（古代）②



第 138 図　包含層出土遺物（古代）③



第 139 図　包含層出土遺物（古代）④



第 140 図　包含層出土遺物（古代）⑤

土師器の見込部に墨書がされたものである。書かれた文字については不明。

7　紡錘車（第140図　P2）

紡錘車の軸と錐の先に付ける錘が出土している。軸は石製、錘は土製であり、ともに大きく欠損する。

8　巡方（第140図　L109）

巡方と思われる石製品である。33区から出土している。表裏両面ともに磨かれており、全体の3/4近くを欠損しているため全容は不明である。ほかの石製品の可能性も考えたが、機能的に意味をなさない上面と右側面に残る擦切痕から考えるに整形に伴うものであり、最終形状が方形・長方形を意図したものであろうと推測する。以上の点からもっともそれらしいものとして巡方とするのが妥当であると判断した。

9　土馬

須恵器製の土馬である。33区から出土している。はほぼ左半身のみで頭部を欠き、は胴はある程度残存するが頭部を欠いている。脚についてはは全て、は1本だけ残してあとは全て欠いている。胴の形状などから土馬と判断した。

10　硯（第141図）

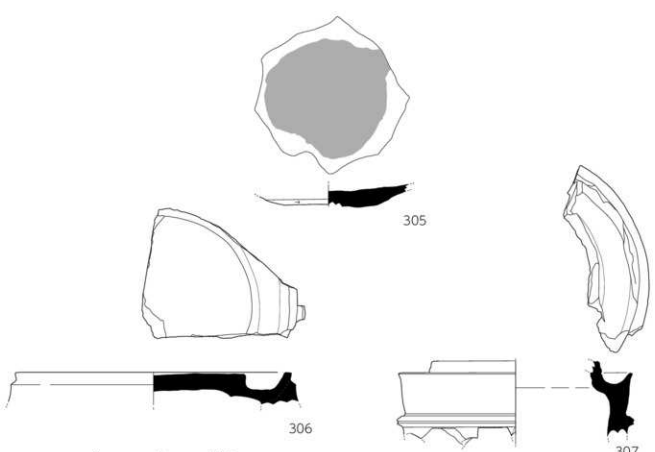
遺跡から須恵器製の硯が出土している。この存在は当時墨による文字を扱う人物の存在を示しており、遺跡の性格を判断する上で重要なものである。出土位置は1区、11区、31区と分散しており、まとまりがない。

（1）転用硯（305）

須恵器坏蓋を転用し、蓋内側の平坦面で墨をすったものとみられ、著しく摩滅している。方向はあまり定まっていないか、擦痕の方向は不明である。

（2）円面硯（306，307）

2点出土している。1区と31区とそれぞれ離れた地点から出土している。中央に円形の陸を持ち、その円周に断面U字の海を持つ。スカシを有する脚部を持っていたものと見られ、一部にその痕跡が残存する。306は全体の3/4、307はほとんどを欠いており、ほかに円面硯の可能性がある破片は見当たらなかった。



第141図　包含層出土遺物実測図（古代 - 硯）

第14表　包含層出土土器（古代）観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
249	29	-	I20-10		土師器	古代	杯-身	口縁～天井部	(12.0)	4.6	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ヘラケズリ,回転ナデ	回転ナデ,ヘラ調整	良好	
250	34	-	-		須恵器	古代	甕	口縁～頸部	(14.4)	(6.8)	-	雲母	暗灰 HueN3/	灰 HueN4/	回転ナデ,波状文	回転ナデ	良好	
251	4	-	-		土師器	古代	甕	口縁～胴部	18.4	(12.0)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR7/6	にぶい黄 Hue2.5Y6/3	ナデ,ハケ目	ナデ,ヘラケズリ	良好	
252	10	-	K18-2		土師器	古代	甕	口縁～頸部	(19.5)	(4.7)	-	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ヘラ削り	良好	
253	24	-	N19-20		土師器	古代	甕	口縁～胴部	(25.2)	(6.2)	-	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	浅黄橙 Hue7.5YR8/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ヘラケズリ	良好	
254	12	-	L17-7		土師器	古代	甕	口縁～胴部	(24.4)	(10.0)	-	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	ナデ,ハケメ	ナデ,指頭圧痕,ヘラケズリ	良好	
255	28	-	-		土師器	古代	高坏	完形	26.2	22.4	(18.4)	長石,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ	ナデ	良好	脚部内面が燻されている
256	4	-	-		須恵器	古代	坏-蓋	口縁～つまみ	(17.2)	2.5	-	長石,石英,角閃石	灰白 Hue5Y7/1	灰白 Hue5Y7/2	回転ナデ,回転ヘラケズリ,ナデ	回転ナデ	良好	
257	4	-	K16-15		土師器	古代	杯-身	口縁～底部	12.6	3.5	7.8	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ,ヘラ切り	回転ナデ	良好	ヘラ切り後の粘土痕,内外面赤彩
258	34	-	I22-9		須恵器	古代	高台付杯	口縁～底部	(13.5)	5.5	8.0	長石	灰白 Hue7.5Y7/1	灰 HueN4/	回転ナデ,ナデ	回転ナデ	良好	自然釉,焼き歪み
259	1	-	-		須恵器	古代	高台付杯	杯部～底部	-	(3.1)	(9.8)	長石,雲母	淡黄 Hue2.5Y8/3	浅黄橙 Hue10YR8/4	回転ナデ	回転ナデ	良好	
260	32	-	J22-23		須恵器	古代	高台付杯	底部	-	(1.7)	(8.6)	長石,角閃石,褐色土粒	灰 Hue10Y6/1	灰 Hue10Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	
261	30	-	J21-20		須恵器	古代	高台付杯	底部	-	(3.6)	(12.4)	角閃石,雲母	灰 Hue10Y6/1	灰白 Hue7.5Y8/1	回転ナデ	回転ナデ,ハケ目	良好	
262	34	-	I22-19		須恵器	古代	高台付杯	杯部～底部	-	(2.8)	4.8	長石	オリーブ黒 Hue10Y3/1	灰 Hue7.5Y4/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	
263	4	-	-		土師器	古代	椀	杯部～底部	(12.8)	6.0	7.2	長石,石英,褐色土粒	橙 Hue5YR6/8	橙 Hue5YR6/8	回転ナデ	回転ナデ	良好	
264	4	-	-		土師器	古代	椀	口縁～底部	(13.3)	6.7		長石,石英,褐色土粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ,回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	
265	24	-	S19-25		須恵器	古代	杯	底部	-	(1.3)	(13.2)	角閃石	黄橙 Hue10YR8/6	黄橙 Hue10YR8/6	回転ナデ,板状圧痕	回転ナデ	良好	
266	19	-	L19-17		須恵器	古代	壺	口縁～胴部	-	(11.1)	-	長石,角閃石,雲母	灰 Hue7.5Y6/1	灰 Hue7.5Y5/1	回転ナデ,格子目タタキ	回転ナデ	良好	
267	9	-	L17-23		須恵器	古代	鉄鉢形	完形	19.8	12.8	-	長石,石英,角閃石	灰 Hue10Y5/1	灰 HueN5/0	ヘラケズリ,ナデ	ナデ,ミガキ,ヘラケズリ	良好	焼き歪み
268	4	-	-		須恵器	古代	台付壺	口縁～胴部	(9.0)	(19.0)	-	長石,角閃石,褐色土粒	オリーブ黄 Hue5Y6/3	オリーブ灰 Hue2.5GY5/1	回転ナデ,ヘラケズリ	回転ナデ	良好	スカシではなくヘラの刻線,底部に比[illegible]痕
269	19	-	L19-16		土師器	古代	甕	口縁～胴部	(24.7)	(7.2)	-	長石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ ハケ目	回転ナデ,ハケ目,ヘラケズリ	良好	
270	31	-	J21-19		土師器	古代	甕	口縁	(23.2)	(7.5)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ,ハケ目	回転ナデ,ヘラケズリ	良好	
271	4	-	K17-11		土師器	古代	甕	口縁～胴部	(26.0)	(8.9)	-	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR7/6	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ヘラケズリ	良好	胴部外面一部煤付着
272	31	-	J21-19		土師器	古代	甕	口縁～胴部	(27.0)	(18.8)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	明褐 Hue7.5YR5/6	橙 Hue7.5YR 6/6	ナデ,ハケ目	ナデ,ヘラケズリ	良好	
273	4	-	-		土師器	古代	甕	胴部～底部	-	(29.2)	-	長石,石英,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	橙 Hue7.5YR7/6	ハケ目,ナデ	ハケ目,ナデ	良好	断面に顔料付着,胴部外面黒斑
274	29	-	I20-10		土師器	古代	甕	口縁～胴部	(28.8)	(10.4)	-	長石,石英,角閃石	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	ナデ,ハケ目	ナデ,ヘラケズリ	良	
275	32	-	I22-7		土師器	古代	杯	底部	-	(2.4)	(5.0)	長石,角閃石,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	浅黄橙 Hue10YR8/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
276	20	-	-		土師器	古代	杯	底部	-	(1.9)	(8.1)	角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	外面に煤付着
277	19	-	L19-12		土師器	古代	坏	杯部～底部	-	(1.5)	(6.8)	角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
278	19	-	-		土師器	古代	杯	杯部～底部	-	(2.4)	(7.4)	長石,雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
279	23	-	-		土師器	古代	杯	杯部～底部	-	(1.9)	(6.6)	角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
280	4	-	K16-10		土師器	古代	高台付椀	杯部～底部	-	(3.1)	7.2	雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	浅黄橙 Hue10YR8/3	回転ナデ,板状圧痕	回転ナデ	良好	外面に赤彩
281	19	-	L19-17		土師器	古代	高台付杯	底部	-	(1.8)	7.8	石英,角閃石,雲母	にぶい橙 Hue7.5YR 7/3	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	回転ナデ	ナデ	良好	見込に赤彩痕跡
282	32	-	-		土師器	古代	高台付椀	杯部～底部	-	(4.8)	7.4	長石,褐色土粒	橙 Hue5YR6/6	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	回転ヘラミガキ	回転ヘラミガキ	良好	
283	23	-	-		土師器	古代	杯-身	口縁～底部	(13.6)	3.1	(8.8)	角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	外面に煤付着
284	29	-	-		土師器	古代	鉢	口縁～底部	(18.5)	5.0	-	長石	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue5YR6/8	回転ナデ,ヘラケズリ	回転ナデ	良好	
285	4	-	K17-11		土師器	古代	甕	口縁～胴部	(25.7)	(12.3)	-	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	ナデ,ハケ目	ナデ,ヘラケズリ	良好	胴部外面一部煤付着
286	2	-	K15-15		土師器	古代	甕	口縁～底部	28.5	21.9	-	石英,角閃石,雲母,褐色土粒	灰白 Hue10YR8/2	浅黄橙 Hue10YR8/3	ナデ,ハケ目	ナデ,ヘラケズリ	良好	外面煤付着
287	34	-	I22-8		須恵器	古代	杯-身	口縁～底部	(12.1)	3.6	(8.4)	雲母	灰白 Hue5Y7/2	灰白 Hue5Y7/2	回転ナデ,ヘラ切り	回転ナデ	良好	火襷,内面に煤
288	4	-	K16-15		土師器	古代	高台付椀	杯部～底部	-	(3.6)	6.5	角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	回転ナデ,ナデ	回転ナデ	良好	内外面赤彩,外面～高台内煤付着
289	19	-	-		黒色土器	古代	高台付椀	杯部～底部	-	(2.7)	6.6	石英,角閃石,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	黒 Hue7.5YR2/1	回転ナデ	ヘラミガキ	良好	内黒
290	4	-	K16-10		黒色土器	古代	高台付杯	杯部～底部	-	(3.3)	(7.2)	角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	黒 Hue10YR2/1	回転ナデ,回転ヘラケズリ,ナデ	ヘラミガキ	良好	内黒
291	19	-	L19-17		黒色土器	古代	高台付椀	杯部～底部	-	(2.6)	(6.7)	長石,雲母	浅黄橙 Hue10YR8/3	オリーブ黒 Hue5Y3/1	回転ナデ	ヘラミガキ	良好	内黒
292	19	-	L19-17		黒色土器	古代	高台付椀	杯部～底部	-	(2.4)	6.8	長石,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	黒 Hue2.5Y2/1	回転ヘラケズリ,回転ナデ	ヘラミガキ	良好	内黒
293	19	-	L19-17		黒色土器	古代	高台付椀	杯部～底部	-	(2.0)	(6.2)	角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	黒 Hue5YR2/1	回転ナデ	ヘラミガキ	良好	内黒
294	19	-	-		黒色土器	古代	高台付杯	杯部～底部	-	(2.8)	(7.5)	石英,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	黒 Hue7.5YR2/1	回転ナデ,板状圧痕	ヘラミガキ	良好	内黒
295	4	-	K16-15		黒色土器	古代	高台付椀	杯部～底部	-	(3.0)	6.8	角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	褐灰 Hue10YR4/1	回転ナデ	ヘラミガキ	良好	内黒
296	7	-	K17-3		土師器	古代	高台付椀	杯部～底部	-	(2.9)	7.6	長石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue7.5YR7/6	回転ナデ	回転ナデ	良好	
297	4	-	K16-15		黒色土器	古代	高台付椀	杯部～底部	-	(5.1)	8.4	長石,角閃石,褐色土粒	浅黄橙Hue10YR8/6	黒 Hue10Y2/1	回転ナデ	ヘラミガキ	良好	内黒
298	7	-	K17-3		黒色土器	古代	高台付椀	完形	16.2	9.7	9.0	角閃石,雲母	浅黄 Hue2.5Y7/3	黒 Hue7.5Y2/1	回転ナデ	回転ナデ,ミガキ	良好	内黒
299	4	-	K16-10		土師器	古代	椀	口縁～杯部	(12.0)	(4.7)	-	長石,角閃石,雲母	淡黄 Hue2.5Y8/4	浅黄橙 Hue10YR8/3	回転ナデ	回転ナデ	良好	
300	33	-	I22-11		土師器	古代	椀	口縁～胴部	(12.6)	(5.3)	-	長石,角閃石,褐色土粒	黄灰 Hue2.5Y6/1	橙 Hue7.5YR 7/6	回転ナデ	回転ナデ	良好	
301	4	-	K16-5		土師器	古代	杯	底部	-	(0.6)	-	長石,石英,褐色土粒	橙 Hue7.5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	ナデ	ナデ	良好	墨書「西」

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
302	1	-	K16-17		縄文器	古代	鉢台付形	杯部～底部	-	(3.2)	(7.4)	長石、角閃石	5C Hue7.5YR/1	5C(7) Hue7.5YR7/2	回転ナデ、回転ヘラケズリ、ヘラ切り	回転ナデ	良好	墨書
305	11	-	L18-17		縄文器	古代	鉢形硬	-	-	1.8	-	長石、石英	5C(7) Hue5YR7/1	5C Hue5YR/1	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	縄文器再利用、墨書
306	1	-	K16-8		縄文器	古代	円面硬	-	(21.8)	(2.4)	-	長石、雲母	5G Hue2.5Y4/1	5C Hue5/6	回転ナデ	回転ナデ	良好	
307	31	-	III-24		縄文器	古代	円面硬	-	-	(6.1)	-	角閃石、雲母	5C Hue10YR/1	5C(7) Hue7.5YR7/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	

第15表　遺構出土鉄器（古代）計測表

挿図番号	区	グリッド	遺構番号	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
I09	29	L20-10	SI01		袋状鉄斧	6.40	3.70	2.20	
I10	1	K16-17	SI15		袋状鉄斧	(11.20)	4.58	3.78	
I13	19	L19-16	ST15		鉄鉾	22.50	2.30	0.20	
I14	19	L19-16	ST15		鉄鎌	(11.60)	4.28	0.30	

挿図番号	区	グリッド	遺構番号	層位	器種	全長(cm)	刀身長(cm)	茎部長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
I11	1	K16-7	SI15		刀子	10.1	6.0	4.1	0.7	0.2	
I12	1	K16-7	SI15		刀子	5.6	4.4	1.2	0.1	0.3	

第6章 中世

第1節 概況

中世に属する遺構は遺跡の西側を除くほぼ全体に分布し、特に中央から東側に集中する。

遺構の種別としては溝、土壙墓、不明遺構などで住居・掘立柱建物は確認されていない。

第2節 遺構

1 溝

（1）SD45,46（第143図）

9区で確認されている。東西方向に走っており、46の後45が掘られる。ともに長さ6m、8mとやや短い。幅も1.8～2mとほぼ同規格のものである。深さは最深部で60cm、平均的に40cm前後とそれほど深くもない。SD45においては礫が集中して出土している。自然礫を中心に構成されており、人為的にもたらされたものであろうが性格は不明である。

遺物は土師器の坏・椀のほか瓦質土器のすり鉢が埋土中から出土している。

（2）SD47（第144図）

11区で確認されている。東西方向に長さ18m、幅4mとやや幅広で深さは最深部で80cmを測る。珍しく土層断面図が作成されていたので内容を見ていくと、21枚の埋土に分けられており色は暗褐色、褐色、黄褐色など周辺の土や地山由来の埋土で構成されている。2ヶ所で断面図が作成されており、分層で共通するものを抽出していくと埋没過程において少なくとも4つの出来事が見られる。詳述すると溝床面付近のa)⑫層の堆積、b)中間付近の④・⑤層の堆積、c)表面付近の②層の堆積、d)①層の堆積による埋没である。

遺構形成後に床面付近において土砂の堆積が見られ、それを一端掘り起こした後に⑫層が堆積する。その後再度浚渫を受けるが⑫層までは完全に除去されず、溝の中間程度までに留まる。その後④・⑤層が堆積したのち3度目の浚渫を受ける。②層が堆積後②層の一部まで浚渫、最終的に①層が堆積し埋没する。

これらの事象がどの時期に行われたものかを示すものとして遺物の検討が重要ではあるが、これだけ埋土を分層しているにもかかわらず全ての遺物は埋土一括として扱われており位置・深度に至るまでの情報を失っている。図示している遺物から中世に位置づけてはいるが、これだけの浚渫・埋没を繰り返していることから相当期間地表面に構造を露出していたことは疑いようがない。断面図が書かれていたためにこのように状況がある程度推測がつくのであるが、その他の遺構については断面図すら書かれていない有様である。

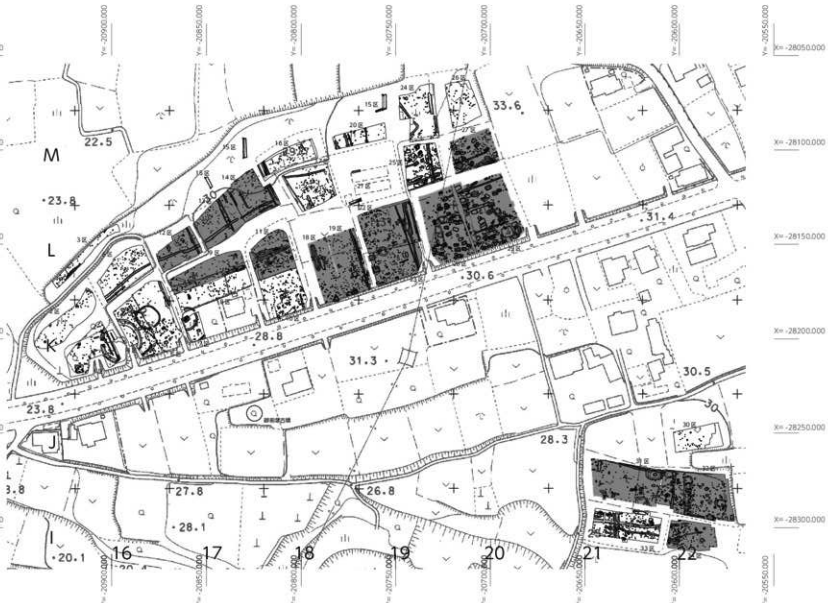
（3）SD41,42,43（第145図）

12区で確認された。東西方向（41，43）、南北方向（42）とが交差重合する。遺構の形成順序から考えると43→41→42の順となる。端部が調査区外に出るため全長については不明である。幅は70cm～1.5mとやや細い。深さも30cm前後とやや浅めである。

SD41は13区、SD43は6区における溝として連続している可能性がある。時期を示すものとしてSD41及び42から中世の磁器及び瓦質土器が出土している。遺物から見るに遺構は切り合いの関係にありながらも大きな時期差は存在しないと見ている。

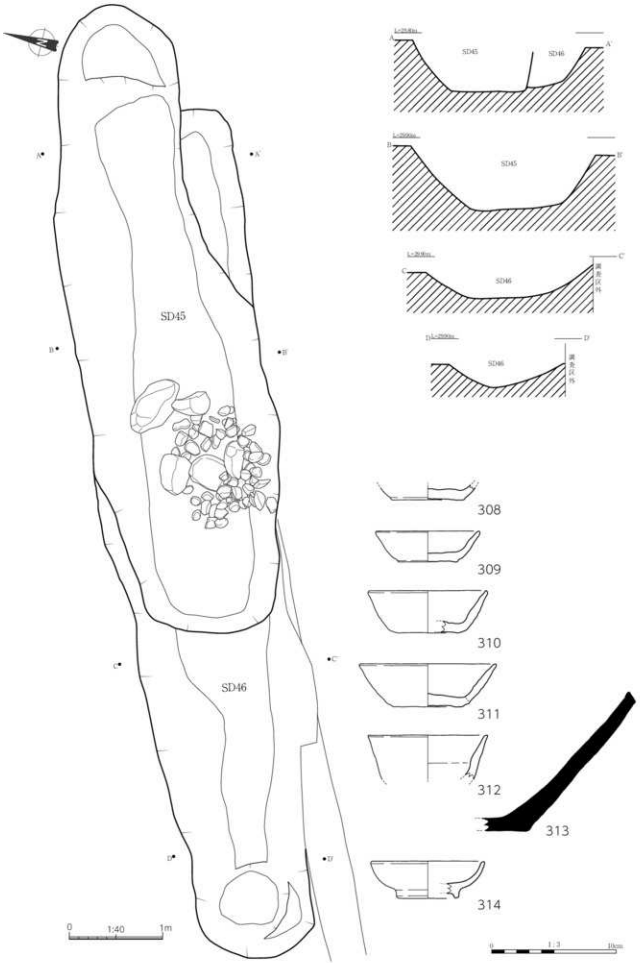
（4）SD14,15,17（第146図）

14区で確認された。北東-南西方向に並走している。間隔は1.5m（SD14-15）、70cm（SD15-17）と狭く、方向は同じであるものの規格性は認められない。SD14から糸切り底の土師器坏が出土している。



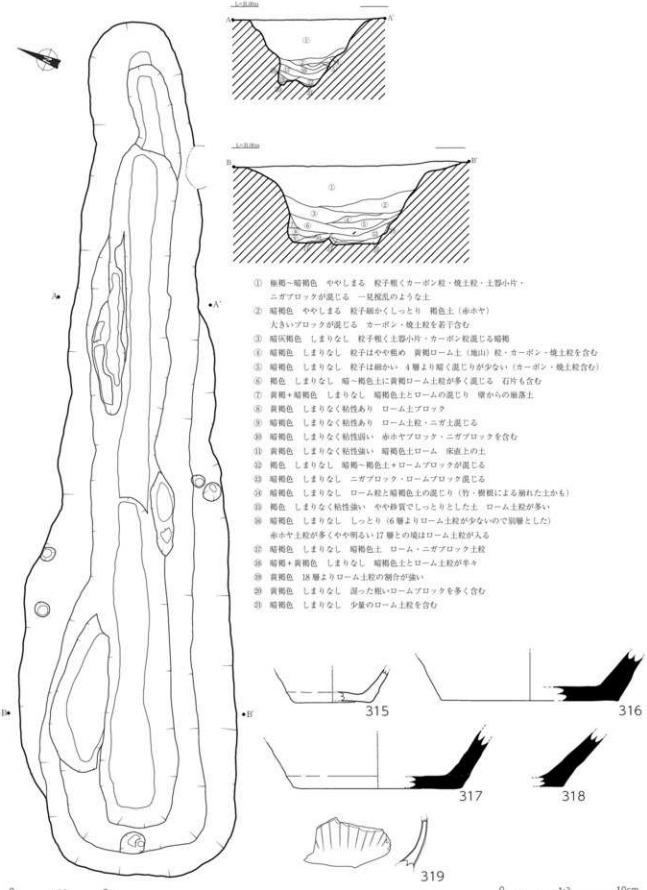
※グリッドは旧測地系（Tokyo Datum）で設定されたものであるため、JGD2011 における数値との間に差が生じている

第 142 図　中世の遺構が多く見られる地点

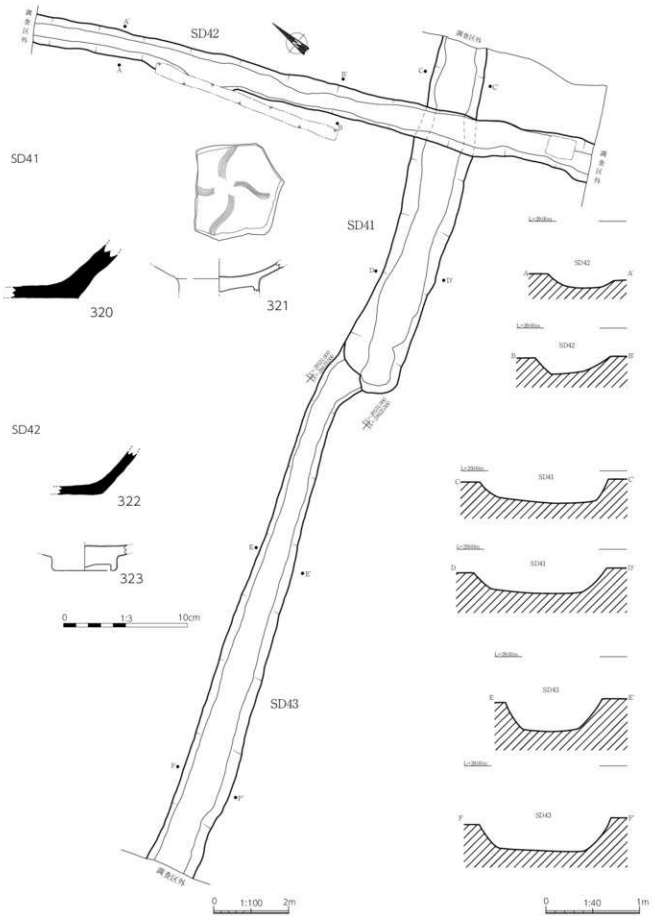


第 143 図　SD45,46 遺構実測図

SD47



第 144 図　SD47 遺構実測図



第 145 図　SD41,42,43 遺構・遺物実測図

（5）SD48．49（第147図）

18区で確認された。SD48は全長14ｍ、幅2.4ｍを測り、SD49は全長8ｍ、幅2.1ｍを測る。２基とも南北方向で互いに近接している。断面形状ではSD48は溝中段から細く深掘りされており、SD49では48で段が付く深さで留まっている。時期を示すものとしてSD48,49それぞれから糸切り底の土師器坏が出土している。口径や底部からの立ち上がり方からほとんど時期差は無いと思われる。

（6）SD53,54,56,57（第148図）

19区で確認されている。SD53は南北方向に長く延び、南側に隣接する道路部分にまで及んでいたことは想像に難くない。SD54,56,57ともに53に並走する形で走っているが長さ10ｍ以下とSD53とは性質を異にしている。また、SD53は幅こそ約１ｍとほかの溝と同じくらいのものであるが深さが最深部で1.2ｍとほかのものと比べて明らかに異なっており、区画溝のようでもある。遺物としてはSD53から土師器坏が出土している。

（6）SD33（第149図）

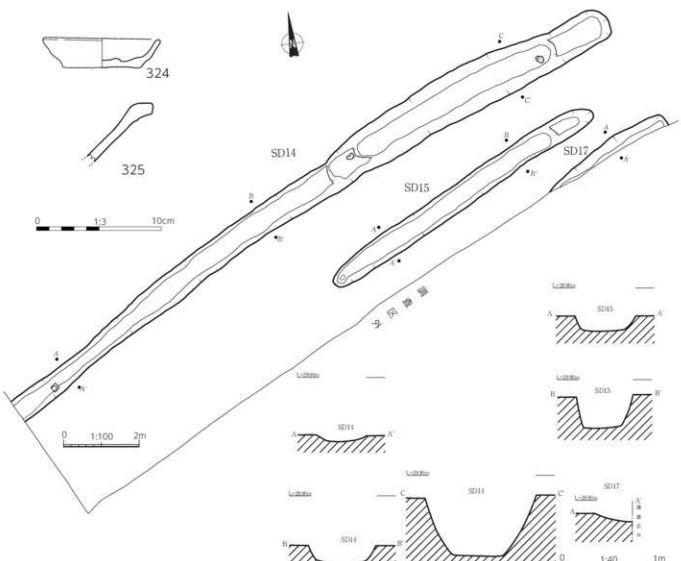
27区で確認された。両端は調査区外にあり、全長は不明である。幅は５ｍ、深さ50～100cmと幅があり、東側で深い傾向にある。溝東側の中位からやや下方で五輪塔が散乱して出土している。元々地上にあったものが遺棄されたものと考えられる。

遺物としては土師器の小皿と坏が出土している。

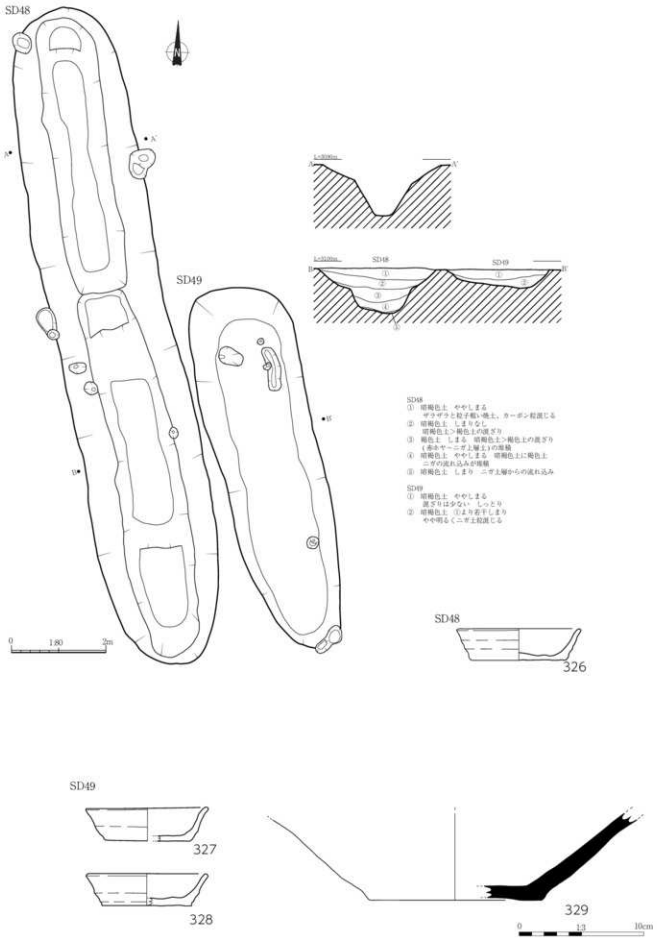
（7）SD58（第150～152図）

ア　遺構

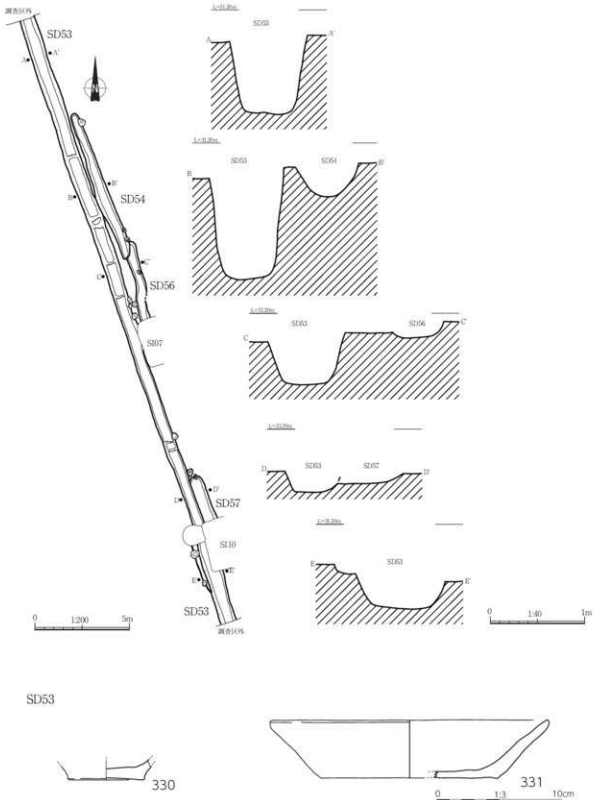
溝とするべきか判断に迷うところではあるがＬ字形に折れた形状を持つ溝である。３ヶ所の



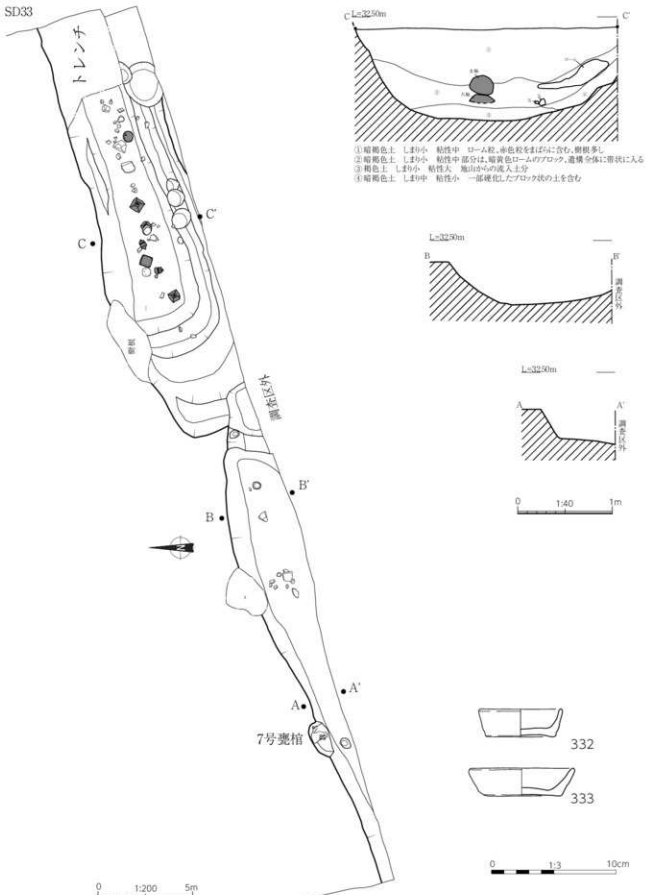
第146図　SD14,154遺構実測図



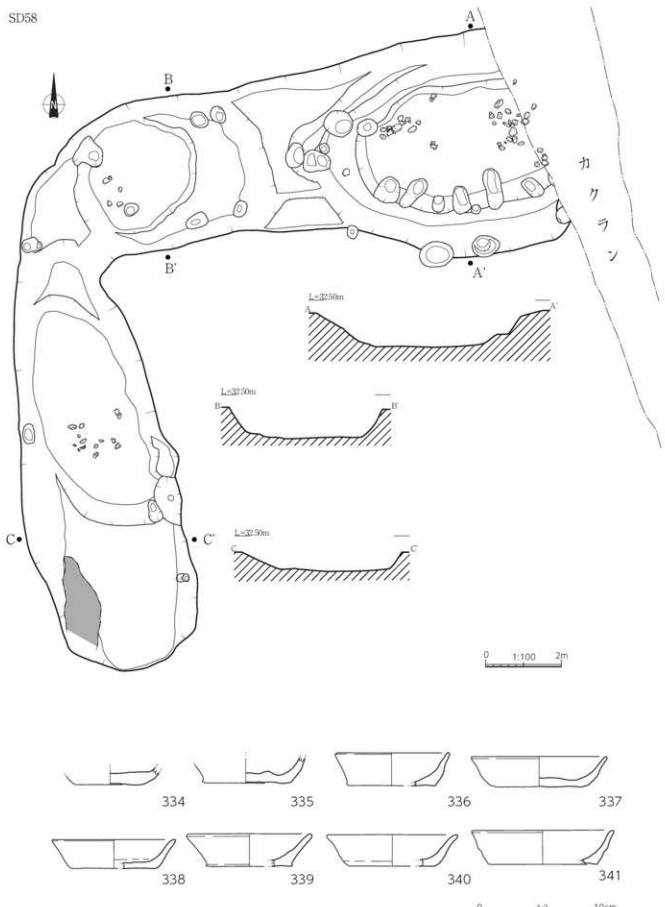
第 147 図　SD48,49 遺構実測図



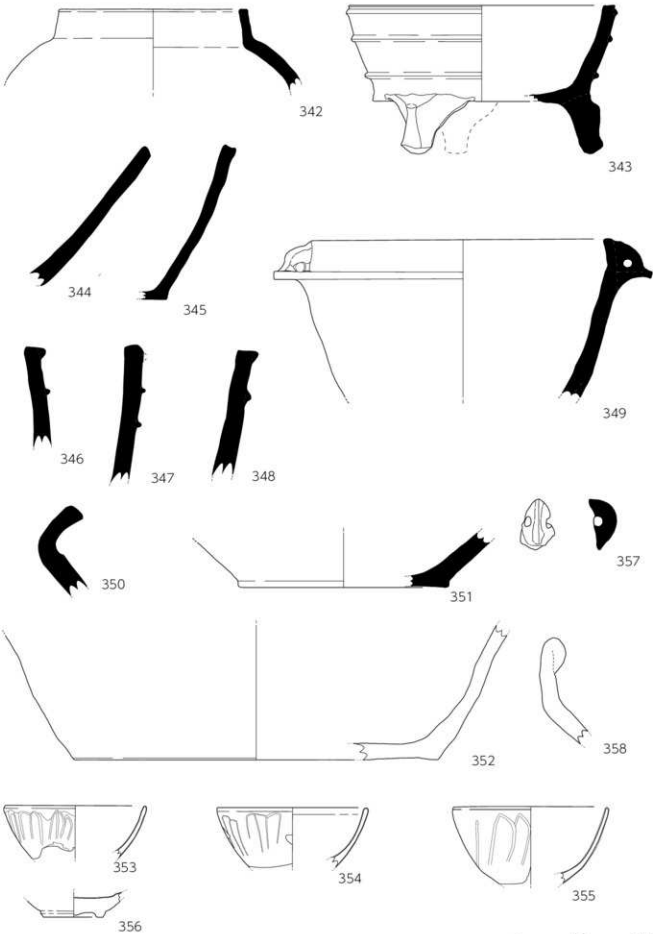
第 148 図　SD53,54,56,57 遺物遺構実測図



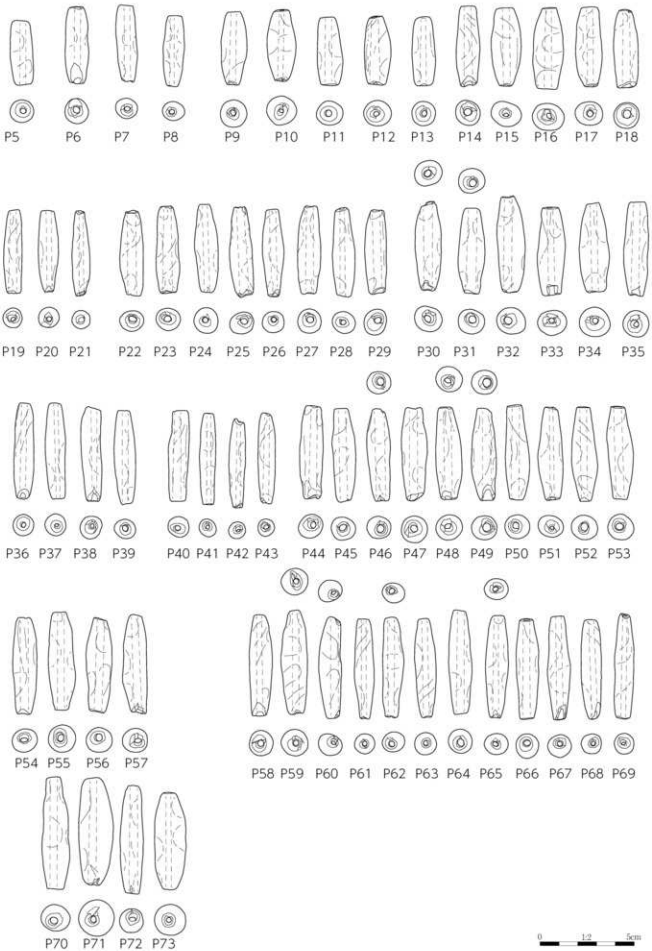
第149図 SD33遺構・遺物実測図



第 150 図　SD58 遺構実測図



第 151 図　SD58 出土遺物実測図①



第 152 図　SD58 出土遺物実測図②

楕円形状の落ち込みを持っており、その窪みに礫などを含む遺物が出土している。溝というよりも後述する土坑にあるような不定形の大型土坑が連結した結果のようにも見える。

イ　遺物

遺物は土師器のほか龍泉窯系の青磁、瓦質土器の火鉢、すり鉢、土錘が出土している。

（8）SD63（第 153 図）

29 区で確認された。東西方向に走り、長さ 8 m、幅 40~60cm、深さ約 20cm を測る。瓦質土器の羽釜の口縁部が出土している。

（9）SD64（第 154 図）

29 区で確認された。南北に延びる溝で、全長は不明、幅は 60 ～ 90cm、深さ 30cm を測る。遺物は瓦質土器の火鉢脚が出土している。

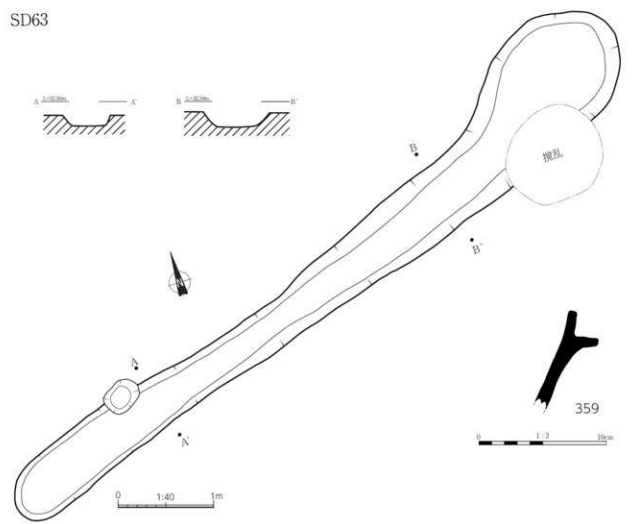
（10）SK201（第 155 図）

31 区で確認された。当初土坑として扱っていたが長さが 5.6 m あることから溝として扱った。幅は 1.6 m、深さは 20cm 未満である。

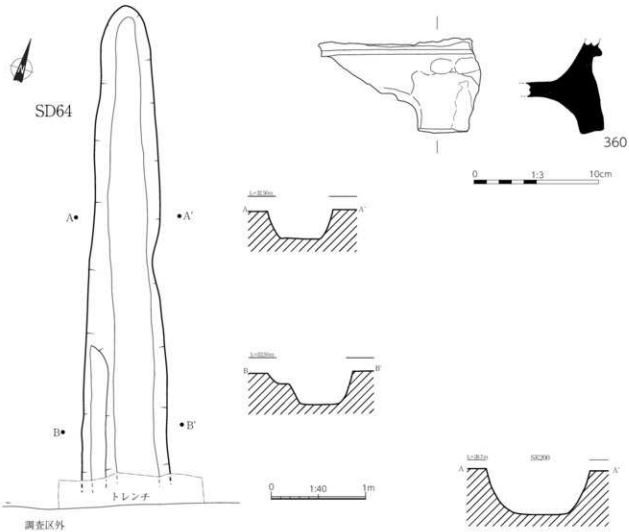
土師器坏のほか、火鉢の底部が出土している。

（10）SD74（第 158 図）

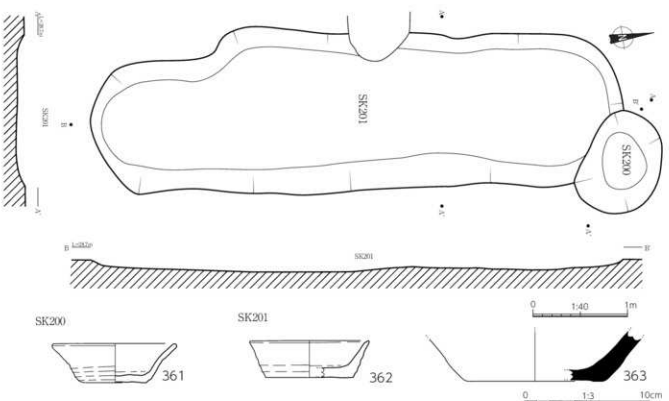
32 区で確認された。南北方向に走り、全長は不明、幅は最大 4 m、深さ 20cm 程度を測る。遺物として注口のようなもの、土師器小皿、瓦質土器のすり鉢が出土している。



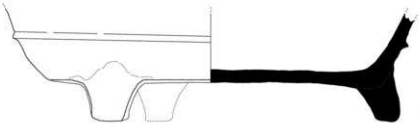
第 153 図　SD63 遺構実測図



第 154 図　SD64 遺構・遺物実測図

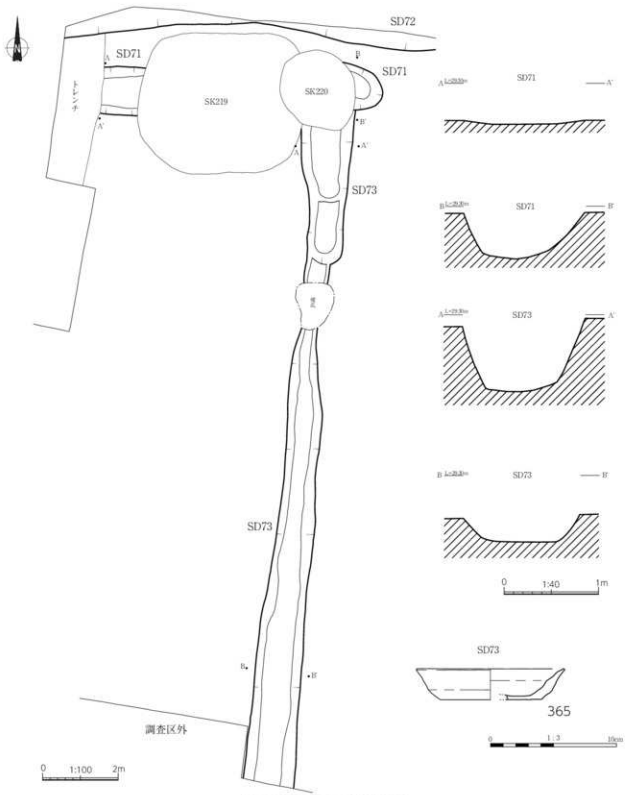


第 155 図　SK200,201 遺構・遺物実測図

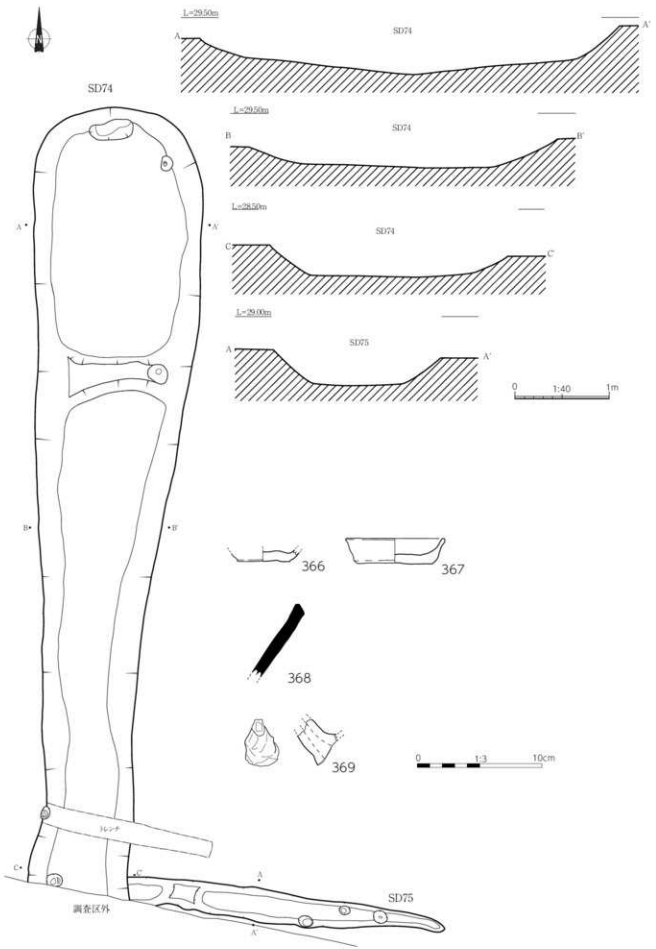


第 156 図　SK201 出土遺物実測図

364



第 157 図　SD73 遺構実測図



第158図　SD74,75 遺構実測図

2　土壙墓

中世の土壙墓としたものについて、古代のものと同様の基準で分類を行った。

（1）土壙墓1 a類

円形を呈するものを1 a類とした。径80～120cmのほぼ正円を呈し、深さは20~60cmと幅がある。底面と壁の境界付近はほぼ鉛直方向で急角度となるため他の土坑とは区別される。SK195から土師器の坏、SK99から白磁椀及び朝鮮通宝が、SK118から土師器坏、SK01で土師器坏、SK177から瓦質土器の羽釜が出土している。

（2）土壙墓1 b類

ST11の1基のみである。長軸1.2m、短軸70cmの長楕円形を呈する。深さは20cmを測る。土師器の坏が埋土中から出土している。

（3）土壙墓2 b類

平面形が長方形を呈するものを2 b類とした。長軸約90～160cmと短軸80~120cm．深さ40～100cmを測る。

SK100から土師器坏と龍泉窯系の青磁、SK103から土師器小皿、須恵器広口壺、ST21からは古銭（洪武通寶）が、ST06から土師器坏と龍泉窯青磁、ST22から瓦質土器のすり鉢、SK160から古銭（天元通寶、永楽通寶）、SK135から龍泉窯青磁が出土している。

分類	小分類	様態	特徴
1	a	円	平面形状が円・楕円形
	b	楕円	平面形状が円・楕円形
2	a	方形	平面形状が隅角の方形
	b	長方形	平面形状が長方形

第159図　土壙墓の分類

3　土坑

（1）SK94（第164図）

SK94は4m四方の範囲に収まる不定形の土坑で、深さは60cmを測る。土層断面の観察によると底面東側に偏って埋まる傾向が見られる。

（2）SK219（第165図）

SK219は抹角方形の大型土坑であり、長軸約4m、短軸約3．6mと正方形に近い形状をしている。断面を観察すると底面付近には礫を含む埋土が堆積し、中間付近に焼土・炭化物が帯状に堆積している。その上部に間層を挟み検出面付近でも炭化物が帯状に含まれる。

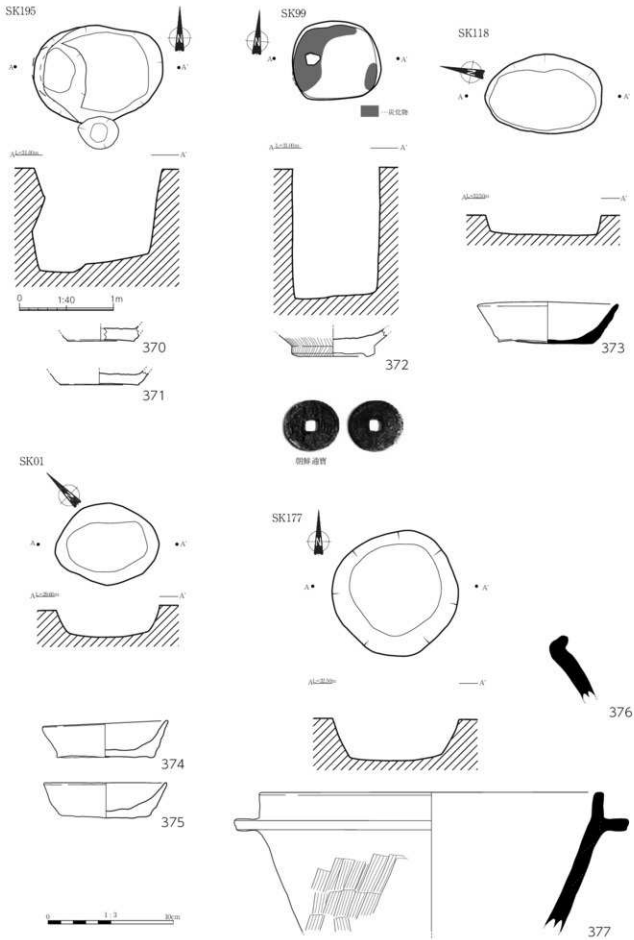
遺物も多く出土しており、青磁片、瓦質土器片が含まれる。

（3）SK264（第166図）

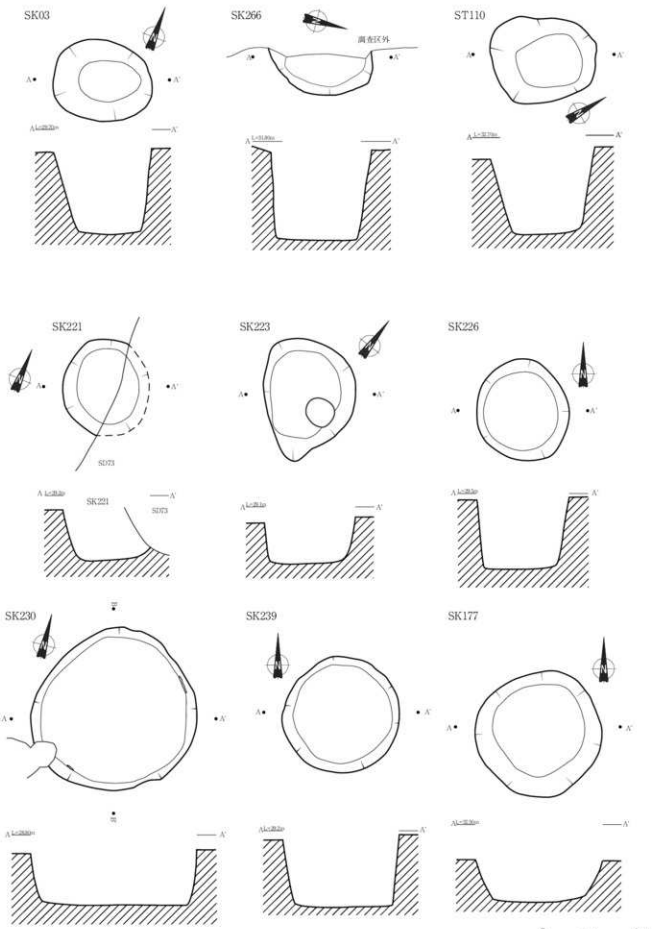
長軸約2m、短軸約1.6mの亜楕円形の土坑で、深さ80cmを測る。底面に炭化物・焼土・灰が混じる埋土が堆積し、その上の埋土中にも焼土・炭化物が混じる。底面以外の埋土は凹レンズ状をなす一般的な上部からの流入による堆積状況であるが、底面の層のみが凸レンズ状に堆積していること、埋土構成が土のほか焼土・炭化物・灰であることから土層骨を直葬した火葬墓の可能性がある。ただし、調査資料に骨片の記述がない以上、可能性の指摘に留める。

（5）古銭を含む土壙墓

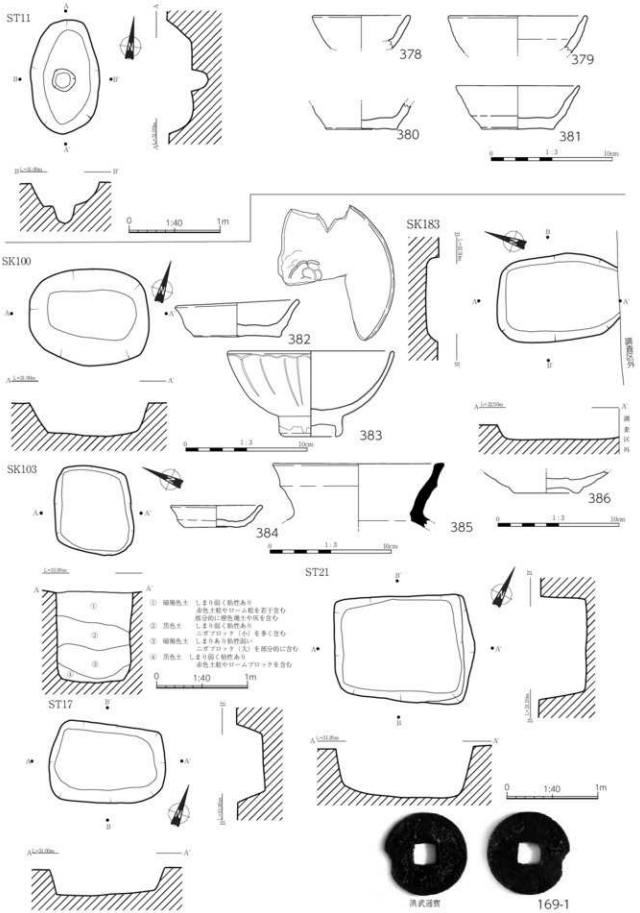
SK99,ST21,SK160において古銭が埋土中に含まれる例が確認された。SK99では朝鮮通寶が1点、ST21では洪武通寶1と判読不能のものが5点（計6点）、SK160では永楽通寶2、天元通寶1に判読不能のものが9点（計12）である。それぞれ流通時期を考えると、朝鮮通寶は15世紀末、洪武通寶は14世紀末～15世紀前半、永楽通寶は15世紀中頃から後半とされるため（櫻木2016）、これら遺構については14世紀～15世紀にかけての年代観が与えられると考える。他の遺構のところでも述べるが、炭素年代測定結果などの観点からもおよそ矛盾のない数字であると考える。



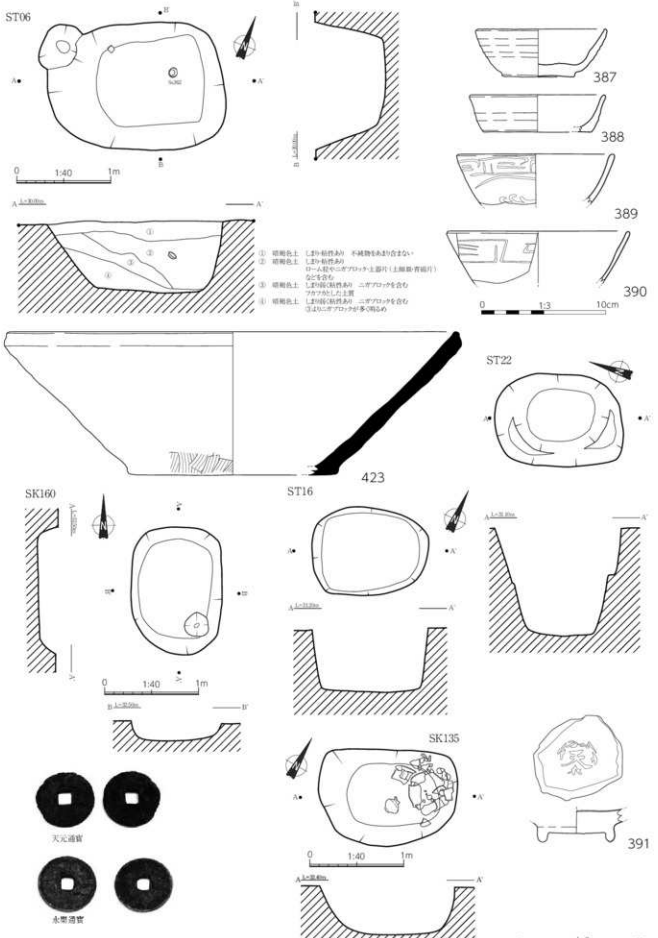
第 160 図　中世土壙墓（1a 類）遺構・遺物実測図



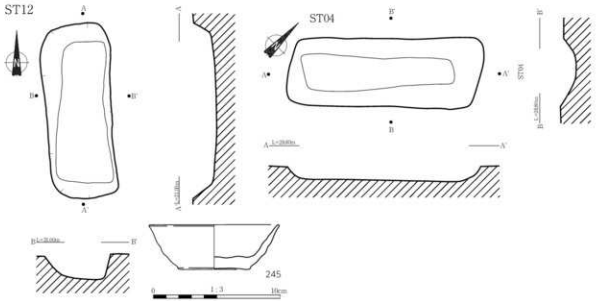
第 161 図　中世土壙墓（1a 類）遺構実測図

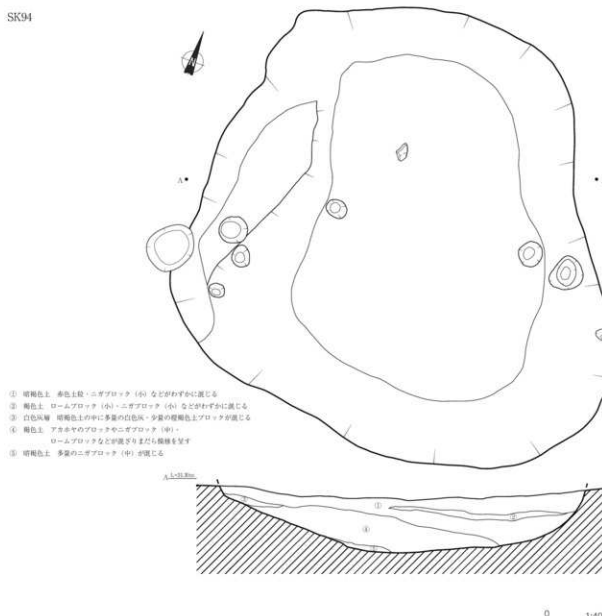


第162図　中世土壙墓（1a類・2b類）遺構・遺物実測図

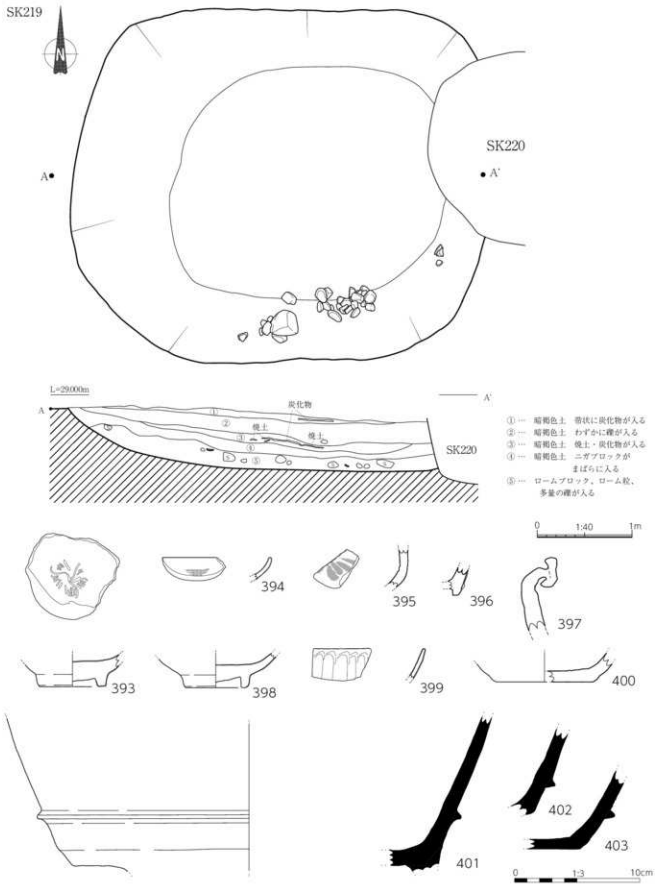


第163図　中世土壙墓（2b類）遺構・遺物実測図





第 164 図　SK94 実測図



第 165 図　SK219 遺構・遺物実測図

4　地下式坑（第 167 図）

（1）遺構の概要

SX03 は調査時において不明遺構とされたものの一つである。検出面において長軸 1.2 m、短軸 80cm の亜楕円形土坑であったものが、深さ 2 m の土坑底から横方向の穴が掘られ、入口の高さは底面から約 1.4 m、幅 80cm と大人がかがんで入れるほどの高さとなる。奥行については崩落の危険を感じたため詳細について調べることが出来なかったと当時の調査担当から聞き及んでおり、実際図面も計測できない部分があったため不鮮明なものとなっている。

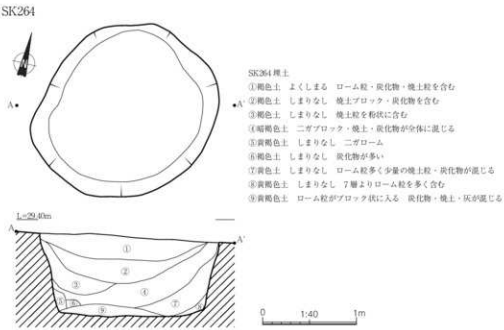
検出面となった亜楕円土坑を縦坑、そこから開いている横穴を横坑と仮に呼ぶこととする。横坑は入口から 60cm ほど下に降りるようになっており、入口付近のところが一番高く 2 mを測る。そこから奥壁まで約 1.6 m、横幅 3.2 mと長方形の空間となっている。

また、横坑の奥側に礫の集中が見られ、図面にも残されているが、それがなんであったかの説明は無く、不明である。

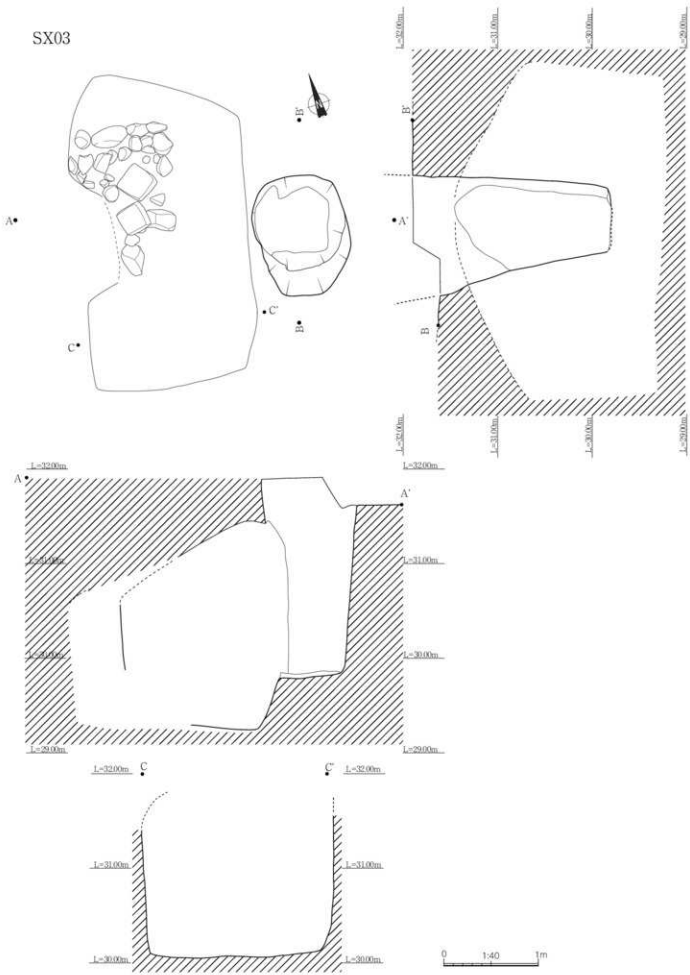
こうした状況から調査時点では不明とされていた本遺構であるが、整理作業において図面を整理し断面形状などの検討から地下式坑ではないかとの判断に至った。熊本においてあまりこうした事例を見る例が乏しく、断定的に言うことが難しいが、ほかに可能性があると言えば地下式横穴墓のようなものしか浮かばず、当該遺構の分布地域から考えても可能性は極めて低いこと、資料がないため図示されていないが石塔や中世の土器等が出土したとの言もあることから、地下式坑と見るのが妥当だと考える。

（2）地下式坑の機能

地下式坑の例が多い関東地方では地下式坑が屋敷周辺に設けられていることから様々な用途例が提示されているが確定的なものではない。



第 166 図　SK264 遺構実測図



第 167 図　SX03 遺構実測図

5　不明遺構（第 168 ～ 177 図）

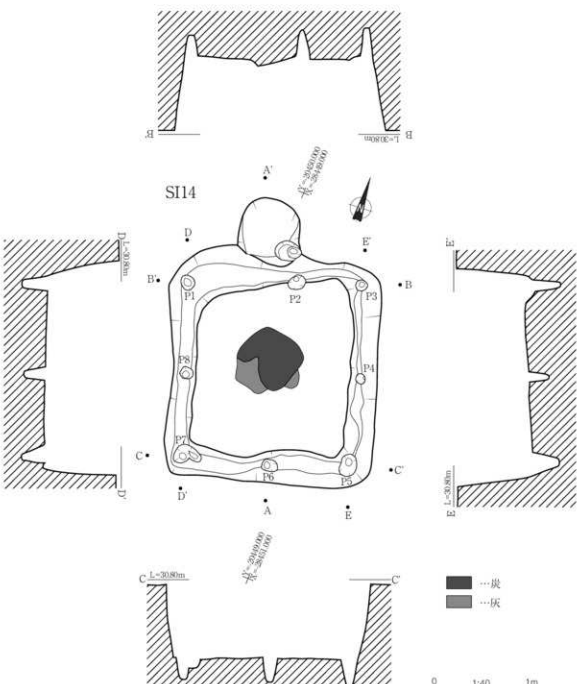
先述した地下式坑についてはある程度の決着が付いたと考えているが、これから示すものについては未だに性質がわからず、類例についても見当たらないため扱いに苦慮しているものである。でありながらある程度規模に差はあれど構成はほぼ同じであることから何らかの意図を持って設けられたものであるだけに余計頭を悩ませる遺構である。

（1）特徴

平面形は抹角の正方形に近く、その一辺に降り場状のステップを設けているものである。大きさは 2 ～ 3 m で、長幅比において明確に長方形と言えるものはない。およそ正方形のものに限られると言って良いかと思う。

平面プランを見る限り、小型の小屋などの竪穴建物を想定し、実際遺構番号には竪穴住居を示す SI が振られている。整理作業においても遺構番号の再設定時に平面プランから住居という括りは維持され、ここで挙げられる遺構の多くに SI を関する遺構番号が付与されている。

本遺跡で確認されている竪穴住居との特異点



第 168 図　SI14 遺構実測図

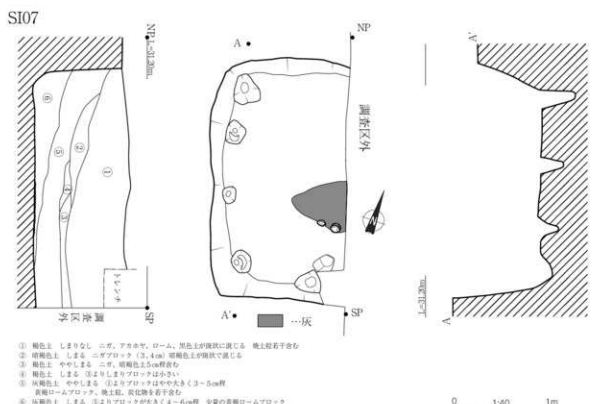
としてはそうした平面形状よりも床面までの深さ、及び床面の状態にある。検出面から床面までの深さは80cm～1mと住居にしては深いということ、また床面において一面が強く焼けているものもあるほか、程度の差はあれど埋土に焼土塊ないしは炭化物を含んでいる。また、底面だけでなく埋土中頃にも焼土を含むなど、土坑に粘土状の被覆がなされていて、継続的な燃焼が起きていた、廃棄時に被覆が崩れ埋没したと考えるのが妥当かと思われる。

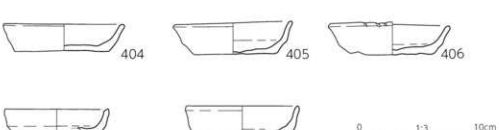
また、床面には土坑の下端付近に8～10の小穴が確認されている。柱としてはやや細いので、杭のようなものを想定するが四隅を基本として、その間に1～2本の杭が打設されているものと思われる。これが何を示すのか不明な点が多いが、土坑の底面から検出面にかけての空間を保つための支持構造であったことは想像に難くない。

（2）遺構の機能

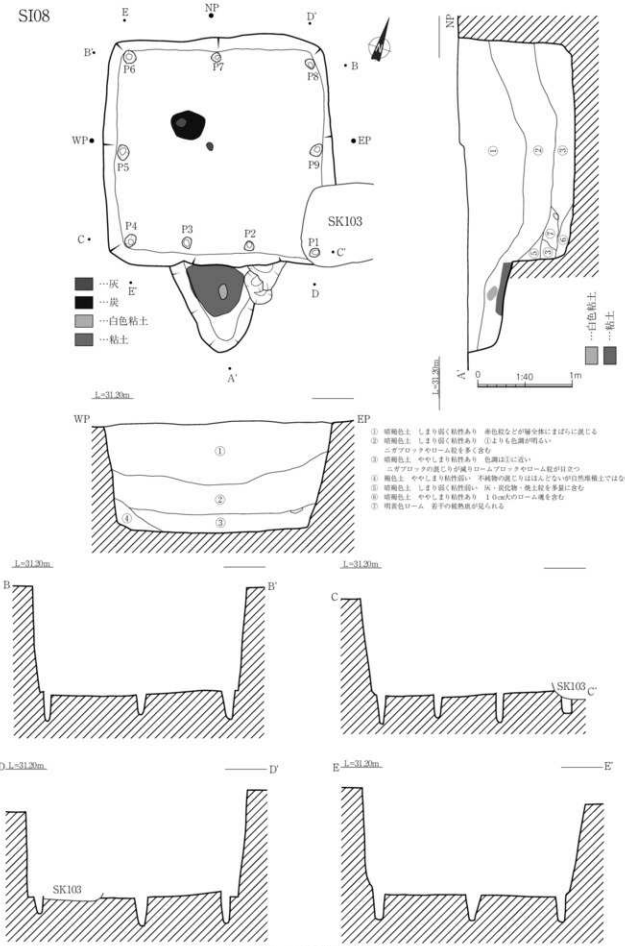
これまでの情報を元にこの遺構についての機能を考えてみる。床面や被覆物が強く焼けるということを考えると、窯などの空間内部で燃焼を行う施設を思い浮かべる。ただし、そうであれば壁面や煙道となる部分に焼けが生じるはずであり、そうした記述や写真はない。

炉や窯ではなく、深く掘りくぼめた方形の土坑で床を焼くということ、埋土中に粘土が層状に見られること、杭状の柱痕跡があること、土師器皿のほか稲等の炭化物が床から出土することなど考えれば考えるほどわからなくなってく

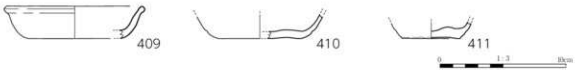




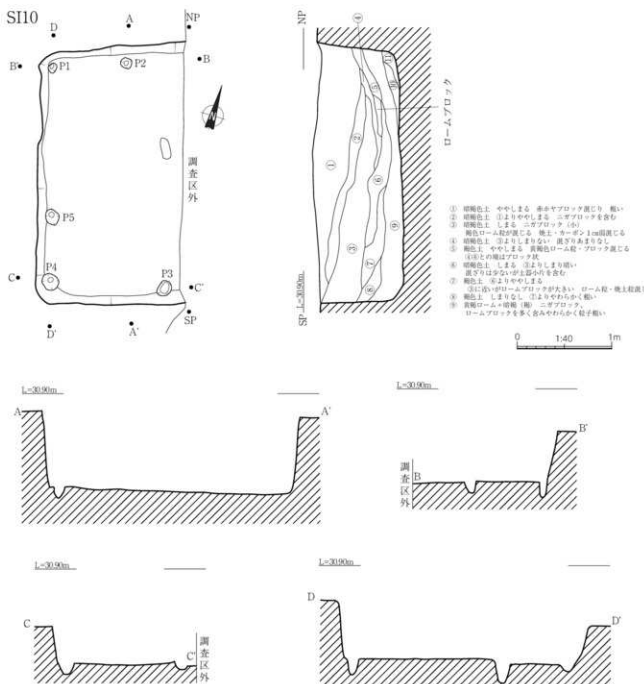
第169図　SI07遺構実測図



第170図 SI08 遺構実測図



第 171 図　SI08 遺物実測図



第 172 図　SI10 遺構実測図

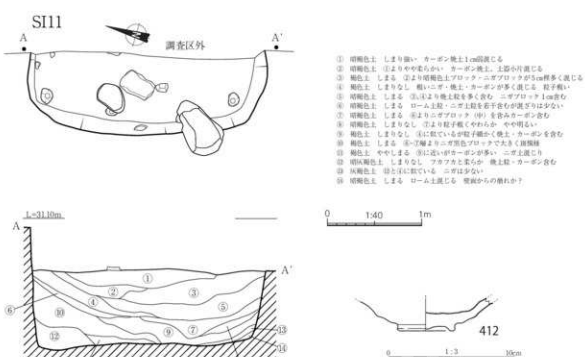
る。今回はこうした遺構が存在することを報告するに留めておき、今後類似する例が見つかり次第遺構の検討を進めていきたいと考えている。

ただ、付近に墓地や地下式坑があるなど同時期における遺跡の性格を反映しているものと思われるため、寺院等の存在を暗示しており、これら不明遺構もそれに伴うものとすれば、仏教系の遺構に注目すべきなのかもしれない。

先述した地下式坑の用途について真言立川流の儀式で用いられ、頭骨以外の部位については地下式坑周辺の土坑で焼くような処理が行われているとの指摘（今井 2014）もあり、こうした焼却施設の可能性もある。ただし、その場合炭や灰に混じって焼骨片も出土するはずであり、推測の域を出ない。

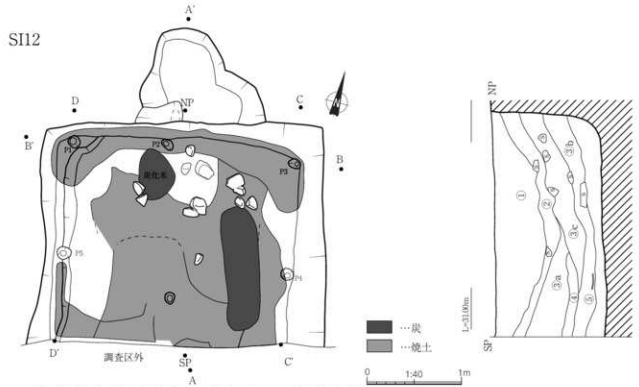
（3）遺構の時期

出土した炭化物の炭素年代測定結果についての詳細については第3部に譲るとしてSI 6及びSI12から出土した藁・炭化米の年代測定結果はそれぞれ 380 ± 30BP（Cal AD1445-1525）、370 ± 30BP（Cal AD1445-1530）の年代を得ており、15 ～ 16 世紀において形成されたものである。土壙墓の年代観においても 15 世紀台は十分に考えられるもので、それらと平行していると考えるならば、地下式坑の存在と合わせて考えるに塔ノ木遺跡には寺院のようなものがここに存在し、その後絶えたのではないかと推定する。

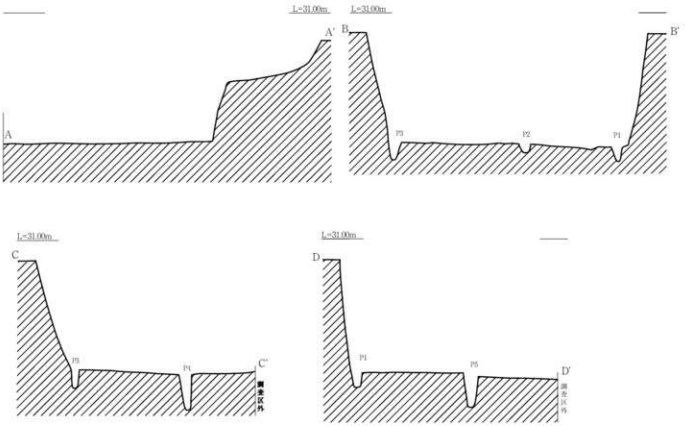


第 173 図　SI11 遺構実測図

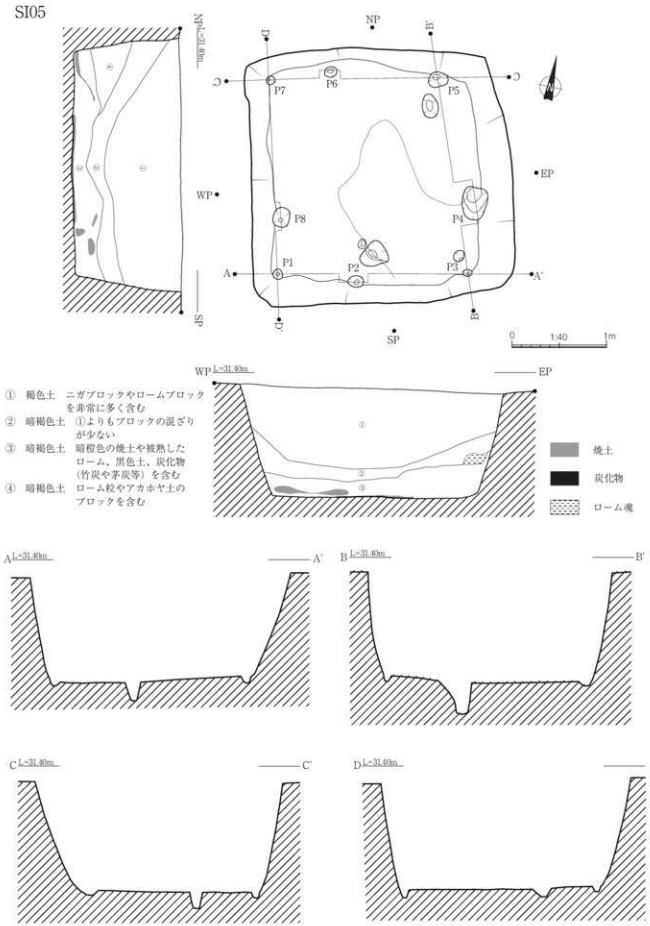
SI12



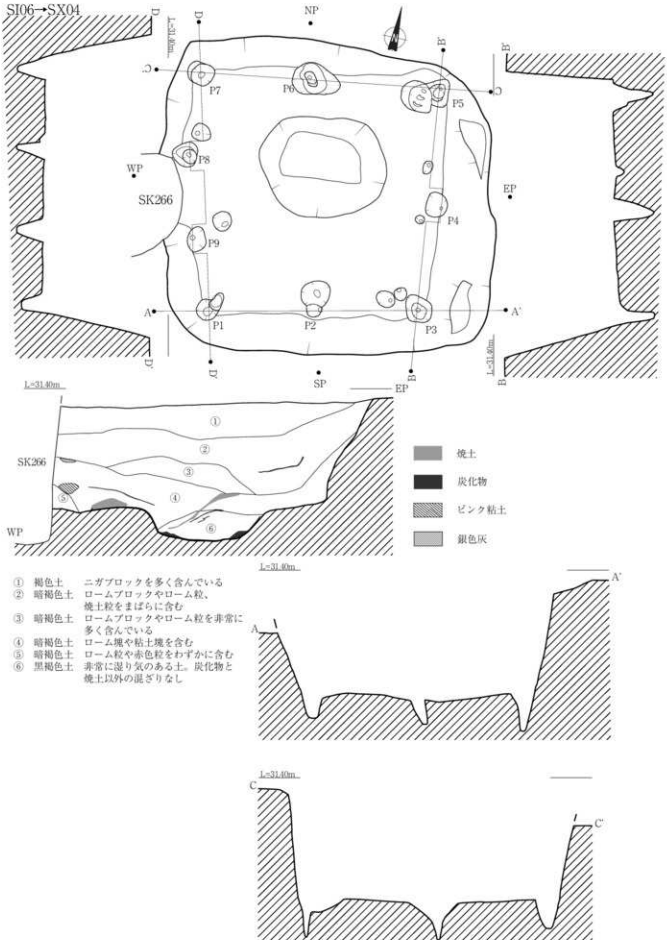
① 褐色土　しまり強く粘性弱い　ニガブロック、ローム粒を多量に含む
② 黒色土　しまり弱く粘性あり　赤色粒を多く含む　下層部には礫が多数出土
③a 暗褐色土　しまり・粘性あり　赤ホヤ２次堆積土のブロックを多く含む
③b ③a 層の土に明橙色の焼土を多く含む
③c 暗褐色土　しまり・粘性あり　③a 層より暗い　赤ホヤブロックはほとんど含まない
④ 暗褐色土　しまり・粘性あり　層全体にまばらに赤色粒を含む
⑤ 焼土及び炭化物・明橙色の焼土、被熱した黄色ローム、形の残る竹炭、その他の木炭などを多量に含む



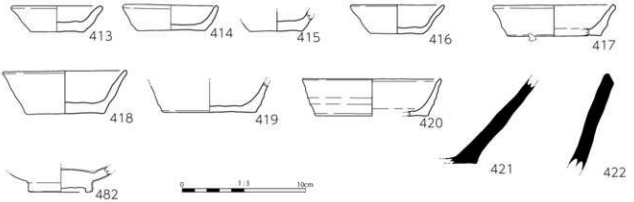
第 174 図　SI12 遺構実測図



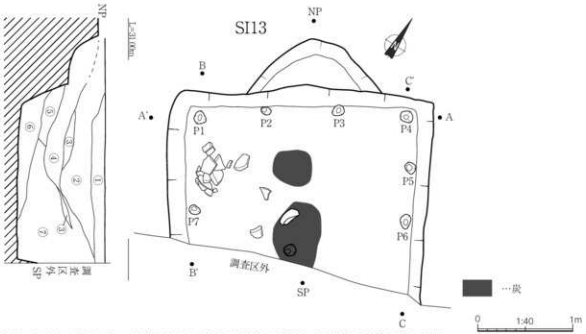
第 175 図　SI05 遺構実測図



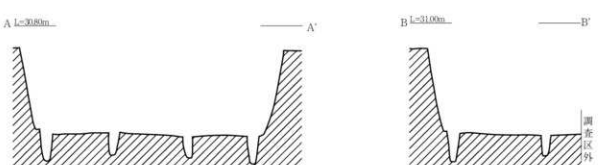
第176図 SX04遺構実測図



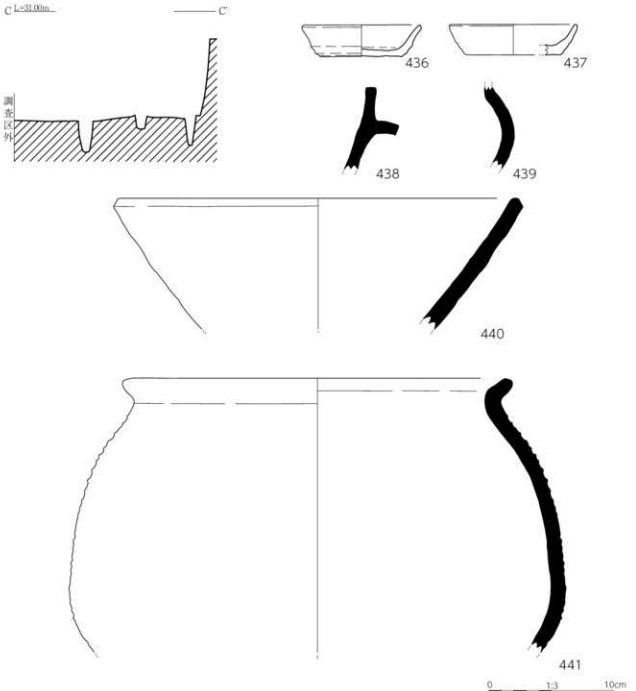
第 177 図　SX04 出土遺物実測図



① 褐色土　しまり・粘性あり　一見するとアカホヤ２次堆積土と相違ないが若干色調が暗い堆土である
② 黒色土　しまり・粘性あり　アカホヤ２次ブロック・ローム粒・赤色粒を含む　部分的にニガブロックを含む
③ 黒色土　土質は②とあまり変わらないが全体に炭化物が混じる
④ 暗褐色土　しまりあり　粘性弱い　ニガブロック・ローム粒を少量含む
⑤ 黒色土　しまり弱く粘性あり　部分的に炭化物を含む
⑥ 暗褐色土　しまり・粘性あり　層全体にローム粒、ロームブロックを多く含む
⑦ 暗褐色土　しまりあり　粘性弱い　アカホヤ２次ブロックやニガブロックを層全体にまんべんなく含む



第 178 図　SI13 遺構実測図



第 179 図　SI13 遺物実測図

第16表　遺構出土土器（中世）観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
245	10	ST12	K18-3		土師器	中世	杯	口縁～底部	(10.2)	3.5	5.6	雲母	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
308	9	SD45	L17-20		土師器	中世	杯	底部	—	(1.2)	5.8	雲母	にぶい黄橙 Hue7.5YR 7/4	明黄褐 Hue10YR7/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
309	9	SD45	L17-20		土師器	中世	杯	口縁～底部	8.4	2.4	(4.8)	雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
310	9	SD45	L17-20		土師器	中世	杯	口縁～底部	(9.6)	3.4	(5.0)	雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
311	9	SD45	L17-20		土師器	中世	杯	口縁～底部	(11.0)	3.4	5.4	雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
312	9	SD45	L17-20		土師器	中世	椀	口縁部～杯部	(9.6)	(3.5)	-	角閃石,雲母	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ	回転ナデ	良好	
313	9	SD45	L17-20		瓦質土器	中世	擂鉢	口縁～底部	-	10.1	-	長石,雲母,褐色土粒	灰白 Hue10Y7/1	灰白 Hue10Y8/1	回転ナデ	回転ナデ,ハケ目,擂目	良好	擂目5～6条
315	11	SD47	L18-11		土師器	中世	杯	杯部～底部	-	(2.6)	(6.0)	角閃石,雲母	明褐 Hue7.5YR5/6	明褐 Hue7.5YR5/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
316	11	SD47	L18-11		瓦質土器	中世	擂鉢	底部	-	(4.0)	(13.8)	長石,角閃石,雲母	明オリーブ灰 Hue2.5GY7/1	明オリーブ灰 Hue2.5GY7/1	回転ナデ	回転ナデ,擂目	良好	擂目6条
317	11	SD47	L18-11		瓦質土器	中世	擂鉢	底部	-	(4.6)	(13.4)	長石,雲母	灰黄 Hue2.5Y6/2	灰黄 Hue2.5Y6/2	回転ナデ,回転ヘラケズリ	回転ナデ,擂目	良好	擂目5条
318	11	SD47	L18-11		瓦質土器	中世	擂鉢	底部	-	(4.2)	-	長石,角閃石,雲母	浅黄 Hue2.5Y8/3	浅黄 Hue2.5Y8/3	ナデ	ナデ,擂目	良好	擂目6条
320	12	SD41	L16-20		瓦質土器	中世	擂鉢	底部	-	(4.2)	-	長石,角閃石	灰 Hue7.5Y6/1	灰白 Hue7.5Y8/1	ナデ	ナデ,擂目	良好	擂目5条
322	12	SD42	L17-18		瓦質土器	中世	擂鉢	底部	-	(3.4)	-	長石	灰HueN4/	灰HueN4/	ナデ,櫛目	ナデ,擂目	良好	擂目9本
324	14	SD14	M18-22		土師器	中世	杯	完形	9.3	2.4	6.2	雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	明褐 Hue7.5YR5/8	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
326	18	SD48	L18-14		土師器	中世	杯	口縁～底部	(9.9)	2.5	(7.6)	雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	見込に煤
327	18	SD49	L18-14		土師器	中世	杯	口縁～底部	9.7	2.7	6.6	角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
328	18	SD49	L18-14		土師器	中世	杯	口縁～底部	(9.7)	2.6	(7.1)	長石,角閃石,雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
329	18	SD49	L18-14		瓦質土器	中世	擂鉢	胴部～底部	-	(6.9)	(13.6)	長石,角閃石,雲母	灰 Hue10YR6/1	灰 Hue10YR5/1	回転ナデ,ナデ	回転ナデ,擂目	良好	擂目7本,底部の擂目6条
330	19	SD53	L19-06		土師器	中世	杯	底部	-	(1.6)	(6.0)	雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue7.5YR 7/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
331	19	SD53	-		須恵器	中世	皿	口縁～底部	22.0	4.6	(14.1)	長石,雲母	灰黄 Hue2.5Y6/2	黄灰 Hue2.5Y6/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	
332	27	SD33	M20-13		土師器	中世	小皿	口縁～底部	(6.6)	(2.2)	(5.6)	長石,角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい黄橙 Hue10YR5/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
333	27	SD33	M20-13		土師器	中世	坏	口縁～底部	(8.4)	(2.2)	6.2	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
334	28	SD58	-		土師器	中世	杯	底部	-	(1.3)	5.8	雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue5YR6/4	にぶい橙 Hue5YR6/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
335	28	SD58	-		土師器	中世	杯	底部	-	(2.0)	7.0	雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
336	28	SD58	-		土師器	中世	杯	口縁～底部	9.1	2.6	(7.0)	角閃石,雲母	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
337	28	SD58	-		土師器	中世	杯	口縁～底部	(10.6)	2.4	(7.0)	雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
338	28	SD58	-		土師器	中世	杯	口縁～底部	(9.8)	2.3	(7.0)	長石,角閃石,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue7.5YR 7/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
339	28	SD58	-		土師器	中世	杯	口縁～底部	(10.0)	2.6	(6.8)	雲母	にぶい褐 Hue7.5YR5/4	にぶい褐 Hue7.5YR5/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
340	28	SD58	-		土師器	中世	杯	口縁～底部	(10.4)	2.5	(6.8)	長石,角閃石,輝石,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
341	28	SD58	-		土師器	中世	坏	口縁～底部	(11.4)	2.7	(6.8)	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
342	28	SD58	-		瓦質土器	中世	壺	口縁～胴部	(15.0)	(6.4)	-	長石,角閃石,輝石	にぶい橙 Hue2.5YR6/4 褐灰 Hue5YR6/1	橙 Hue2.5YR6/6 にぶい橙 Hue2.5YR6/3	ナデ	ナデ	良好	
343	28	SD58	-		瓦質土器	中世	火鉢	口縁～胴部	(21.1)	11.7	(17.3)	角閃石,雲母	浅黄橙 Hue10YR8/3	浅黄橙 Hue10YR8/4	回転ナデ,ナデ	回転ナデ	良好	口縁～胴部突帯3条,スタンプ,煤
344	28	SD58	-		瓦質土器	中世	擂鉢	口縁～胴部		(11.0)	-	角閃石,雲母	灰 Hue5Y6/1	灰 Hue5Y6/1	ナデ	ナデ,擂目	良好	
345	28	SD58	-		瓦質土器	中世	擂鉢	口縁～底部	-	12.2	(13.0)	長石	灰 Hue7.5Y5/5	灰 HueN5/5	ナデ,指頭圧痕	ナデ,擂目	良好	
346	28	SD58	-		瓦質土器	中世	火鉢	口縁～胴部	(42.6)	(7.9)	-	長石	灰白 Hue2.5Y8/1	灰白 Hue2.5Y8/2	回転ナデ	回転ナデ	良好	胴部突帯1条,スタンプ
347	28	SD58	-		瓦質土器	中世	火鉢	口縁～胴部	-	(10.8)	-	長石,角閃石,雲母	灰黄 Hue2.5Y6/2	灰黄 Hue2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ	良好	胴部突帯2条,スタンプ
348	28	SD58	-		瓦質土器	中世	火鉢	口縁～胴部	(17.6)	(9.9)	-	長石,角閃石	灰 Hue5Y6/1	灰 Hue5Y5/1	回転ナデ,ヘラ調整	回転ナデ	良好	口縁突帯1条
349	28	SD58	-		瓦質土器	中世	羽釜	口縁～胴部	30.6	(12.5)	-	石英,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	ナデ,回転ナデ	ナデ,回転ナデ	良好	煤
350	28	SD58	-		須恵器	中世	甕	口縁～胴部	-	(7.1)	-	長石,石英,角閃石,輝石	灰 HueN5/0	灰 Hue10Y4/1	回転ナデ,格子タタキ	回転ナデ	良好	
351	28	SD58	-		瓦質土器	中世	甕	底部	-	(4.3)	(16.6)	長石,角閃石	灰 Hue7.5Y4/1	暗灰 HueN3/1	ナデ	ナデ	良好	
357	28	SD58	-		瓦質土器	中世	羽釜	胴	-	(4.0)	-	長石,角閃石,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	ナデ	ナデ	良好	
359	29	SD63	L20-9		瓦質土器	中世	羽釜	口縁	-	(7.6)	-	長石	灰黄褐 Hue10YR4/2	にぶい黄 Hue10YR6/3	回転ナデ	回転ナデ	良好	
360	29	SD64	L20-9		瓦質土器	中世	火鉢	脚部	-	(7.2)	-	長石,角閃石	灰黄 Hue2.5Y6/2	灰白 Hue5Y7/1	回転ナデ,指頭圧痕,ナデ	回転ナデ,ナデ	良好	
361	31	SK200	J21-20		土師器	中世	杯	完形	9.9	3.1	5.0	角閃石,褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい黄橙 Hue7.5YR 7/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
362	31	SK201	J21-20		土師器	中世	坏	口縁～底部	(9.4)	2.9	(6.9)	長石,角閃石,褐色土粒	明黄褐 Hue10YR7/6	にぶい橙 Hue10YR 7/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
363	31	SK201	J21-20		瓦質土器	中世	擂鉢	底部	-	(3.9)	(12.0)	長石	灰白 Hue5Y7/1	灰白 Hue5Y7/2	ナデ	ナデ,擂り目	良好	擂目4条,煤
364	31	SK201	J21-20		瓦質土器	中世	火鉢	底部	-	(8.5)	26.2	-	にぶい黄 Hue2.5Y6/4	黄褐 Hue2.5Y5/3	ナデ,ハケ目,回転ヘラケズリ	回転ナデ	良好	胴部～底部煤付着
365	32	SD73	I22-3		土師器	中世	杯	口縁～底部	(11.8)	(2.5)	(8.2)	長石,雲母,褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR7/2	にぶい黄橙 Hue10YR7/2	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
366	32	SD74	I22-4		土師器	中世	小皿	底部	-	(0.9)	4.2	角閃石	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
367	32	SD74	I22-4		土師器	中世	坏	口縁～底部	7.8	2.0	6.0	長石,角閃石,褐色土粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
368	32	SD74	I22-4		瓦質土器	中世	擂鉢	口縁	-	(5.8)	-	石英,褐色土粒	浅黄 Hue2.5Y7/4	灰黄 Hue2.5Y7/2	回転ナデ,指頭圧痕	回転ナデ,擂目	良好	擂目4条
369	32	SD74	-			中世		注口	-	(3.7)	-	角閃石,雲母	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	ナデ	ナデ	良好	
370	10	SK195	K18-3		土師器	中世	杯	底部	-	(1.2)	(5.4)	角閃石,褐色土粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
371	10	SK195	K18-3		土師器	中世	杯	底部	-	(1.1)	(6.3)	褐色土粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
373	28	SK118	L20-1		土師器	中世	杯	完形	11.3	3.3	7.7	長石,角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良	
374	14	SK001	M18-22		土師器	中世	杯	口縁～底部	10.0	2.9	7.6	長石,角閃石,褐色土粒	明黄褐 Hue10YR6/6	明黄褐 Hue10YR6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	
375	14	SK001	M18-22		土師器	中世	杯	口縁～底部	9.8	2.8	7.0	角閃石,雲母,褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ,糸切り	回転ナデ	良好	

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
376	28	SK177	−		須恵器	中世	壺	口縁	−	(5.1)	−	雲母	暗灰黄 Hue2.5Y5/2	黄灰 Hue2.5Y5/1	ヘラケズリ、格子目タタキ	回転ナデ	良	
377	28	SK177	−		瓦質土器	中世	羽釜	口縁～胴部	(27.4)	(11.1)	−	長石、角閃石、雲母	にぶい黄 Hue2.5Y6/3	暗灰黄 Hue2.5Y5/2	ナデ、ハケ目	ナデ	良	煤、炭化物付着
378	10	ST11	K18-3		土師器	中世	小皿	口縁部～杯部	(8.0)	(2.7)	−	長石、角閃石、褐色土粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ	回転ナデ	良好	
379	10	ST11	K18-3		土師器	中世	杯	口縁部～杯部	(11.4)	(3.1)	−	長石、角閃石、雲母	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ	回転ナデ	良好	
380	10	ST11	K18-3		土師器	中世	杯	杯部～底部	−	(2.1)	5.8	角閃石、雲母	にぶい橙 Hue7.5YR 7/3	にぶい橙 Hue7.5YR 7/3	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
381	10	ST11	K18-3		土師器	中世	杯	口縁～底部	(10.2)	3.6	(6.0)	角閃石、雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
382	19	SK100	L19-16		土師器	中世	杯	口縁～底部	10.2	3.0	7.1	長石、角閃石、雲母、褐色土粒	明赤褐 Hue5YR5/6	明赤褐 Hue5YR5/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
384	19	SK103	L19-17		土師器	中世	坏	口縁～底部	7.6	1.8	5.0	角閃石、雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
385	19	SK103	L19-17		須恵器	中世	壺	口縁～胴部	(14.1)	(5.2)	−	長石	灰白 Hue7.5Y7/1	灰白 Hue7.5Y7/1	回転ナデ	回転ナデ	良好	
386		SK103																
387	7	ST06	K17-8		土師器	中世	杯	口縁～底部	10.5	3.8	5.8	雲母、褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
388	7	ST06	K17-8		土師器	中世	小皿	口縁～底部	(10.8)	(3.0)	(8.6)	長石、雲母、褐色土粒	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue7.5YR 7/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
389	32	SK219	J22-23		瓦質土器	中世	火鉢	胴部～底部	−	(11.6)	(27.7)	長石、褐色土粒	灰 Hue7.5Y6/1	灰黄 Hue2.5Y6/2	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	良好	胴部突帯1条
401	32	SK219	J22-23		瓦質土器	中世	火鉢	胴部～底部	−	(7.1)	−	長石、角閃石	にぶい黄橙 Hue10YR7/2	灰 Hue10Y1/5	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	良好	胴部突帯1条、胴部に煤
402	32	SK219	J22-23		瓦質土器	中世	火鉢	胴部～底部	−	(6.1)	−	長石、角閃石	灰 Hue7.5Y4/1	灰 Hue7.5Y5/1	ナデ、ヘラケズリ	回転ヘラケズリ、ナデ	良好	胴部突帯1条、胴部～底部煤
403	19	SI07	L19-12		土師器	中世	坏	完形	9.6	2.3	7.6	長石、角閃石、雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
404	19	SI07	L19-12		土師器	中世	坏	完形	9.5	2.6	6.7	長石、角閃石、雲母	にぶい橙 Hue5YR 6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
405	19	SI07	L19-12		土師器	中世	坏	完形	9.7	2.6	6.8	長石、角閃石、雲母、褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
406	19	ST07	L19-12		土師器	中世	坏	口縁～底部	(8.2)	2.1	(7.0)	角閃石、雲母、褐色土粒	橙 Hue5YR6/6	橙 Hue5YR6/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	内外面煤付着
407	19	ST07	L19-12		土師器	中世	坏	口縁～底部	(9.0)	2.6	(7.0)	石英、雲母、褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
409	19	ST08	L19-17		土師器	中世	杯	杯部～底部	−	(1.9)	(6.6)	角閃石、雲母、褐色土粒	橙 Hue7.5YR7/6	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
410	19	ST08	L19-17		土師器	中世	坏	底部	—	(1.3)	(4.7)	石英、角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
413	23	SX04	L19-18		土師器	中世	小皿	完形	7.4	2.1	4.3	長石、角閃石、褐色土粒	にぶい橙 Hue5YR 6/4	にぶい橙 Hue5YR 7/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
414	23	SX04	L19-18		土師器	中世	灯明皿	完形	7.7	2.1	5.4	長石、角閃石、雲母、褐色土粒	灰黄褐 Hue10YR6/2	褐灰 Hue10YR5/1	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	油煙付着
415	23	SX04	L19-18		土師器	中世	小皿	底部	−	(1.6)	4.3	雲母、褐色土粒	橙 Hue7.5YR 7/6	橙 Hue7.5YR 7/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
416	23	SX04	L19-16		土師器	中世	杯	口縁～底部	(7.6)	2.3	(4.2)	雲母	灰黄 Hue2.5Y6/2	灰黄 Hue2.5Y6/2	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
417	23	SX04	L19-16		土師器	中世	小皿	口縁～底部	(9.9)	2.5	(7.6)	角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
418	23	SX04	L19-16		土師器	中世	杯	口縁～底部	(10.8)	3.5	(6.2)	角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	回転ナデ、糸切、板状圧痕	回転ナデ	良好	
419	23	SX04	L19-18		土師器	中世	小皿	杯部～底部	−	(2.5)	(7.4)	長石、角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
420	23	SX04	L19-18		土師器	中世	小皿	口縁～底部	(11.2)	3.0	(9.0)	長石、雲母、褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
421	23	SX04	L19-18		瓦質土器	中世	擂鉢	底部	−	(7.8)	−	長石、角閃石、褐色土粒	灰 Hue5Y6/1	灰 Hue5Y5/1	回転ナデ	擂目、ハケメ	良好	
422	23	SX04	L19-18		瓦質土器	中世	擂鉢	口縁	−	(17.7)	−	長石、角閃石	灰 Hue10Y6/1	灰黄 Hue2.5Y7/2	回転ナデ	回転ナデ、擂目	良好	擂目6条
423	7	ST06	K17-8		瓦質土器	中世	擂鉢	口縁～底部	26.4	11.4	(16.6)	長石	にぶい黄 Hue2.5Y6/3	白灰 Hue5Y7/2	回転ナデ、ハケ目	擂目	良好	擂目3条と4条が交互
436	19	SI13	L19-21		土師器	中世	杯	口縁～底部	9.8	2.5	6.5	長石、角閃石、雲母、褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ、回転ヘラケズリ、糸切り	回転ナデ	良好	
437	19	SI13	L19-21		土師器	中世	坏	口縁～底部	(10.1)	2.4	(7.6)	角閃石、雲母、褐色土粒	にぶい橙 Hue5YR 6/4	にぶい橙 Hue5YR 6/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
438	19	SI13	L19-21		瓦質土器	中世	羽釜	口縁	−	(6.4)	−	角閃石、雲母	灰 Hue5Y5/1	灰白 Hue5Y7/2	回転ナデ	回転ナデ	良好	鍔の下に煤付着
439	19	SI13	L19-21		瓦質土器	中世	火鉢	胴部	−	(6.6)	−	長石、雲母、褐色土粒	赤橙 Hue10R6/8	赤橙 Hue10R6/6	回転ナデ	回転ナデ	良好	スタンプ
440	19	SI13	L19-21		瓦質土器	中世	擂鉢	口縁	(32.4)	(10.3)	−	長石、角閃石、雲母、褐色土粒	浅黄橙Hue10YR8/4	黄橙 Hue10YR8/6	回転ナデ	回転ナデ、擂目	良好	擂目6条
441	19	SI13	L19-21		須恵器	中世	壺	口縁～胴部	(30.8)	(21.6)	−	長石、角閃石、褐色土粒	灰 Hue7.5Y6/1	灰 Hue7.5Y7/1	回転ナデ、格子目タタキ	回転ナデ、当て具痕	良好	

第17表　遺構出土陶磁器（中世）観察表

挿図番号	区	遺構番号	種別	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	胎土（色調）	釉（色調）	備考
314	9	SD45	青磁	坏	(9.2)	(5.0)	3.0	白茶 C107	カーキ色 C232	貫入
319	11	SD47	青磁	碗	－	－	(4.0)	灰色 C297	すずかけの樹の色 C216	連弁文，貫入
321	12	SD41	白磁	碗	－	－	(2.4)	薄白茶 C103	枯草色 C157	見込に櫛目7条
323	12	SD42	青磁	碗	－	(5.3)	(2.1)	灰白 C144	黄灰 C319	高台内露胎
325	14	SD14	陶器	擂鉢	－	－	(4.7)	貝のピンク色 C69	褐色 C128	擂目7条
352	28	SD58	炻器	甕	－	(29.0)	(10.7)	コーヒー色 C124	チョコレート色 C113	
353	28	SD58	青磁	碗	11.4	－	(4.2)	ねずみ色 C292	茶の緑 C229	連弁文，貫入
354	28	SD58	青磁	碗	12.0	－	(4.7)	ねずみ色 C292	茶の緑 C229	連弁文，貫入
355	28	SD58	青磁	碗	(12.4)	－	(6.1)	カーキ色 C232	すずかけの樹の色 C216	連弁文
356	28	SD58	陶器	碗	－	4.7	(2.0)	薄金茶色 C94	白茶 C107	見込に胎土目
358	28	SD58	炻器	壺	－	－	(8.4)	コーヒー色 C124	褐色 C128	
372	19	SK99	白磁	碗	－	6.6	(2.2)	灰色 C144	乳灰 C141	外器面高台に工具による刻み
383	19	SK100	青磁	碗	(13.8)	(5.2)	7.0	かもしか色 C106	白茶 C135	見込に花の模様，連弁文
389	7	ST06	青磁	碗	(12.6)	－	(4.0)	鉛の灰色 C211	すずかけの樹の色 C216	雷文，花文
390	7	ST06	青磁	碗	(14.6)	－	(4.2)	鉛の灰色 C211	すずかけの樹の色 C216	雷文
391	29	SK135	青磁	碗	－	(5.3)	(2.6)	白茶 C135	鉄の緑 C230	見込に天の字
392	32	SK219	青磁	碗	－	5.4	(2.6)	すずかけの樹の色 C216	すずかけの樹の色 C216	貫入，へら彫りによる花文
393	32	SK219	染付	坏	－	－	(1.8)	貝の白 C163	トルコ石の灰緑 C219	
394	32	SK219	陶器	鉢	－	－	(6.1)	カーキ色 C232	銀灰色 C143	鉄釉
395	32	SK219	陶器	鉢	－	－	(2.2)	相思鳥の灰色 C294	鉄の緑 C230	高台部分に釉だれ
396	32	SK219	炻器	壺	－	－	(5.8)	ねずみ色 C292	茶色 C127	
397	32	SK219	青磁	碗	－	5.2	(2.7)	ミンクの灰色 C244	鉄緑 C230	見込重ね焼き痕，畳付けから高台内露胎，貫入
398	32	SK219	青磁	碗	－	－	(2.4)	灰色 C297	すずかけの樹の色 C216	連弁文，貫入
409	19	SI08	青磁	皿	(11.2)	－	(2.5)	大理石の色 C215	すずかけの樹の色 C216	
411	19	SI11	磁器	坏	－	4.5	(2.6)	チョコレート色 C113	ミンクの灰色 C244	外器面に釉だまり，高台上面から露胎
482	23	SX04	青磁	碗	－	5.2	(2.1)	灰白 C144	すずかけの樹の色 C216	高台内露胎

第18表　遺構出土土製品（中世）観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	遺構	種別	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	孔径（cm）	重量（g）	色調	備考
P4	17	28	SD58	土製品	土錘	3.26	1.15	0.30	4.44	浅黄　Hue2.5Y7/3	
P5	54	28	SD58	土製品	土錘	3.72	1.13	0.39	5.06	黒褐　Hue10YR3/1	
P6	67	28	SD58	土製品	土錘	3.95	1.03	0.30	3.88	オリーブ褐　Hue2.5Y4/3	
P7	70	28	SD58	土製品	土錘	3.63	1.10	0.23	3.24	黒　Hue5Y2/1	
P8	2	28	SD58	土製品	土錘	3.74	1.32	0.32	5.82	にぶい黄褐　Hue10YR5/4	
P9	9	28	SD58	土製品	土錘	3.66	1.45	0.25	6.94	明赤褐　Hue5YR5/6	
P10	18	28	SD58	土製品	土錘	3.49	1.25	0.30	5.34	黄褐　Hue10YR5/6	
P11	19	28	SD58	土製品	土錘	3.53	1.34	0.31	5.55	にぶい黄橙　Hue10YR6/4	
P12	38	28	SD58	土製品	土錘	3.71	1.23	0.25	4.97	にぶい黄橙　Hue10YR7/3	
P13	4	28	SD58	土製品	土錘	4.09	1.26	0.39	5.46	黒　Hue5Y2/1	
P14	7	28	SD58	土製品	土錘	4.01	1.54	0.32	6.86	にぶい黄Hue2.5Y6/4	
P15	32	28	SD58	土製品	土錘	5.00	1.31	0.39	7.23	明赤褐　Hue5YR5/6	

挿図番号	遺物番号	出土区	遺構	種別	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	備考
P16	44	28	SD58	土製品	土錘	4.65	1.26	0.34	6.30	にぶい黄褐 Hue10YR4/3	
P17	53	28	SD58	土製品	土錘	4.60	1.30	0.35	5.66	黒褐 Hue10YR3/1	
P18	22	28	SD58	土製品	土錘	4.31	1.02	0.33	3.55	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	
P19	41	28	SD58	土製品	土錘	4.18	1.05	0.23	3.94	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	
P20	63	28	SD58	土製品	土錘	4.36	0.89	0.20	2.89	にぶい黄褐 Hue10YR5/4	
P21	20	28	SD58	土製品	土錘	4.39	1.19	0.39	4.42	にぶい赤褐 Hue5YR5/4	
P22	21	28	SD58	土製品	土錘	4.45	1.19	0.36	5.10	黒 Hue5Y2/1	
P23	45	28	SD58	土製品	土錘	4.53	1.26	0.27	5.69	にぶい赤褐 Hue5YR5/4	
P24	55	28	SD58	土製品	土錘	4.62	1.22	0.37	5.24	オリーブ黒 Hue5Y3/1	
P26	59	28	SD58	土製品	土錘	4.52	1.24	0.32	5.93	黒 Hue2.5Y2/1	
P27	66	28	SD58	土製品	土錘	4.58	1.18	0.21	4.80	明褐 Hue7.5YR5/6	
P28	5	28	SD58	土製品	土錘	4.31	1.32	0.35	5.92	黒 Hue5Y2/1	
P29	11	28	SD58	土製品	土錘	4.57	1.41	0.43	6.73	黒 Hue2/0	
P30	12	28	SD58	土製品	土錘	4.31	1.34	0.44	6.67	にぶい褐 Hue7.5YR5/4	
P31	35	28	SD58	土製品	土錘	4.54	1.45	0.39	8.24	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	
P32	37	28	SD58	土製品	土錘	4.52	1.38	0.22	7.12	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	
P33	46	28	SD58	土製品	土錘	4.68	1.63	0.27	8.58	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	
P34	33	28	SD58	土製品	土錘	4.36	1.67	0.34	8.29	にぶい褐 Hue7.5YR5/4	
P35	23	28	SD58	土製品	土錘	5.03	1.11	0.33	4.87	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	
P36	43	28	SD58	土製品	土錘	4.87	1.09	0.20	5.01	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	
P37	48	28	SD58	土製品	土錘	4.86	1.10	0.22	5.36	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	
P38	71	28	SD58	土製品	土錘	4.80	1.08	0.27	4.69	黄灰 Hue2.5Y4/1	
P39	13	28	SD58	土製品	土錘	4.63	1.03	0.35	4.35	にぶい黄褐 Hue10YR5/4	
P40	64	28	SD58	土製品	土錘	4.65	0.89	0.20	2.92	にぶい褐 Hue7.5YR5/4	
P41	65	28	SD58	土製品	土錘	4.56	0.86	0.20	2.89	にぶい黄褐 Hue10YR4/3	
P42	69	28	SD58	土製品	土錘	4.62	0.84	0.22	3.30	黒褐 Hue2.5Y3/2	
P43	1	28	SD58	土製品	土錘	4.77	1.27	0.39	6.18	黒 Hue2.5Y2/1	
P44	10	28	SD58	土製品	土錘	4.71	1.20	0.40	5.58	明赤褐 Hue2.5YR5/6	
P45	14	28	SD58	土製品	土錘	4.73	1.21	0.44	5.71	黒褐 Hue2.5Y3/1	
P46	16	28	SD58	土製品	土錘	4.80	1.31	0.41	6.98	黒 Hue2/0	
P47	27	28	SD58	土製品	土錘	4.73	1.33	0.41	7.33	黒 Hue1.5/0	
P48	28	28	SD58	土製品	土錘	4.73	1.28	0.36	5.49	にぶい褐 Hue7.5YR5/4	
P49	34	28	SD58	土製品	土錘	4.83	1.23	0.43	5.53	橙 Hue5YR6/6	
P50	42	28	SD58	土製品	土錘	4.72	1.18	0.21	5.68	にぶい赤褐 Hue5YR5/4	
P51	47	28	SD58	土製品	土錘	4.84	1.25	0.34	5.90	橙 Hue2.5YR6/6	
P52	52	28	SD58	土製品	土錘	4.75	1.16	0.30	6.40	黒 Hue2.5Y2/1	
P53	3	28	SD58	土製品	土錘	5.04	1.28	0.35	6.02	黒 Hue5Y2/1	
P54	49	28	SD58	土製品	土錘	4.97	1.33	0.30	8.07	にぶい赤褐 Hue5YR4/4	
P55	62	28	SD58	土製品	土錘	4.88	1.32	0.38	6.50	黒 HueN1.5/0	
P56	72	28	SD58	土製品	土錘	5.06	1.25	0.30	8.58	黒 Hue2.5Y2/1	
P57	6	28	SD58	土製品	土錘	5.14	1.25	0.38	6.41	黒 Hue2.5Y2/1	
P58	15	28	SD58	土製品	土錘	5.28	1.35	0.36	8.57	黄褐 Hue10YR5/1	
P59	24	28	SD58	土製品	土錘	5.19	1.18	0.36	5.26	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	
P60	25	28	SD58	土製品	土錘	5.11	1.09	0.31	4.62	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	
P61	26	28	SD58	土製品	土錘	5.12	1.19	0.31	4.62	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	
P62	31	28	SD58	土製品	土錘	5.06	1.20	0.30	5.20	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	
P63	36	28	SD58	土製品	土錘	5.31	1.18	0.39	6.09	橙 Hue5YR6/6	
P64	39	28	SD58	土製品	土錘	5.25	1.15	0.29	5.70	にぶい黄橙 Hue10YR6/3	
P65	40	28	SD58	土製品	土錘	5.13	1.15	0.34	6.12	橙 Hue5YR6/6	
P66	50	28	SD58	土製品	土錘	5.29	1.09	0.26	5.30	にぶい赤褐 Hue5YR5/4	
P67	51	28	SD58	土製品	土錘	5.09	1.02	0.25	5.04	にぶい褐 Hue7.5YR6/4	
P68	60	28	SD58	土製品	土錘	5.37	1.07	0.24	4.95	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	
P69	8	28	SD58	土製品	土錘	5.74	1.42	0.39	8.75	黒褐Hue2.5Y3/1	
P70	30	28	SD58	土製品	土錘	5.45	1.76	0.40	15.90	浅黄 Hue2.5Y7/3	
P71	57	28	SD58	土製品	土錘	5.52	1.23	0.31	6.82	黒 Hue2.5Y2/1	
P72	58	28	SD58	土製品	土錘	4.88	1.56	0.24	12.39	褐灰 Hue10YR4/1	

第3節　包含層出土遺物

1　土師器（第178図）

中世の土師器として小皿、皿、坏が出土している。

小皿は平均して口縁径7.46cm、器高2.1cm程度を測る。皿に比べて底部からの立ち上がりはやや急である。皿は平均の口縁径8.86cm、器高1.8cmと小皿より若干広く、背が低い。坏は平均口径10.1cm、高さ2.8cmである。

2　陶磁器

（1）磁器（第181図456～475）

青磁が出土している。破片ではあるが龍泉窯系のものが割合として多く、蓮弁花文の椀及び無文の小皿などが見られる。底部のみのものもあり、ほとんどが椀であると思われる。

（2）陶器（第181図476～481）

磁器に比べると割合は少ないが陶器も出土している。は備前焼のすり鉢である。底部のみの出土で全容は不明である。

3　瓦質土器（第182図）

陶磁器に比べて個体数が多いのは瓦質土器である。破片がほとんどであり全体形状はよくわからないが、大きく分けて羽釜、すり鉢、火鉢、炉などが含まれる。

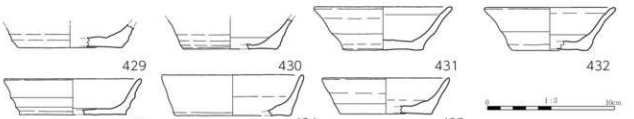
4　権状石製品（第183図L111）

23区から出土した。滑石製で元は滑石製石鍋であったものを転用しており、裏面には使用時のススがこびりついている。他の面は滑らかになるように研磨されており、この部分だけ意図的に研磨されなかったようにも見える。形状は平べったい分銅のような形をしており、上部中央付近に孔が穿たれる。孔上部には紐ずれのようなものも見受けられることから紐状のものが孔に通され、吊すようにして使用されたものと思われる。表裏両面に判読できないが文字状のものが刻まれており、表面のものは「四■■」と漢字の「四」のように見える。また、その三文字の左上にも「四」の外に「○」のような記号が彫られている。

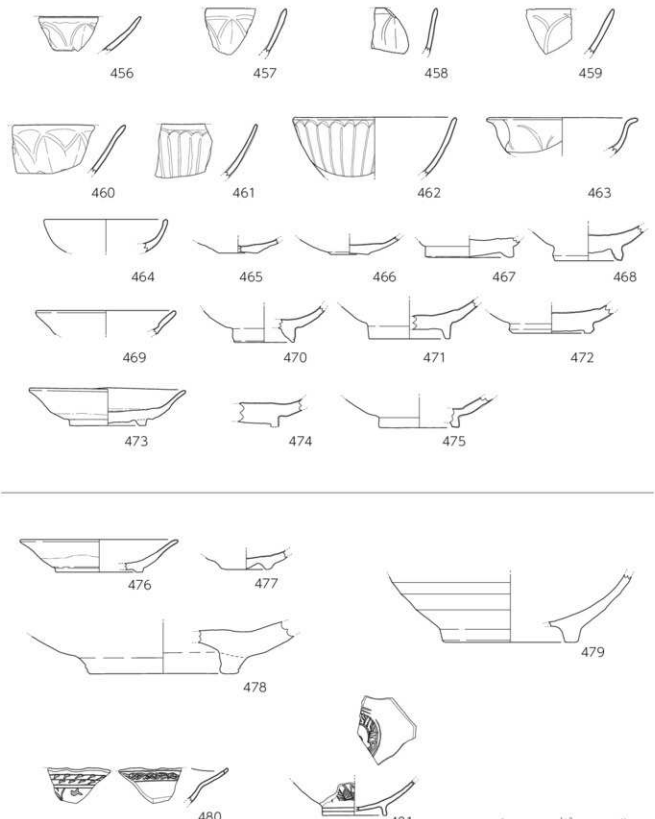
裏面については横方向のランダムな沈線と二つの記号状の彫り込みが見られ、記号状の彫り込みについては文字とも取れる。ただし、先述したようにススの固着が見られること、それが刻まれている部分でも起きていることから固着が使用時の結果であるとするならば裏面についていては石鍋として製作された段階か使用されていた頃に付けられたものと言えよう。そう考えると文字や記号ではない可能性が高い。重量は60.8gを測り、当時の重量単位である両（37.5g）に換算すると1両を超え2両に満たない。これと他の何かを用いて調整していた可能性はある。

5　滑石製石鍋（第183図482）

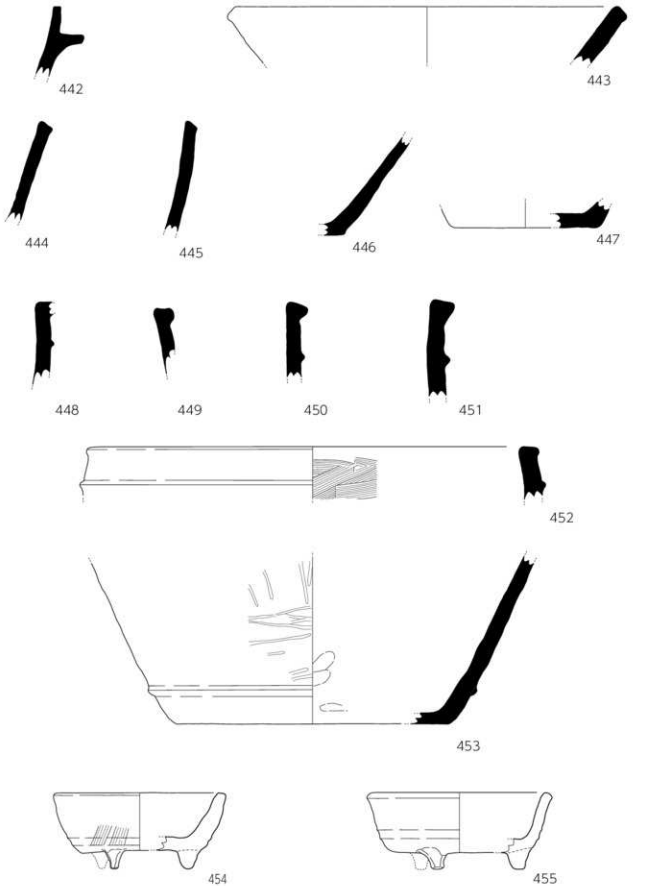
破片であるが滑石製石鍋が出土している。胴部中頃のものであり、鍔をもつ。鍔はあまり発達せず、鍔下の胴部は緩やかに内湾することから13世紀付近のものと推定する。前項にある権状石製品もこの時期辺りのものだろうか。



第180図　包含層出土遺物（中世）①



第 181 図　包含層出土遺物（中世）②



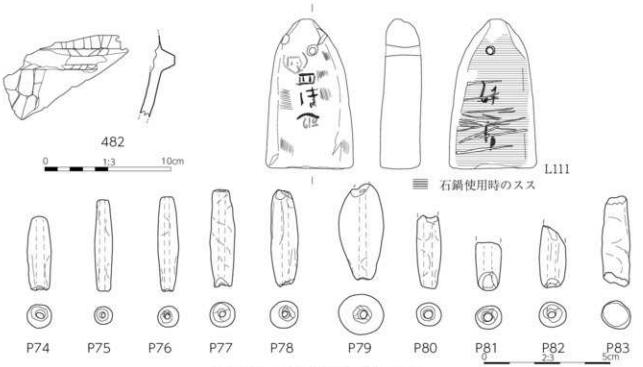
第 182 図　包含層出土遺物（中世）③

6　土錘（第 183 図 P74~P83）

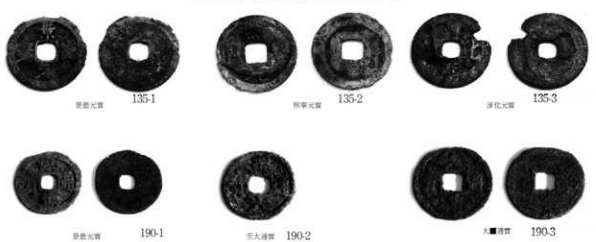
SD58 だけではなく包含層から土錘が数点出土している。長さにはある程度の規格性が認められる一方で、太さについてはばらつきがあり、機能的な面での変化は太さによって異なっているものと推定する。また、は穿孔されておらず、土錘ではない可能性もある。

7　古銭（第 184 図）

遺構のほか、包含層からも古銭が出土している。判読できたものについては第図に掲載しているものとなるが、判読不能のものが多い。種類は宋銭・明銭・元朝銭などであり、これらの流通時期を見ると 14 世紀～ 15 世紀にかけてであるので、土壙墓中に見られた古銭とほぼ同時期にあたる。一方でこれよりも新しい時期のものは見当たらない。



第 183 図　包含層出土遺物（中世）④



第 184 図　包含層出土古銭

第19表　包含層出土土器（中世）観察表

挿図番号	出土区	遺構	グリッド	出土層位	区分	時期	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	焼成	備考
429	23	−	−		土師器	中世	小皿	口縁～底部	7.1	2.3	4.9	長石, 雲母, 褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
430	23	−	−		土師器	中世	小皿	口縁～底部	7.5	2.1	5.3	石英, 角閃石, 雲母, 褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue2.5YR6/8	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
431	24	−	X19-20		土師器	中世	皿	口縁～底部	(11.2)	1.6	(8.5)	長石	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
432	24	−	X19-25		土師器	中世	小皿	完形	8.1	1.4	7.6	長石	にぶい橙 Hue10YR 7/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
433	23	−	−		土師器	中世	小皿	口縁～底部	(8.4)	1.7	(6.2)	長石, 角閃石, 雲母	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
434	20	−	−		土師器	中世	杯	底部	−	(1.9)	(8.1)	角閃石, 雲母, 褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	外面に煤付着
435	19	−	−		土師器	中世	杯	杯部～底部	−	(2.4)	(7.4)	長石, 雲母, 褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
436	19	−	L19-17		土師器	中世	杯	口縁～底部	(10.9)	3.4	(6.4)	雲母, 褐色土粒	橙 Hue7.5YR 7/6	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
437	4	−	K16-15		土師器	中世	杯	口縁～底部	(10.4)	3.4	(6.6)	褐色土粒	にぶい橙 Hue5YR7/4	にぶい橙 Hue5YR7/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
438	23	−	−		土師器	中世	小皿	口縁～底部	(10.8)	2.8	(8.4)	長石, 角閃石, 雲母, 褐色土粒	にぶい橙 Hue7.5YR 6/4	にぶい橙 Hue5YR 6/4	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
439	23	−	−		土師器	中世	小皿	口縁～底部	(11.2)	3.2	(9.1)	角閃石, 雲母, 褐色土粒	橙 Hue5YR7/6	橙 Hue5YR7/6	回転ナデ、糸切り	回転ナデ	良好	
440	13	−	L19-3		土師器	中世	杯	口縁～底部	(10.0)	2.8	(7.2)	角閃石, 褐色土粒	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	にぶい黄橙 Hue10YR7/4	回転ナデ	回転ナデ	良好	
441	29	−	−		瓦質土器	中世	羽釜	口縁	−	(5.4)	−	長石, 雲母	にぶい黄橙 Hue10YR7/3	灰黄褐 Hue10YR4/2	ナデ	ナデ	良	
442	13	−	L19-17		瓦質土器	中世	擂鉢	口縁	(31.0)	(4.4)	−	長石, 角閃石, 雲母, 褐色土粒	浅黄 Hue2.5Y7/4	にぶい黄 Hue2.5Y6/3	回転ナデ	回転ナデ, 擂目	良好	擂目5条
443	29	−	−		瓦質土器	中世	擂鉢	口縁～胴部	(30.4)	(7.7)	−	長石, 輝石	灰 Hue5Y6/1	黄灰 Hue2.5Y5/1	回転ナデ	回転ナデ, 擂目	良好	擂目5条
444	29	−	−		瓦質土器	中世	擂鉢	口縁～胴部	−	(6.6)	−	長石, 輝石	灰黄 Hue2.5Y6/2	灰黄 Hue2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ, 擂目	良好	擂目6条
445	29	−	−		瓦質土器	中世	擂鉢	胴部～底部	−	(7.6)	(9.4)	長石, 輝石	灰 Hue5Y6/1	灰 HueN5/0	ナデ	回転ナデ, 擂目	良好	擂目5条
446	28	−	L19-5		瓦質土器	中世	擂鉢	底部	−	(2.0)	(11.6)	長石	橙 Hue7.5YR 6/6	灰黄褐 Hue10YR6/2	指頭圧痕, ナデ	ナデ, 擂目	良	擂目6条
447	29	−	L20-9		瓦質土器	中世	火鉢	口縁	−	(6.4)	−	長石, 角閃石, 雲母	灰 HueN6/0	灰 HueN6/0	ヘラケズリ, 回転ナデ	回転ナデ	良	スタンプ, 胴部突帯1条
448	29	−	−		瓦質土器	中世	火鉢	口縁	(45.6)	(5.3)	−	長石	灰 HueN4/0	灰 HueN4/0	回転ナデ	回転ナデ	良	スタンプ
449	6	−	−		瓦質土器	中世	火鉢	口縁	−	(5.8)	−	長石, 雲母	黄灰 Hue2.5Y5/1	にぶい黄橙 Hue10YR6/4	回転ナデ	回転ナデ	良好	スタンプ（花文）
450	19	−	L19-17		瓦質土器	中世	火鉢	口縁	−	(7.5)	−	長石, 角閃石, 雲母, 褐色土粒	にぶい黄褐 Hue10YR5/3	にぶい橙 Hue7.5YR 7/4	回転ナデ	回転ナデ	良好	スタンプ（花文）
451	23	−	−		瓦質土器	中世	火鉢	口縁	(35.2)	(4.1)	−	雲母	浅黄 Hue2.5Y7/3	灰黄 Hue2.5Y6/2	回転ナデ	回転ナデ, ハケ目	良好	スタンプ（菊花文）
452	7	−	K17-8		瓦質土器	中世	火鉢	胴部～底部	−	(13.1)	(21.4)	長石, 角閃石, 雲母, 褐色土粒	オリーブ Hue10Y4/2	灰オリーブ Hue7.5Y4/2	ミガキ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕	良好	内面に煤付着
453	23	−	−		瓦質土器	中世	香炉	口縁～脚部	(13.5)	5.9	(9.2)	雲母, 褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ, ナデ, 糸切り	回転ナデ	良好	脚は1ケのみ
454	28	−	−		瓦質土器	中世	香炉	口縁～脚部	(14.4)	5.9	(11.6)	雲母, 褐色土粒	橙 Hue7.5YR 6/6	橙 Hue7.5YR 6/6	回転ナデ	回転ナデ	良好	内外面口縁部に煤付着
681	4	−	K16-4		滑石製品	中世	石鍋	−	−	(6.4)	−	−	−	−	ノミ	ノミ	良好	口縁の下に鍔

第 20 表　包含層出土陶磁器（中世）観察表

挿図番号	区	遺構番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土(色調)	釉(色調)	備考
455	32	I22-9	青磁	碗	−	−	(2.7)	白茶 C135	カーキ色 C232	しのぎ連弁文
456	34	I22-4	青磁	碗	(19.4)	−	(3.7)	ミンクの灰色 C244	カーキ色 C232	しのぎ連弁文
457	34	I22-4	青磁	碗	−	−	(3.6)	灰白 C144	瓦の鼠茶 C293	しのぎ連弁文
458	34	I22-4	青磁	碗	(12.6)	−	(3.6)	白茶 C135	カーキー色 C232	しのぎ連弁文
459	19	L19-17	青磁	碗	−	−	(3.6)	ミンクの灰色 C244	鉄の緑 C290	しのぎ連弁文
460	23	一括	青磁	碗	−	−	(4.3)	灰白 C144	焦茶色 C228	連弁文
461	7	K17-8 № 1	青磁	碗	(13.0)	−	(4.7)	灰白 C144	すずかけの樹の色 C216	連弁文，貫入
462	4	K17-11	青磁	皿	(12.0)	−	(2.9)	灰白 C144	龍泉窯青磁色 C207	連弁文
463	1	K16-17	青磁	皿	(9.8)	−	(2.6)	ねずみ色 C292	すずかけの樹の色 C216	貫入
464	24	N19-25	青磁	小皿	−	(3.2)	(1.1)	かもしか色 C106	しろがねの色 C300	
465	24	N19-25	青磁	小皿	−	(3.0)	(1.4)	鹿皮の茶 C96	灰白 C144	
466	28	一括	青磁	碗	−	(7.0)	(1.5)	カーキー色 C76	月の白色 C209	見込蛇の目釉剥ぎ
467	19	L19-16	青磁	碗	−	(5.8)	(5.6)	褐色 C128	枯茅色 C157	
468	34	一括	青磁	皿	(11.2)	−	(1.9)	ベージュ C218	白茶 C135	
469	19	一括	白磁	碗	−	(4.8)	(2.8)	かもしか色 C106	枯茅色 C157	高台内露胎
470	24	N19-25	青磁	碗	−	(6.4)	(3.1)	雪の灰白 C282	鉛の灰色 C211	高台内露胎
471	32	I22-3	青磁	碗	−	(6.8)	(2.2)	すずかけの樹の色 C216	すずかけの樹の色 C216	高台内露胎，貫入
472	18	L18-25	青磁	皿	12.4	6.0	3.0	雪の灰色 C241	銀灰色 C143	見込露胎
473	20	一括	青磁	鉢	−	−	(2.2)	銀灰色 C143	すずかけの樹の色 C216	高台内露胎
474	21	2 トレンチ	青磁	碗	−	(6.4)	(2.5)	ミンクの灰色 C244	すずかけの樹の色 C216	
475	32	I22-10	陶器	皿	(12.6)	(6.9)	2.6	薄白茶 C103	あひるの卵の薄青 C204	口縁部露胎
476	19	L19-9	陶器	皿	−	(3.0)	(2.1)	褐色 C128	ミンクの灰色 C244	外面露胎
477	34	I22-8	瓦器	擂鉢	−	12.0	(4.1)	褐色 C128	栗皮色 C133	備前系，擂目7条
478	30	J22-20	陶器	鉢	−	(10.8)	(5.4)	コーヒー色 C110	(外) 枯茶色 C126 (内) 灰白 C144	内器面：ハケによる白化粧 外面：鉄釉，黒釉薬，露胎
479	32	I22-3	染付	皿	−	−	(2.8)	月の白色 C209	春蘭の色 C245	輪花
480	32	I22-9	染付	碗	−	(5.2)	(2.7)	雲の灰白 C241	雲の灰白 C241	畳付け釉剥ぎ

第 21 表　包含層出土土製品（中世）観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	遺構	種別	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	孔径(g)	重量(g)	色調	備考
P73	105	20	−	土製品	土錘	3.70	1.12	0.41	4.87	にぶい黄橙　Hue10YR6/3	
P74	107	23	−	土製品	土錘	4.60	0.89	0.25	2.85	にぶい黄橙　Hue10YR7/3	
P75	102	19	−	土製品	土錘	4.76	1.03	0.27	4.93	にぶい赤褐　Hue5YR5/4	
P76	101	4	−	土製品	土錘	4.91	1.29	0.32	7.05	明黄褐　Hue2.5Y R5/6	
P77	103	19	−	土製品	土錘	4.84	1.36	0.28	8.72	黄灰　Hue2.5Y4/1	
P78	109	32	−	土製品	土錘	4.74	2.16	0.35	18.95	にぶい黄橙　Hue10YR5/3	
P79	108	28	−	土製品	土錘	3.64	1.25	0.36	4.40	黒褐　Hue2.5Y3/2	
P80	104	16	−	土製品	土錘	2.47	1.26	0.43	2.56	にぶい赤褐　Hue5YR5/4	
P81	106	20	−	土製品	土錘	3.10	1.33	0.33	4.24	にぶい黄橙　Hue10YR6/3	
P82	110	19	−	土製品	土錘	4.55	1.43	穿孔なし	8.75	橙　Hue7.5YR6/6	

第 3 部　自然科学的分析

塔ノ木遺跡出土の遺物等について、以下の自然科学的分析を依頼した。

1　遺跡出土炭化物炭素年代測定

（株）地球科学研究所が業務委託により実施した。

なお、報告書中の試料名に遺構番号や対象物の種類について記載がないため、以下で補足する。

（1）試料番号1　SI06出土　炭化物（藁）

（2）試料番号2　SI12出土　炭化物（竹）

（3）試料番号3　SK262出土　炭化物（堅果：ドングリ）

（4）試料番号4　SI12出土　炭化物（米）

2　塔ノ木3号墳（SZ03）石棺内出土人骨

当町教育委員会からの依頼により特定非営利活動法人人類学研究機構松下孝幸氏、松下真実氏によって分析が実施され、同氏から玉稿を賜った。

なお、次頁以降は業務委託報告書及び分析の論考を先方の体裁のまま掲載するため、本誌における体裁と異なる点がある。

塔ノ木遺跡埋蔵文化財発掘調査に係る炭素年代測定

業務委託報告書

(株)地球科学研究所

嘉島町教育委員会　様

20026950
(株)地球科学研究所

件名 **塔ノ木遺跡埋蔵文化財発掘調査に係る炭素年代測定**

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

Conventional Radiocarbon Age(14C年代) ：

半減期 ： リビーの半減期(5568年)

Modern Reference Standard ： SRM-4990C

同位体分別の補正： δ 13Cを-25‰に規格化することによって同位体分別の補正を行った

基準年(0 BP) ： A.D.1950

放射性炭素濃度は一定であったと仮定する

参考：Stuiver,M. and Polach,H.A.(1977) Discussion:Reporting of 14C data. Radiocarbon, 19

δ 13C (permil) ： この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta\ ^{13}C\ (‰) = \frac{(\ ^{13}C/\ ^{12}C)[\text{試料}] - (\ ^{13}C/\ ^{12}C)[\text{標準}]}{(\ ^{13}C/\ ^{12}C)[\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、 $^{13}C/\ ^{12}C[\text{標準}] = 0.0112372$である。

暦 年 代 ： 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。 具体的には年代既知の樹木年輪の 14C の測定、サンゴのU-Th年代と 14 C年代の比較、湖の縞状堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。

使用したデータセット ： Intcal13もしくは Marine13

Reimer, PJ, Bard, E, Bayliss, A, Beck, JW, Blackwell, PG, Bronk Ramsey, C, Buck, CE, Cheng, H, Edwards, RL, Friedrich, M, Grootes, PM, Guilderson, TP, Haflidason, H, Hajdas, I, Hatté, C, Heaton, TJ, Hoffmann, DL, Hughen, KA, Kaiser, KF, Kromer, B, Manning, SW, Niu, M, Reimer, RW, Richards, DA, Scott, EM, Southon, JR, Staff, RA, Turney, CSM, van der Plicht, J Hogg, A 2013, 'IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP' Radiocarbon, vol 55, no. 4, pp. 1869-1887.

較正曲線のスムース化に用いた理論

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

Talma, A.S., Vogel,J.C.,1993,Radiocarbon 35(2), 317-322

測定方法などに関するデータ

測定方法 **AMS** ： 加速器質量分析

処理・調製・その他 ： 試料の前処理、調製などの情報

前処理 acid-alkali-acid： 酸 - アルカリ - 酸洗浄
acid washes： 酸洗浄
acid etch： 酸によるエッチング
none ：未処理

調製、その他

Bone Collagen Extraction： 骨、歯などのコラーゲン抽出

Cellulose Extraction ： 木材のセルローズ抽出

分析機関 **BETA ANALYTIC INC. (ISO 17025 accredited)**

4985 SW 74 Court, Miami, Fl, U.S.A 33155

*前処理からAMS測定まですべて上記場所の特別に設計された実験施設で行われます。

C14年代測定結果

嘉島町教育委員会 様　20026950

測定コード	試料名	Conventional Radiocarbon Age (BP) (14C年代)	δ 13C(‰)
1 ; Beta- 427498	No.1	380 ± 30	-11.5

測定方法-納期：AMS-Standard
試料種：charred material　**前処理**：acid/alkali/acid
2sigma calendar: Cal AD 1445 to 1525 (Cal BP 505 to 425) and Cal AD 1555 to 1630 (Cal BP 395 to 320)

2 ; Beta- 427499	No.2	370 ± 30	-27.0

測定方法-納期：AMS-Standard
試料種：charred material　**前処理**：acid/alkali/acid
2sigma calendar: Cal AD 1445 to 1530 (Cal BP 505 to 420) and Cal AD 1545 to 1635 (Cal BP 405 to 315)

3 ; Beta- 427500	No.3	2920 ± 30	-25.5

測定方法-納期：AMS-Standard
試料種：charred material　**前処理**：acid/alkali/acid
2sigma calendar: Cal BC 1215 to 1015 (Cal BP 3165 to 2965)

4 ; Beta- 427501	No.4	380 ± 30	-24.9

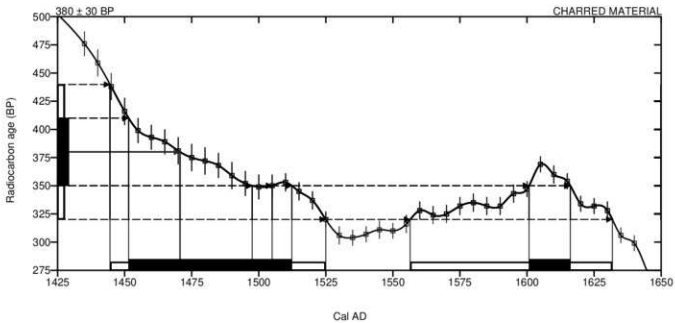
測定方法-納期：AMS-Standard
試料種：charred material　**前処理**：acid/alkali/acid
2sigma calendar: Cal AD 1445 to 1525 (Cal BP 505 to 425) and Cal AD 1555 to 1630 (Cal BP 395 to 320)

年代値はRCYBP(1950 A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic Acidの
C14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12 = -11.5 o/oo : lab. mult = 1)

Laboratory number	**Beta-427498 : NO.1/50069**
Conventional radiocarbon age	**380 ± 30 BP**
Calibrated Result (95% Probability)	**Cal AD 1445 to 1525 (Cal BP 505 to 425)** **Cal AD 1555 to 1630 (Cal BP 395 to 320)**
Intercept of radiocarbon age with calibration curve	Cal AD 1470 (Cal BP 480)
Calibrated Result (68% Probability)	Cal AD 1450 to 1510 (Cal BP 500 to 440) Cal AD 1600 to 1615 (Cal BP 350 to 335)



Database used

INTCAL13

References

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates, Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

References to INTCAL13 database

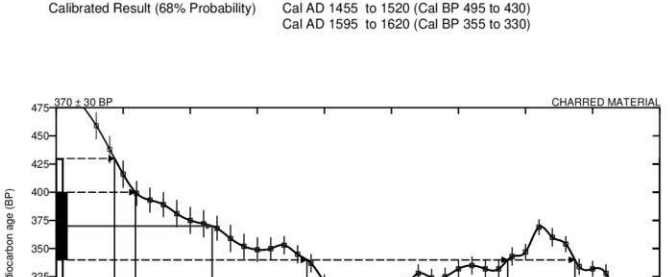
Reimer PJ et al. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4):1869–1887., 2013.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • Email: beta@radiocarbon.com

(Variables: C13/C12 = -27 o/oo : lab. mult = 1)

Laboratory number	**Beta-427499 : NO.2/50070**
Conventional radiocarbon age	**370 ± 30 BP**
Calibrated Result (95% Probability)	**Cal AD 1445 to 1530 (Cal BP 505 to 420)** **Cal AD 1545 to 1635 (Cal BP 405 to 315)**
Intercept of radiocarbon age with calibration curve	Cal AD 1485 (Cal BP 465)
Calibrated Result (68% Probability)	Cal AD 1455 to 1520 (Cal BP 495 to 430) Cal AD 1595 to 1620 (Cal BP 355 to 330)



Database used

INTCAL13

References

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates, Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

References to INTCAL13 database

Reimer PJ et al. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4):1869–1887., 2013.

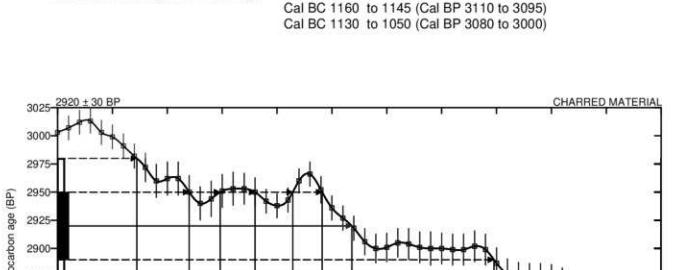
Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • Email: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12 = -25.5 o/oo : lab. mult = 1)

Laboratory number	**Beta-427500 : NO.3/50071**
Conventional radiocarbon age	**2920 ± 30 BP**
Calibrated Result (95% Probability)	**Cal BC 1215 to 1015 (Cal BP 3165 to 2965)**
Intercept of radiocarbon age with calibration curve	Cal BC 1115 (Cal BP 3065)
Calibrated Result (68% Probability)	Cal BC 1190 to 1175 (Cal BP 3140 to 3125) Cal BC 1160 to 1145 (Cal BP 3110 to 3095) Cal BC 1130 to 1050 (Cal BP 3080 to 3000)



Database used

INTCAL13

References

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates, Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

References to INTCAL13 database

Reimer PJ et al. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4):1869–1887., 2013.

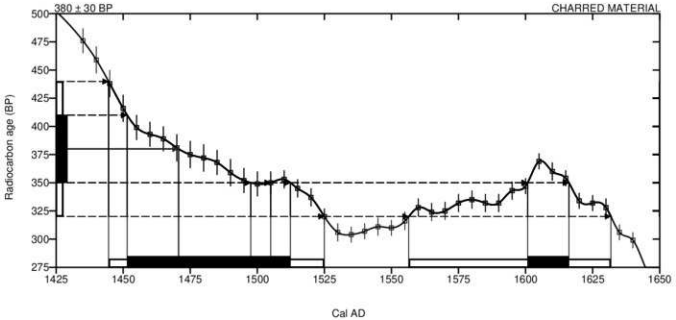
Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • Email: beta@radiocarbon.com

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12 = -24.9 o/oo : lab. mult = 1)

Laboratory number	**Beta-427501 : NO.4/50072**
Conventional radiocarbon age	**380 ± 30 BP**
Calibrated Result (95% Probability)	**Cal AD 1445 to 1525 (Cal BP 505 to 425)** **Cal AD 1555 to 1630 (Cal BP 395 to 320)**
Intercept of radiocarbon age with calibration curve	Cal AD 1470 (Cal BP 480)
Calibrated Result (68% Probability)	Cal AD 1450 to 1510 (Cal BP 500 to 440) Cal AD 1600 to 1615 (Cal BP 350 to 335)



Database used

INTCAL13

References

Mathematics used for calibration scenario

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates, Talma, A. S., Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2):317-322

References to INTCAL13 database

Reimer PJ et al. IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon 55(4):1869–1887., 2013.

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-5167 • Fax: (305)663-0964 • Email: beta@radiocarbon.com

BETA

Consistent Accuracy Delivered On Time

Beta Analytic Inc
4985 SW 74 Court
Miami, Florida 33155
Tel: 305-667-5167
Fax: 305-663-0964
beta@radiocarbon.com
www.radiocarbon.com

Mr. Darden Hood
President

Mr. Ronald Hatfield
Mr. Christopher Patrick
Deputy Directors

The Radiocarbon Laboratory Accredited to ISO/IEC -17025:2005 Testing Standards (PJLA Accreditation #59423)

Quality Assurance Report

This report provides the results of reference materials used to validate radiocarbon dating results on unknown materials, prior to reporting. Known age reference materials were analyzed as QA measurements to verify the accuracy of the results. These are analyzed in multiple detectors. This report quotes the results of the QA measurements.

Report Date: January 6, 2016
Submitter: Mr. Sumihisa Matsuyama

QA MEASUREMENTS

Reference Sample (IAEA-C3)

Expected value:	129.41 +/- 0.06 pMC
Measured value:	128.90 +/- 0.41 pMC
Agreement:	accepted

Reference Sample

Expected age:	30300 +/- 200 BP
Measured age:	30660 +/- 160 BP
Agreement:	accepted

Reference Sample (IAEA-C2)

Expected value:	7130 +/- 10 BP
Measured value:	7140 +/- 30 BP
Agreement:	accepted

COMMENT: All standards were within accepted ranges.

Validation: Darden Hood Date: January 6, 2016

熊本県嘉島町塔ノ木遺跡３号墳出土の古墳人骨

松下真実*・松下孝幸**

【キーワード】：熊本県、古墳人骨、保存不良、石棺、追葬

はじめに

熊本県上益城郡嘉島町大字北甘木字豆坂に所在する塔ノ木遺跡３号墳の発掘調査が土地区画整理事業に伴っておこなわれ、2008(平成20)年度の調査で古墳時代に築造されたと推測される３号墳の主体部（石棺）から人骨が出土した。

３号墳石棺石蓋

３号墳石棺

熊本県内での古墳人骨については、益城町の福原横穴群(松下・他、1985a)、城の本２号墳(松下、2006b)、玉名市小路石棺(松下、1985b)、熊本市の古城横穴墓群(松下・他、1985c)、五丁中原遺跡群(松下、1997)、御幸木部遺跡群(松下、2006c)、北岡横穴群、小塚遺跡、飛田遺跡群および飛尾横穴群(旧城南町)(松下・他、2009)、山鹿市の津袋大塚東側１号石棺(旧鹿本町)(松下・他、1986a)、湯の口横穴墓群(松下・他、1986b、1988)、舞野遺跡(松下・他、1989c)、広諏詰原遺跡(旧鹿央町)（松下、2004)、宇土市西潤野２号墳(松下・他、1992)、合志市豊岡宮本横穴群(旧合志町)(松下、2006a)、菊池市瀬戸口横穴墓(旧七城町)(松下・他、1989a) 美里町四十八塚５号墳(旧中央町)(松下・他、1989b)から出土した例があるが、横穴群は盗掘を受けているものが多く、人骨の保存状態はあまりよくなかった。上記のうち保存状態が比較的良好であったのは、津袋大塚東側１号石棺、中央町四十八塚５号墳、西潤野２号墳、豊岡宮本横穴墓群、飛田遺跡群の円形周溝墓から出土した人骨ぐらいしかない。

本古墳から検出された人骨は、きわめて遺存状態が悪かったが、人類学的観察などをおこなったので、その結果を報告しておきたい。

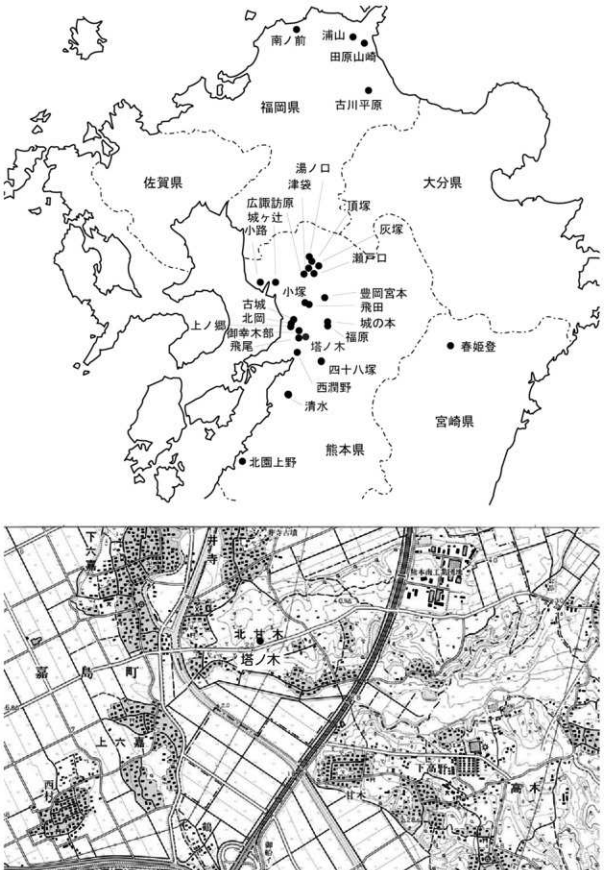


図１．遺跡の位置（1/25,000）

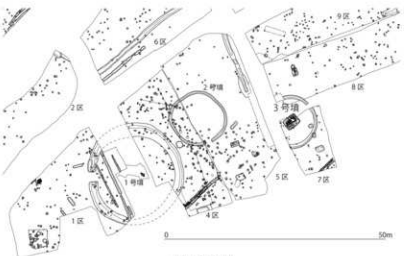
(Fig.1 Location of the Tounoki tumulus3, Kashima Cho, Kumamoto Prefecture)

資　料

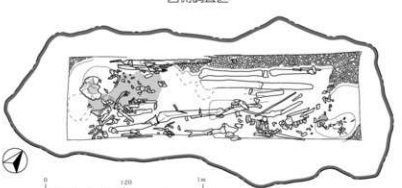
３号墳主体部の石棺から人骨が検出された。人骨の遺存状態はきわめて悪く、ほとんど骨種を同定することができない状態である。筆者らは現場で人骨を実見していないが、人骨は個体ごとに１号から４号までの番号が付けられて取り上げられていた。石棺内の北東がわに１号人骨と３号人骨の頭蓋が位置し、２号人骨と４号人骨の頭蓋は南西がわに置かれていたようである。

この古墳は考古学的所見から古墳時代中期に造られたと推測されているので、この４体の人骨は古墳人骨である。副葬品としては、鉄剣、竪櫛が検出されている。

表１に示すとおりこの石棺からは検出されたのは合計４体の人骨で、男性２体、女性１体、小児１体であった。埋葬の順番は不明であるが、比較的骨の保存状態が良好であった１号人骨が最後に葬られた被葬者の遺体の可能性が考えられる。各人骨の残存状態は図２に示すとおりで、保存状態は極めて悪い。年齢区分に関しては表３の基準のとおりである。



西側調査区



３号墳主体部（石棺）

表１　資料数（Table 1. Number of materials)

成　人			小　児	合　計
男性	女性	不明		
2	1	0	1	4

表２　出土人骨一覧（Table 1List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	頭位
１号人骨	男性	成年（１６～２０歳）	南西
２号人骨	女性	不明	北東
３号人骨	男性	不明	南西
４号人骨	－	小児（６～７歳）	北東

表3　年齢区分 (Table 3. Division of age)

	年齢区分	年　　齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳　(第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳　(第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳　(蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳　(40歳未満)
	熟年	40歳～59歳　(60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書 (1996) を参照されたい。

所　見

1号人骨 (男性・成年 [16～20歳])

残存していた骨は保存状態はきわめて悪く、骨片状態であった。頭蓋や肋骨、胸骨に赤色顔料が付着していた。

1．頭蓋

保存状態は悪く、左側頭頂骨と左側側頭骨の一部と、右側頭頂骨から後頭骨にかけて残存していた。縫合は、矢状縫合とラムダ縫合の一部が確認できた。矢状縫合とラムダ縫合は、内外両板とも明瞭で、開離している。

下顎骨は、下顎体の一部が残存しているにすぎない。

2．歯

遊離歯が残存していた。残存歯の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

8 7 6 5 4 3 ／ 1	1 ／ 3 4 5 6 7 ／　[／：不明（破損）]
／ 7 6 5 4 3 2 ／	／ ／ 3 4 5 6 7 ／

(1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯)

咬耗度はBrocaの1度（咬耗がエナメル質のみ）である。歯の咬合形式は不明である。

3．四肢骨

(1) 上肢骨

肩甲骨、胸骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

①上腕骨

左側の骨体が残存していた。骨体は細く短いが、上腕骨小頭は大きい。三角筋粗面の発達はそれほど強くない。

②橈骨

左側の骨体が残存していた。骨体は細い。近位骨端はまだ癒合していない。

③尺骨

左側の骨体の一部が残存していた。保存状態は悪く形質的特徴は不明である。

（2）下肢骨

寛骨、大腿骨のみが残存していた。

①寛骨

左側の腸骨体の一部が残存していた。辛うじて大坐骨切痕が確認できた。大坐骨切痕の角度は小さい。

②大腿骨

左側の骨体上部後面が残存していた。大転子はまだ癒合していない。保存状態は悪く形質的特徴は不明である。計測はできなかった。

4．性別・年齢

性別は、大坐骨切痕の角度が小さいことから男性と推定した。年齢は、上顎第３大臼歯の歯根形成程度と大腿骨大転子及び橈骨近位骨体がまだ未癒合状態であることから成年（１６～２０歳）と推定した。

２号人骨（性別・年齢不明）

頭蓋片、肋骨、椎骨、上腕骨、橈骨、尺骨、寛骨、大腿骨、膝蓋骨が残存していたが、保存状態は極めて悪い。

1．歯

遊離歯が残存していた。残存歯の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／７６５４３／／	／／３４５６７８
８７６５４／２／	１２３４５６７８

[／：不明（破損）]

（1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯）

咬耗度はBrocaの１度（咬耗がエナメル質のみ）～２度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。歯の咬合形式は不明である。

2．四肢骨

①上腕骨

両側の内側上顆のみ残存していた。保存状態はきわめて悪い。内側上顆は小さい。

②橈骨

右側の近位端が残存していた。保存状態は悪い。橈骨頭や骨体はかなり小さい。

③尺骨

右側の肘頭から滑車切痕にかけて残存していた。右側の保存状態は悪い。赤色顔料が付着している。尺骨上端は小さい。

④寛骨

右側の腸骨体の一部が残存していた。腸骨体表面は剥離し海綿質が露出しており、保存状態はきわめて悪い。大坐骨切痕の様態は不明である。

3．性別・年齢

性別は、四肢骨が小さいことから女性と推定した。年齢は不明である。

3号人骨（男性・年齢不明）

頭蓋、下顎骨、胸骨体、鎖骨、肋骨が残存していたが、保存状態は著しく悪い。

1．下顎骨

右側の下顎角のみが残存していた。咬筋粗面の発達は比較的良好である。

2．歯

遊離歯が残存していた。残存歯の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

8 ／ ／ 5 4 ／ 2 ／	／ ／ 3 4 5 6 7 8
8 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8

［／：不明（破損）］

（1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯）

咬耗度はBrocaの1度（咬耗がエナメル質のみ）～2度（咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ）である。歯の咬合形式は不明である。

3．性別・年齢

性別は、下顎骨の咬筋粗面の発達が比較的良好で、歯冠が大きいことから男性と推定した。年齢は不明である。

4号人骨（小児、6～7歳）

1．歯

遊離歯のみが残存していた。残存歯の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

（乳歯）

／ ／ Ⅲ ／ ／	／ ／ Ⅲ ／ ／
Ⅴ ／ ／ ／ ／	／ ／ ／ ／ Ⅴ

［／：不明（破損）］

（Ⅰ：乳中切歯、Ⅱ：乳側切歯、Ⅲ：乳犬歯、Ⅳ：第一乳臼歯、Ⅴ：第二乳臼歯）

（永久歯）

／ 7 6 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 6 7 ／
／ 7 6 ／ 4 ／ 2 1	1 2 ／ 4 ／ 6 7 ／

［／：不明（破損）］

（1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯）

咬耗度は Broca の1度（咬耗がエナメル質のみ）である。歯の咬合形式は不明である。

2．性別・年齢

年齢は、乳歯の残存状態及び永久歯の歯冠の咬耗状態と歯根形成程度から6～7歳と推定した。性別は不明である。

要　約

熊本県上益城郡嘉島町大字北甘木字豆坂に所在する塔ノ木遺跡３号墳の発掘調査が土地区画整理事業に伴っておこなわれ、３号墳の内部主体である石棺から４体の人骨が検出された。保存状態は著しく悪かったが、人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

1．１基の石棺内から４体分の人骨が検出されたが、４体のうち３体は成人骨で、残りの１体は小児骨（６～７歳）である。成人骨は２体が男性骨で、１体は女性骨であったが、男性骨のうち１体は比較的若い成年（１６～２０歳）であった。

2．この人骨は、考古学的所見から、古墳時代中期に属する人骨である。

3．この石棺墓からは副葬品として鉄剣、竪櫛が検出された。

4．埋葬順序は不明であるが、骨の保存状態から最後に埋葬されたのは１号被葬者（１号人骨）と考えられる。

5．人骨の残存状態が著しく悪いので、被葬者の形質の詳細を知ることはできなかったが、１号人骨（男性）の上腕骨は、遠位部の径がやや大きい割には、骨体は細いようである。また、２号人骨（女性）の橈骨の径はかなり小さい。男性の体格はよくわからないが、女性は橈骨の大きさから推測するとかなり小さな体格だったようである。本遺跡の周辺からは弥生人骨が多数出土しているので、今後、弥生人との関連を検討していきたい。

謝辞

＜擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた嘉島町教育委員会の皆様方に感謝致します。＞

＜参考文献＞

1. 北條輝幸、1982：人骨。妻の鼻墳墓群（本渡市文化財調査報告第１集）：53-60.

2. 松下真実・他、熊本市北岡横穴群出土の古墳人骨（２）（投稿中）

3. 松下真実・他、熊本市北岡横穴群出土の古墳人骨（３）（投稿中）

4. 松下真実・他、熊本市飛田遺跡群出土の古墳人骨（投稿中）

5. 松下真実・他、熊本市小塚古墳群３号墳出土の古墳人骨（投稿中）

6. 松下孝幸・他、1985a：熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨。福原横穴墓群（熊本県文化財調査報告第77集）：29-42.

7. 松下孝幸、1985b：玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡（玉名市文化財調査報告第６集）：32-48,57-61.

8. 松下孝幸・他、1985c：熊本市古城横穴墓群出土の古墳時代人骨。古城横穴墓群（熊本県文化財調査報告第74集）：129-146.

9. 松下孝幸・他、1986a：熊本県鹿本町津袋大塚東側１号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側１号石棺出土人骨研究報告書（鹿本町文化財調査研究報告第２集）：5-33.

10. 松下孝幸・他、1986b：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群菊池川中流域古墳・横穴

群　総合調査報告書 (1)(山鹿市立博物館調査報告書第５集) : 111-122.

11. 松下孝幸・他、1988：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群 (Ⅱ) 菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書 (3)(山鹿市立博物館調査報告書第８集) : 53-63.

12. 松下孝幸・他、1989a：熊本県七城町瀬戸口横穴墓出土の古墳時代人骨。北上原古墳・瀬戸口横穴墓群 (熊本県文化財調査報告第 104 集):97-107.13.　松下孝幸・他、1989b：熊本県下益城郡中央町四十八塚５号墳出土の古墳時代人骨。堅志他城跡・四十八塚古墳 (熊　本県下益城郡中央町文化財調査報告第１集) : 77-114.

14. 松下孝幸・他、1989c：熊本県山鹿市舞野遺跡出土の古墳時代人骨。銭亀塚古墳ほか (菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書 (4)(山鹿市立博物館調査報告書第９集) : 71-82.

15. 松下孝幸・他、1992：熊本県宇土市西潤野２号墳出土の古墳時代人骨。立岡古墳群 (宇土市埋蔵文化財調査報告書第 19 集) : 71-84.

16. 松下孝幸、1997：熊本市五丁中原遺跡群第１次調査区３号墳周溝内墓壙出土の古墳時代人骨。五丁中原遺跡 (五丁中原遺跡第１次調査区発掘調査概要報告書) : 25-26.

17. 松下孝幸、2004：熊本県鹿央町広源寺原遺跡出土の古墳人骨。鹿央町文化財報告書広源寺原遺跡 (町民テニスコート新設工事及び農村総合整備事業農道７号工事に伴う埋蔵文化財調査報告書) : 27-34.

18. 松下孝幸、2006a：熊本県合志町豊岡宮本横穴群出土の古墳人骨。豊岡宮本横穴群 (熊本県合志町文化財調査報告第２集) : 57-84.

19. 松下孝幸、2006b：熊本県益城町「城の本２号墳」出土の古墳人骨。城の本２号墳 (益城町文化財調査報告第 20 集): 37-42.

20. 松下孝幸、2006c：熊本市御幸木部外村屋敷遺跡出土の古墳人骨。御幸木部遺跡群 (国土交通省熊本河川国道事務所加勢川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査)(熊本県文化財調査報告第 233 集) : 81-90.

21. 松下孝幸・他、2009：熊本県城南町飛尾横穴群出土の古墳人骨。飛尾横穴群 (熊本県埋蔵文化財調査報告第 246 集): 38-46.

22. 松下孝幸・他、熊本市北岡横穴群出土の古墳人骨（投稿中）

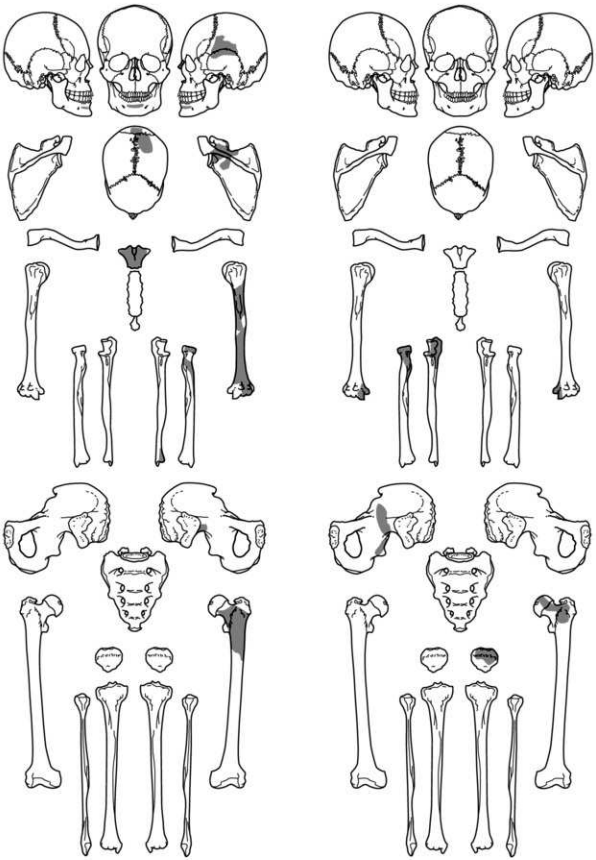
23. 内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾５号墳出土の人骨について。塚原 (熊本県文化財調査報告第 16 集) : 317-322.

24. 内藤芳篤・他、1980：清水１号古墳出土の人骨。清水古墳・野寺遺跡・林源衛門墓 (熊本県文化財調査報告書第 41 集): 22-28.

25. 分部哲秋・他、1991：熊本県菊鹿町灰塚古墳出土の人骨。灰塚古墳 (県営畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査)(熊本県文化財調査報告第 114 集) : 49-59.

26. 松下孝幸・他、水俣市北園上野古墳群出土の中世・古墳人骨（投稿中）

＊ Masami　MATSUSHITA、＊＊ Takayuki　MATSUSHITA
（特定非営利活動法人人類学研究機構）



1号人骨（男性・成年）　　2号人骨（女性・年齢不明）

図2　人骨の残存図（アミかけ部分）

(Fig.2 Regions of Preservasion of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

第４部　総括

第1章 塔ノ木遺跡の調査結果

第1節 調査結果概況

1 塔ノ木遺跡の存続時期

塔ノ木遺跡の調査が実施された結果、縄文時代～中近世にかけての遺構遺物が確認され、特に弥生時代中期～後期初頭及び古墳時代中期、8～9世紀、13～15世紀とおよそ4つの時期にピークを持つ。

2 主要遺構

各時代の遺構については下記のとおりであり、弥生時代以降は墓が目立ち、住居が少ないように見える。これは削平により元来あった地表近くの遺構が飛んでしまっており、深く掘りこまれるもののみが残るということが起因している可能性は否めない。

各時代における主要な遺構としては、まとめると以下のものとなる。

（1）縄文時代　土坑・集石遺構
（2）弥生時代　甕棺墓・土壙墓
（3）古墳時代　古墳・土壙墓・木棺墓
（4）古代　竪穴住居祉・土壙墓・溝
（5）中世　土壙墓・溝・地下式坑・不明遺構

前述したように原地表面が削平されたことによる遺構喪失の影響か土壙墓が各時代通じて目立つ。

3 出土遺物

各時代における遺物の組成は以下のとおりである。

（1）旧石器時代　石器（台形石器）
（2）縄文時代　土器（深鉢･浅鉢）･　石器（石鏃・打製石斧）
（3）弥生時代　土器（甕、壺、高坏、精製高坏、精製甕、）・石器（磨製石鏃、磨製石斧）
（4）古墳時代　土師器（坏、丸底壺、甕、鉢、高坏）・須恵器（甕、転用硯、円面硯）・鉄器（鉄鏃、鉄刀、鉄剣、刀子、鉄鎌、鉄斧）・木製品（竪櫛）
（5）古代　土師器（坏、皿）･　須恵器（坏、甕、壺）・鉄器（鉄斧、刀子）
（6）中世　土師器（坏、小皿）･　須恵器（すり鉢）･　瓦質土器（すり鉢、火鉢、）･　磁器（碗）・石鍋・権状石製品・古銭

4 時代変遷と遺構等の推移

遺物の構成という観点から見ると、縄文時代は生活用具の様相が強く、堅果類の貯蔵を行っていることもあり住居は確認できなかったものの遺跡周辺に集落を有していた可能性が高い。

続く弥生時代においては土壙墓や甕棺墓といった遺構が多く、遺物組成から見ても生活に伴うものが少なく、祭器的性格の強い精製・彩色土器などが多くある。生活域というよりは墓域が展開していたと見る。

古墳時代では調査区西部に古墳、東部に土壙墓（弥生時代の墓域と重複）が展開する。一部に住居が見られるものの生活用具があまりないなど全体的には生活域よりも墓域の傾向が強い。

古代においては溝・住居・土壙墓が見られ、遺物でも生活に伴うものが見られる。加えて須恵器甕を転用した硯や円面硯、鉄鉢など文具も出土しており、時期によって一般的な集落とは異なる性質を持っているように見受けられる。

中世においては明確な建物址が確認できず、土壙墓が点在する一方で、床面が焼けている深い方形状の土坑や地下式坑などやはり一般集落とは性質が異なる遺構に、すり鉢・火鉢などの瓦質土器と石鍋を転用した権状石製品が出土している。

次章以降でこれらの中でも特徴的なもの、①弥生時代の甕棺墓群、②古墳時代の古墳について考察を行い、改めて塔ノ木遺跡の性格について総括していきたい。

第2章 塔ノ木遺跡の甕棺

第1節 塔ノ木遺跡出土甕棺の様相

1 出土甕棺の概観

遺跡から30基近くの甕棺墓が確認された。そのうち6基については残りが悪く全容がつかめない。残る25基については一定程度以上残存しており分析に耐える資料となる。

2 甕の形態

甕の形態は遺体を入れて埋葬するという性質のものであるため日常的に生活で用いる甕に比べて大型のものが多数を占める。本遺跡出土の甕棺も遺体を納めた甕（主棺）ではその例に漏れず①器高が1m前後に及ぶ大型、②器高60~80cmの中型、③40cm前後の小型に分かれ、蓋となる甕・鉢については主棺の口径に依存するか口縁部を打ち欠いて径を調整するなどの措置が執られる。副棺では鉢と甕が使用されており大きさは主棺に比べて小さいものが選択される。一部埋葬状態から主と副が逆転している事例（17号、18号）も見られるが組み合わせられる土器の形態に大小という対比関係にあるのは変わりない。

3 主棺と副棺における器種選択

主棺は押し並べて甕形が選択される。一部肩が極端にすぼまり壺の口径に近いものも見られ、遺体がそのままの状態で納められるとは考えにくいものもある。その際どのように納棺したのか考えてしまうが、甕棺人骨の残存事例が少ない上該当する甕棺からの人骨残存例がないことから埋葬形態は判然としない。一つの可能性として一旦骨にして埋葬する再葬を行ったことも考えられるが推測の域を出ない。

副棺は鉢・甕が選択される。先述したとおり主棺に比べてやや小さいものを選ぶ傾向にある。主棺口径が肩から上がすぼまる形状のものが多いため、口径が狭くなることが起因するのかは現時点でのサンプル数が少なく限定的であるため本稿では触れないでおく。

器種の組み合わせを見ると

ア 甕-甕 12例（48%）
イ 甕-鉢 8例（32%）
ウ 甕-壺 1例（4%）
エ 単棺（甕） 4例（16%）

のようになっており、甕-甕が約半数、甕-鉢が3分の1、単棺が1割という状況である。基本的に合わせ口式のものであると見て良いかと思う。

4 口径のズレ、口縁打ち欠き

また、甕棺分布圏の境界域付近では甕の供給が不安定なことを反映するためか口径が合わないものを組み合わせ、相互の中心を軸に据えた場合、合わせ口の部分が「ズレる：空く」ことが散見される。本遺跡の場合こうした「ズレ」は起きていないように見える。一方で口縁~肩にかけての部分を意図的に欠損させ口を合わせる例は8例（約3割）、その中で主副ともに打ち欠く例は2例（1割未満）見られる。

5 大型棺・小型棺の比率

甕の大きさという点に着目してみた場合、

ア 大型棺 2例（8%）
イ 中型棺 15例（60%）
ウ 小型棺 8例（32%）

という比率になっており中型のものが多勢を占める。ものの大小が型式差に起因するものも当然あると思われるが、中型以上のものが7割近いことは埋葬者が成人、小型棺埋葬者が子どもという従来からの説を表すのか、実際のところ本遺跡において小型棺からの小児人骨出土例がほとんどないためこれについても推測の域を出ない。次節以降で甕棺の詳細について検討する。

第２節　出土甕棺の属性検討

１　甕の属性と棺への適用

甕棺の時期については諸先達の成果を援用しつつを検討を行っていった。分類においては特に変化しやすい部分、口縁の形状や傾き、調整方法、突帯のあり方などといった諸属性を踏まえ、大きく３種、時期的な変化を加味して３～４段階の区分とした。

（１）甕Ａ

器高が１ｍ前後になる大型の甕であり、口縁が内側に強く張り出し、胴部は外側に弱く傾斜する。いわゆるＫⅢａ式（須玖Ⅱ）とされるものである。

甕Ａ類は出土例が２基に留まるため傾向については詳述できないが口縁下部から胴部にかけて直立気味になるものと胴部にかけて膨らみ、胴部下半においてもその膨らみを保ちつつ底部へ至るもの、とがある。

大型甕が主棺であり、副棺となるものは大型

第185図　甕棺出土位置と甕棺の分類（東地区）

鉢､中型甕（黒髪系）が組み合わせられている。

2）甕B

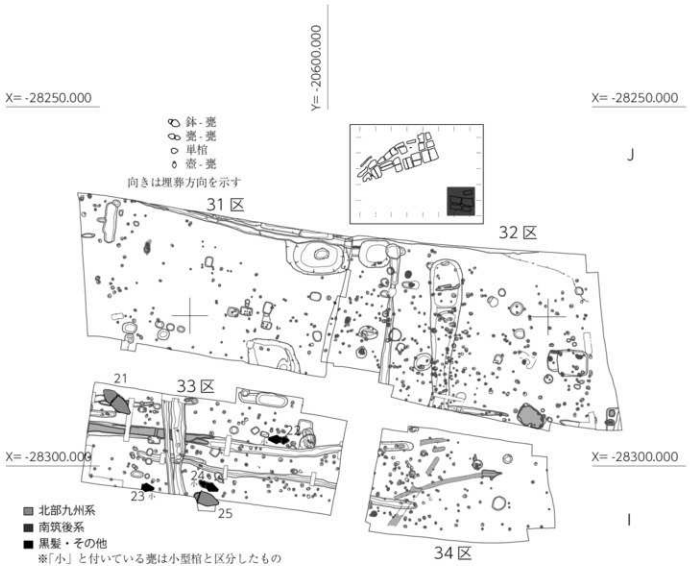
口縁部直下において大きく張り出し、器形は全体に丸みをもつ。胴部中位には2条のコ字形凸帯をめぐらしているもので底部は平底である。内湾することにより一層頸部のすぼまりが強くなっている。

口縁部は内湾しつつも鋤先状口縁の形状を保つものと、くの字を呈するものがあり、口縁の内傾化と鋤先状口縁からくの字への変化を見ることができる。本遺跡から出土している甕棺から4段階の変化を見ることができ、④くの字化した段階を後期とすると､その前段階である②･③は中期末あたりとみるのが妥当であると考える。最も口縁の内傾化が進んだ③の段階では口縁径がもっともすぼまり、それに伴って肩部が強く上に張り出す形状となる。

（3）甕C

口縁は内側に飛び出し、平坦な面を有しており、肩にかけて内側に斜行し胴部へ向かって外へ張り出す。胴部中頃を最大胴部径とし、底部に向かってゆるやかに収束する。肩部・胴部に突帯を巡らし、刻み目を持つものが多く見られる。黒髪式の一群に含まれる甕であり、大きさは主に小型である。

数が3基に限られるため傾向についてははっきりしたことは言えないが、出土位置的に甕Aと墓群をともにしており、併行関係にあると言える。また、A，Bともに熊本外の要素を持つものであるのに対し、Cは中期初頭の城ノ越式から独自の発展を遂げた在地色が強いものである。副棺として小型甕ないしは単棺となる。



第186図　甕棺出土位置と甕棺の分類（東南地区）

2　甕Bにおける差異

今回出土した甕棺の中で、甕AとCは2基と3基で数が少なくまた甕Cに至っては黒髪式における典型例となる甕を欠いているなど、あまり多くのことを語ることは出来ない。ここで中心となるのは甕Bである。

甕Bに関しては非常に大きな枠組みで見れば、一つのものとして捉えることも可能であるが、口縁形状のあり方や胴部の突帯について着目してみると最低でも2つ、多くて4つの違いを見て取れる。

（1）　口縁形状

口縁形状で最も端的な変化としては、くの字形口縁内側の内傾化が挙げられる。それに伴って口縁部の開口径が狭まり、最も内傾するものについては壺のような口縁形状を示す。また、それに伴って頸部直下の肩部の張り出しが増強される。口縁部を除けば芋の葉のような形状である。

（2）　胴部突帯

胴部に施される突帯についても、口縁のあり方と連動して変化が見られる。

まず甕Bの典型例としては「2条のコ字形突帯・下位突帯の刻目」とすれば、鋤先状口縁・内傾化の段階で上位の三角突帯、下位のコの字状・刻目突帯となり、さらに内傾化が進むものでは上位の突帯消失、下位のコの字刻目突帯単体化という傾向を見ることができる。

（3）甕Bにおける段階の整理

現段階において各個体における微細な変化を取り上げて細分するにはまだサンプル数が足りず、詳細検討については見送ることとするが、①口縁部の内傾化、②内傾化に伴う口縁径の縮小、③突帯の省略・単純化の画期が見いだせそうであり、これらの様相が南筑後KⅢb以降の型式を設定しうるのかもしれない。

3　甕棺型式と遺跡内編年

諸属性の検討から甕棺の甕について A,B,C の3つが分類され、それぞれがA（須玖系）、B（南筑後系）、C（黒髪系）と割り当てることが出来る。

AはKⅢa段階であり、弥生時代中期後半にその時期を求められ、Cは黒髪三式、四式とAと同様に中期後半に位置づけられる。一方でBについては、中期後半後葉～後期前半前葉と上記二つに後続する形である。

遺跡内の編年として A,C → B という変化を見ることができよう。加えて興味深いのは墓域がはっきりと異なっていることであり、A,C の墓域は遺跡の南東部に位置し、B の墓域は遺跡の東側である。直線距離にして約 100 m離れており、それぞれが別の墓域と言えるだろう。加えて A,C の墓域には土壙墓がなく、反対に B の墓域には土壙墓が密集するという状況も単なる時期差による様相の違いとは言いがたいものである。

第3節　塔ノ木遺跡における弥生時代の存続時期と甕棺の位置づけ

1　出土遺物

出土遺物全体から見れば、弥生時代における遺跡の存続時期は中期前半～後期前半とすることができる。また、中心時期は中期末～後期前半にあると見ている。この時期を境に古いものもは低調であり、新しい時期のものは見当たらない。

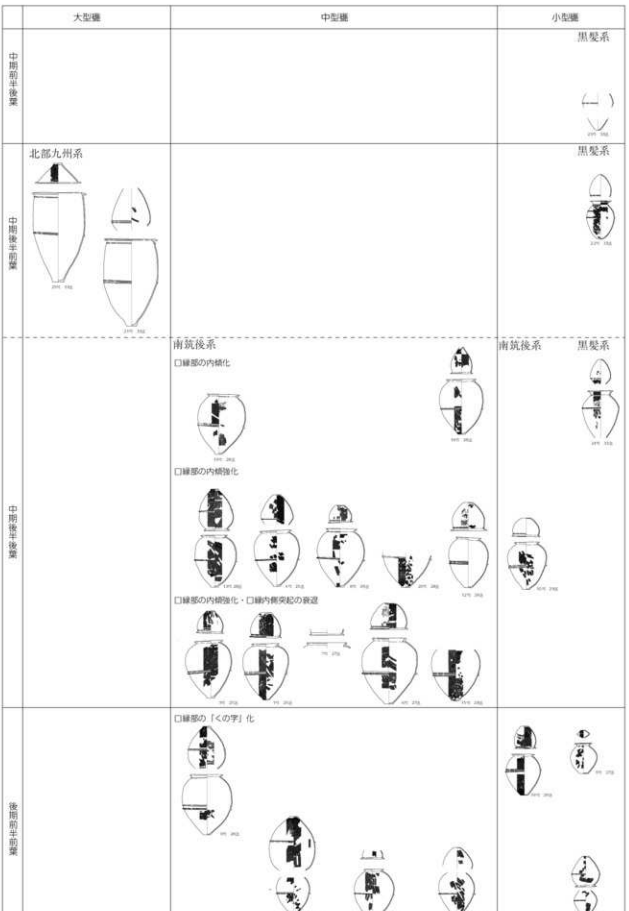
2　甕棺の位置づけ

その上で本遺跡出土の甕棺はどう位置づけられるかと考えると、やはり最も遺跡内で隆盛する時期と重なっていると言える。一方で中期後葉の甕棺とその時期にあたる土器群は、中期末～後期の土器群に比べると低調である。

この差については墓域が異なっている点も含めて台地上で出土している甕棺を総合的に見ていく際に留意すべき事項であると考える。

3　集落展開と甕棺の分布

整理中であり全体を詳細に見ているわけではないので明言を避けるが、飯田溝を挟んで西に展開する上官塚遺跡の甕棺群は中期後半のものが多い印象にある。加えて後期後半の環濠集落として北甘木台地上の頂部付近に二子塚遺跡があり、こちらは中期～後期前半は低調であることから同台地上での集落展開が上官塚→塔ノ木→二子塚へとシフトしているようにも見受けられる。こうした変遷が当時の情勢を反映したものであるとして、甕棺からもそうした見方が出来るとすれば非常に興味深い。



第187図　塔ノ木遺跡における甕棺の分類と編年

第3章 塔ノ木遺跡の古墳時代

第1節　古墳の分布と形状

1　古墳の分布

塔ノ木遺跡の古墳は調査区内で３基確認された。分布は偏っており、飯田溝と呼ばれる丘陵鞍部に面した際の部分に位置する。他の部分では見られず、限定的な分布となる。また、調査区南側に隣接して走る道路を挟んだところには現存墳丘の残る御前塚古墳があり、この一帯が古墳の分布域であったことが推測される。故に道路が通る際古墳が掛かっていそうな気もするが、そうした記録は残されていない。

また、１～３号墳は非常に近い位置に集中していることも特徴の一つであると言え、特に１，２号墳については肉薄している。このように近接するのは塔ノ木遺跡における古墳築造に適した場所が非常に限定的であったこと、つまり飯田溝に面している小高い部分の端にあることが意味を持っていたのではないかと考えられる。

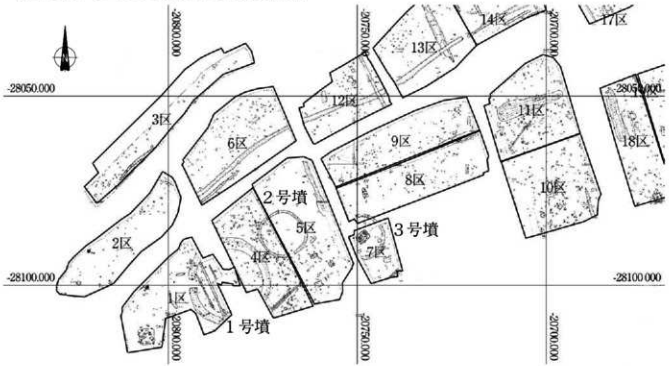
2　古墳の形状

今回確認された全ての古墳は円墳である。これについては飯田溝を挟んで反対側の上官塚遺跡においても同様であり、前方後円墳を含まないというのは本台地上にある古墳の特徴であると言えよう。

3　墳丘

他の遺構と同じく上面を失っていると考えられ、それに伴い地上施設の大半を失っているものと考えている。特に古墳は墳丘という地表面に対して立体的な構造を持つ遺構であり、周溝と主体となる石棺・墓壙のみ残る状態であることを考えると墳丘は存在したものの耕作により消失したと考えるのが妥当である。

こうした状況だけに御前塚古墳における墳丘が残存しているということは本地域の古墳築造の在り方を知る上で重要な意味を持つ。



第188図　塔ノ木遺跡で確認された古墳の分布

第2節　古墳の規模

1　古墳の規模

今回確認された3基の古墳は、周溝の外周径から推定すると12～23mと決して大きくはない。御前塚古墳についても周囲が削られているため全容は不明であるがこれとほぼ同じ規模ではないかと推定している。

上官塚遺跡における墳丘規模は時期的なことなど詳細検討を経てからでないと確たることは言えないが、塔ノ木遺跡のものに比べると同じかやや大きいものもある。

2　古墳相互の規模比較

3基の中で1号墳が最も規模が大きく（23m）、2号墳・3号墳はほぼ同じ規模（12m）という関係にあり、後述するように時期差は認められないことも加えて考えると、1号墳を中心に2，3号墳があるように思われる。

それぞれが時期をほぼ同じくしながらも独立し、近接して存在することもそれぞれが密接に関連するものと考えられる。

第3節　主体部と被葬者

1　内部主体

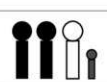
（1）主体の種類と数

1～3号墳ともに破壊・非破壊の差はあれど主体が確認された。各古墳に対し、1つの主体であり、同一周溝中に複数の主体が認められることはなかった。

前担当が平面図を書いていないという理解しがたいことをしているが全てに墓壙があり、その底部付近を床面とした屍床とそれを囲う箱式石棺である。1号墳については破壊されており残材などが散乱している状況であったが、元は2，3号墳のように箱式石棺に板石による蓋がかぶせられて粘土目張りが施されるようなものであったと推定される。

（2）箱式石棺

石棺は板石状の大型石材を使用し、長軸2～3石、短軸1石で構築されており、蓋も2～3石で覆われる。規模もそれぞれあまり大きな差はないように思われる。

		1号墳	2号墳	3号墳
形　状		円墳	円墳	円墳
規　模		約23m	約13m	約12m
埋葬主体		石棺？	箱式石棺	箱式石棺
被葬者				
出土遺物	棺内副葬	なし（破壊）	刀子 管玉・勾玉	鉄剣・刀子 竪櫛
	周溝出土	鉄刀・鉄製穂摘鎌 甕・複合口縁壺・高坏	甕	甕

第189図　各古墳の要素比較

墓壙は平面図がないなど情報の欠落が著しいものの断面図からの復元等によりそれぞれで大きな差はない。墳丘規模に差はあっても主体の規模には差がなく、埋葬主体の在り方については墳丘規模などの影響を受けない規格的なものであったと言えるのであろう。

2　被葬者と副葬品

（1）被葬者の数

1号墳は主体が破壊されていることから人骨が残存しておらず不明である。2号墳は単体での埋葬である。3号墳は埋葬時期を違えて計4体が埋葬されている。

（2）　副葬品及び周溝出土遺物

副葬品及び周溝出土遺物について着目してみる。ちなみにここで周溝出土遺物を含めているのは1号墳における状況が少し異常とも考えているからである。

1号墳は主体を破壊されており、墓壙中及び棺内と思われる位置からの副葬品は確認されていない。破壊された際に持ち出された可能性が考えられる。

その一方で周溝中から鉄刀と鉄製穂摘具が出土しており、本来これは1号墳の主体に納められていた副葬品ではないかと考えている。ただし、この出土状況を示す図面及び写真がないため周溝に対してどのように位置し、溝のどの深さから出土しているか、など基本的な情報を欠いているため推測の域を出ないというのが現状である。

2号墳からは刀子1、管玉・勾玉が出土している。ここでの被葬者は単体であり、確認された人骨の残存状況は最も良い状態にあるにもかかわらず、土井ヶ浜人類学ミュージアムに移送された形跡もなく人骨の取り上げが行われたかについても不明であるため確たることが言えない状況であるが副葬品の構成、1号墳に近接する位置・墳丘規模などのことを含めて考えるに女性ではなかったかと考える。

3号墳は最も埋葬された人数が多いものである。第3部における分析により計4体の人骨であること、構成も成人男性2、成人女性1、小児1（性別不明）という状況で、順序は①成人男性（年齢不明）or ②成人女性（小児？）→③成人男性で、最終埋葬者は成人男性のうち若い年齢の者であったことが報告されている。最終埋葬者以外の人骨については残存率が悪く、複葬のための棺開放などが影響していると考えられ、最終埋葬者の埋葬との間に一定以上の期間を経ている可能性も考えられる。

副葬品は鉄剣1、刀子1、竪櫛2という内容であり、鉄剣については最終埋葬者の左腕付近の石棺側壁に添えられていたことから最終埋葬者の埋葬時に副葬されたものと推定される一方、刀子は最終埋葬者の首元、竪櫛は寄せられた人骨とともに動かされたと思われ棺の隅から出土している。こうした状況から3号墳の副葬品は複数回にわたって納められたものであり、最終埋葬者のものと思われるものは鉄剣に限られそうである。

3　被葬者の関係性

これまでの情報を整理していくと規模から見て1号墳が中心的な位置にあり、2，3号がそれに関連すると考えるのが妥当そうである。加えて2号墳は1号に対して近接するという点から1号と2号は対である可能性が高く、3号はそれらに付随する若しくはこれらとは独立していると考える。

2号は単体埋葬であり、3号は複葬である点も隣接していながら差がある点も興味深い。それだけに中心となる1号墳が破壊され、被葬者の状態がわからなくなった点は残念である。

第４節　古墳と土壙墓

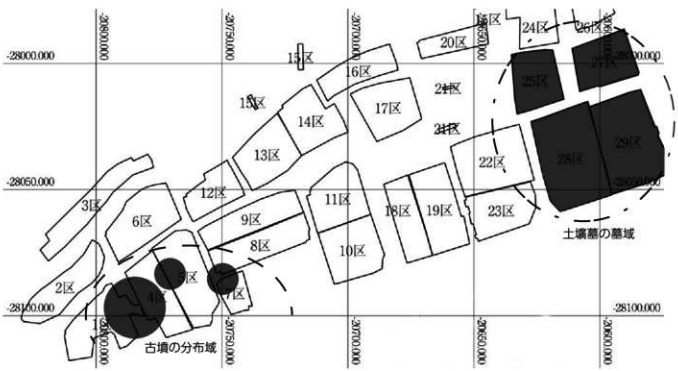
１　古墳と土壙墓の分布

古墳は遺跡の西端で確認された一方で、土壙墓は遺跡の東側で見られる。こうした点から古墳と土壙墓は隔絶されていると言ってもよく、独立した墓域の設定があったものと考えられる。

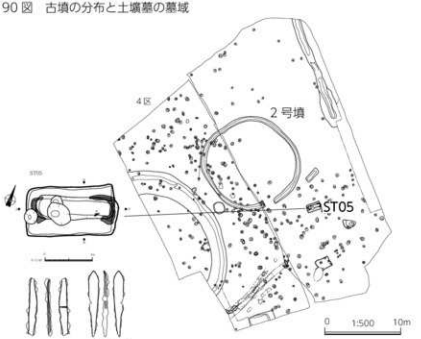
２　例外的な土壙墓の存在

同期の土壙墓は古墳と墓域を違えている点については先述のとおりであるが、例外としてST05については２号墳に隣接する位置に単独で存在する。副葬品として鉄器（鉄鏃・刀子）を有しているほか、棺部端付近に粘土があり粘土目張りがなされている点についても他の土壙墓と扱いが異なっている。また、時期についても鉄鏃の形状から古墳と同時期と判断できる。

これを墳丘を持たない特別な墓と見るべきかについてはより検討が必要になるかと思われるが、ほとんどの土壙墓が古墳の墓域から離れた位置に造営される一方で周溝や内部主体が石棺でないなどの差はありつつも鉄器が副葬される・棺に粘土目張りが施されるなど通常の土壙墓とは異なる扱いを受けている上、古墳に近接する位置に埋葬されていることなど古墳被葬者と何らかの関係があると考えざるを得ない状況は特筆すべき点であろう。



第 190 図　古墳の分布と土壙墓の墓域



第 191 図　例外的な土壙墓の位置と古墳との関係

第５節　集落構造と墓域

１　集落の位置と墓域

古墳時代の遺構は、少ないながらも集落の痕跡を認めることができ、辛うじて遺跡における集落構造を見ることができる。

住居址が確認されたのは 32 区で遺跡の南東部にあたる。ちょうど弥生時代中期の甕棺が確認されたところから少し東に行ったところになる。この辺りは緩やかな斜面が舌状に伸びるところで日当たりも良く、さらに水場となる低地の小川に容易に下りることができ、集落を営むには格好の場所であると言える。

他方、墓域に関しては先述したとおりその居住域から上りきった台地の尾根筋状にあって、飯田溝に面した西側が古墳、それよりも 100 m 近く東へ行ったところに土壙墓群が見られ、それぞれが完全に分離されている。

２　区域を隔てる遺構の存在の有無

このように大きな視点で見れば集落においてはっきりと遺構の分布域が異なっているため区別は容易であるが、当時の人々がそれぞれの域を区別するための溝や柵列等によって区画を行っていたかについて明確にこれを示すものは遺構としては確認されなかった。

これだけ明確に離れていれば区画を何らかの施設によって示す必要はなかったのかもしれない。ただ、今後北甘木台地におけるほかの遺跡の整理作業を進めていく上で判然としない居住域と墓域の関係をわずかなりとも把握できた成果については評価したいと考えている。

３　居館の有無

遺跡内で古墳と土壙墓、その被葬者が住んでいたであろう住居址を確認でき、さらに古墳と土壙墓は墓域を別にするなど明確に扱いに差を出している状況下において、日常生活においても差があったのではないかと考えるのは自然であり、住居址においてもその差が反映されるものと考える。つまり居館的な存在が集落にあるのではないかと考えるがこれについては今回確認された遺構に大きな差はなく、ごく一般的な構成の住居址であったことから今回の調査では確認できなかった。

ただ、北甘木台地上に多くの古墳を造営し、かつ北の丘陵に直孤文の装飾で著名な井寺古墳を築いたであろう人々の代表的な立場の者が住まう居館は本遺跡を含めて北甘木台地のどこかにあったはずであり、その位置の把握が塔ノ木遺跡の古墳時代における課題の一つである。

第 192 図　塔ノ木遺跡における古墳時代の集落構造

終章

塔ノ木遺跡について

第1節　塔ノ木遺跡の調査成果

この調査を通じて得られた調査成果について、まとめると下記のとおりとなる。

1　縄文時代

縄文時代後期の土器群に伴って集石遺構やドングリピットが確認された。一方で集落域を示す遺構は確認されなかった。

2　弥生時代

弥生時代中期～後期前半の甕棺が確認され、土器群も中期後半～後期前半に中心が置かれる。集落域の確認には至らなかったが、甕棺の墓域が中期後半と中期末～後期で異なる場所で確認されている。また、同時期のものと思われる土壙墓も確認され、中期末～後期の甕棺墓域とその領域を共有している。

3　古墳時代

古墳時代中期の古墳が3基確認された。いずれも内部主体は箱式石棺であり、うち2基は破壊を免れていたうえ人骨の残存が認められた。墳丘は削平により失われているが周溝の確認により規模を推定でき、12～24m程度の古墳であった。内部主体については周溝で区切られた区画の中央部に一つある状態で、複数の主体の存在は確認されていない。被葬者に関して1号墳は既に破壊されており不明であるが2号墳は単体、3号墳は4体の複葬であることが明らかとなった。

古墳とは異なる場所で同時期の土壙墓群を確認した。古墳と土壙墓群は直線距離にして100mと明確に離れており、被埋葬者の差が表れている。一方で群を離れて古墳に隣接する土壙墓が確認されており。これは墳丘を造営されないものの特別な扱いを受ける被葬者の存在をうかがわせるものである。

また、住居は遺跡の南東部、緩やかな斜面が舌状に広がる場所付近で確認された。ある程度のかたまりを確認できたが居住域全体を把握するには至っておらず付近の土地に居住域が広がる可能性を指摘する。これら古墳と土壙墓群と住居が遺跡内において領域を明確に違えているということを確認できた。

4　古代

住居や溝などが確認され、遺跡の全体から同時期の遺物が出土している。特に目を引くのは須恵器坏蓋を転用した硯と円面硯が出土したことであり、塔ノ木遺跡において文字を書く層の存在が窺える。当時の識字層を考えると官衙ないしは寺院ということになるが、平安期の遺構としてこれらの確定的なものを見いだすには至らなかった。ただし続く中世での遺構の傾向から寺院ではなかったかと推測する。飯田山常楽寺等の関連が考えられて興味深い。

5　中世

溝が至るところに走っており、土地を区画しているようにも見える。ただ一方で区画された内側に特定の遺構があるわけではなく、溝の性格自体が不明なものが多い。また、同時期の土壙墓が確認されており、ほかに地下式坑も1基確認された。一つ特徴的であるのが不明遺構としたものであり、方形の土坑を深く掘り床面辺りで火を用いており中心部付近に炭や灰の堆積が見られることが多い。加えて床全体が焼けているなどある程度火の勢いが強く且つ長時間にわたって火が続いた結果であるようにも見えるものもあり遺構の性格は不明である。単体の遺構であるならまだしも複数の類似遺構が遺跡の中央付近にかたまって存在し、土壙墓・地下式坑にほど近い場所に位置していることから何らかの施設であるとは疑いようのないことではあるが性格については不明な点が多く、今後の類例増加による性格の解明を期待する。

第2節　塔ノ木遺跡について

1　北甘木台地における塔ノ木遺跡

北甘木台地において、塔ノ木遺跡は台地の斜面をある程度上ったあたりの傾斜が緩やかになる鞍部に位置し、中心部において水場はやや遠いため住居はあまり見られない。通時的に見て縄文時代～近世までの長期にわたって占有され、特に弥生時代・古墳時代・平安時代・室町時代あたりにピークを持つ。

遺構は土壙墓・甕棺墓などが遺跡の東部で多く見られ、西端に古墳が見られるなど遺跡の中心付近では墓域の傾向が強いように思われる。

一方で古墳時代の住居址が遺跡の南東部で確認され、墓域とある程度の領域の棲み分けを行っていたことが判明した。この付近は斜面を南に下っていくことで水場に近く、台地にあって集落を営む位置としては格好の場所である。水が得にくい一方で低地からも見える頂部付近に古墳等の墓域が形成されるのも場の利用の在り方にとって不思議はない。

遺跡の西端に古墳がかたまる理由としては飯田溝を挟んで上官塚の古墳群と塔ノ木の古墳群が屹立することで飯田溝を通り抜ける際に左右に古墳がある情景を意図しているもののように思える。さらには飯田溝を北に抜けた先には井寺古墳があり、台地付近に存在する古墳の象徴的存在として扱われているように思われる。

また、平安時代において硯が出ていることは注意を要する。これまでに古代寺院の存在が指摘されることなく飯田山の影に隠れていたものがわずかに頭を出したものか。ただ物的な面に過ぎず遺構を伴うものではないため今回は推定に過ぎないが今後北甘木台地の整理が進む過程において寺院の存在を裏付けるものが出てくる可能性は大いにあると言えるだろう。

実際中世において寺院関連の遺構と思われるものが確認されていることもあり連綿とそこに存在し続けたわけではなさそうであるが、そこに寺域を求める何かがあるのではないかとおもわれる。また遺跡の名前となった土地の名前である「塔ノ木」も、寺院にあった塔ないしは石塔を指していたのではないだろうか。

2　熊本平野東端部における塔ノ木遺跡

（1）遺跡の位置

北甘木台地は熊本平野東端部にあり阿蘇外輪山の裾と交わる部分に位置する。熊本平野は低地が主体的であり、古墳時代の一時期においては現在の海岸線よりも内陸にまで水が入り込んでおり古墳はこうした低地部分に造営されないなどの特徴を有している。

（2）遺跡を取り巻く自然環境

低地に比べて比較的標高が高い台地上に塔ノ木遺跡は位置しており、水田耕作に向く低地部分から斜面を上ったところに遺跡はあると言える。こうした小高い台地は雨期における洪水の影響をほとんど受けないことから集落を営むには格好の場でありつつも、標高の問題から水を容易に得やすい場所ではないとも言え、結果的に現代に至っても住宅地ではなく畑地が広がっていたことはそうした環境を反映したものと思われる。

ただし、北甘木台地の裾には豊富な水をたたえる湧水地に囲まれており、斜面を下りればすぐそこに良質な水を得ることが出来るという恵まれた環境にあると言える。これは布田川断層により地下の砥川溶岩がずれることで不透水層が破断し、阿蘇の伏流水が地表へ吹き出すことによって起きており、先年発生した平成28年熊本地震により大きな被害を受けた本地域はそうした潜在的リスクを抱えながらも平時は湧き水の恩恵に預かり良田の広がる地域であったと言えよう。

（3）弥生時代における「入植」

こうした良環境を求めて弥生時代の人々はこの地に入植したと思われ、弥生時代中期において突如としてこの台地に弥生文化がもたらされたのはこうした人の動きがあったものと考えられる。

事実、弥生時代前期の遺跡は加勢川を遡上して熊本市の神水付近で集落を営んでいる痕跡を認めるがこれほどまでに広く、大量に集落が展開するのは弥生時代前期末～中期にかけてであり、有明海沿岸からそこへ注ぐ河川を遡上して適地を探し拠点を築いていくといういわば「入植」をこの時期に展開しているのではないかと考えている。

（4）塔ノ木遺跡の弥生時代

塔ノ木遺跡は中期後半～後期前半とこうした動きに比して後続する時期にあたり、後期前半に中心が置かれていることを考えると集落が十分根付いている時期ということができる。

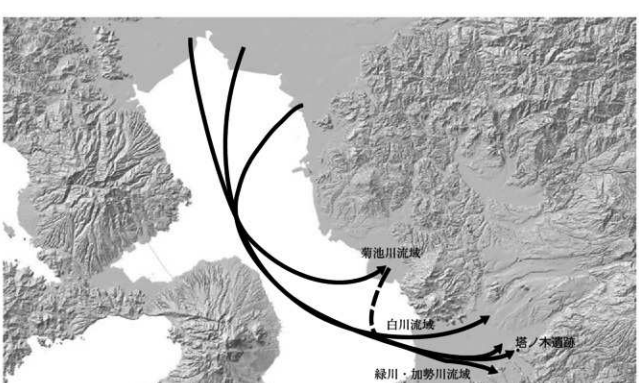
一方で現在整理作業が行われている上官塚遺跡では中期前半～後半にかけての土器群が優勢のように見え、飯田溝を挟んで台地の緩斜面と頂部付近で時期差が見えること、台地を上りきった二子塚遺跡では弥生時代後期後半の環濠集落が形成されていることを含めて考えると、中期前半～後半にかけて台地の標高が低い部分に展開していた集落が後期に至って台地の標高が高い部分に後退し、後期後半には台地を上りきった標高の高い部分に集住するという傾向が見えているのではないだろうか。

こうした動きを見る中で塔ノ木遺跡は台地の西端に展開する中期と、完全に台地を上りきる後期後半との間にあり、徐々に標高を上げつつある段階とみることもできる。この傾向を論証するには上官塚やその他付近の遺跡調査結果を含めて総合的に判断していく必要があるが、近年地震復興関連の調査事例が増加しておりこれら成果のフィードバックが期待される。

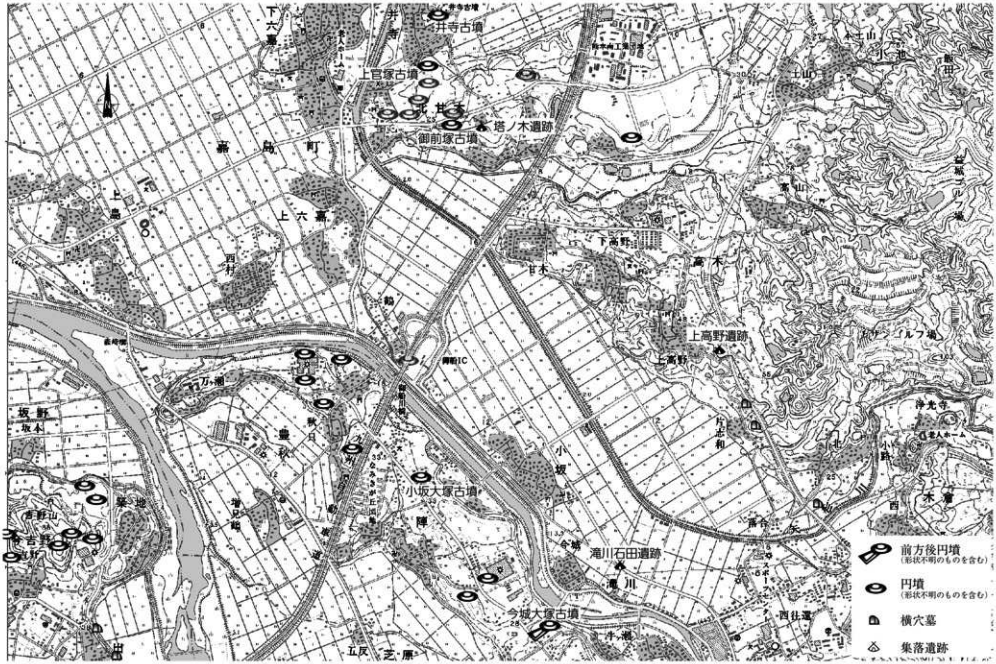
（5）塔ノ木遺跡の古墳時代

塔ノ木遺跡において弥生時代後期前半まで土器群が認められるが後期後半の土器を欠いており、古墳時代も前期のものを欠く。中期において土壙墓・古墳を伴った集落が展開されており、やはりここでも脈絡なく始まるような感が否めない。古墳や土壙墓の展開については前章等でまとめているので省略するが、上官塚遺跡でも古墳が多数造営される現状から二子塚遺跡で展開されていた集落が古墳時代において「下りてきている」という見方も出来るだろう。

現に、二子塚遺跡において古墳は見られるものの数は少なく古墳の数の背景となる集落規模から台地の低標高部分である西側へ中心が移ったことは疑いようがない。こうした情勢を反映した集落展開の在り方が台地の上で観察できることは非常に興味深い。



第 193 図　弥生時代中期における環有明海流入ルート



第 194 図　加勢川・緑川流域における古墳時代主要遺跡の分布

3　塔ノ木遺跡について

上記を踏まえて塔ノ木遺跡を最終的に評価するとすれば、台地付近の湧水を背景に集落が展開された中で墓域を含む集落構造の一端を見ることができる遺跡であり、それが弥生時代中期において突如として始まり、弥生時代後期後半における中断を挟んで古墳時代中期に集落の展開が再開され、古墳時代後期においては若干不明瞭となるが古代に至って寺院らしきものが造営され、そうした環境が中世まで続いていたものと思われる。近世に至ってこれらが廃絶し、現代に至るまで畑地として利用されており、その耕作によって上部の遺構の大半が消失したものと推定される。

現に今回の調査によって確認された遺構のほとんどはこうした攪乱を免れうる深度にまで掘削されたものであり、地表に構築されていたであろう古墳の墳丘はもはや見る影もなく周溝と内部主体を確認することで古墳であると認識できる程度であり、現在の地面に立っていてもここ一帯がこの地域でも有数の数を誇る古墳群であったことなど気づかないほどである。

こうして地表から失われた遺跡の情報を区画整理事業という町の大型事業に伴ってその一端を確認することができたのはこの町の歴史を知る上で非常に重要な証拠となり得たのであるが、もしこれが失われておらず良好な状態を保っていたとするならば、という思いは残る。

【主要引用参考文献】
荒尾延寿ほか編 1989『嘉島町誌』嘉島町
今井恵昭 2014「地下式坑が作られた時代」『駒沢史学』82
緒方　勉 1968「熊本県嘉島町剣原出土箱式石棺」『熊本史学』第三五・三六号 pp.124-127
乙益重隆 1959「熊本県上益城郡カキワラ貝塚」『日本考古学年報』8　日本考古学協会　p.74
櫻木晋一 2016『貨幣考古学の世界』考古調査ハンドブック 15　ニューサイエンス社
佐藤哲朗ほか編 2014『塔平遺跡 2』熊本県文化財調査報告第 302 集　熊本県教育委員会
島津義昭ほか編 1992『二子塚』熊本県文化財調査報告第 117 集　熊本県教育委員会
高田貫太 1998「古墳副葬鉄鉾の性格」『考古学研究』第 45 号第 1 巻　考古学研究会
田村実 1980「舷と汽水環境と貝塚」『熊本地学会誌』63　熊本地学会　pp.2-13
出合宏光 2004「九州南部における 11 ～ 14 世紀の土器」『中近世土器の基礎研究』XⅦ　日本中世土器研究会　p.p.
西健一郎 1983「黒髪式土器の基礎的研究」『古文化談叢』12 九州古文化研究会
橋口達也 2005『甕棺と弥生時代年代論』雄山閣
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
濱田耕作ほか編 1917「肥後に於ける装飾ある古墳及　横穴」『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第一冊　臨川書店 pp.8-16
永上公誠ほか編 2013『塔平遺跡 1』熊本県文化財調査報告第 285 集　熊本県教育委員会
村崎孝宏編 2015『塔平遺跡 3』熊本県文化財調査報告第 310 集　熊本県教育委員会
吉村靖徳 1995「権衡に関する一考察－福岡県出土権状製品の検討と課題－」『九州歴史資料館研究論集』20